HEAVY OBJECT
鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI
イラスト・オブジェクトデザイン
凪良 NAGIRYO
ヘヴィオブジェクト
荒野の新人オブジェクト
an audition war 採用戦争
電撃文庫

か-12-24

ヘヴィーオブジェクト 採用戦争

鎌池和馬

電撃文庫
¥
610

9784048685948

1920193006100

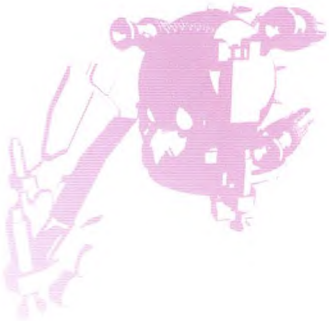
ISBN978-4-04-868594-8
C0193 ¥610E

ASCII MEDIA WORKS

発行● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 610 円

※消費税が別に加算されます



ヘヴィーオブジェクト 採用戦争（さいようせんそう）

超巨大兵器『オブジェクト』が全てを塗り替えたこの世界は、宇宙開発技術採用を巡り熾烈な競争を繰り広げていた。

人生を効率よく生きたい戦地派遣留学生のクウェンサーと、貴族だけど下っ端軍人のヘイヴィアは、上官である和風マニア美女（ただしドS）のフローレイティアにこき使われる日々を過ごしていた。

正統王国のオブジェクト『ベイビーマグナム』を操る『エリート』少女・ミリンダの魅惑のお尻に気を取られ、報われる日が永遠に来なそうな彼らに、今回下されたミッションは……姿が見えない謎の超巨大兵器『ステルスオブジェクト』との交戦!?

氷で閉ざされた南極から、凶暴な軍隊アリに支配されるアマゾンシティ跡地まで、あらゆる戦場に派遣させられる不良兵士二人組の、明るく爽快な近未来アクション……のはずだ！

鎌池和馬（かまちかずま）

本日のレプリカント的観察日記。蟻です。単品の性能のみならず、複数で行動する事を前提とした機能性が素敵。散開と集合のコンビネーションを研究すれば、様々な分野に応用できそうな感じです。

【電撃文庫作品】

とある魔術の禁書目録（インデックス）①～⑳
とある魔術の禁書目録（インデックス）SS①②
ヘヴィーオブジェクト
ヘヴィーオブジェクト 採用戦争

イラスト：凪良（なぎりょう）

バンダイナムコのゲーム『アルトネリコ』シリーズのキャラクターデザインをつとめる。電撃文庫では『シャーブ・エッジ』『F』（著／坂入慎一）、『アブラクサスの夢』（著／高橋弥七郎）などを担当する。個人サークル『S.E.C』でも活動中。http://www.sec.or.tv/

カバー／暁印刷

ヘヴィーオブジェクト
採用戦争
鎌池和馬
電撃文庫1954

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI
イラスト・オブジェクトデザイン
凪良 NAGIRYO

結局、戦争はなくならなかった。
でも、変化はあった。
――超大型兵器オブジェクト。
それが、戦争の全てを変えた。

ヘヴィオブジェクト
HEAVY OBJECT
an audition war 採用戦争

INDEX

000010 序 章

000012 第一章

障害物競争なら普通は泥まみれ>>南極大陸制圧戦

000098 第二章

二人三脚の登山は命懸けで>>イグアス山岳砲撃戦

000258 第三章

騎馬戦は足元を崩すべし>>アマゾンシティ総力戦

000368 終 章

【ブライトホッパー】BRIGHT HOPPER

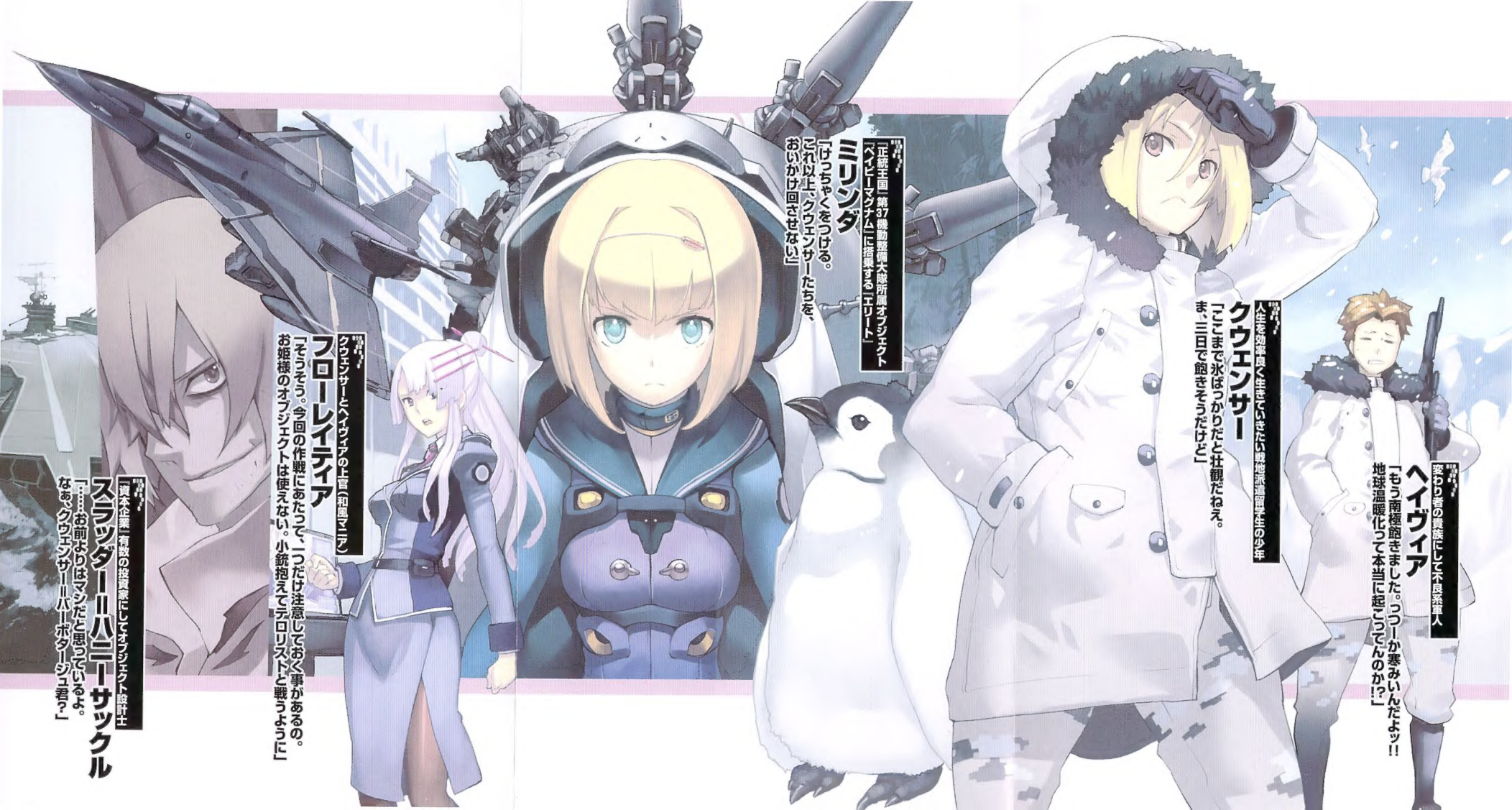
「正統王国」第52機動警備大隊所属「オブジェクト」。

ミリンダの駆る第一世代オブジェクト「ベイビーマグナム」よりもスペック的には優っており、仲間では最新鋭とされている。
全体的なフォルムは、巨大な球体の下に、前方は円形の静電気発生装置、後方は3本の脚を取り付けたもの。

機体には陸戦専用の第二世代を採用、レーザービーム系の兵器を集中装備している。
静電気で巨体を浮かばせる従来の移動方式に加え、バッタに似た脚を使って地面を蹴る事で、他のオブジェクトには無い超高速移動と時速七〜八〇〇キロに及ぶ超高速戦闘を可能にした。

搭乗者はハルリード＝コバカバーナ少佐。
「正統王国」の有力貴族であるため、彼の乗るオブジェクトの内装は王城用の宮大工にオーダーさせている。

Designed by Hakuyu Yamada(FROG inc.)



変わり者の貴族にして不良系軍人
ヘイヴィア
「もう南極飽きました。っつーか寒みいんだよッ!!
地球温暖化って本当に起こってんのか!?」

人生を効率良く生きていきたい戦地派遣留学生の少年
クウェンサー
「ここまで氷ばっかりだと壮観だねえ。
ま、三日で飽きそうだけど」

『正統王国』第37機動整備大隊所属オブジェクト
『ベイビーマグナム』に搭乗する『エリート』
ミリンダ
「けっちゃくをつける。
これ以上、クウェンサーたちを、
おいかけ回させない」

クウェンサーとヘイヴィアの上官（和風マニア）
フローレイティア
「そうそう。今回の作戦にあたって、一つだけ注意しておく事があるの。
お姫様のオブジェクトは使えない。小銃抱えてテロリストと戦うように」

資本企業『有数の投資家にしてオブジェクト設計士
スラッダー＝ハニー＝サックル
「……お前よりはマシだと思っているよ。
なぁ、クウェンサー＝バー＝ボタージュ君？」

name / Frolaytie=Capistrano
age / 18
sex / female
place of birth / Paris, Normandy
height / 173m
weight / 51kg
body size / 97.58.81(cm)
hair color / silver(+ blue dye)
eye color / purple

今のところ、オブジェクトは最強だって言われているな。
誰もがひっくり返らないと信じ切っている。
でも。
こんな歴史の定説だって、いつひっくり返るかは分からないもんだ。
——とある整備兵の世間話

ヘヴィーオブジェクト
採用戦争

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

序章

歴史の定説なんてものは簡単に変わっちまう

例えば鉄。

世界で初めて鉄を使った時代と文明は何か。

紀元前一四〇〇年代のヒッタイト、と答えた人はもう古い。西アジアにある『それよりも古い』遺跡から、鉄を製錬する時に出てくる物質が発掘された事によって、この説は間違いである事が証明されてしまった。

もしかすると、古い参考書では情報が更新されていないかもしれないから注意するようにただ、ここで例に出した西アジアの遺跡にしたって、いつまでもそれが正しいとは断言できない。ひょっとすると、何年か先にはさらに古い遺跡の中から鉄が出てくるかもしれない。その時にはたった今言った事がそのまま『古い参考書』になる訳だ。

こんなもんは特別な事じゃない

どんな分野にでも当てはまるもんだ。

オブジェクトだってそうさ

本体だけで全長五〇メートル、主砲の長さなどを含めればそれ以上もの巨体。一〇万トン以上の重量。核シェルター級の分厚い装甲を持ち、原子炉をはるかに凌ぐ出力のJPlevelMHD動力炉を抱え、その膨大なエネルギーをフル活用した一〇〇門以上の砲を振り回す怪物。

今のところ、オブジェクトは最強だって言われているな

陸海空、全ての軍と兵器を雇い払い、戦争の代名詞とまで呼ばれるようになった超大型兵器。戦争とはオブジェクト対オブジェクトのせめぎ合いであり、どちらかの機体が行動不能になった時点で、その戦争の勝敗は決定してしまう、とも。

大した定説じゃないか。

誰もがひっくり返らないと信じ切っている。

でも。

こんな歴史の定説だって、いつひっくり返るかは分からないもんだ　ひょっとすると、何年か先の時間にいる未来の人間がこの話を聞いたら、鼻で笑われてしまうかもしれないぜ

第一章　障害物競走なら普通は泥まみれ　〉〉南極大陸制圧戦

1

諸君らに極めて重要な任務を言い渡すっ!!

「……、」

短い茶色の髪にがっしりとした体格の少年兵ヘイヴィアは、先ほど聞いた上官の言葉を思い出しながら、死んだ魚のような目で両手の指を黙々と動かしていた

狭い部屋だった。

部屋にはテーブルがあり、テーブルの上には金属製の小さな機材が山のようにあり、テーブルの向こうには肩に届かない程度に金髪を伸ばした少年クウェンサーが座っていて、やはり似たような作業を行っている。

彼らが腰掛けているのは椅子ではなく、オブジェクトの中でも小さい部類に入る、レールガンの砲弾のケースだ。一体何発入りなのかは知らないが、このケースだけで二人掛けのソファ

と同じぐらいある。

テーブルの方も、正確には大きな木箱だった。中が空っぽだったので、レールガンの砲弾のケースとケースの間にねじ込ませ、作業スペースを確保したのだ

彼らが行っているのは装填作業だった

アサルトライフル用の空っぽのマガジンを大量に渡され、そこへ指を使ってライフル弾を一発一発詰めていく訳である。ヘイヴィアがガチャガチャと効率悪く音を鳴らしまくるだけなのに対し、クウェンサーの方は深窓の令嬢のようにほっそりとした指を使って規則的に仕事をこなしていく。

開始一五分でヘイヴィアはダウンした。

彼は自分が腰掛けているレールガンの砲弾のケースを踵で蹴りつけ、

「おい。なあもう無理だぜ　こんなもんは戦争じゃねえっ!!　核ミサイル撃っても動き続けるオブジェクトが闊歩するような戦場で、こんな小さな弾丸チマチマ詰めたって何の役にも立たねえだろ!!」

「ヘイヴィア、そのマガジンやり直し　お前、今、変に力んだからマガジンのスプリングがS字に歪んだよ　音で分かる」

「何でテメェは嬉しそうなんだよ!!　こんなイライラする作業続けたら精神がやられちまうわ!!」

「えー？　こういう細かい作業していると心が安らがない？　むしろ重たいライフル担いで野原を駆け回る方が変なんだって」

「おーおー、オブジェクトの設計学んでる『学生』さんはこの変態ぶりだよ。っつーか、こんなん何の意味がある訳？　軍需企業の方もさ、パッケージに収める前に、工場で弾丸を詰めてから輸送してくれりゃ良いんだ」

「それだと長期保存中にマガジンのスプリングが緩んで、動作不良を起こすリスクが増えるとかって話じゃなかったっけ？　だから必要な弾丸を必要な分だけマガジンに詰めて、不要になった分はマガジンから取り出さないとまずいんだろ」

「ホントかよ？　それプリンターのインクと同じでさ。本当は全然余裕で使えんのに、わざと消費期限を設けて新しいのを買わせたいってだけなんじゃねえの？」

「ヘイヴィア、そのマガジンはスプリングがおかしい。一度詰めた弾取り出してやり直し」

「うがーっ!!」

面倒臭さの極みに達したヘイヴィアが叫ぶが、クウェンサーは当然のように無視した。反応がなくてもめげない男ヘイヴィアはテーブル代わりに使っている大きな木箱のすぐ脇に置かれた複数の段ボール箱を指差し、

「こんなもん俺らだけで終わるかっ!!　っつーか、これは本来機械を使ってやるべき作業じゃねえのか!?　装填機材を一台でも納入してくれりゃ、マガジンをセットしてボタンを押すだけ

で、ソフトクリームの機械みたいに勝手に仕上げてくれんじゃねえのかよっ!?」

「その辺は経費削減ってヤツじゃないの？　今時の戦争はオブジェクト主流。歩兵同士じゃ戦わない時代だよ。ライフルの薬室に入った実弾なんて、一体いつ使うの？　くだらない作業のためにバカ高い機材を購入して部隊に楽をさせるぐらいなら、余ってる兵士をこき使った方がマシって判断なんだろ」

「……テメェは本当に人のやる気を削ぐヤツだよな」

うんざりした調子で、ヘイヴィアはアサルトライフルのマガジンをテーブル代わりの大きな木箱の上に放り捨てた。背中を弓なりに反らす感じで、ぐいーっと伸びをしながら背後に目をやる。

そちらにあるのは小さな戸棚だ。

そこに並んでいるものを何気なく目で追っていたヘイヴィアだったが、

「なあ。おい、クウェンサー、見ろよ。すっげえモン見つけた」

「？」

「訓練用の教材ビデオに混じって、一本だけエロビデオが差さってるぞ」

2

部下の少年兵二人に笑顔で地味地味な作業を押し付けた指揮官・フローレイティアは、基地の中に用意された特別な士官室にいた。とはいえ、この基地は一〇〇台以上の大型特殊車両で構成される大規模な車両団なので、彼女のいる執務室も、ブロック化されたコンテナのようなものに近い。

クウェンサー、ヘイヴィアは一七歳。フローレイティアは一八歳と部隊の低年齢化が進んでいるが、これもまた時代の潮流の一つだろう。未成年の銀髪の少女が八〇〇人程度の大隊を指揮していても、それを訝しむ者は誰もいない。そういう時代なのである。

現在、フローレイティアはパソコンに繋がったタブレットを操作し、次の作戦行動における自軍の進攻ルートの再検証を行っている。

そうしながら、別のモニターにも目をやっていた。

そちらの方は、パソコンにマイクとビデオカメラを接続した、映像チャット用のものだった。相手は戦場から遠く離れた『安全国』のゲスト様だ。

別にわざわざパソコンを一台用意しなくても、この程度ならノートパソコンに二つウィンドウを表示させれば済む話だが、フローレイティアがそうしなかったのには訳がある。

このゲスト様は、作業用のウィンドウで顔を隠してしまう事が失礼に当たるほどの人間だからだ。三つ星までしかランクがないのに五つ星をつけられそうなぐらい、である。

『そう　それじゃー、ヘイヴィア様はお元気っつー訳ですのね？』

「ええ、まあ。名高いウィンチェル家の嫡男サマですから。本当に危険な最前線には向かわせられませんよ」

などと、適当な世辞を言うフローレイティアだが、実際には空のマガジンにライフル弾をチマチマ詰める内職から全長五〇メートル以上のオブジェクトの爆破まで、尻を蹴ってこき使いまくっているのは内緒である。

（……しかしまあ、私も私で数奇な人生を歩んでいるなぁ……）

そんな事には気づかないモニター越しのゲスト様――一五歳程度の金髪の少女は、時代錯誤なドレスをまとっていた　とはいえ、コルセットを中心に要所に手を加えてあり、自分一人で着こなせるようになっていた。どうやら、『貴族』の令嬢と言っても使用人に全てを任せる温室育ちではないらしい。

彼女は人差し指で自分の頬を掻きつつ、

『それは結構。わたくしとしましても、盛大に式を挙げる前に死なれてしまっては元も子もねーですしね』

「失礼ながら……ウィンチェル家、バンダービルト家の双方から猛反対されている婚約だったのでは？」

『こーゆーもんは障害が大きい方が燃えんですよ。貴女も恋愛をなさい、軍人さん』

有力『貴族』のご令嬢から指摘され、思わず肩をすくめてしまうフローレイティア、彼女は

長い銀色の髪を揺らし、話題を変えるようにこう言った。
「それにしても、よろしかったのですか？」
『何がです』
「ヘイヴィア上等兵の待遇についてです。ウィンチェル家の嫡男なら、最低でも下士官……少尉辺りの地位を与えるのが妥当では？　これは失礼に当たるかもしれませんが、上等兵、というのはお世辞にも……」
『ま、その辺は色々あんじゃねーですか？　わたくしだって知らねーでしてよ。興味もねーし軍の階級については知識もねーので、コメントのしよーがねーのです。それを言ったら、貴女だって「平民」ではなく「貴族」の令嬢なのに、戦場でドンパチしてるじゃねーですか』
ごほんとフローレイティアは咳き込む。
藪蛇を回避するつもりで話題を変えたのに、さらにヤバいものを掘り返されてしまった。
『で、ヘイヴィア様とは会話できんですか？』
「まったく。映像チャットの回線は繋ぎますが、周りには内緒ですよ。他は皆、恋人の写真を見つめながら帰ったら結婚するんだと真顔で言ったりしているんですからね」
『あら。それって映画だけのお話じゃねーんでしたのね』
言いながら、金髪の少女は前髪を整え直したりドレスの各所をチェックしたりしている。どうやらヘイヴィアと話をする前なので緊張しているらしい。

こういうところは可愛げがあるな、とフローレイティアが無礼極まりない事を考えていると、ご令嬢はこんな事をねだってきた。

『では、ヘイヴィア様と繋げてくださいな』

「はいはい。ヤツは第二火薬庫の予備作業室です。そちらに繋げますね」

3

クウェンサーとヘイヴィアは部屋の片隅に置かれたパソコンのモニターに向かっていた。エロビデオのディスクをセットし、ピリピリと張り詰める空気の中で、そっとメディア再生用のソフトを起動させる。

そして画面いっぱいに桃色のエロが広がった。

『よぉーし!!　今からこの天才インテリ女軍人のジェシカ様が、ブルって身動き一つ取れない新兵の貴様達を、一人前のオトコにしてやる!!　命令だ！　ガキ扱いされんのを卒業したいヤツは私の胸に飛び込んで来ォおおおおい!!』

『たっ、隊長!!』

『俺も、俺も隊長!!』

『もうっ、おれ、もうっ、隊長、たいちょーっ!!』

『ふはははよし分かったジェシカ様が何とかしてやる全員こーい!!』

ふんはーおっしゃーわはははもしゃもしゃもしゃー、と肉肉汗肉汗汗肉汗のとんでもない事になっているモニターを見て、げっそりするクウェンサー。改めてパッケージを見てみれば、そこには『クール女軍人悦楽㊙おっぱい猛特訓』とか書かれている。

彼は思わず、ビデオを発見した同僚に目をやり、

「……あの、ヘイヴィア？　もしかしてお前、女の上官にしごかれるのが好きな人……？」

「違うって!!　馬鹿、俺だってたまたま見つけたモンを観賞しましょうって話をしただけであって、別に俺がここに隠しておいたって訳じゃねえんだって!!」

エロいっつーかケバいって言うんじゃないのコレ的な画面から目を逸らし、改めて空のマガジンにライフル弾を詰める作業に戻るクウェンサーだったが、

「……あれ？　何だろ　あれ？　なんか作業スピードが上がってるんだけど、何で？」

『甘ったれんな小僧!!　誰が休んで良いと言った!?　このジェシカ様が良しと言うまで動きを止めるなと何度言えば分かるんだ新兵が!!』

「うわあ!!　なんか叱咤激励されてる気分になる!!　エロとか全然期待外れだったのに、この声のリズムに合わせてると何やらすごい作業がはかどる!?」

「おい手が勝手に動くぞ？　何故か休むと悪い気がする感じが自然に湧き出てくんぞ!?　これはもしや軍曹に叱られながらダイエットするビデオと同じ効果があるんじゃねえのか!?」

『無駄口を叩いてないでもっと速く指を動かせ!!　一秒でもこのジェシカ様を退屈させるな!!　貴様らも男なら、私に泡を吹かせるぐらいの気持ちでやってみろォ!!』

「はい!!　はいジェシカ様!!　必ずやその期待に応えてみせます!!」

「隊長!　俺らはいっぱしの兵隊になってみせるぜ!!　たいちょーっ!」

徐々に手の動きを速くしていった二人は、いつしか電動ミシンのような勢いで空のマガジンにライフル弾を詰め込んでいく。ガシャガシャガチャチャチャチャ!!　と、家内制手工業の極限に達したクウェンサーとヘイヴィアは、もはや完璧に雑念を振り払い、鼻息を荒げて正確に弾を詰め込んでいくだけのマシンと化していく

「ふぬーっ!!」

「おっしゃーっ!!」

その時だった。

突然映像チャットの着信を知らせる小さな電子音が聞こえたと思ったら、エロビデオの上に新しいウィンドウが表示された。

そして、

『……一体、何してやがるんですの……?』

と、思春期の金髪ドレスの少女のとても冷めた声と視線をぶつけられた。

「「うおわァあああああああああああああああああああああああああああああッ!?」」

クウェンサーとヘイヴィアの二人は同時に叫び、マウスに飛び付いてエロビデオの再生ソフトを閉じる。しかしウィンドウに映った金髪少女はどんよりした表情でこちらを指差し、

『……ヘイヴィア様、木箱の上に怪しげーなパッケージが置きっ放しでしてよ』

「きゃあああーっ!!」

曲がりなりにも従軍経験のある屈強な兵士が、女の子みたいな悲鳴を上げてエロビデオのケースをテーブル代わりの木箱から叩き落とした。

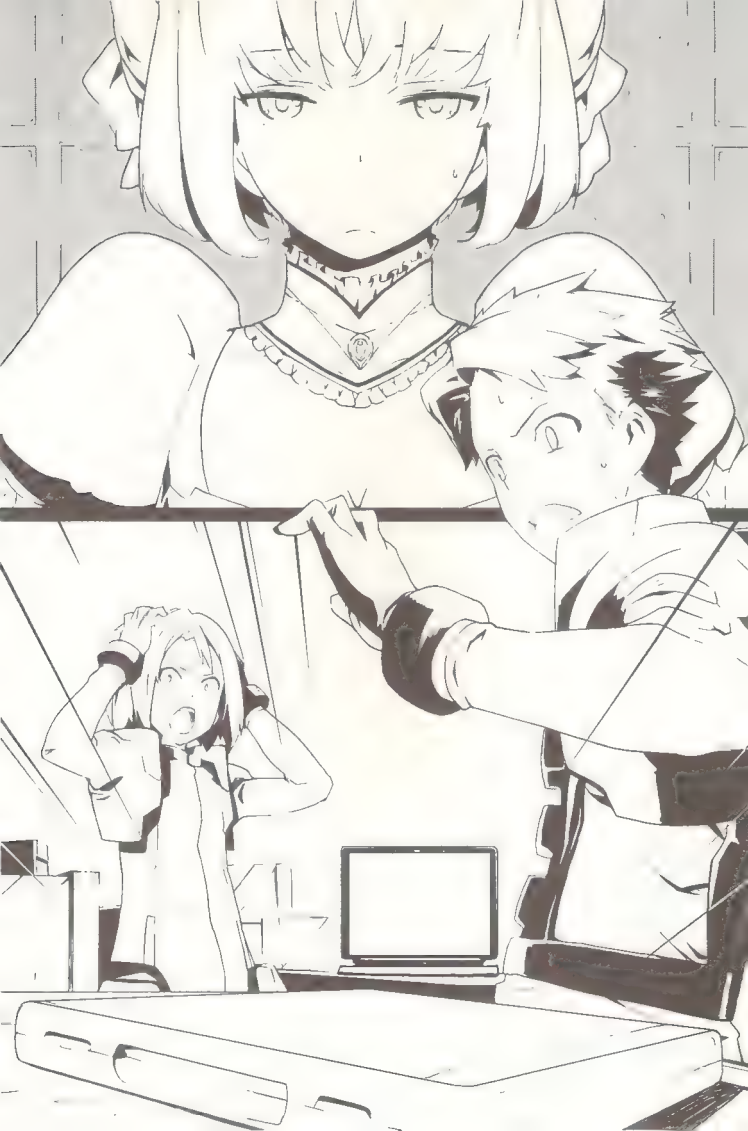
クウェンサーは傍らのヘイヴィアにひそひそ話で情報収集開始。

「（……何？　おい、ヘイヴィア何あの子？　お前の事知ってるみたいだけどどういう人？）」

「（……詳しい事は後で話すが、バンダービルト家のお嬢様、それも一人娘だ。家の力はウチと同じぐらいだが、ほぼ孤立無援の俺と違って、向こうは『貴族』の力をフル活用しやがるから油断できねえ　いいか、俺が話すからテメエは黙ってろよ　『平民』が怒らせて良い相手じゃねえっ!!）」

『そんな短慮な事はしねーですわよ』

「そうかよ、ホントにお嬢様の言い分が正しけりゃ、俺もこんなに手を焼く事はなかったんだけどな」



『何を仰っているのやら　世間話に理由などいらねーのです　婚約者同士が一日でも言葉を交わさねー方が不自然なのです。そもそも、ヘイヴィア様の方から連絡をいただけりゃーこんな事をする必要もねーんですよ。戦場へ行ったっきり音信不通だなんてまともじゃねーですわよ』

「おい頼むぜ。情報漏洩防止のために、肉親同士のやり取りだって通信室でモニタリングされる軍管轄のメールに何を書けってんだ？　実は可愛らしい絵文字をふんだんに使う癖があるのがバレちまうだろ」

忌々しそうに言うヘイヴィアだが、彼の口調が若干変わっている事にクウェンサーは気づいていた。どこか角が取れている感じがするのだ。確かに、これは黙っておいた方が良さそうだ、とクウェンサーは判断し、元の弾込め作業に戻った。他人の惚気話に口を挟む趣味はない。

『しっかし、その部屋は何なんですの？　最前線で武勲を立てて家督を継ぐ資格をもぎ取るっつー話でしたけど、ウィンチェル家は内職で後継ぎを決めんですかね？』

「いやまー、こっちも色々あんだよ。『安全国』で紅茶を飲んでいるお嬢様にゃ、戦場の理は分かんねえかもしんねえけどな」

『ふふん。そうお思いでしょう？』

「あん？　何だよ、パリの屋敷でのんびりくつろいでんじゃねえの？　……まさかと思うが、こっちに向かっている最中だとか言うんじゃねえだろうな」

『いくら何でも、戦争中の基地に乗り込んで引っ掻き回すほど不躾じゃねーですわよ。むしろ

逆。わたくし、今は世界で一番、この星の争いから遠い所へ遊びに来てんですの。国旗の色など関係のない場所ですわ』

「？」

『ま、泥臭い戦場で武勲を立て、ウィンチェル家の石頭達を押さえつける事に成功したら、貴方もこちらへいらっしゃいな。本宅を建てんのには多少不便な場所ですけど、たまーに来るなら楽しめますわよ』

と、そこでノックもなしに部屋のドアが大きく開け放たれた。

バンッ!!　という大きな音に、クウェンサーとヘイヴィアの二人は振り返る

そこに立っていたのは長い銀髪の上官・フローレイティアだった。

「クウェンサー、ヘイヴィア。急ぎの仕事だ。会議室に集合しろ」

「？？？　わざわざ少佐殿が直接やって来なくても、通信一つで済むのでは……？」

「この部屋は変に密閉されてるから通信機の電波は届かないし、パソコンのチャット関係は優先順位の問題で、バンダービルト家の通信が終わるまで新規の割り込みはできなかったの。私自身、ついさっき思い出してね。私の失態だから、わざわざ私が回収しに来た訳よ」

そこまで言うと、フローレイティアはパソコンのモニターの方へ目をやった。彼女はヘイヴィアの首の後ろを掴んで、

「そういう訳ですから、お借りします」

『ええ』

金髪ドレスの少女は小さく頷いた。

『せいぜい死なねー程度にしごいて、とっとと武勲を立てさせてくださいな』

4

フローレイティアがクウェンサーとヘイヴィアの二人を作戦会議室に放り込むと、すでに集まっていた兵士達と一緒に彼女は会議を始めた。

「今回の舞台は南極よ」

フローレイティアはホワイトボードをスクリーン代わりにして、大きな地図を表示させながらそう切り出した。

「南極のロス海沿岸部を飛行していた、我が『正統王国』所属の調査用航空機が、地上から地対空ミサイルで狙われた　ロック用のレーザーを照射された訳よ」

「目的は南極に落ちた乗員の救助活動ですか？」

クウェンサーが手を挙げて発言したが、フローレイティアは首を横に振った。

「幸い、航空機は非常時のためにフレアを装備していてね。それで敵のロックをごまかしつつ、射程圏外まで逃げ切る事には成功した。……問題は、どこの馬鹿が南極からミサイルで狙って

きたか、という事よ」

フローレイティアはニヤニヤと笑いながら言う。

「『情報同盟』、『資本企業』、『信心組織』などの世界的勢力に直通通信で確認を取ったが、いずれも心当たりは『ない』そうよ。真偽はさておき、これで国際的には『南極の連中は、いずれの勢力にも属さないテロリスト』であると認定された訳。……つまり、我々の手で葬ったところでどこからも文句は来ないという事ね」

そんな言葉を聞きながら、クウェンサーとヘイヴィアの二人は小声で話す。

「(……テロリスト、ねえ。西欧の『安全国』の中には、実際にはオブジェクト任せの戦場より恐ろしい所もあるって話だけど)」

「(……白兵戦に関しちゃ、野戦用の軍人より警察の特殊部隊の方が鍛えてるってウワサもあるしな。っつか、都市部の対テロ鎮圧活動は軍人の仕事じゃねえだろ)」

「(……南極まで警察は来てくれないだろ。それで俺達の方に回されたのかもね)」

ヘイヴィアは手を挙げて、上官に声をかけた。

「やられたらやり返せ？」

「そこまで野蛮じゃないの　照準用のレーザーから逆算された地対空ミサイルの予想設置位置は、ちょうど『正統王国』の無人観測所の近くでね。こいつが破壊されていないかどうかをチェックし、施設がまだ無事なら、破壊されないように脅威の排除。……ね、分かりやすい日

的でしょ？」

「（……いずれにしても殺すがな）」

フローレイティアの笑顔に、ヘイヴィアはこっそりと呟く

構わずに上官は説明を続けた。

「さっきも言ったけど、照準用のレーザー照射位置は逆算できる。おそらく南極のロス海沿岸部にある、エレバス山の麓ね。ここに部隊を派遣して強襲。可能なら生け捕りにして目的を吐かせたいところだが、無理っぽいなら気にしないで良い。――皆殺しにして構わんそうよ」

わお、と会議室のあちこちから緊張感のないどよめきが上がった。

現代の戦争の代名詞はオブジェクト――全長五〇メートルを超す、モンスター兵器だ

そして、オブジェクトには一つの特徴がある　大小合わせて一〇〇門以上の砲を持つオブジェクトだが、それらは大出力の動力炉の力を借りた方式のもの、つまりレーザービームや下位安定式プラズマ砲、レールガン、コイルガンなどを使うのが主流だった。

わざわざ地対空『ミサイル』など搭載しない。

つまり、向こうの『テロリスト』がオブジェクトを保有している可能性はかなり低い　そしてこちらの軍には『正統王国』の技術の粋を集めたオブジェクトをいつでも出撃させられる。

その時点で、もう勝敗は決まったようなものだ。

核兵器を使っても動きを止める事のできないオブジェクトが、そこらの小銃やミサイル如

きでどうにかなる訳がない。誰もがそれを分かっていたからこそ、兵士達の肩から一気に緊張が抜けたのだ。

「そうそう。今回の作戦にあたって、一つだけ注意しておく事があるの」

ところが、フローレイティアはこんな事を言った。

「南極での作戦では、お姫様のオブジェクトは使えない　その事を留意しておくように」

は？　とクウェンサーは思わず呟いてしまった。

聞き間違いかと思ったが、フローレイティアはばつが悪そうな調子でもう一度言った。

「だから、お姫様のベイビーマグナムは使えないの。……オブジェクトっていうのは、重量二〇万トン以上の怪物兵器よ　下手に氷の大陸の上に載せたら、分厚い氷を割って落っこちてしまうかもしれないでしょ　そしたらどうやって引き上げるの？　あんなもんを持ち上げるクレーンに心当たりはないでしょ」

「え、ええと……」応、俺達は『最強の兵器であるオブジェクトを、迅速かつ正確に戦場へ派遣する事で最大の戦果を上げるための整備部隊』って触れ込みなんですけど……メインのオブジェクト奪われちゃったら、どうすれば良いんですか？」

「そうね」

クウェンサーの質問に、フローレイティアは指揮棒でペチンとスクリーン上の地図を叩いて、

「もちろん、小銃抱えてテロリストと戦ってもらうけど？」

5

そんなこんなで南極である。

テロリストが潜伏しているであろうエレバス山は海のすぐ近くにあったが、クウェンサー達は直接そこへは乗り込まず、多少遠い沿岸にボートで乗り付けた。ここから味方の兵隊一〇〇人程度と共に、ゆっくりと包囲の円を狭めるように接近していく訳だ。参加しているのは、普段は主に基地周辺を警備している兵隊だろう。戦車や攻撃ヘリと共に、時代遅れと呼ばれている連中だ。

「マジかよ……」

クウェンサーと共に行動していたヘイヴィアが思わず呟く

「南極だぜ。もう一回言うけど南極なんだぜ。何やってんだ俺は。基地で三年ぐらい働いてりゃ家督を継ぐための資格が手に入るって話だったのによ。何で俺はこんなトコにいるんだっつの？　あの爆乳、俺がレーダー分析官だって事を忘れてんじゃねえだろうな」

「……それを言ったらこっちは派遣留学で、オブジェクトについて勉強するために基地へやってきたはずなんだけど。一体何でオブジェクトのオの字もない氷の大陸に飛ばされなくちゃいけないんだ」

「クソッたれが。これじゃ人間アンテナだぜ。無人機に任せりゃ良いじゃんよ」
「ビュービュー吹いてる突風のせいでUAVは飛ばしにくいんだよ。ラジコン電波は傍受されやすいって話だから、テロリスト対策には相応しくないだろうし」
「何だよ真面目ぶりやがって。美人の上官の下でマゾにでも目覚めやがったか？」
「さっさと終わらせて帰りたいんだよ。こんな設計の勉強と何の関係もない仕事なんてまっぴらだ。ヘイヴィアもさ、『受け流す』ってオトナの対応を学んだら？」
クウェンサーはうんざりした調子で言ったが、ヘイヴィアはあまり聞く気がないようだ。彼は白い空を見上げて、
「つかよ、ここって南極なんだよな。さっきから気になる事があるんだけど、質問して良いか？」
「大自然の素晴らしさについては専門外だよ。説明したがりの環境保護団体に聞いてくれ」
「いやいや、とてもとても簡単な事なんだ」
南極と言えば氷の大陸。ところによってはマイナス五〇度以下にまで気温が下がる、正真正銘の凍土である。この白い大地では、一年を通して水が固体である時期の方が長い。それは人間だって同じだ。こんな過酷な環境に生身の肉体を放り出したら、カチンコチンにならない時期の方が短いのだ。
と、そのはずだったのだが……。

「……何で、南極なのにこんな暑ちぃんだよ、ちくしょう……」

呻くようにヘイヴィアは言って、寒冷装備のコートのフードを頭から取り払った。額に浮いた汗を不気味そうに拭い、彼は周囲を見回している。動物モノのドキュメンタリー番組では一面真っ白な陸地ばかり映っていたものだったが、彼らのいる所は真っ黒な石の地面だった。そして地面の所々から、白い湯気のようなものが出ている。一応、今現在も強い横風が吹いていて、頭上の雲からは白い雪が降り続いているのだが、蒸気のせいでちっとも寒さを感じないし雪も地面に降りるか降りないかの所で溶けてしまい、全く積もっていなかった。何もかもがイメージ通りではない。

一方、クウェンサーはデジタルの温度計の数字に目をやりながら、

「南半球は季節が逆なんじゃなかったっけ？　これからちょうど夏に差し掛かるんだよ　それでも一応、外気はマイナス三・九度　コート脱ぐと、あっという間に体が冷えるぞ」

「嘘だろ。これでマイナスだって？　なんかサウナみてえに蒸し暑くねえか？」

「この辺りは火山地帯だから、地面から一時的に変な熱が出てるんだよ　二年ぐらい前に大噴火があって火口の様子が大幅に変わったって話題になってたじゃん。それを受けて暑く感じているだけ。じっとしてるとすぐ体が冷えるから、フードは被っておいた方が良い」

「うはははははは!!」

と、いきなりヘイヴィアが笑い出した。
訝しげな顔でそちらを振り返ったクウェンサーに、ヘイヴィアは指差して言う
「おい見ろよクウェンサーッ!!　温泉だ、南極のくせに地面から温泉が湧いてやがるぜ!!」
「……だから火山地帯だって言ってるだろ」
「それにしたって温泉だぜ!?　南極なのに!!　なんつーかイメージ全部ぶち壊しっ!!」
言いながら、ヘイヴィアは分厚い手袋を取った。白い湯気を出す水溜まりの縁で屈み込み、その手をお湯の中に差し込んでみる。
「うっ……ヤバい、ちょうどよさげな四〇度っぽい」
「やめろヘイヴィア、一度でもその温泉に浸かったら、俺達もう戦争なんてどうでも良くなるに決まってる」
極めて名残惜しいが、このままのんびり温泉トラップに嵌り続けていたら、後でフローレイティアからどやされるのは確実だ。二人は先に進む事にする。
一〇〇人以上の兵隊が同じように動いているはずだが、包囲網が極めて広いため、見える範囲にはクウェンサーとヘイヴィアの二人しかいない。
黒くて硬い岩の大地を、携帯端末に表示された地図を基に歩いていく。しばらく進むと、黒々とした地面は白い雪や氷に覆われていった。体感的にはほとんど真っ平らだが、ボールを置けば前方へゆっくり転がっていくであろう程度の、緩い下り坂状の雪原が続いている。それ

と共に、心なしか体感温度も下がってきたような気がした。四方どちらを見ても白い大地が広がっているだけで、めぼしい目印がない。ちょっと地図から目を離すと、どこにいるか分からなくなりそうだった。

クウェンサーは足元でザクザク音を鳴らす氷の粒に目をやり、

「おおー、ようやく南極ってムードになってきたね」

「痛てっ!?　っつか寒いんじゃなくて痛てえ!?　ちょ、クウェンサー。なんか俺の顔の調子がおかしいんだけど変な事になってねえ!?」

「……顔の汗が凍り付いているな。痛いのは皮膚が引っ張られているからじゃないの？」

くそくそくそくそっ!!　とヘイヴィアは慌てて顔についた微細な氷を振り払い、フードで頭をすっぽりと覆う。

「ちくしょうっ！　どうせ南極っぽいってんなら、ペンギンとかカワイイ系のイベントにしてくんねーかな！」

「ここまで氷ばっかりだと壮観だねえ。ま、二日で飽きそうだけど」

「なに、クウェンサーは何で大丈夫な訳？　寒い国の出身の人？」

「いや別に。俺もどっちかというと、氷にはウンザリしている方だよ」

クウェンサーは適当な調子で肩をすくめる。

『安全国』の学校にいた頃はさ、オブジェクトの装甲の基礎とかで、四角い板状の氷を作っ

ては、しょっちゅう砕く実験ばっかりやらされてたよ。どことどこを突くと、どういう風に亀裂が走るのか、とか」

「何で氷なんだよ。オブジェクトの装甲なら鋼鉄だろ」

「水の方が再利用が簡単だから。冷凍庫があれば何度でも実験できる　あと、基本的な亀裂の仕組みを学ぶだけだから、高耐火反応剤で微調整した鋼板なんて、高価な職人技が必要なものは使わないの。ちょっと薬品を混ぜて粘度を増してから固めると、見た目の『割れ方』がそっくりになるんだよ」

わざと粘度のバランスを崩して、より効率の良い衝撃吸収性を持つ比率を調べようって実験もしてたっけ、とクウェンサーはため息混じりに呟く。わざわざこんな戦場までやってきているのだ。それぐらい学校の授業はつまらなかったという訳である。

話題を変えるように、クウェンサーは言う。

「そういえば、こんな何もないトコでテロリストって何やっているんだろうな。わざわざ地対空ミサイル用意してまで観光で来るような場所か？」

『分かっていないねクウェンサー』

と、答えたのは無線越しのフローレイティアだった

『南極は国連が崩壊する前から、領有権を巡って複数の国家が鎬を削ってきた「激戦区」よ』

「……？　南極に国境も領土もないでしょう？」

『決まっていないから、決めてしまおうとする勢力が出てきて揉めるの。南極には鉄や石炭なんかの鉱山もあるしね。海には豊富な漁場もある。争わないのは損なのよ』

フローレイティアは適当な調子で説明を続ける。

『今のところ、南極の領有権を主張しているのは、この前崩壊したオセアニア軍事国に、「資本企業」の西米セントラルヴァレー方面、「情報同盟」のチョノス諸島方面、「正統王国」では南グレートブリテン方面の連中ってところかな』

その言葉に、クウェンサーは眉をひそめた。

「……オセアニアとかチョノス諸島は南半球ですけど、西米セントラルヴァレーって、ロサンゼルスの辺りでしょう？　南グレートブリテンだってロンドンじゃあ……ぜんっぜん、南極と隣接していないじゃないですか」

『最初に大陸を発見した者にその領有権がある……って開拓スピリッツ全開の主張をしているの。探検隊を派遣した順番で言えば、一応理には適っているけど……これは大航海時代と同じで、あんまり当事者の人権を考えていない思考方法よね』

……という事は、例のテロリスト（かどうかは不明だが、書類上そういう事にされてしまっている何者か）は、南極の領土や資源を巡るいざこざが元で、『正統王国』の調査機を地対空ミサイルで狙う、などという行動を起こしたのだろうか？

（……ま、問題なのはそこじゃない。こんなオブジェクト全盛の時代に、鉄砲持って戦場を走

り回る係を俺達に押し付けられる方が、よっぽど厄介なんだよな……）

『何か言いたげねクウェンサー』

「いっ、いえ!!　特に何も!!」

『一つ良い事を教えてあげる　テロリストについては、見つけても無理にドンパチする必要はないの　ロス海には我らが最強のオブジェクト様が待機してるから、居場所を伝えれば可愛いウェイトレスさんが遠距離砲撃でみんなまとめて吹っ飛ばしてくれる仕組みよ』

「ならよ」

ヘイヴィアが白い息を吐きながら、うんざりした調子で無線機に言う。

「わざわざ俺らを歩かせなくても、軍事衛星かなんかで走査しちまえば済む話じゃないですかね？　今は月面に別荘が建って、レーザー式の軌道エレベーターかマスドライバー式かでシャトルの射出規格を争うような時代なんだから、衛星なんて空き缶みたいにゴロゴロあるでしょそりゃ強襲揚陸空母の艦橋で温かいココアを飲みながら指示を出している上官様には、雪原で震える俺らの苦労なんて分からねえかもしれませんが」

『北極や南極は、ちょっと事情が複雑でね』

部下の嫌味を完璧に無視し、フローレイティアはサラリと答える

『地球の遠心力を利用して赤道近くを漂う静止衛星じゃ、監視の目が届かないの　赤道を横軸とみなした場合、縦軸に対応して回転する衛星もあるけど、そっちは一日に一定の時間しか監

視に使えないから、今この時間は使えない』

「……地軸の延長線の大気圏外にピタリと乗せる衛星ってありませんでしたっけ？」

『それこそ領有権問題のど真ん中よ　地軸の延長線って、ピンポイントでしょ。乗せられる衛星の数に限りがあるの　……で、我らが「正統王国」は北極に強いアドバンテージを持つ代わりに、南極では衛星を一つも乗せられない状況にあるのよ』

「機材不足を補うために生身の人間を大量投入して、非効率極まりない作業量を必死でこなしていくって訳ですか」

ヘイヴィアは口の端を曲げ、ため息と共に言う。

「……文化的な人間のやる事じゃねえな」

『ヘイヴィア　文化的な人間は礼儀作法を重んじるものよ　理解できてる？』

へいへい、と軽く答えようとしたヘイヴィアだったが、その声は出なかった

タアン!!　と。

クウェンサーとヘイヴィアの間の地面に、ライフル弾が突き刺さったからだ。

（敵襲!?）

二人はとっさに伏せようとしたが、ここは何の遮蔽物もない雪原であると気づかされる　へ

イヴィアはクウェンサーの肩を摑み、強引に後ろへ下がった。平坦な雪原とはいえ、地面にはわずかな起伏がある。凸字の雪原を数メートル引き返してから伏せる事で、クウェンサー達は氷の地面という遮蔽物に身を隠したのだ。

「（……何だ何だ!?　例の南極テロリストか!?）」

「（……それ以外に何があるってんだ!!　ここが南極で命拾いしたな、強い横風がなけりゃ最初の一発目で俺らのどっちか片方死んでたぞ!!）」

「（……この辺、火山と極寒が入り混じっているだろ。温度差がある、連中は俺達より南極生活長いみたいだし、ひょっとすると銃身とか照準装置の金属が変質しているのかもしれないな）」

小声で言い合っている間にも、氷の粒を巻き上げるように、タタン！　パン!!　と断続的にライフル弾が白い地面に当たってくる。着弾点はバラバラだった。ヘイヴィアの言う通り、横風の影響かもしれないし、他にも『狙った通りに当たらない要因』が重なっているのかもしれない。

ヘイヴィアは伏せたまま、赤外線や紫外線など、様々な情報を得られる照準装置の取り付けられたライフルを構えながら、

「（……距離二〇〇。人数は七、八人か？　使ってるライフルは、木製ストックの例のヤツだ。ビニールテープ使って、強引にグレネードを取り付けてやがるな）」

「（……やれそう？）」

「（……むしろ何だその傍観っぽい質問は？　テメエも拳銃とかＰＤＷとか取り出してさっさと構えろよ!!）」

「（……いや悪いんだけど、俺銃器持ってきてないよ。あるのはいつも通りの爆弾だけ）」

「（……何しにここまで来たんだよテメェは!?）」

思わず両手でクウェンサーの首を絞めようとするヘイヴィアだったが、そこで間近の地面にライフル弾が当たった　慌てて頭を下げ直し、牽制のためにヘイヴィアもライフルを撃ち返す

「（……くそくそくそっ!!　後で首は絞めるが今尋ねるぞ！　何でテロリストと戦うっつーのに鉛弾の一発も持ってきてねえんだ!?）」

「（……いや正直に言うと俺は持ってこようとは思ったんだよ!?）」

『駄目よクウェンサー。訓練課程を修了していない「学生」に、「軍人」の火器を渡す許可は下ろせないの』

「（……うーん。爆薬を取り扱う方がデリケートだと思いますけどねえ）」

『「安全国」の学校では、オブジェクトの模型を使った耐衝撃実験のために爆薬を使っていたんでしょ。だから許可を出しているだけよ。そもそも、それは銃の暴発の怖さを知らない小僧の台詞ね』

そうですかねえ、とほのぼの受け答えするクウェンサーのすぐ横で、テロリストの放った銃弾が思い切り雪の塊を巻き上げた。

ブチ切れたのはヘイヴィアだ。

「のんびりしてねえで何かしろォおおおおおッ!!　つか、何で俺だけが命懸けで応戦しなくちゃならねえんだ!　敵の居場所さえ教えりゃ海で待ってるお姫様がオブジェクトで砲撃してくれんじゃねえのかよォおおおおお

ただ、敵兵の方も次第に慣れてきたのか、一塊だった集団が徐々にバラけてきた。今は数メートルの間隔しか開いていないが、じきに横の別ルートから回り込んで来そうだ。

クウェンサーは思わずハッと顔を上げそうになり、ヘイヴィアに頭を押さえつけられた。そのすぐ上を敵兵の弾丸が通り過ぎていく。

雪に埋もれたまま、クウェンサーは言った。

「まずいヘイヴィア!!」

「敵さんが複数のルートに分かれて襲って来そうって事か!? そんぐれえ分かってるよ！ 分かってて何もできねえから困ってんだろうが!!」

「違うそうじゃない!! ペンギンだ!!」

「はぁ!? この状況でペンギンなんてどうでも――ペンギン!?」

「赤ちゃん！ ペンギンの赤ちゃん!!」

クウェンサーが指差す方向をギョッとした目で見るヘイヴィア。ライフルで互いの命を狙う兵隊達のど真ん中を横断するように、灰色の小さいペンギンの赤ちゃんが、よちよちよちよち……と、たどたどしい足取りで歩いてくる。

巻き込まれる。だが銃撃を止める訳にもいかない。

ヘイヴィアがこめかみに青筋を浮かばせるほど苦悩していた、その時だった。

奇妙な事が起きた。

すんでのところで引き金から指を離したヘイヴィアに応じるように、向こう側のテロリスト達も銃撃を止めたのだ

ペンギンの赤ちゃんだけが、戦場の最前線にいる兵隊達の事など全く気に留めず、体を左右に振るような動きで白い大地を横断していく

クウェンサーとヘイヴィアは手に汗握りながらそれを見守る

「(……がんばれっ!!　がんばれ赤ちゃん!!)」

「(……おいおい何で赤ちゃんが一匹だけなんだよ!?　ちゃんと親が保護しないとまずいだろ!!)」

そこで、ぺちっと赤ちゃんペンギンが転んだ。

「うあぁっ!!」

「駄目だヘイヴィア!!　人間は手を貸さないのが大自然のルールだ!!」

思わず飛び出していこうとするヘイヴィアを必死に押し留めるクウェンサー、そうこうしている間に、ペンギンの赤ちゃんは小さな羽を動かし、一人で力強く起き上がる、

ぎゃー、という新たな鳴き声が聞こえたのはその時だった

「アホウドリだとう!?」

「おい、食われねえよな？　ここに来て上空から襲いかかってきたりはしねえよな!!」

しかしそれもまた大自然のルールである。

海鳥にライフルを向けるか向けないかで摑み合いになるクウェンサーとヘイヴィアの見ている前で、アホウドリは大きな翼を広げ、天空から狙いを定める　ふわふわしたボールみたいなシルエットのペンギンの赤ちゃんは、自分が狙われているのだという事にすら気づいていないようだった。

そこへ襲いかかるアホウドリ。

天敵は上空から槍のように勢い良く急降下していく。死の嘴がペンギンの赤ちゃんを正確に狙う。

誰もが血の色と匂いを想像した。

クウェンサー達はライフルを奪い合う事すら忘れ、とっさに自分の目を掌で覆おうとするしかし。

予想に反して、悲劇は起きなかった

横合いから。

くみゃあああああああああッッッ!!　という、新たな鳴き声が炸裂したからだ。

「ッ!?　なに、何だよクウェンサー!?」

「お母さんが来たみたいだ　ペンギンのお母さん!!」

威嚇の鳴き声に驚き、アホウドリの狙いがわずかに逸れた　間一髪の所を嘴が掠め、ペンギンの赤ちゃんがようやく甲高い声で母を呼ぶ。

アホウドリは一度では諦められなかったのか、白い天空へ伸び上がるように上昇すると、大きな弧を描いて再びペンギンの赤ちゃんを狙い直す
だが、もう赤ちゃんは一匹ではない。
その盾となるように、大きなペンギンのお母さんが駆け付ける。
助かるなんて保証はない。
海鳥の鋭い嘴や爪は、成体のペンギンに対しても十分な脅威になるはずだ。
それでも、ペンギンのお母さんの瞳は揺るがない。
水を掻くための羽を広げ、嘴を限界まで広げると、ありったけの声量で威嚇の声を上げ続ける
固唾を呑むクウェンサーとヘイヴィア。
いいや。
雪原の向こうにいるテロリスト達も、もはや一言も発さずに趨勢を見守っていた
そして。
アホウドリは数回、親子の頭上を大きく旋回したが、そこで諦めたのだろう　一定の軌道から大きく外れると、ぎゃあー、と負け惜しみのような鳴き声を上げて白い空の向こうへと去っていった。
ペンギンのお母さんは我が子を守り抜いたのだ

その瞬間。

わあああああああああああああああああああああああああああああああああ!! という、スタジアムみたいな歓声が南極大陸に響き渡った。ペンギンの親子愛に感動した全ての人類が喜びの雄叫びを放ったのだ。クウェンサーとヘイヴィアは互いに抱き締め合い、雪原の向こうでは、敵兵がライフルを両手でバーベルのように振り上げて、全身で感動を表現していた。歓喜の渦を作り上げたペンギンの親子の方がびっくりしたようで、赤ちゃんは母親の短い足と足の間に潜り込むと、二匹揃って足早にこの場から離れていく。本来ならオスの行う仕草だが、何らかの事情があってお母さんペンギンが行っているのだろう。

一〇分ぐらいかけて、ペンギンの親子は戦場を横断し、小さな段差を下りると、完全にクウェンサー達の視界から消え去った。

束の間のペンギンフィーバーは静かに幕を下ろした。

直後、

パパン!! ダンダンダダドガガガッ!! と。

両勢力は躊躇なく銃撃戦を再開させる。

クウェンサーとヘイヴィアは思い切り身を伏せる。ヘイヴィアは引き金を引きながら、血走

った口で叫ぶ

「うおおおおおおおおッ!!　撃て撃て撃て撃て撃て!!」

「だーちくしょう!　やっぱり分かり合えないな俺達!!」

大声で言いながら、携帯端末を操作するクウェンサー　どこまで行っても白い物しか見当たらない南極の地図を、拡大縮小を繰り返しながら確認していく

それを見て、苛立った調子でヘイヴィアが言った。

「今さら地図なんかチェックして何になるんだよ!　どっちみち、お姫様からの援護はねえんだろ!?　このままじゃ敵が分散して回り込まれちまうぜ!!」

「その前に片をつけよう」

クウェンサーは背負ったバッグからプラスチック爆弾『ハンドアックス』を取り出した　無線信号の受信機とセットになった電気信管を突き刺しながら、

「合図したら撃ちまくって牽制してくれ。その間にこいつをぶん投げてみる」

「……敵との距離がどんだけ開いているか分かってるか?　一〇〇はあるぞ　野球の硬球の遠投だってそんなに飛ばねえだろ」

「説明してる暇はない!　ほら今!!」

「もうかよクソッ!!」

文句を言いながらも、ヘイヴィアはライフルを構え直す　一ヶ所の敵を正確に狙うのではな

く、バラけつつあった敵兵全体に行き渡るように、扇型に銃口を振るような感じで弾をばら撒いていく。

結果、命中精度はさらに落ちて、まともに弾は当たらなくなるが、敵兵がわずかに怯んで身を伏せる。

そこで、クウェンサーは大きく体を起こして、全力でプラスチック爆弾を放り投げた。大きく弧を描いて宙を舞う『ハンドアックス』だったが、それはヘイヴィアの予想通り、敵の塊までは届かない　おまけに風に流されて真っ直ぐに進まなかった　この強い横風の中、五〇メートル以上も飛んだのだから努力はした方だろう。ちょうど落ちた所が分厚い氷だったので、そこからカーリングのように『ハンドアックス』が滑ったのも功を奏した。雪原全体が前方へ緩く傾斜している事も手伝って、プラスチック爆弾は地面を舐めるように、さらに距離を稼いでいく。

それでも、様々な要素が重なっても、一二〇メートルを超した辺りが限界だった　敵の伏せている二〇〇メートル前後には程遠い。

ヘイヴィアが舌打ちして叫んだ。

「ちくしょう！　だから言っただろうが!!」

「良いんだ！　あれで狙い通り!!　伏せろよヘイヴィア!!」

叫び返し、クウェンサーは無線機を親指で操作して起爆信号を送る

訝しむヘイヴィアだったが、結果は直後にやってきた。

ズズゥン!!　と。

彼らの前方にあった白い大地が直径二〇〇メートルほど、丸ごと崩落したのだ。

まるで巨大な落とし穴だった。ガラガラと崩れる大地は、数百メートル下まで一気に落下していく。その上に乗っかっていた、雪も氷も兵隊も、その全てを呑み込んで。

なす術もなかった。

今まで散々ライフル弾をばら撒いてきた敵兵達は、悲鳴と共に奈落の底へと落ちていく。

「ま、大成功ってトコかな」

クウェンサーは起爆に使った無線機から指を離し、そっと息を吐く。

「嫌だな。俺が知りたいのはオブジェクトの設計なのに。何で殺しの技術ばっかり身につくんだ」

「……あの、ぶっちゃけ何が起きた訳？」

「あいつらが立っていた場所って、正真正銘、氷の上だったんだ　V字の岩の崖を塞ぐ形で、分厚い氷の板が覆っていたって訳。その下は空洞になってる。この辺りが活火山だっていうのも手伝って、下の方は川みたいに変化しているって訳。ディーゼルの雪上車が通った程度じゃ

びくともしない厚さだけど、流石に軍用の爆薬に耐えられるほどの強度はなかったんだよ」
「ったく。それで地図を確認してやがったのかよ」
「オブジェクトを派遣できないって言うのも、これなら頷けるかな」
クウェンサーは自分が崩した氷の崖の底を眺めた。深い深い闇の底は全く見えない。仮にオブジェクトがこの氷を踏み抜いたとしたら、二〇万トンの巨重を持ち上げるクレーンを用意しなければならない。当然、今の人類にそんな持ち合わせはなかった。
「そういや、『安全国』の学校じゃ氷の板を割る実験ばっかやってたって話だったっけ？」
「こんな大雑把なモンじゃないよ」
クウェンサーは肩をすくめて、
「ほら、爆弾もあった方が良かったろ？」
「……どっちにしても、テメエの首を絞めてえ気持ちは揺るがねえがな」

6

ざくざくざくざく、とクウェンサーとヘイヴィアの二人は雪原を歩く。
もうすぐ目的地だ。
ここまで来ると、包囲網が狭まってきたせいか、別のルートを通って接近してきた、同じ基

地の別働隊の人影もちらほら見えていた。白い景色の向こうから手を振ってくる味方に、クウエンサーは同じように手を振り返しながら、

「うーん、やっぱ顔見知りが多いと安心できるね」

「アホ！　合図にしても方法があるだろ!!　この状況で手を振るなんて、発煙筒使って敵兵みんなに居場所を教えるようなもんだぞ!!　ついさっき敵兵ぶっ殺したばっかりなんだからよ、向こうだって警戒してる可能性高けえだろ!!」

遠くにいる歩兵も仲間から似たような忠告をされているのか、頭を叩かれていずこかへ引きずられていくのが見えた。

ヘイヴィアはガタガタと小刻みに体を震わせ、口から白い息を吐きながら、

「もう南極飽きました　っつーか寒みぃんだよッ!!　何が南半球はこれから夏季ですだクソッたれ!!　地球温暖化って本当に起こってんのか!?　十分に寒すぎるだろうが!!」

「南極の寒暖平均値が分かんないから何とも言えないよね。まあ、少なくとも夜に散歩をしたいような雰囲気じゃないけどさ」

ブツブツ言い合っていると、無線から通信が入ってきた。ロス海で待機しているベイビーマグナムに乗っているお姫様だ。

『……みっぺいされてねつがこもってあつくるしいから、さっさとおわりにしようよ　クウエンサー、エアコンのちょうせいメンテでしくじったでしょう?』

「くそう　相変わらずお姫様のお城は快適そうだなぁ」
『うーん　あっつい　だれも見てないからとくしゅスーツぬいじゃおうかな　どうせこうそくせんとうなんておこらないだろうし』
「それはイマジネーションで俺達の体温を上昇させようという配慮なのか……？」
『？』
眉をひそめるクウェンサーの隣で、本格的にやる気のなくなったヘイヴィアが呻くように呟いた。
「だからさー、やっぱ無茶なんだって　俺ら元々、安全な基地の周囲を守るための兵隊だろ遠征してテロリストの拠点を叩くなんて特殊任務にゃ向かねえんだよ」
「あれ？　歩兵にも種類ってあるの？」
「おいおい最前線にいるヤツの口から出ちゃったぜこの言葉！　そもそも俺とテメエだって受け持っている仕事は全然違うだろうがよ!!」
「……なんかヘイヴィア偉そうだよね　学生の俺はともかく、他の人達に関しては同じ基地に詰めてる兵隊じゃないの？」
「一口に兵隊っつっても、なり方は色々あんだよ　士官学校とか短期訓練課程とかな　希望の兵科でルートが変わるんだ　基地にいる連中は大抵一年制の教育課程スクールを出てきた連中俺みたいに六ヶ月の短期訓練課程からやってきた人間は少ねえの」

「半年と一年なら、長く訓練してる方が強そうだけど？」
「一年間机にかじりつくのと、半年泥にまみれて訓練続けるのはどっちが強そうかねクウェンサー君？　そもそも、短期訓練課程は最低二回は留年するのが基本　俺みてえに半年ストレートで卒業試験を突破できんのは稀だぜ」
『どっちにしたって、私が小銃抱えて走り回っていた頃に比べりゃ遊園地みたいなもんよ』
年寄りみたいな口調のフローレイティアだが、彼女は確か一八歳のはずである。一体いつから戦場にいるんだこの女、とクウェンサーは思わなくもない。
一つつーか、そもそもヘイヴィアって何でそんな泥臭いコース選んだ訳？」
「あん？」
ひとまず銃撃戦が終わり、周囲に敵兵がいない事を確認した安心感からか、あるいは面倒な次の戦場へ向かうのをできるだけ先延ばしにしたいからか、クウェンサーとヘイヴィアはダラダラと世間話を続けていく。
「いや、ヘイヴィアって『貴族』サマじゃん？　だったら、『貴族』特有のスペシャルコースがあるんじゃないの　卒業した時点でもう少し尉と呼ばれていました、とかさ」
「んー、そりゃ士官学校の事か　それぐらいなら『平民』でも入学できるぞ　流石に『将』辺りは『貴族』のオンパレードになるが、准将ぐらいまでなら気合い入れれば何とかなるしな」
「だったら何でヘイヴィアは下っ端の上等兵？」

「色々あんの。家督を継ぐためには高みの見物ポストじゃなくて、リアルに基地を守って国益のために戦ってますってアピールしなくちゃならねえとかな」

『結局、基地でもダラダラしているけど』

「それは言わない方向で。何事も建前ってヤツだよ。そもそも、オブジェクトメインの戦場で歩兵が一人で気張ったって『国益』レベルの功績なんか得られる訳がねえんだ。……まさか、こんな南極に放り出されるとは思っちゃいなかったがな」

『『貴族』さんは大変だね。そういう苦労話をたまに聞くと、俺は『平民』で良かったと思うよ」

「……逆に俺は『平民』ってスゲー不安だと思うけど　最近はいくらか議会もみんなに開かれたとはいえ、基本的に政治の中枢ってみんな『貴族』が掌握しているんだぜ　政治の場で自分達の意思を伝える機会が少ないって事に何か思わねえの？」

「政治なんて面倒だよ。誰かがちゃんとやってくれてるならお任せで良いんじゃない？」

「マジかよ　これがあれか、無関心層ってヤツか」

ブツブツ言っていた二人は、そこでふと足を止めた。

低い丘を一つ越えると、その先がエレバス山の麓だった。

クウェンサーとヘイヴィアは自然と雪の上に伏せ、双眼鏡やライフルのスコープで周囲を観察する。

しかし、麓と言っても、かなり広い。横風で流れる吹雪の奥に景色が霞んでいる。二人がそ

れぞれレンズ越しに確認すると、数キロほどの平たい雪原の向こうに、急激な斜面が待ち構えていた。

その雪原と斜面の接点には、まるで登山路の入口を管理するゲートのように、四角い建物が一つだけあった。あれが『正統王国』の無人観測所だろう。その周辺の雪原には、太さ八〇センチ、長さ九メートルほどの筒が横倒しに置いてあった。一つ二つではない。一定の間隔を開けて、数キロ程度の雪原全体に安置されていて、五〇本ぐらい転がっている。

クウエンサー達の表情は訝しげだった。

「(……調査機が地上から地対空ミサイルの照準用レーザーで狙われた場所っていうのが、この辺だって話だったけど)」

「(……残りのテロリストってのは一体どこにいやがるんだ？　寒さに耐えかねて立ち去ったとかって話じゃねえだろうな)」

そこへ、上官のフローレイティアから通信が入った。

『無人観測所の中で暖を取っているなら襲撃すれば済むけど、そうじゃないと面倒ね』

「どういう事すか？」

『いるかいないかも分からないテロリストを捜し出せって追加命令が下るだけよ。このクソ寒い南極の隅から隅まで、どこかに隠れていないか片っ端からね……実際にはテロリストはとっくに南極を離れていたとしても、それが確定するまでは延々と捜索を続けなくちゃならなく

なるかもね」

「マジかおいクウェンサーさっさと無人観測所確かめようぜ下手に逃げられたらこっちが凍え死にしちまう早く早くほら早くさっさと済ませりゃ温かい毛布とエアコンが待ってんだからよ」

「駄目だってヘイヴィア　そうやって慌てるといきなり頭を撃たれるんだから」

小声で言い合いながら、クウェンサーとヘイヴィアは伏せたまま這うような格好でじりじりと雪原を進む　似たような格好で移動する人影がちらほらと見えた　同じ『正統王国』の人間だ　彼らの反応は大体同じ『面倒臭い仕事はさっさと済ませよう』と、『この等間隔で置いてあるこのデカい筒は何なんだ？』である

全員の意見を代弁するかのように、ヘイヴィアはうんざりした調子で言う

「……五〇メートル級のオブジェクト同士がぶつかり合う時代にさ、生身の兵隊が銃を突き合わせて撃ち合うなんてナンセンスだぜ　敵がどういう作戦で来ようが、最終的にはロス海にお姫様のオブジェクトを待たせてる俺らに勝てる訳がねえんだ　だからさっさと諦めてくれりゃ良いのによ　こんなつまんねえ事で死んだら間抜けすぎるぜ」

「ていうかさ、ヘイヴィア　さっきから気になっているんだけど」

クウェンサーは伏せたまま、周囲を見回して言う

慎重に雪原を這い、一キロほど進んだ時の事だった

「無人観測所の周りに横倒しになっている、この変な筒って何？」

「あん？　観測に使うアンテナとかじゃねえの？　今は横風が強いから、変に折れないように倒してあるとか」

ヘイヴィアは適当な調子で言ったが、自分の答えに自信があった訳ではなかった。

そして。

クウェンサーの質問に対する答えは、別の所からやってきた。

ぐるん、と。

ある一点を中心に、直径八〇センチ、全長九メートルの円筒がひとりでに動き出す。

低重心の台座に支えられた巨大な砲台が、突如としてクウェンサー達に砲身を向けたのだ。

「……は？」

クウェンサーとヘイヴィアは、その瞬間、まともに体を動かす事ができなかった。呆然とする頭は、それでも目の前にある光景が、何を示しているのかだけは認識する事ができた。

どこかで見たような気はしていたのだ。

自分達を狙うものの正体。

それは。

超大型兵器、オブジェクトに搭載するために造られた巨大な砲の『スペア』だ。
等間隔に並べられた大小五〇もの砲が、雪原の中心地点にいるクウェンサー達の歩兵部隊へと集中的に向けられている。
「おおおお

棒立ちでは撃ち抜かれるのがオチだが、この平らな雪原では身を隠す場所などない。敵はそれが分かった上で、このど真ん中にクウェンサー達を招き寄せたのだ。

（くそっ、何で連中はレールガンなんて準備してるんだ!!　そもそも、最初に『正統王国』の飛行機を狙った時には旧式の地対空ミサイルとか使ってたくせに!!）

どうする

焦るクウェンサーの耳に、つい先ほどまで隣にいたはずのヘイヴィアの声が飛んできた

「クウェンサーッ!!　潜れ!!」

言っている意味が分からなかったが、辺りを見回して、やっと理解できた　第一射の衝撃波で、大地に大きな亀裂が走っていた。幅だけで一メートル以上ある。ヘイヴィアは自然発生した塹壕に潜り込み、顔だけ出して叫んでいたのだ

クウェンサーは雪原の上を転がり、近くまで延びていた亀裂へと飛び込む

彼の体が落ちるのと同時に、周囲一面のレールガンが第二射を発した

ズッドォォォ!!　という、余波そのものが爆撃みたいな音を発し、亀裂の中に逃げ込んだはずのクウェンサーの肺から酸素を絞り出そうとする

ヘイヴィアが気づき、こちらへ走ってきた

「ったく冗談じゃねえぜ　あのテロリストども、オブジェクト用のスペアの砲を山ほど用意してやがったんだ。大昔の戦争の対戦車陣地のつもりかっつーの!!」

「何それ？」

「入隊訓練やってた頃にゃ歴史の授業だ何だで、クラシックな戦術について眠たい講義をあれこれ受ける事もあったんだよ　こういう風に敵を誘い込んで前後左右から砲撃を仕掛ける陣地ってのが、大昔の戦争にゃ実在したらしい　そん時は対戦車砲を使っていたようだが、随分と派手な砲台に乗せ換えたもんだな、くそ!!　たかが歩兵のためにここまで手間かけやがって!!」

雪原を這っていた味方の内、この亀裂に飛び込めたのはどれぐらいいたか　他のメンバーは別の亀裂に飛び込んでいれば良いが、できなかった連中はやられているはずだ

亀裂の壁に背中を預け、ヘイヴィアが尋ねてくる。

「一番ヤバい問題は何だか分かるかクウェンサー」

「スペアって言っても、あのオブジェクトの砲で四方八方から狙われているって事だろ」

「違う」

ヘイヴィアは顔全体を汗びっしょりにしながら言う

「オブジェクトの砲を動かしているって事は、それを動かせるだけの動力炉があるって事だ」

「おい、それって……」

「何がテロリストだよクソッたれ!!　敵はオブジェクトを持ってやがったんだ!!　どっかに隠してあるオブジェクトから太い送電ケーブルを延ばして、ここにあるスペアのレールガン

に接続しているんだ。最悪、ここを切り抜けてもオブジェクトが待っているかもしんねえぜ!!」

他人の口から改めてその言葉を聞かされ、クウェンサーはゾッとした。

超大型兵器オブジェクト。

核シェルター級の分厚い装甲に、原子炉を超える特大の出力の動力炉。そしてその膨大な電力をフル活用して放たれる、レーザーや下位安定式プラズマ砲の嵐。それに対抗できるのは、同じオブジェクトだけだ。生身の兵隊がどれだけ抗っても、ダメージを与えるのは難しいのだ、だが、

「ヘイヴィア。悪いんだけど、先の事をいちいち論じている暇はなさそうだぞ」

「あん？」

「足元見ろ!!　連中の砲撃の余波のせいで、亀裂がどんどん広がって来てる！　このままじゃ俺達、二度と這い上がれない所まで落っこちるぞ!!」

ギョッとした顔でブーツの辺りに目をやるヘイヴィア。確かに、亀裂は急速に広がっていたかと言って、迂闊にここから這い出れば、地上を席巻する無数のレールガンの餌食になる。どちらにしても行き止まり。早急に問題を解決しなければ、黙っていても殺される。

「どうするクウェンサー。砲台は鉄の塊だ。ライフル程度じゃ破壊はできねえ!!」

「こっちの『ハンドアックス』も、五〇以上の砲台を一門一門吹き飛ばせるほどの量はないよ

そもそも安全に近づく方法が全く思いつかない」

「さっきのテロリストみてえに、足元の氷を割って一気に崩落に巻き込めねえのか？」

「残念ながらこの辺はきちんとした岩盤の大地だし、仮にそれをやったらど真ん中にいる俺達が真っ逆さまだろうな」

言うだけ言うと、クウェンサーは無線機の周波数を合わせる

通信相手は、近郊のロス海でオブジェクトを浮かばせて待機しているお姫様だ。

「ベイビーマグナムへ　こっちの位置は分かるか？　そこから砲撃した場合、いくつの砲台を破壊できる？」

『あいだに山をはさんでいるから、ちょくせつはねらえない　大きくこをえがくようにコイルガンをはっしゃすれば、しゃへいぶつのもんだいはクリアできるけど』

「命中率は？」

『五分五分。じゅうたんほうげきなら全てふきとばせるけど、それだとあなたたちもいっしょにけしとばすことになる』

本来、ベイビーマグナムの主砲は遠投のように弧を描いて狙うものではなく、直線的に敵のオブジェクトを撃ち抜くためのものだ。なおかつ、上空の風の流れは不規則で、ピンポイントに標的を爆破するのは少し難易度が高いらしい。

そうこうしている間にも、第三射、第四射のレールガンの余波が、クウェンサー達の足元を

揺らす。亀裂の中に隠れている事が分かれば、そこごと抉り取るように砲撃を撃ち込まれるだろう」

ビリビリと痛む鼓膜に顔をしかめるクウェンサーだったが、そこでふと顔を上げた

「ベイビーマグナムへ！　正確に当てるのは難しくても、とにかくここまで砲弾を届かせる事はできるんだな!?」

『う、うん。それぐらいなら、できる、けど……』

「グリッドで指示を出す!!　座標００２１２を基準点に、W11、J18、G26、M19、L27、B20、R12!!　そこなら風に流されても、誤差＋－五までなら味方の歩兵を巻き込まずに済む！　今すぐ馬鹿デカいコイルガンの砲弾を降らせてくれ!!」

『そこだと、うってもてきのほうだいに当たらないとおもうけど』

「良いから早く!!　それでケリがつく!!」

『？』

お姫様はいまいち意図を摑めなかったようだが、一秒を争う緊急事態である事は分かってくれているようだ。答えが出なくても、とにかく指示に従ってくれる

ドォン!!　という、これまでとは違う大きな音が響き渡った　山という巨大な壁を挟んでいるせいか、ややくぐもった音だった。

本来、ベイビーマグナムのコイルガンは音速をはるかに超える速度で発射されるものだが、

今回は大きく弧を描いて一定のポイントへ落とすため、わざと速度（＝威力）を落として撃ったらしい。音の方が速く届くのは珍しかった。

しかし、そんな感慨にふけっている場合ではない。

クウェンサーは亀裂の縁を両手で掴み、ぶら下がるような格好をしながら、傍らにいるヘイヴィアに……いや、無線を使って自軍の全員に向かって叫ぶ

「しっかり掴まれ!!　多分亀裂は広がって崩落する!!」

「おい、結局何をどうしたんだよ!?」

困惑しながらも指示に従うヘイヴィアだが、いちいち説明している暇はない。

コイルガンの砲弾が真上から落ちてきた。

数発の鋼の塊は、容赦なく岩盤に突き刺さって大震災のような震動を巻き起こした

直径一メートル弱、軽くトンに達する重さの砲弾だ　それが二八〇〇メートルの高さから降り注いだのだから、当然のようにとてつもない運動エネルギーが発生した。

ゴバッ!!　という爆音が雪や氷の粒を火山のように巻き上げ、亀裂の上方から土砂のように流れ込んできた　しっかりと掴んでいたはずの両手が、亀裂の縁から離れそうになる　しかし足元に感触はなかった。着弾の衝撃で亀裂が押し広げられ、先ほどまでの足場が消失していた。

南極の岩盤そのものが砕けたガラスのように割れたのだ。

「くそっ!!　敵も味方もオブジェクトの砲ってのはとんでもねえな!!　衛星からクレーターが確認できんじゃねえのか!?」

ヘイヴィアは吐き捨てながら、必死で亀裂の縁へ足を引っ掛け、這い上がる。

「おいクウェンサー、テメエのリクエストのせいでとんでもねえ事になっちまったぞ！　ったく、衝撃波だけでも砲台を薙ぎ倒してくれりゃ良いんだが……」

言いかけた彼の言葉は、いきなり途切れた。

見たのだ。

確かに、トン単位の巨大な砲弾は上空から降り注いだ。数発の砲弾は南極の岩盤を砕き、衝撃波を撒き散らし、遠くの山に雪崩を起こしたほどだった。

しかし。

五〇基の砲台そのものには直撃しなかった。

多少雪や氷の粒を被っているものの、動作に支障のある砲があるとは思えない。

「ちくしょう……ッ!!」

ヘイヴィアの喉が干上がる。こんな状態で這い上がればレールガンで四方八方から蜂の巣にされるのがオチだ。しかし亀裂の中へ退避しようにも、砲撃のせいで亀裂自体が広がり、足元は崖になっている。

すると、クウェンサーは亀裂からよじ登りながらこう叫んだ。
「良いから登れ!!」
「何言ってんのか分かってんのかテメェ!?」
「登らないと死ぬんだよっ!!」
意味不明な事を言って完全に地上へ這い出るクウェンサー。彼は無線機を使って、辺りの味方へも同じ内容の話をしているようだった。ヘイヴィアはどうしようか迷ったが、崖と化した亀裂の壁面には、足を引っ掛けるようなでっぱりもない。このまま指の力が抜ければ間違いなく死ぬ。腕力がなくなって、這い上がれなくなってからでは遅いと判断し、半ばヤケクソ気味に地面へと這い出る。
当然のように、無数のレールガンの砲口がこちらに向けられた。
生身の人間に避けられるようなものではない。
「くそっ!!」
ヘイヴィアは無駄と知りつつ、慌ててライフルを構えようとした。
しかし。
そこで、クウェンサーがこう言った。
「大丈夫だ」
どの辺が、と聞き返す前に、敵の方が先に動いた。

ドバッ!!　と。

レールガンの凄まじい発射音がヘイヴィアの鼓膜を叩き、心臓を締め付ける。

一発でも当たればイージス艦がくの字に折れる

思わず目を瞑ろうとしたヘイヴィアだったが、現実にはその条件反射すら追い着かないほど素早く結末がやってきた。

「……は？」

その瞬間、むしろポカンとした表情でヘイヴィアは目の前の光景を眺めていた

確かに痛みはあった。

だがそれは衝撃の余波を受けただけだ　砲弾が当たっていれば即死のはずだ

こちらに向けて放たれたはずのレールガンは、クウェンサーやヘイヴィア達には当たらず、あらぬ方向へと飛んでいった。しかも、それだけに留まらない　ある砲台は反動に負けたように後ろへ転がり、別の砲台は横倒しになり、ひどいものになるとロケットのように真後ろへと飛んでいくものもあった。規則的に配備されていたレールガンの群れが、完成途中のドミノをうっかり倒してしまったように、グチャグチャに乱されていく。

ヘイヴィアの頭は疑問でいっぱいだった

「なっ、何だ？　何が起こったんだ？」
「レールガンを支えるために地面へ刺していたアンカーを使い物にならなくさせたんだ」
「？」
「厳密には、アンカーじゃなくて地盤そのものを割った訳だけど」
クウェンサーは念のために伏せていた体を起こしながら言う
「オブジェクトの使うレールガンとかレーザーって、あの二〇万トンの巨体に載せて使うために設計されたものだろ。だから本来、あれを発射すると周囲に衝撃波とか輻射熱とかが撒き散らされる　こういう砲が基地の警備に直接使われないのは、敵の攻撃と同じぐらい、味方の攻撃の余波も怖くてまともに配備できないからって話もあるぐらいだし」
「それが……今のと、どう関係してんだよ」
「つまり、普通に地面に置いて撃ったぐらいじゃあまりにも威力が高すぎて、衝撃波がレールガン自体を薙ぎ倒してしまうって事　連中は一〇メートル以上もの長さのアンカーを、岩盤の深く深くまで突き刺してレールガンが後ろに倒れる事を防いでいたはずだ　でも……」
「お姫様の砲撃が、岩盤そのものを割っちまったから……」
「アンカーの効果も失われた　発目すら当たらなかったのは、砲が傾いだからだ　後は子供に片手でマグナム拳銃を撃たせるようなもの　そんな事をすれば、勝手にダウンしてくれる……応、倒れた砲でも射線は避けるようにして、送電ケーブルを切断していこう　まだ砲を

撃つ機能ぐらいは残っているかもしれないからな」
「後は、これを操っている連中を捜せばおしまいだな」
「それについては心当たりがあるんじゃないの？」
クウェンサーが顎で指すと、『正統王国』の無人観測所の方が慌ただしくなってきた。どうやらそちらで暖を取りながら、遠隔操作で砲台を操っていた連中がいるらしい。向こうにとっては奥の手だった対戦車陣地を片っ端から破壊されたのだ。焦りもするだろう。
「向こうが銃を持って応戦し始める前に、有利なポジションを探しておこう」
クウェンサーはヘイヴィアの肩を叩いて行動を促す。
「本格的な銃撃戦になったら、俺は役に立たない。だからヘイヴィアが先導してくれ」

7

無数の砲台を黙らせたクウェンサーとヘイヴィアの二人は、すぐに他の『正統王国』軍の歩兵達と合流した。味方の被害は思ったより少なかったようだ。
だとすれば、その後の戦闘の流れは火を見るより明らかだろう。
無人観測所にいたテロリスト達は、大した手間もなく排除できた。どうやら本当にオブジェクト用のスペア砲を利用した対戦車陣地に重点を置いていたらしく、『それが突破された時の

対応』を全く考えていなかったようだった。テロリストの人数も少なく、正面からやり合っても勝ち目は薄かった……というのも『遠隔操縦で無数の砲を動かす』戦術に頼る後押しにもなったのだろう。

『正統王国』の調査用航空機を狙っていたと思われるミサイルランチャーも見つかった。見た目は装甲車のような車体で、上部がランチャーになっている。回転式の台座の上に、八発のミサイルが備え付けられていた。四本の発射用の筒でワンセット、それが二つほど並べられている。

ミサイルランチャー自体はレーザーで照準する形式のようだが、それとは別にレーダー用の専用車両も用意されていた。だが、そのレーダーの設置角度が異様だった。おそらく対空用の設備を無理に倒して、地上のクウェンサー達を走査するために利用しようとしていたのだろう。

「……結局、皆殺しにしちまったから連中の目的は分からなかったな。フローレイティアの不満顔が目に浮かぶぜ」

ヘイヴィアが面倒臭そうな調子で言う。

敵味方に相当な被害が出る状況では、『相手を生かして捕らえる』のは極めて難しい。もたもたしている内に敵兵に態勢を整えられればこちらの危機だ。よって、ヘイヴィア達は火器を使って全力で戦い、結果として敵兵を一人残らず殺してしまった訳だが……。

「おかげで、敵がこれで全部なのか、他にもどっかに隠れているのか、そこら辺も分からなく

なっちまった、結局、この白い大陸で寒さに震えながら捜索活動続行かよ」

「エレバス山は活火山だから、上陸時と同じで局地的に暖かいみたいだけどね」

クウェンサーは足元を指差す。そこは雪や氷の粒で覆われた白い大地ではなく、黒くてゴツゴツした岩盤だった。

と、ヘイヴィアが岩盤から噴き出す白い蒸気を見つめてこんな事を言った

「クソッたれ　こんな状況で捜索活動なんかやってられるか　どんだけ頑張ったって給料は同じだぜ　テロリストどもの尻候は潰したし対戦車陣地も黙らせた。むしろ働き過ぎじゃねえの？　他の歩兵にも花を持たせてやらねえとマナーに反するぜ」

「おい、もうギブアップかよ。フローレイティアさんがうるさいぞ」

「足元を見ろクウェンサー　ここには温泉が湧いている　ちょうど良い感じの四〇度だ　流石にここで全裸になって飛び込むほど馬鹿な真似はしねえが、ブーツと靴下を脱いで足湯モードになるぐらいなら許されると俺は思う」

「……それ言っちゃう？　俺だってさ、本当はこんな白い大陸で人捜しなんかしたくないのよ？　っつか、オブジェクトの設計の勉強と何も関係ないじゃんこれ」

『正統王国』軍は現在、無人観測所を中心に、周囲一帯の捜索をしている。未だに対戦車陣地に電力を供給していたオブジェクトの存在については不明……だが、もう馬鹿二人はそんな事などどうでも良くなっていた。直径一メートル、深さ三〇センチ程度のお湯に足を突っ込み、

岩盤に腰掛け、とてつもなくまったりしたムードに包まれていく。
「それにしても、テロリスト達は何で地対空ミサイルなんて使ったんだろうな」
「あん？　何の話だよ」
「連中、大量のスペア砲を使っていただろ。あれで撃ち落としたって良いんじゃないのか　まして、スペア砲に電力を供給する謎のオブジェクトが本当にあるんだったら……」
「知るかよそんなの　連中は現に対戦車陣地で奇襲を仕掛けてきただろ。成功率を高めるために、わざと質の悪い兵器だけを使って、情報を集めさせねえって目的でもあったんじゃねえの？」
「……例のオブジェクトにしても、そもそもお姫様のレーダーにも映らないっていうのはどういう事なんだろうな。オブジェクトって、五〇メートルの巨体だぞ。隠そうとする方が難しいだろ」
「なあクウェンサー。まさかと思うが、カクカクしたボディのステルスオブジェクトとかが待ってるなんて事はねえだろうな」
「うわー、それ嫌だ　でも、あれだけの巨体に高度なステルス性を付加するとなると、どれだけ費用がかかるんだろう。開発費の他に定期的な整備でも湯水のように金を使うらしいよ」
「そんなもん、敵に聞かなきゃ分かんねえよ。第二世代のデザインなんてどいつもこいつも極端すぎるじゃねえか」

本当にステルスオブジェクトなんて実在すればの話だけどな、とヘイヴィアは適当に付け加える。

敵に聞かなければ……と言えば、結局、テロリストの目的が何だったのかも不明のままだ。彼らはこんな所までやってきて、一体何をやろうとしていたのだろうか。

「ま、俺らの仕事じゃねえよな。そういうのに頭を悩ませんのは、爆乳の上官ぐらいで十分だ」

ヘイヴィアは適当な調子でそんな事を言った。

彼は足を浸したお湯の温もりどころか、立ち上る湯気に体を埋めようとするかのように全身を脱力させながら、

「だぁー……。あまりにも気持ち良過ぎて眠たくなってきたぜ……」

「おい、寝たら死ぬぞって言わせてくれよ。実はちょっと憧れているんだ」

クウェンサーとしても、オブジェクトの設計に関係のない事をいつまでも考えるつもりはない。彼はお湯の温度を足で楽しみつつ適当に首を回す。

その時だった。

何か、銀色の塊が見えた

「？」

クウェンサーは首の動きを止め、そちらに改めて目をやる。

横風に流れる吹雪の奥。五〇メートルぐらい先にある、人の背丈ぐらいの岩の陰に、半ば身

を隠すように、何か巨大な塊が置いてあった。まるで、できるだけ吹雪が当たらない位置を選んで置いてあるようだった。

「うわ、何か嫌な物見つけた」

「何見つけてんだ馬鹿!!　仕事しなくちゃならなくなっちまったじゃねえか!!」

「ホント、トラブルは全部俺達の見ていない地球の反対側辺りでやってほしいよね」

「この南極から反対側だと結構『安全国』も危なくなるけどな」

クウェンサー達はいかにも面倒臭そうな調子で、お湯から足を引っこ抜き、丁寧に水分を拭ってから靴下とブーツを履く。

「おいクウェンサー、なんか向こうの方、白い蒸気みてえなのが元気良く噴き出してんじゃん。本当に大丈夫なのかよ……」

「目の前の問題をさっさと解決すれば、その分だけゆっくりくつろげる。そういう風に考えてやる気を出そうよ」

ブツブツ言いながらも、彼らは岩陰にある巨大な塊の方へと向かう

一辺が八〇センチぐらいの、四角い箱だった。

……のように見えたのだが、左右両サイドから、カニのような機械の脚が生えている　ロボットだ。よくよく観察してみると、箱の上部にはカメラやセンサーのようなものがいくつも取り付けられていた。鉄板のカバーが外されていて、防水加工のノートパソコンがケーブルで接

続されている
ヘイヴィアが眉をひそめた。
「何だこりゃ？」
「観測用ロボットだよ。『安全国』て学校に通っていた頃、オブジェクトの基礎構造を学ぶ・環とか何とかで、こんなのを作った覚えがある」
クウェンサーは近づき、様々な角度から観察しながら、興味深そうな調子で言う。
「人間に入って行けないような、活火山の火口近くまで接近して色んな情報を得るためのロボットみたいだ」
「軍でもＵＡＶとか無人兵器の開発が流行ってるけどよ、今時の調査活動ってのはこんな手作りロボットを導入してる訳？」
「火星の探査ロボットに比べればハードルは低い方だよ　ついでに、火口付近の高温に耐えられるスーツを作るのよりも簡単だ」
クウェンサーはあっさりと肯定した。
「同時に南極の寒さにも耐えられるようにしないといけないから、正反対の環境に対応するように設計する必要がある。パラボラがついているから、ラジコンみたいに操作して、ここで得た情報は人工衛星を介して研究室とか実験船とかに送られる仕組みみたいだね」
「そうかよ。だが気になるのはそこじゃねえ」

ヘイヴィアはロボットの後ろに回って、ある一点を指差した。
「カバーが外してあって、変なコンピュータがケーブルで繋げられている事だ」
「外部接続用のコネクターは、ちゃんと別にあるな。このロボットを組み立てた人間が、わざわざカバーを外してコンピュータを繋げるようには思えないけど」
「……となると、設計者以外の人間が、無理矢理こいつを繋げたって事か？」
そこで、クウェンサーとヘイヴィアの二人は顔を見合わせた。
テロリストの目的は、これかもしれない。
「ようクウェンサー　コンピュータの画面見て分かる事ねえか？」
「触って大丈夫なのかな」
「何だよ、フローレイティアにでも指示を仰ぐのか。やだねえ、料理教室に通いたての若奥様みてえじゃん。フライパンに油を垂らすのにもいちいち先生を呼ぶ感じの」
「なら、なんかまずい事になったら説教受けるのヘイヴィアだけな」
「分かったよクソが俺らはエプロンの付け方も知らねえ幼妻だ」
早口で応じたあたり、ヘイヴィアは本当にあの上官が恐ろしいようだ。
クウェンサーは無線機の周波数を合わせ、南極用の探査ロボットとノートパソコンの事を簡潔に説明する。
フローレイティアからの返答もまた、明快なものだった。

『電子シミュレート部門のスタッフをそっちへ送る。到着するまで触れないように』

「けっ　こうしてまた俺らの手柄がよそに持っていかれる訳ですね」

と、ヘイヴィアは何やら不満顔だった　先ほどまで仕事面倒臭いと言っていたから、実は手柄うんぬんよりも南極のど真ん中で待機しなければならないのが嫌なのかもしれない

そんな、さっさと仕事を終わらせて帰りたいオーラを発するヘイヴィアに対し、フローレイティアはちっとも意に介さない軽い調子で、

『おや、ロボット内の空きスペースにプラスチック爆弾でも仕込まれているって可能性は考えないの？　操作を間違えると即座にドカンとか』

「早く帰りてえ!!　一刻も早く!!」

涙目で叫んでその涙を凍らせているヘイヴィアだが、フローレイティアは冷淡に現場待機の指示を出すと、そのまま通信を切ってしまった

おっかなびっくり探査ロボットを眺めるクウェンサーとヘイヴィア

自然と二人の足は、少しずつロボットから遠ざかっていくが、

「……あれ？」

「おい、なんか勝手に動き出してねえか？」

彼らの足が、ふと止まった。

二人の目は、ケーブルでロボットに繋がっているノートパソコンの方に向いていた
その画面が。
何やら猛烈な勢いで新しいウィンドウを表示し始めた
ヘイヴィアはますます逃げ腰になり、
「なんか、まずい事になってねえか？」
「まずいなんてレベルじゃないぞ……」
こちらはヘイヴィアと違ってウィンドウ内の文字列を真剣に目で追い掛けていたクウェンサーが、勢い込んで防水加工のノートパソコンの前へ滑り出した　慌てて一〇本の指をキーボードの上で固定させる。
改めて自分の意志で複数のウィンドウを表示させ、そこに書かれた内容を確認する
「この探査ロボットは通信衛星を使って遠隔地の研究室から操られていて、ロボットが採取したデータも同じルートで研究室に向かうように作られている　その通信衛星を使った送受信回線に、何か干渉しているみたいだ」
「ここから機密データを盗んでやろうとか、そういう話か？」
「いいや、違う！　くそっ!!」
ウィンドウを睨みつけていたクウェンサーが、唐突に叫んだ
「狙いは通信に使ってる衛星そのものだ!!　この人工衛星は通信の他に、宇宙空間での様々

な実験を行えるようにいろんな装備を搭載してる。その中の一つ――飛来した小惑星の表面をレーザーで焼いて、その時に出る光を検出してデータを取る機能が丸ごと乗っ取られてる!!」

「ごめんクウェンサー俺に分かる言葉で言って!!」

「平たく言うとハッキングした実験用のレーザーを勝手にターゲットに照射しようとしているんだっ!!　威力は大体三〇ミリの鉄板を焼き切るぐらいのヤツ!!」

「待て待て待て!!　そんな事できんのか？　衛星のセキュリティだって簡単なものじゃねえだろ!!」

「できるんだよ。ハッキングされているのは国家プロジェクトで莫大な予算を掛けて作り上げた衛星じゃない。どっかの大学が個人レベルの資金で作り上げた、安価な小型衛星なんだ　使われているシステムも市販のOSやフリーウェアをちょっと成長させたぐらいのものだ。当然、セキュリティだって!!」

「でも、宇宙空間で小惑星の表面を焼くためのレーザーだよな　それなら地上に照射されても、建物にぶつかる前に大気で減衰したり、オゾン層で屈折したりするんじゃ……」

「ターゲットが地球ならね」

クウェンサーは画面を指差しながら言う。

「テロリスト達が狙っていたのは、月面にある特権階級達の別荘地帯だ」

「月面!?」

素っ頓狂な声を出すヘイヴィアに、クウェンサーはモニターに表示されている衛星のレーザー照射角度の情報を指差す　明らかに地球の大気圏とは正反対の方向に向けられていた。他の天体を狙っているのだ。

「月面って、おい、冗談も休み休みに言えよクウェンサー　良い機会だから教えてやるが、世の中にはジョークを言って良い時と悪い時があるんだぜ」

「いい加減に現実見ろよ！　現に衛星のレーザーは月を狙ってる!!　より厳密には、月面のテラフォーミング実験の一環として設置されているブラインドネット!!」

「？　……ブラインドネットって、あれだろ。光学的な第二大気圏とかって呼ばれてるヤツ。宇宙空間に可変フォトニック結晶でできた半透明のワイヤーの馬鹿デカい網状の機材を二つ、大小の半球を重ねるように設置して、地表に降り注ぐ太陽光の量を自由に調整するって宣伝してたよな。確か、地球の温暖化を食い止めるためのリ・テラ計画にも使われるかもしれねえとかウワサされてたけどよ」

「月は地球と違って分厚い大気がないから、太陽光の影響をもろに受ける！　一日の内に、マイナス何十度の極寒と数百度の灼熱を経験するんだ!!　……テロリスト達が、レーザーを使ってブラインドネットを破壊し出したらどうなると思う!?」

人類による月の開発は進められているが、それでも地球のような大気はない。別荘は分厚い

壁に覆われた硬い建物だ　だが、その建物も『ブラインドネット』に守られた『環境』を前提に建てられたものだ　本当の意味で、過酷な地球外環境に耐えられるようにはできていないのだ

『ブラインドネット』が奪われたら、建物全体がものすごい温度差を受ける事になる　別荘にどんな弊害が出るか分かったものじゃない！　そして数ミリでも亀裂が走れば、中にいる人達は真空の地獄の中で死んでいく事になる!!」

他にも、太陽から降り注ぐ放射線の問題もある　巨大な網状のブラインドネットは月面に降り注ぐ放射線を偏光させる働きも担っていたはずなのだ

ヘイヴィアはうんざりした調子で、大声を出す

「……ふざけんなよ　月面への大規模攻撃なんて、人類の歴史でもこれが初めてじゃねえのか?!　理論的にどうこうじゃなくて、具体的にやろうと思う事すら誰も考えなかっただろ!!」

「その計画は今もこうして進行してる　早く人工衛星を何とかしないと!!」

無人観測所にいたテロリストの連中は、この月面攻撃が終わるまで時間を稼いでから逃げる算段だったのかもしれない　まだ発見できてはいないが、どこかに船でも隠してあれば、そういう作戦にも成功の可能性は出てくるだろう

「ヤベえな!!　衛星の周回ルートと月面の向き、後は太陽との位置関係で、大体どこに『穴』を空けられて狙われているかは分かるだろ　該当エリアのセレブ達を避難させねえと、ものす

ごく後味の悪い事になりそうだぜ!!」

「俺達の権限で!?　月に別荘建てるような金持ちに命令なんか出せるのか!?」

「そうだそうだ困った時の上官だ。フローレイティアに連絡だっ!!」

無線で指示を仰ぐクウェンサーとヘイヴィア

すると、フローレイティアは地獄を照らす炎のような怒りの声で、

『……電子シミュレート部門のスタッフが到着するまで触れるなと言っていたよね……？』

「いやスミマセンでも今はそれどころじゃ!!」

『上官の命令へ勝手に優先順位をつけるとは良い度胸ねクウェンサー　とはいえ……月面の別荘、か』

思案する彼女の声色には、やはり焦りのようなものが滲んでいた

フローレイティアは『待ってろ』とだけ残して通信を切る、数分経って再び通信が繋がると、今度は態度に余裕が戻っていた。どうやら電子シミュレート部門の力でも借りて、何らかの予測を立てていたのかもしれない

『とっとと結論を言うか、小型衛星については心配しなくていいよ　レーザーの予想照射地点は推測できたけど、ブラインドネットの「穴」によって狙われているらしい該当エリア「ロックキャッスル」に、面白いＶＩＰ様がいるらしくてね』

「？」

『「正統王国」と同じ世界的勢力の一角、「資本企業」軍の少将サマよ　今まで、「正統王国」でも何度か暗殺しようとして失敗している大物ね。テロリストが勝手に殺してくれるのなら、対外的な問題もクリアできるし。上層部の意見は、やってくれるんなら放っておけ。私も同感ね。今後、暗殺作戦でさらに多くの部下が戦死するぐらいなら、私はここで目を瞑る』

「……、」

「……、」

　クウェンサーとヘイヴィアは思わず顔を見合わせた。これまでの緊張が、何とも間抜けなものへと切り替わる。件の別荘にいるのが『資本企業』の民間人だった場合は流石にまずいとは思うのだが、殺し合いの指示を出して高みの見物をしているヤツの命を救ってやる義理はない。

『そういう訳よ。衛星については触れなくて大丈夫。一応、探査ロボットと接続したコンピュータには触れているのね。そっちについては後で諜報部門を送って、「過酷な環境で自然故障した」風に装うから問題はない。分かったらさっさと帰って来い』

　言うだけ言うと、フローレイティアは通信を切った。

　ヘイヴィアはへなへなと氷の上に腰を下ろした。

「はぁー。なんか一気に脱力したな。っつーか、俺らは一体何のために戦ってきたんだ。これじゃ対戦車陣地の餌食になった連中が浮かばれねえぞ」

「――――、」

適当な調子で言うヘイヴィアだったが、クウェンサーの方は答えない。
何か考え事をしているようだった
「おい？　何だよ、さっさと帰ろうぜ。それともさっきのペンギンの赤ちゃんの行方がまだ気になってんのか？」
「ヘイヴィア。ちょっと質問して良い？」
「何だよ」
「南極に来る前、整備基地の火薬庫で映像チャットやってたよね。ほら、『正統王国』の……ナニナニ家だっけ？　金髪でドレスの女の子」
クウェンサーは慎重に言葉を選びながら、先を続ける。
「……あの子、どこにいるって言ってたっけ？　確か、世界で一番地上の争いから遠い場所、とか言ってなかったっけ？」
「……ちょっと待て。おい、待てよちょっと!?」
「国旗の色とか関係ないとも言ってた気がする。それってつまり、各勢力の国境が定まっていないって所だよな」
もちろん、該当する場所はいくつもある。
例えば二〇〇海里の外にある公海。そして今クウェンサー達のいる南極。どこの誰のものでもない楽園は一つや二つではない訳だが、その内の一つが……、

「へっ、ヘイヴィア　まだ決まった訳じゃないし、ほら、杞憂な確率とっても高いんだからさ。とっ、とりあえずネット使って連絡取ってみたら？」

「そっ、そうだよな。何の根拠もねーもんな。あれ、南極ってネット使えたんだっけ？」

南極は各国各勢力の調査基地が乱立しているので、意外にネット環境は充実しているし、『正統王国』には海で待機している強襲揚陸空母もある

ヘイヴィアは携帯端末を取り出し、無線ＬＡＮのスイッチを入れながら、

「クウェンサー、軍事行動中で外部とのアクセスが遮断されてるけど、これってハッキングか何かでどうにかなんねえの？」

「そんな事ができたら派遣留学なんてしてません。でも、あのご令嬢の臨時権限ってまだ生きているかもよ　それならヘイヴィアとの間だけは何とかなるかも……」

「おおう！　繋がった繋がった！　でもフローレイティアにバレてブチ切れられんのも時間の問題って感じだな!!」

携帯端末で簡単な操作を行ったヘイヴィアは、どこかにいるであろう顔見知りのご令嬢と連絡を取る。

問一、あなたは今どこにいるのですか？

とても単純な問いかけに対し、とても単純な答えが返ってきた。

『決まってんでしょう？　月面にある「ロックキャッスル」って名前の別荘ですわよーだ』

その直後。

『正統王国』の有名貴族ウィンチェル家の跡取り息子ヘイヴィア殿は、こめかみに青筋を浮かばせてこう叫んだ。

「ファああアアア――――――――――――――――――――――――ック!!」

『なっ、何ですのそのストレートすぎる要求は!?　わ、わたくし、そーゆー申し出は嫌いじゃねーですが』

嫌いじゃないのかよ!?　と思わずツッコミそうになるクウェンサーだが、相手は『貴族』のご令嬢なので、下手にこじらせないようにしようと必死に押し留める

ヘイヴィアとクウェンサーは、携帯端末の向こうにいるお嬢様には聞こえないヒソヒソ声で臨時の作戦会議を開催。

「（……じゃあ何か？　こういう事かクウェンサー。軍の上層部は、たとえ『貴族』の一人娘を巻き込んでも『資本企業』軍の少将さんをブチ殺してえって事かよ!?）」

「（……戦争中の『資本企業』を敵視しない有力『貴族』って事で、消したいと思っている派閥でもあるのかも。でも、フローレイティアさんは知らないと思うなぁ、他に民間人がいるなんて話、知っていたらあんな調子で命令出さないと思うんだけど）」

「(……どっちにしたって結果は同じだ。軍の正式命令である以上、ここで衛星に手を加えるとそれだけで罰則を受けちまう。でも、ここで放っておいたら……ッ!!)」

『何をコソコソ話してやがるんですの?』

声に、二人はビクゥ!! と肩を震わせる。

そして、クウェンサーは肘でヘイヴィアの腕をつつきながら、さらに小さな声で言った。

「(……ヘイヴィア。ヘイヴィアってば)」

「(……何だよこの切羽詰まった状況で!!)」

「(……おーっと手が滑ったって事で。やっちゃってやっちゃって!!)」

ぶふっ!? とヘイヴィアが思わず噴き出しそうになった。

「(……テメェ自分が何言ってるか分かってんのか!! それやったら俺だけじゃなくてテメェまで一緒に罰則受けちまうぞ!?)」

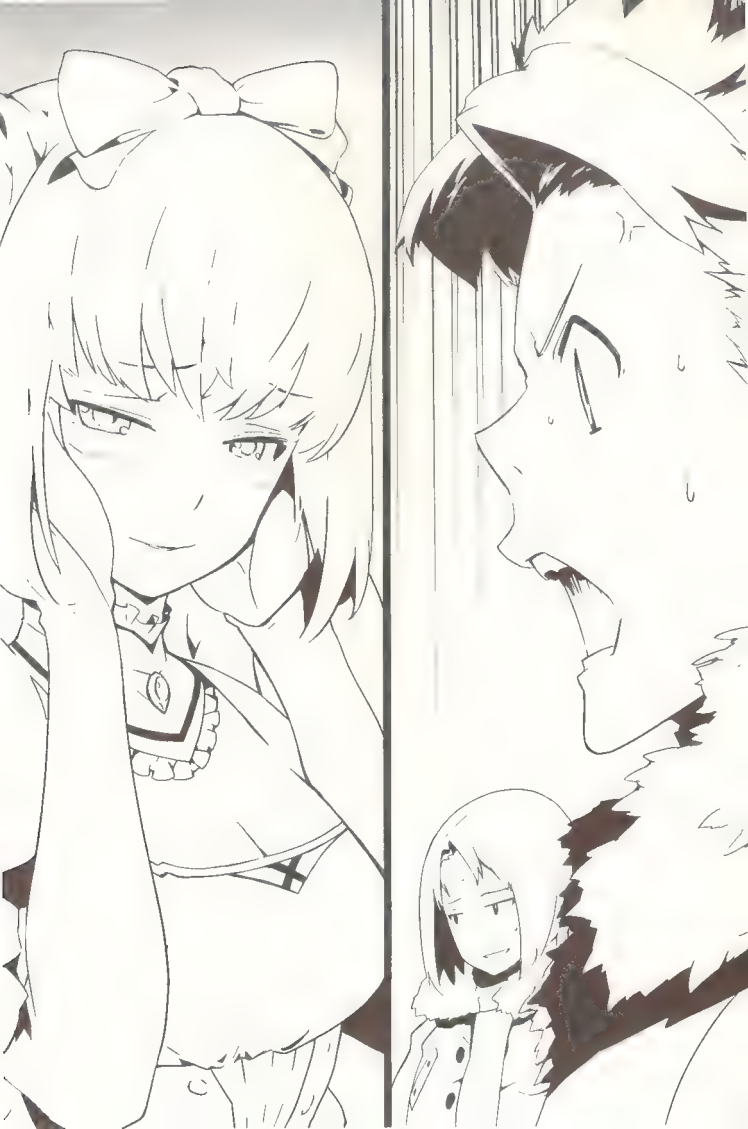
「(……早くしろレーザー照射まで二〇秒ないぞ!!)」

「(……分かったよやるよ!! ただし後になってから文句を言うんじゃねえぞ!!)」

ヘイヴィアは一度だけ大きく息を吸って意識を切り替えると、探査用ロボットに接続されているノートパソコンに向き直り、

「おおーっと手が滑った!!」

「馬鹿ヘイヴィアそっち逆!!」



ぎゃあぎゃあ喚きながら、二人は必死にパソコンへ向かって人工衛星の軌道を強引に変更させていく

『……気持ち悪りーですわね。一体さっきから何をやってんですの？』

「コンビでヒーローやってます!!　割と地味に人生の危機を覚悟しながらなっ!!」

8

怒られるとか怒られないとか、そんな次元ではなかった

海上の本拠地として利用させてもらっている、強襲揚陸空母の士官室。そこに呼び出されたクウェンサーとヘイヴィアを待っていたのは、予想通りの方向性で予想以上の破壊力を見せつける、我らが上官フローレイティア様の怒濤の説教スペシャルだった　いつ机の上に飾ってある和の飛び道具シュリケーンが飛んでくるか、クウェンサー達は気が気ではない

くどく

責任を問おうにも公式の場では問えない　そうじゃなければ今頃鉄格子の中よ」

「……はあ。そっすね……」

……ちくしょう、ヒロイン助けるために戦って、残ったもんがこの説教か……」

生クリームを絞り尽くした後のビニール袋みたいな顔になっているクウェンサーとヘイヴィアに、フローレイティアは喉飴を舌で溶かしながら質問した。

「で、例のお嬢さんの反応はどうだったの？」

「それについては俺じゃなくてヘイヴィアに尋ねてください」

クウェンサーが適当に質問をパスすると、ヘイヴィアは何ともばつが悪そうな調子で、しかし上官からの質問なので顔を逸らす事もできずに、あの後あった事を率直に報告する

「超嬉しそうでした」

「そう」

二時間ずっと怒り顔で通し抜いたフローレイティアは、そこで初めて表情を崩した苦笑いのような含みを混ぜて、二人の上官はこう言った。

「なら、これ以上は聞く必要もないか」

9

一仕事終えたヘイヴィアは、フローレイティア用の士官室を出ると、一度クウェンサーとも別れた。いつも一緒にいる相棒は、なんだかんだ言っても『学生』だ『軍人』として訓練を受けている自分と同じペースで動き回っているのだから、疲れも溜まっているのだろう。

ヘイヴィア自身、ちょっと一人きりになりたかった事もある。

寝室は四人一部屋なので、彼の目的にはそぐわない。結局、南極の近くを航行している艦艇のハッチを開け、冷たい外気にさらされるデッキへと出た。

携帯端末を操作し、ネットを通じて映像チャットを接続する

相手は月面の別荘で待つ、バンダービルト家のご令嬢だ。

フローレイティアは、すでにこの臨時権限については承知しているはずだ、にも拘らず遮断をしなかったのは、彼女なりの計らいなのかもしれない。

おそらくは、この通信を最後に臨時権限は使えなくなる、

だから、ここで話すべき事は全て話しておく、

「ちょっとは混乱も収まってきたかよ?」

『え、ええ。でも、仕方がねーでしょう。自分のいた月の別荘がテロの標的になっていたなんて話を聞かされたら、誰だってパニックになりますわよ』

かもな、とヘイヴィアは苦笑する。

結局、この件で彼はまた、家督を継ぐのに必要な武勲から遠ざかった。しかし、ヘイヴィア

は後悔していない。そもそも、ここを失ったら何の意味もないのだ。

『何故、ですか？』

ふと、少女がそんな事を言った。

『ウィンチェル家を継ぐ事が、並大抵の事ではねーのは理解しています　まして、あなたは一族の他の者から疎まれる理由がある　……ですが、それにしても……』

「俺のやっている事は、危険すぎるって言うのか？」

『片鱗のようなものを、今日見ました。安全な基地で三年ぐらい働いてりゃー勝手に資格が転がり込んでくるなんて、全然話が違うじゃねーですか　いつもいつも、こんな事を続けていりゃあ、いつか大変な事になります。それに、そもそも……そもそも、あなたは「あれ」さえ諦めれば、こんな事をしなくても、いつでもウィンチェル家を継げるじゃねーですか。それを、どうして……？』

疎まれる理由。

あれさえ諦めれば

その言葉を聞き、ヘイヴィアの目がわずかに細くなった　それは、クウェンサーにも、フローレイティアにも、ベイビーマグナムのお姫様にも見せた事のないぐらい、真剣な顔だった

「良いか。俺のウィンチェル家とテメエのバンダービルト家は、互いに一族を滅ぼしたいと思っているほどの敵対『貴族』だ。それは分かるな」

『え、ええ……』

「それでも、俺らはそんなくだらねえいがみ合いに振り回されるのは嫌だって思っている　その気持ちに変わりはねえな」

『ええ　ですが、ですけど……ッ!!』

「それだけ分かりゃあ十分だ」

ヘイヴィアは笑った。

「このままじゃ、俺ら二人が辿る道はシェイクスピアの悲劇だ　だが、俺はそんな結末で終わらせるつもりはねえ　せいぜいあがけるところまであがき続けて、何が何でも家督を継ぐ資格をもぎ取ってみせる　……そうすりゃ、一族全員を黙らせて、両家のくだらねえいざこざに終止符を打てるんだからな」

『……』

「だから、それまで待ってろ　俺は必ず『資格』を得る　何のために士官学校に通わないで、上等兵なんて位置に甘んじてると思ってやがる　やるべき事をやるためだ」

ヘイヴィア＝ウィンチェル

彼は映像チャットを通して自分の目的を改めて語りながら、今度は口にも表情にも出さず、少女を心配させないように一人で決意する。

……そのためなら、超大型兵器オブジェクトとでも戦ってやる、と

10

ベイビーマグナムを操るオブジェクトの操縦士・エリートのお姫様は、コックピットの中でモニターを眺めていた。

戦場となったエレバス山から少し離れた所にある、ロス海沿岸部

そこに数隻のモーターボートが停めてあった　おそらくテロリスト達のものだろう　本来なら探査ロボットを使った月面攻撃が終わった後に、これを使ってオセアニアにでも逃げるつもりだったのかもしれない

問題なのはそこではない

モーターボートのすぐ近くの海面に、数十本の太い送電ケーブルが束ねられた状態で垂れていた　例のオブジェクトのスペア砲を利用した対戦車陣地のものだ

本来ならこの先端にオブジェクトが繋がっているはずなのだが、現在は影も形もない

お姫様はオブジェクトのレーダーを確かめたが、それらしい巨大な影はどこにもなかった

少し考え、お姫様は率直に報告した

相手は現場指揮を執るフローレイティアだ

「どうりょくろ　はやっぱり見つからなかった　どうやってかくれながらいどうしていたの

かもふめいのまま。もしかすると、せんすいきのうをもったオブジェクトかもしれない」

『五〇メートル級もの巨大な球体状の物体が潜航していれば、水流の乱れをソナーが拾うと思うけど』

「なら、ステルスかもしれない」

『あれだけの巨体ならレーダーに映らなくても肉眼で見つかる気もするけど　ともあれ、見つからなかったのなら仕方がないね。それに、別ルートからテロリストどもの素性は割れそうよ』

「？」

『例の対戦車陣地で使われた、大量のレールガン、その送電に使われた小抵抗ケーブル。調査機をロックした地対空ミサイルのユニット。敵兵はみんな死んでしまったが、ヒントとなるものはいくつか残されているの。そこから導き出される勢力は、おそらく……』

フローレイティアは、一度言葉を切った

明確な根拠がないからか。

あるいは、分かっていても、口に出すのがためらわれるからか

しかし、彼女はやがて、もう一度口を開いた

『……マスドライバー財閥　世界的勢力の一角、「資本企業」の超巨大組織よ』

【ステルスオブジェクト】
STEALTH OBJECT

全長…不明

最高速度…不明

装甲…不明

航続…不明

分類…不明

運用者…マスドライバー財団

仕様…不明

主兵…不明

副兵…不明

コードネーム…ステルスオブジェクト
（どんな方法でも居場所を確認できないところから）

メインカラーリング…不明

STEALTH OBJECT

第二章　二人三脚の登山は命懸けで　〉〉イグアス山岳砲撃戦

1

大西洋、フォークランド諸島近海
強襲揚陸空母シャルルマーニュの滑走路に使われている平べったい甲板の上で、今年で六〇歳になる初老の艦長と、わずか一八歳の少女であるフローレイティアはゆっくりと並んで歩いていた　一七〇メートル程度の長さの甲板は、散歩のコースにしてはやや短い
「これもまた、時代の流れですかな」
西洋の探偵が好むような、太くて短いパイプを片手に、白髪の艦長は笑う
「かつての大型空母は七～八〇機ほどの航空機を運用できるように設計されていましたが、実際の戦闘で、それほどの航空機をフルに活用する機会は少なかった　おまけに超高速魚雷やステルス機雷などの登場によって、空母の撃沈も夢物語ではなくなった　……となると、そこで浮上するのはコストとリスクの計算です」

「一ヶ所に大量の人員や機材を集中するより、小分けして分配した方が、損失時のリスクは軽減できる、と？」

そう応じたフローレイティアの口には、艦長とは対照的に和風の細くて長い煙管があった

艦長はゆっくりした動作で頷き、

「一隻につき、一〇機も搭載できればよろしい　航空機の数が必要ならば、その分だけ艦艇を集めて調整すれば済む話ですからな　小型の空母は着陸用の滑走路の長さがネックとなりましたが、それも高精度のセンサーや制動用逆噴射ノズルの開発によって、そう難しくもなくなりました　そこでさらに、我々の任務内容の質も大きく変動した。……そう、あのオブジェクトが登場した事によって」

ガコォォォン、という重たい金属音が響いた。

二隻の強襲揚陸空母が、五〇メートル以上の間隔で並んでいた。そしてその間に、球状のボディに一〇〇門近い砲を搭載した、超大型兵器が鎮座していた。ベイビーマグナム。『正統王国』が誇るオブジェクトの一機を取り囲むように、複数のワイヤーや足場が張り巡らされていた

艦長はその巨体を見上げながら告げた。

「レーザー技術の発達によって、空の支配権は彼らに移った。今の我々の主任務は、航空機を迅速に戦場へ届ける事ではなく、海上のオブジェクトに補給を施し、その間の警戒や防衛を行い、あの超大型兵器を見送る事にあります」

この船が単なる空母ではなく、上陸作戦に使う揚陸艦の役割を持つのはそういう事だ　基地を作るために必要な機材を積んだ船をそのまま海岸近くまで接近させ、速やかに機材を上陸させる役割を担ってこそ、『オブジェクト主体の現代の戦場で、空母に求められるスキル』を満たせるのである

フローレイティアは改めて軽く会釈し、

「今回は協力していただき、ありがとうございます　一応我々は全環境で迅速に基地構築を行う事を目標としていますが、何分、我々は丘で戦う方が得意でして」

「いえいえ。あなた達はそれぐらいの方が好ましい　海の上でも迅速に動かれてしまっては、我々海兵隊の立つ瀬がありませんよ　我々の艦隊の船も動かす機会があって助かります」

そこまで言うと、艦長はフローレイティアの方へ煙が行かないように気を配りながら、一度小さく煙を吐く

気分を切り替えるような調子で、艦長は顔を引き締めて言う

「それで、あなた達が追っている敵というのは……」

「ええ。マスドライバー財閥と言えば、ご存知でしょう？」

2

クウェンサーは海面から三〇メートルぐらいの高さにいた。

通常、ベイビーマグナムは巨大な車両を組み合わせて作られた、四角い整備場の中でメンテナンスを受ける。しかし、海上でそれは用意できない。そこで強襲揚陸空母二隻でオブジェクトを挟み、両サイドから多数のワイヤーを張り巡らせる事で、急拵えの整備場を作り上げているのだ。

強襲揚陸空母の両端には、たくさんのクレーンが設置されていた。伸縮式のアームを利用して、たくさんのアームを張るための装置だ。片方の端に集中していないのは、艦同士の位置取りに手間取らせないため、そして船のバランスを保つためだろう。

クウェンサーが足を踏みしめている足場も、キャットウォークのようにがっしりとした鋼板製の連絡通路ではない。二本のワイヤーの間に細い鉄板を隙間なく繋げていった、金属製の細い吊り橋のようなものだった。当然ながら、波で艦艇が上下したり潮風が吹いたりして、絶えずワイヤーは不安定に揺れている。

「わっわっわっわっ!?」

手すり代わりに張られた太いワイヤーを両手で摑み、スケボーの初心者のように上半身を前後に揺らすクウェンサー。対して、整備兵の婆さんは手すりに摑む事すらなく、両手を組んで呆れたように鼻から息を吐いた。

「ほれ、両手を塞いでは何の作業もできんじゃろう。片方だけでも離せんのか？　お前は一体

何しにここまで上って来たんじゃ」
「嫌だって揺れるし高いし落ちたらヤバいし!!」
「下は海じゃから落ちても死なんよ。よほどの嵐でもない限り、波と風には規則性がある　そいつを理解して重心を調整すれば、体を揺らす事もない」
「サラリとすごい事を要求するねこの婆さんは!!」
実はアイキドーとかの達人なんじゃないだろうか、と訝しむクウェンサーだが、周りを見てみると、ベイビーマグナムの周囲で装甲板の溶接作業やレーダーのチェックなどを行っている他の整備兵達も、みんな命綱なしで両手を離して作業している。どうやらメンテナンスを行う者としては基本のスキルらしい。
「……何で誰も命綱とかつけてないんすか？」
「そんなまどろっこしいモンつけてたら、体が動かしにくくて作業が遅れる　さっきも言ったじゃろ　下は海じゃ、落ちても死なん　命綱なんてモンは、本当に命を預ける時につけりゃ良い」
「設計士に必要なスキルじゃないぞこんなの……」
ブツブツ言うクウェンサーに、整備兵の婆さんは軽く眉をひそめ、
「小僧。そういえば、いい加減にオブジェクトの研究テーマは決まったのかの？」
「決めようと思っていたところで南極に放り込まれました」

クウェンサーはうんざりしたように答える。
「興味のあるジャンルはいくつかあるんですけどね。自重の分散と効率的な推進方法とか。ただ、どの分野を選べば一番手っ取り早く設計士に近づけるのかが分からなくって」
「わざわざ『安全国』から戦場へ派遣留学したり、専攻分野を最短コースで選ぼうとしたり……本当に小僧は楽をするために人生を歩んでいるんじゃな」
「効率化を図っていると言ってください」
その時、クレーンのアームに連動しているサイレンが鳴り響いた。クウェンサーと婆さんが首をすくめるように頭を下げると、アームに吊り下げられた荷物が頭上数メートルの所を移動していく。
それを見て、クウェンサーが首を傾げた
「何ですかあれ？」
「小型の冷蔵庫じゃな。電子レンジも搭載する予定じゃ」
「どこに？　何で？？？」
「七つの海を渡るには、それなりに時間がかかる　例えば太平洋横断には半日かかるからの効率的な食事によって集中力を維持させるため、ボルトを使ってコックピットに固定設置しようという案は前々からあった」
「そうですか。それで電子レンジを……」

納得しかけたクウェンサーは、そこでハッと顔を上げた。

いつも支給されている、味のない巨大消しゴムみたいなレーションは、冷蔵庫で冷やす必要もないし電子レンジで温める必要もない。という事は、

「きっ汚い!!　お姫様だけグラタンとかハンバーグとかフライドチキンとか美味しそうなの食べる気か!?」

「汚くない。あの子の集中力一つで戦局が変わるのじゃから、これぐらいの配慮は当然じゃレーションに味がないのは『万人に受ける美味しい料理は作れないから、好悪のつけられない食べ物を均等に配備する事で、全ての兵士の士気を均等に保つ』のが狙いじゃが、お姫様専用のものに関しては、彼女一人の個人的な好みを追求すれば問題ないからの」

「でもお姫様はフライドチキンを電子レンジで温めるだけでフライドチキンがいつでもどこでも好きなだけ食べられてフライドチキン!!」

「……お前が今ものすごく鶏肉が食べたい事は分かったから、少し冷静になったらどうじゃ」

3

ヘイヴィアは強襲揚陸空母の甲板の端にお行儀良く並べられている小型の戦闘機に目をやっていた。高さは三～四メートルぐらいあるので、少し見上げる格好になる。

「見ろよクウェンサー。このゴテゴテしたデルタ翼。ジャミング用の特殊アンテナばっか。ミサイルよりも多く吊り下げてるぜ」

「仕方がないんじゃないの。オブジェクトにロックされたら最後、大空のどこにいても光の速さで飛んでくるレーザーに撃墜されるっていうんだから。ロックされない、ロックされてもギリギリで回避できる環境を整える方に重点置くのが普通だと思うよ」

とはいえ、これでも本気でやり合ったら生き残れる確率は低いけど、とクウェンサーは付け加える。

ヘイヴィアも適当な調子で頷いて、

「……一時期はステルス神話も囁かれてたみてえだけど、あれ、結局レーダー施設そのものを複数設置すると、せっかく照射位置とは別方向に拡散させたレーダー用の電波を別基地でキャッチされて居場所がバレるって話らしいしな」

「バレないように飛ぶから、バレても当たらないようにする路線を変更した訳だ」

あまり興味なさそうに言ったクウェンサーは、そこで話題を変える。

「なんか、いつもよりフローレイティアさんが時間をかけて作戦練ってるみたいだけど、マスドライバー財閥って何？」

「その名の通り、世界最高のマスドライバー建造技術を持った集団だ。……っつか、『資本企業』に限らず、マスドライバー開発を謳ってる組織はたくさんあるが、今の時代に実用レベル

のマスドライバーを建造できるのは、あの財閥ぐらいだって話だぜ」
「つまり、宇宙マニアの集まりだろ。そんなにヤバい連中なの？」
「せいじてきに。色々とふくざつなの」
と答えたのはヘイヴィアではなく、フライドチキン一人占めのお姫様だった。
しかしどこに？　と首を傾げるクウェンサーは、そこですぐ足元の甲板にバスタオルを敷き、うつ伏せになって日光浴している少女を発見する　青系の特殊スーツをまとったお姫様は、全身の力を抜いてリラックスしているようだった。
ヘイヴィアは肩をすくめて、
「そもそも、『資本企業』ってのは金が全てっていう勢力だ。金を持っているヤツの地位が高くて、持っていないヤツの地位が低い。人権の序列や優先順位まで、貯金の大小で決まっちまうって寸法だな」
「とうぜん、ぐんじりょくをもつ『だいせいりょく』も、おかねのあつまる所になってくるの」
「一昔前までは、単純に大会社が牛耳ってた。が、最近になって事情が変わってきたらしい。ようは、莫大な金さえ集まりゃ良いんだからな。デイトレードでガッポリ儲けた投資家とか、様々な会社に顧問弁護士を供給する派遣団体とか、まあ色々だ。……確か、マスドライバー財閥も領地や住民を管理していたはずだぜ。もちろん、それらを守るという名目の戦力も」
「となると」

クウェンサーは首を傾げ、
「例のマスドライバー財閥っていうのも、そうした新世代の一角っていう事なのか？」
「元々はレートビジネス主体の団体だ」
「？」
「株とか為替とか、日々価値の変わる商品ってのがあるだろ。その倍率の差で利益を得る商売の総称だ。代表的な株式や通貨の他にも、石油や石炭なんかのエネルギー関係、宝石や純金っていう貴金属、果ては歴史的な美術品や骨董品まで『差額で利益を増やすための金融商品』扱いにされているな」
流石は『資本企業』、とヘイヴィアは適当な調子で言う。
「例の財閥はそこで爆発的に増大させた資産を将来有望な会社にガンガン送り込んで、マスドライバーに必要な技術を研究・開発させてる。正式採用されれば宇宙の交通網を独占できる。常に変動し収益が不安定なレートビジネスではなく、恒久的に富をもたらすシステムの掌握が、最終的な目標なんだろうな」
夢や希望とは切り離された、完全なビジネスとしての思想。どこまでいっても、『資本企業』の人々は財産にしか興味がないらしい。
「ちなみに、マスドライバーっていうのは、まうえに向けた大きなレールガンみたいなものよ。シャトルとかコンテナを、『えいせいきどうじょう』に打ち上げるの。スペースシャトルより

もおてがるなんだって」

お姫様は付け加えるように言う。

しかしクウェンサーが気になったのはそこではない。うつ伏せになっているお姫様のお尻が時折モゾモゾと揺れ動く方が気になるのだが、それを真正面から言ったら主砲をブチ込まれるかもしれない。

「その大金持ちのマスドライバー財閥が、何で俺達の敵になってる訳？」

「クウェンサー、新聞読めよ。マスドライバー財閥ってのは、この前、一方的に『資本企業』から脱退したんだ。領地や住民を切り離してまで、だ。亡命というよりクーデターに近い。何しろ『資本企業』は金が全てだ。軍資金さえあれば兵力は買えるからな。……その他にも、オブジェクトだって抱えているかもしれねえし」

「げんざい、『資本企業』のせいふにざいさんを没収されないように、『だいいどう』を行っているらしいよ」

うつ伏せで足をぱたぱた振りながら、お姫様は言う。

ヘイヴィアはうんざりした調子で、

「……マスドライバー財閥の『大移動』直前に、『資本企業』軍の諜報部は財閥のエリート達全員を押さえる事に成功し、複数のオブジェクトがぶつかる大戦争は回避できたらしい。エリートがいなけりゃオブジェクトは使い物にならねえからな」

「俺達がやりそうな作戦だな」

「だが、ウワサによるとそれ以外にも、秘密裏に用意していたエリートや機体もあるんじゃねえかって話になってるみてえだぜ。本当だとすりゃ、戦争続ける気まんまんだろ。領地や住民を切り離してでも『大移動』を実行した事自体、得体の知れない覚悟を感じるじゃねえか」

クウェンサーは首を傾げた。

「しかし、何でまた？　秘密のオブジェクトがあるって話だとしても、マスドライバー財閥は『正統王国』とか『資本企業』とか、世界的勢力に勝るものじゃないんだろ？」

「単純な採用戦争の結果だよ」

ヘイヴィアは小型戦闘機の下面を掌で撫でながら言う。

「ずーっと前からロケットエンジンを使ったシャトルは、大規模な宇宙開発を行うにはコストがかかりすぎるって言われてた。そこで二〇年ぐらい前から新方式が検討されてきた訳だが、ここで最後に残った候補は二つ。レールガンの技術を応用したマスドライバーと、レーザーの技術を応用したレーザー式軌道エレベーターだった。ところが……」

「『資本企業』は、さいしゅうてきにレーザー式をえらんだの」

「コンペに負けちまったマスドライバー財閥は焦ったんだろ。新方式は二種類っつったが、実質的にはレーザー式が多種多様な企業や組織が参入しているのに対して、マスドライバーはあの財閥の独占状態だ。『資本企業』以外の世界的勢力で実用的なものが建造されたって話も聞

かねえ。ここで正式採用すれば、マスドライバーは世界的なフォーマットになって、マスドライバー財閥は永遠に金の湧き出る泉を得られる可能性も出てくるが、コケちまったら経済価値はゼロ以下。開発にかかった何百億ドルって大赤字を抱えて組織は破綻しちまう」

肩をすくめて、ヘイヴィアは息を吐く。

「おまけに明暗を分ける理由は技術的に無謀だからではなく、単純に上層部の好みでだ。このままじゃ組織としてはおしまいだ。だからマスドライバーを『資本企業』以外の……『情報同盟』とか『信心組織』とかに採用してもらおうとしたらしいんだが、ここでも『資本企業』から待ったがかかった。『我が「資本企業」で開発された技術が、他の勢力の大きな利益を生む行為は避けてもらいたい』んだとさ。お金中心な『資本企業』にとっては、自分達以外の国際市場を活性化させるなんてのは、敵に塩を送るようなもんだしな」

「八方塞がりだな……」

「それでマスドライバー財閥もブチ切れたんだろ。ヤツらが最終的に何を目的に掲げているかは不明だが……『資本企業』の主力である傭兵部隊がわんさか、おまけにオブジェクトの影までチラついてんだ。フローレイティアだってちっとは真面目に作戦練りたいだろ」

ふうん、とクウェンサーは適当に相槌を打って、

「その、傭兵部隊ってのはどんなもんなの？　正規の軍ではないんだよな」

「『資本企業』軍は完全ＰＭＣ制だ。平たく言えば、全ての軍が傭兵化されて金で動く。傭兵

会社は整備部門の技術者を含む兵隊を管理し、彼らを雇う大会社はオブジェクトを操るエリートに重役の椅子を与えてバランスを取るって訳だ」

「……自分で部隊を全部運営しているんじゃないんだな」

「最重要のオブジェクトやエリートについては会社の方で保有するようだが、その周りの人間は外から呼ぶんだとさ。感覚的には、そうだな、個人競技の社会人スポーツ選手みたいなもんか。選手自体は会社の所属だが、衣装だのシューズだのの細かい調整は外の職人に任せるし、良い記録を出すための試合場の管理だって会社がやる訳じゃない。でも、会社に所属してる選手が動かない事には試合は始まらねえ」

「そんなものなのか。しっかし、それにしても、食品会社やコンビニのグループまで軍隊を持っているっていうのか？」

「必要ならそれっぽい重工業を買収・提携・合併してオブジェクトの技術力を手に入れる　というか、自社のオブジェクトを保有する事で、初めて『一流』会社になれるって風習があるみたいだしな。……例のＰＭＣだって、子会社化や専属契約のパターンも結構多いらしいぜ　そうしないと設計図とかの守秘義務に問題が出てくるかもしれねえしよ　とにかく、莫大な金を持つヤツが多くの力を動かせるから、必然的に大企業や怪物投資家なんかが力を持つようになるって寸法だ。俺らで言う王族みたいなもんだな」

「……って事は、ウチの部隊みたいな『正統王国』の正規軍とガチで戦争起こしても、勝敗が

分からないレベルの戦力なのか？」
「フローレイティアが真面目になる理由が分かるだろ」
ヘイヴィアはややうんざりした調子で言った。
「『資本企業』を脱退して『大移動』をしているマスドライバー財閥とは、交渉や休戦は望めない。やるとなれば総力戦だ。少なくとも、オブジェクトを吹き飛ばすまでは戦いは終わらない。どんな作戦になるかは知らねえが、ヤバい事になるのは間違いねえんだ、テメエもいつも以上に準備をしっかりしておいた方が良いぜ」
「準備かぁ……」
すると、クウェンサーの頭の中に、クレーンで吊り下げられた小型の冷蔵庫が浮かび上がった。彼はそのイメージから連想したものをそのまま伝える。
「ならフライドチキンが欲しいな」
「てめっ、味のないレーションばっかの戦場でなんて事言うかねこの子は！」
「えー、食べたくない？　こう、噛むとじゅわーっと鶏の脂が口の中に広がってさ。ちょっとレモンで風味をつけても良いかもしれない」
「お馬鹿っ!!　そんな事言ったら食べたくなるでしょ!!　おおお駄目だ、トロットロの脂身が恋しくなってきたーっ!!」
身悶える馬鹿二人だったが、そこでお姫様がいつもの無表情で言った。

「たべられるよ」
「は？」
「このシャルルマーニュ号はしゅうこう15しゅうねんだったらしくて、そのパーティに色んなたべものをもちこんでいたみたい。まだ余りがあるみたいだから、かんないしょくどうに行けばたべられるよ」

4

クウェンサー、ヘイヴィア、お姫様の三人が強襲揚陸空母シャルルマーニュの艦内食堂へ向かうと、誰もいない室内で、フローレイティアがホワイトソース系のスープスパゲッティを頬張っているところだった
「見ろよクウェンサー!!　案の定だ、美味いもののチェックに余念がない我らが上官サマが一人で全部平らげようとしてやがる!!」
「アラスカの時の鹿といい、この人もかなり素晴らしい人格を持っているよな……」
「むぐ？　何だ、そういうお前達も嗅ぎつけたの？」
きょとんとした顔のフローレイティアだが、今は上官相手に機嫌を取っている場合ではない。一刻も早くパーティ用の残りからフライドチキンを探さなくては。

「こっちはナゲット、こっちは唐揚げ!?　くそうニアピンか!!　俺は骨付きが欲しいのに!!」

「何だクウェンサー、フライドチキンか？　辛口で良いならあと三つあるけど」

「……すでに大量のコショウが振られているのは減点だが、この際細かい事は言うまいっ!!」

わーいチキンだー、とクウェンサーは両手を挙げてフローレイティアの軍門に下る

ヘイヴィアやお姫様も、それぞれ使い捨ての紙皿に余ったハンバーグやフライドポテトなどを山盛りにしている。

しばしもぐもぐと口を動かしていた四人だったが、別に久しぶりのまともな料理が食べられるからと言って、無言で集中する必要はない。人間が集まれば自然と馬鹿話になってしまうのは世界のルールである。

口火を切ったのはヘイヴィアだった。

「ポールダンスってあるじゃん、あの、女の人が棒に絡みつくヤツ」

「……またいきなりだな、ヘイヴィア、ひょっとして欲求不満なの？」

「あれどうやんの？」

「いや、どうするも何も、棒に絡まってクネクネするもんだろ」

「そうじゃなくてだな」

ヘイヴィアは自分が伝えたい事をどう言葉にするべきか、しばし悩んだ素振りを見せ、

「アクロバットなものになると、逆さまになって片足だけ……膝の裏のトコで棒に絡みついてグルグル回ったりすんだろ。あれ何なの？　どうやったら体を支えられるんだ？」

知るかよそんなの……とクウェンサーが適当に答えそうになった時、予想外の人物が横から口を挟んできた。

上官のフローレイティアだ。

スープスパゲッティを綺麗に平らげた彼女は、ナプキンでお上品に口元を拭きながら、

「ものにもよるけど、基本的には真鍮製の棒と肌の摩擦で体を固定しているだけよ。まあ、後は脚の組み方にもコツはあるけど、金属棒を挟んでねじるぐらいの気持ちで力をかけると、足一本で体を綺麗に支えられる訳」

ポカンとする馬鹿二人の前でフローレイティアはガタンと椅子から立ち上がると、軽く周囲を見回した　すると、食堂の端の方に、何らかの配管らしき布テープの巻かれたパイプが上下に走っているのを発見する。

フローレイティアはパイプの太さや強度などを確かめ、

「具体的にやると、こう、こんな感じ」

「あれえ!?　フローレイティアさん、何でそんなに手慣れているの!?」

あまりにも唐突に始まった艶めかしい動きに驚愕しているクウェンサーに対し、フローレイティアはタイトスカートも気にせず逆さまま回転したままこう答えた。

「作戦成功時の先勝パーティなんかで、たまに隠し芸をやる必要があってな。後、これをやると何故か現場の兵士のやる気が倍増する……足で棒を挟んで派手に回転すると、ストッキングが破れてしまうのが難点ね。化学繊維で摩擦が減るから、本来は生足でやるべきなんだけどさ」

「そ、そりゃこんだけの爆乳に、ウチモモのストッキングをピリピリ裂きながらクネクネされたりしたらテンションがおかしくなるのは事実だが……ッ!!」

意外な軍の伝統にわなわなするヘイヴィア。

そこでフローレイティアは、棒から床へと足をつけながら、さらにこんな事を付け加えた。

「ちなみに、ウチのお姫様も同じ事ができるぞ？」

「「ええっ!?」」

華奢な女の子がやると、セクシー系の士官が踊るのとはまた別の感じが出てくるのでは!?

と戦慄くクウェンサーとヘイヴィアだったが、当の本人は小さな口でポテトをもぐもぐやるばかり。女の子提供のエロ線引きは相変わらずサッパリである。多分、男の側からやってやってと言ったら間違いなくビンタに決まっているのだ。

そんな馬鹿話をしていた四人だったが、やがて会話はきな臭い方へと移っていった。どう考えたところで、ここはやっぱり戦場なのだった。

具体的に話を切り出したのは、やはりヘイヴィアだ。

「そういや、結局マスドライバー財閥の連中って、何で南極の探査ロボットから衛星を乗っ取って、月面の別荘を攻撃しようとしたんですか？」

「この後のブリーフィングで言おうとしていたんだが、まぁいいか。事情は簡単よ。別荘に滞在していた『資本企業』の少将サマは、軍事衛星や宇宙ステーションに強い権限を持っていたの。で、そいつはマスドライバーではなくレーザー式の軌道エレベーターを推進していた。……まぁ、自分達の方式が採用されなかった事に対する逆恨みになるのかな」

席に戻ってきたフローレイティアは、そっけない調子で答える。

「わざわざレーザーを使って別荘を襲おうとしたところに、皮肉っぽいメッセージ性を感じられるとは思わない？」

「でも、それだと……」

大してお腹は減っていないのか、ポテトを少しずつ口に含みながらお姫様が言う。

クウェンサーも会話に乗って、

「結局、今回の争いは『資本企業』内の勢力争いに終始するのでは？　俺達『正統王国』が深く関わる理由はないような気もするし、下手に絡むと内政干渉とか難癖つけられて、さらに大きな戦いに発展してしまうんじゃないんですか？」

「……そこが痛いのよ」

「っつー事は、やりたくなくてもやらなきゃならない理由があるんすか？」

ヘイヴィアは細かく切ったハンバーグにフォークを突き刺しながら質問する。
フローレイティアは頷き、
「マスドライバー財閥は、元々、西米セントラルヴァレー方面のロサンゼルスに本拠地を置いていた。で、『資本企業』に追われて『大移動』が始まると、中米シエラマドレ方面を南下して、南米大陸のイグアス方面へ拠点を移しつつあるらしいんだけど」
「それがどうかしたんですか？」
「……その近くにあるアマゾン方面では、『正統王国』の宇宙開発基地が建造中なの。発射方式はレーザー式軌道エレベーター……。それも、マスドライバー案も出たけど、戦争中って事で『資本企業』の技術協力は受けられないって突っぱねた、いわくつきの施設ね。月面の別荘みたいに変な逆恨みをされても困るのよ」
「安全をかくほするためのせんそう？」
「そういう事」
フローレイティアは細長い和風の煙管を咥え、先端に火を点けながら、
「ただ面倒臭いのは、さっきクウェンサーも言った通り、この諍いは基本的に『資本企業』内の紛争だという事。暴走しているマスドライバー財閥がどこに矛先を向けるか分からない以上、手っ取り早く叩いておくに限るけど、首を突っ込みすぎると『正統王国』と『資本企業』の全面戦争の引き金を引きかねない。……一応、アマゾン方面で建造中の宇宙開発基地を守るため、

という大義名分があるから、そこから逸脱しないラインを明確に見定めておく必要があるのよ」

連中がどこで戦争をやろうが知った事じゃないけど、それで『正統王国』の人々が巻き込まれては元も子もないのよね、とフローレイティアはため息をつく。

短い沈黙があった。

やがて、おずおずとクウェンサーは質問する。

「マスドライバー財閥のオブジェクトってのは、もう確認できたんですか……？」

「まだ分からない。中米で巨大な影は確認できたけど、オセアニアと同じでガスタンクかもしれないし」

「でも、ヤツらの位置は分かるんですよね」

「実はそれもあやふやなの」

「？」

「南米のアンデス山脈は標高六〇〇〇メートルを超える　そして鉱山としても有名よ　今年は太平洋側の南東貿易風がイカれてて、雲と混ざった粉塵が内陸側へ流れているの　つまり、ところどころ衛星でスキャンできない場所ができているって訳」

フローレイティアはしばし考え、

「……詳しい事は分からないけど、今回のオブジェクトは、マスドライバー財閥の技術をフルに活用したものでしょうね。となると、怪しいのは大口径のレールガン。南極に大量配備され

ていたものもレールガンだったし、ここはほとんど鉄板よ」
「南極のはスペア用の砲でしたけど……」
「主砲っていうほどデカくはなかった、でしょ？」
クウェンサーの懸念を、フローレイティアは引き継ぐ。
「おそらくオブジェクトの主砲はあんなものじゃないでしょうね。何しろ、相手は衛星軌道上や月面まで届くマスドライバーを作る連中だし。直撃すれば一発でおしまいだが、それ以外にも余波の衝撃波にも注意しろよ。特に、耳と内臓をやられないように配慮するの」
具体的にどうしろってんだ、とヘイヴィアはこっそり呟く。
しかしそれは、今に始まった事ではない。
マスドライバー財閥に限らず、生身のクウェンサー達は五〇メートル級のオブジェクトに狙われれば、一番小さな砲を撃たれただけで粉々にされる。そういう危機的状況に立たされるたび、彼らは無意味と知りつつ、誰にでもなくこう質問するのだ。
具体的にどうしろと？

5

南米、イグアス方面海岸への上陸作戦。

目的は内陸部へ入り込んでくるであろうマスドライバー財閥の殲滅。
その作戦前会議、ブリーフィング完了に合わせるように、お姫様のオブジェクトのメンテナンスが終わった。
左右両サイドの強襲揚陸空母から張り巡らされていた複数のワイヤーが取り外され、ベイビーマグナムの戒めが解かれる。お姫様はオブジェクトをゆっくりと前進させ、二隻の艦艇の間を抜けると、そこから一気に時速三〇〇キロまで加速した。総合マルチロール型の第一世代であるベイビーマグナムは、専用の円形フロートを取り付ければ海上でも絶大な力を見せつけるのだ。
船の甲板からでも、もう陸地は見える。
オブジェクトの巨体を見送っていたクウェンサーは、そこでヘイヴィアから声を掛けられた。
「そろそろ上陸だぜクウェンサー　俺らも『潜って』おいた方が良い。そう簡単に当たるとは思えねえが、榴弾砲なら届きそうな距離だからな」
「強襲揚陸空母って、船の先端がデカい城門みたいに開くんだっけ？」
言いながら、クウェンサーはヘイヴィアの待っている方へ走る。平べったい甲板の端に、四角くラインを引かれた一角がある。彼らが立っている場所は、本来小型の戦闘機を出す時に使うエレベーターだった。
二人を乗せた床が三〇秒で艦内に潜る。

ヘイヴィアは艦内を歩きながら、
「この船の役割は簡単だ。分厚い装甲で機銃や砲撃に耐えながら突っ込んで、岸の近くまで到着したら前面の門をパカッと開ける。後は俺ら上陸部隊が雄叫びを上げて突っ込めば良い」
「……ほとんど決死隊だな」
「そうならないように、お姫様が一足先に海岸線の掃除をしているんだよ」
うんざりした調子で、ヘイヴィアは言う。
「南米に向かってくるマスドライバー財閥を叩けばご褒美をもらえるが、そのためにはまず俺らの部隊も上陸しなくちゃならねえ。面倒な海水浴はさっさと終わらせて、お姫様をビーチに上げちまおうぜ」
二人は艦の最前部へ向かう。
そこは巨大な倉庫のようになっていて、すでにたくさんの兵士が待っている他、オブジェクトの整備に使う機材を積んだ大型車両なども置いてある。
ヘイヴィアは適当な所に座り、ライフルを分解して各部の調整を始めながら言う。
「お姫様が海岸線の安全を確保したら、俺らが浜辺で海水浴開始。沿岸部に最低限のメンテ施設と簡易飛行場を作り上げる。その他の兵舎とか何とかは、飛行場を使って輸送機で運ばせるって寸法さ」
この船だけじゃ、一〇〇台以上の大型車両を全て運ぶ事はできねえからな、とヘイヴィアは

付け加えた。

クウェンサーは爆薬の数を確かめたり、無線機の調子をチェックしながら首を傾げる。

「お姫様がそんなに便利なら、俺達は海の上で待機していれば良いんじゃないの？」

「アホ。お姫様のベイビーマグナムは水陸両用だが、海戦時には専用のフロートをつけてるだろ。主戦場は内陸部だ。あのフロートを取り外さない限り、お姫様はイグアスの戦場へ突入する事もできねえんだよ　ビーチの一角に網張って、自然分解する反発剤を大量に使って足掛かりを作る訳だ」

「……やっぱり楽はできないか」

うんざりした調子でクウェンサーが言うと、チェック中だった無線機から、友軍の通信が入った。海岸近くを進み、敵がいないか確認作業を行っているお姫様からだった。

『たいくつなさぎょうね』

「人を殺すより良いんじゃないか」

『あなたたちをまつのがたいくつなの』

お姫様はため息混じりに言った。

『クウェンサー、オブジェクトのけんきゅうテーマにまよっているって言っていたよね。なら、パーツこうかんなしで「りく」と「うみ」を行き来できるすいしんほうほうについてとか、どう？』

「おいおい　なんかカリカリしてんな今日のお姫様は」
ヘイヴィアが横から口を挟むと、お姫様はその言葉を証明するように、わずかにチクチク刺さるような沈黙を返した。
やがて、彼女は言う
『さっきメールで、もぎせんのいらいがあったの　ほとんどめいれいみたいなものだけど　1かげつごにノルマンディーほうめんでだって』
「うわ、『正統王国』の『本国』じゃん　良いパフォーマンスになるんじゃないの　凛々しいお姫様の雄姿をみんなに見せてやりましょうってヤツだろ」
『……わたしは、かませいぬの方』
ムスッとした調子でお姫様は言った。
『ブライトホッパーってきいたことある？』
「ん？」
クウェンサーはちょっと眉をひそめ、
「そうだそうだ、確か『正統王国』で建造中の最先端オブジェクトって触れ込みだったよなレーザービーム系の装備を集中装備させた機体　静電気で巨体を浮かばせた上で、バッタに似た脚を使って地面を蹴る事で、超高速移動ができるとかっていうヤツ　あれもう完成したのか」
ついでに言えば、乗ってるエリートは有力『貴族』の長男坊だ　そこらのオブジェクトと差

別化を図るために、内装は王城用の宮大工にオーダーさせているらしいぜ」
「ウワサは色々聞くけど。本番のオブジェクトを建造する前に、慎重に慎重を期して試作実験炉を三基も作ったとか何とか。どこまで本当なのかは分かんないけどさ」
最先端オブジェクトと一対一での模擬戦　しかし、ここでお姫様が互角に戦ったり、ましてブライトホッパーに勝ったりしてしまったら、せっかくのお披露目で出鼻をくじいてしまう事になる　つまり、『正統王国』の上層部はわざと負けるように通達を出してきたのだ
ヘイヴィアはいかにもくだらなさそうな声で、
「んなもん、言われた通りに手を抜いて適当にやり過ごせば良いんじゃねえの？」
『……そうすると、マスコミのれんちゅうがスペックシートのすうじをみて、こう言うの。本来のベイビーマグナムなら、もっとたたかえたはずだ。つまり、そうじゅうしているエリートが三下なんだなって』
「うわあ、面倒臭い……」
『本当、いやになっちゃう。一応スペックできにはブライトホッパーの方が上らしいけど……なら、どたんばでほうしんかえて、えんりょなくガチでぶつかってやろうかな』
何だか嵐の予感を感じさせる、不穏な言葉を漏らすお姫様　しかし仕事の手は抜いていないようで、すぐさまこう言った。
『がいとうエリアのチェック完了　……山のしゃめんに、ふくすうのきんぞくはんのうあり』

「複数の金属反応っ？」

クウェンサーとヘイヴィアに緊張が走るが、そこへ横から強襲揚陸空母から通信が入った。

『こちらシャルルマーニュ　ベイビーマグナムへ　その山は鉄鉱石が大量に埋蔵されているという報告を受けている　判断の参考にされたし』

『てっこうせき？』

お姫様は、わずかに沈黙する。

『……でも、かくしょうはない』

『シャルルマーニュよりベイビーマグナムへ　衛星で走査しているが、今のところ、山の周囲に装甲車両などは見当たらない。仮に山の膨大な金属反応が敵の兵器であった場合、それをサポートするための車両が数倍必要になるかと思うが？』

『だ、そうよ』

結構投げやりな調子でお姫様は言ってきた。

「本当に？」

クウェンサーは懐疑的な声を上げる。

「あの、実は鉄鉱石じゃなくて待ち伏せしてる敵の砲台だったら、困った事になる俺達なんだからね、オブジェクトの分厚い装甲に守られているお姫様には実感できないかもしれないけど」

『むっ、もんだいないった・もんだいないもん』

「そうかそうか。なら、もしもその金属反応が本当に砲台だった暁には、おっぱいで型を取った特殊なバブロアでも作ってもらおうかな　もちろん実演でね」

ジュワッ!!　という何かが蒸発するような音が炸裂した。

ベイビーマグナムが、山の斜面にギリギリぶつからない範囲で、主砲のレーザービーム砲を威嚇砲撃したのだ。空気中の塵や水分を焼き、オレンジ色の光線が宙を裂いていく

『反応なし。やっぱりだれもいないとおもう』

「間違ってたらホントにバブロアだからね」

「馬鹿話はそれまで」

フローレイティアが打ち切るように口を挟んだ。

一ひとまず、お姫様からの叱責を優先する　よーし、それじゃ手早く海岸に上がって、お姫様の浮き輪を外してしまおう　付け替え作業を敵さんに見つかると色々面倒よ　気づかれる前にお姫様を陸に上げて、自由自在に動かせるようにする事が、安全に作戦を終わらせる一番の方法だと考えるように!!」

通信は強襲揚陸空母シャルルマーニュの艦橋にも伝わっているらしく、船がさらに加速した　ぐんっ、とクウェンサーは後ろに引っ張られるような慣性を感じる。

フローレイティアの最終確認の声が響く

「あと五分で沿岸部に突入する、後は小型の水中翼船で海に繰り出して、一気に上陸するから。最優先はお姫様のオブジェクトの、海戦用フロートの取り外し作業、他については最悪、海に装備を落としても輸送機で同じパーツを運んでもらえれば支障はないの、総員は当作業を行う担当の整備兵の護衛と協力に尽力するように。以上よ!!」

その言葉に弾かれるように、クウェンサー達は動き出す。前面に向けて緩やかな下り坂になっている広い床を走り、それぞれが大型車両を載せた水中翼船へとよじ登っていく

特に申し合わせた訳ではないが、自然とクウェンサーとヘイヴィアは同じ水中翼船に乗り込んでいた。他にも一〇人ほどの兵隊が居合わせている

時間はすぐに来た。

作業用のサイレンが響き渡ると、前面に壁のように聳えていた分厚い門が外側へ向けて両開きに開放されていく　水中翼船を固定していた金具が自動で取り外され、下り坂を滑るように次々と水中翼船が海の上へと流れていった

陸地まではおよそ三キロ程度。

強襲揚陸空母シャルルマーニュから一〇隻以上の水中翼船が放たれ、間隔を空けずに海の上へと向かう。いや、それだけではない、同じような強襲揚陸空母は七、八隻あり、そこから同じようにたくさんの水中翼船が飛び出した

水中翼船の船底には特殊な翼が備わっており、水を切って進むと、その抵抗力を利用して船

体のほとんどが水上に浮かび上がる仕組みになっていた　可能な限り水の抵抗をなくし、時速数十キロで海を突き進むためのものだ。

浜に上陸するまで、およそ二～三分か。

クウェンサーは水中翼船の手すりに掴まりながら、前を見る

ここからでも、もうくっきりと陸地が見える。あまり整えられていない、流木やゴミの多い砂浜と、その向こうに一〇〇メートルほどの低い山のようなものが連なっているのが見える。お姫様の話では、砂浜には敵兵やオブジェクトの影はなかったそうだが、

「おい、なんかチカッて光ったぞ!?」

ヘイヴィアが叫んだ。

砂浜の奥に連なっている、一〇〇メートルほどの高さの低い山。緑に覆われたその斜面の真ん中辺りから、何かが弧を描いて高速で向かって来ているのだ　先ほどの光は、飛来物が太陽の光を反射させたのだろう。

（……レールガン!?）

とっさにクウェンサーはそう思ったが、口を動かすだけの暇はなかった。

山から放たれ、天空で大きく弧を描いた大比重の砲弾が。

マッハ五の速度でクウェンサー達の進む海面へと容赦なく落ちてきたからだ。

ゴバッ!!　という爆音と巨大な水飛沫が巻き上げられた。
クウェンサーの視界が水で埋まる。直撃こそ避けたが、海面が大きく唸り、まるで上り坂のジャンプ台を超えるように水中翼船が大きく跳んだ。着水と同時に体が揺さぶられ、手すりから両手が離れる。危うくそのまま海に落ちるところだった。
死の寸前にありながら、しかしクウェンサーは両手を挙げてこう叫んだ。
「ひゃっほう!!　ババロアあああああ!!」
「何で満面の笑みを浮かべて喜んでんだよクソが!!　向こうの砲撃はバンバン続いてんだろうがよおおおおお!!」
レールガンはその一発だけでは終わらない。
さらに次々と――――四～五〇発もの巨大な砲弾が弧を描いて襲いかかってくる。
とっさにクウェンサーは無線機を掴み、オブジェクトに乗るお姫様に向かってこう叫んだ。
「撃ち落とせ!!」
『っ!!』
無茶苦茶な注文に、お姫様は応じた。
大小一〇〇門の砲の内、対空用のレーザーに命令を飛ばす。
じゅわっ!!　と空気中の水分が蒸発する音が炸裂した。オレンジ色の光は、空気中の塵や

埃を焼きながら進む光線のものだった。マッハ五で飛ぶレールガンの砲弾に次々と突き刺さり、空中で溶かして吹き飛ばしていく

しかし限度はあった。

撃ち漏らしは三分の一程度　大型の巡航ミサイルや戦闘機ならともかく、使用されていたレールガンの砲弾はターゲットとしては少々小さ過ぎた事もまずかったのかもしれない。サイズの小さな標的でも榴弾砲や短距離ミサイル程度なら何とかなった可能性もあるが、レールガンの速度は圧倒的に速すぎる。

対空網をすり抜けた鋼鉄の塊が、容赦なくクウェンサー達の元へと突っ込んできた。

複数の水の柱が噴き上がった。

着水の衝撃波に体を叩かれたクウェンサーの目には、すぐ近くを突き進んでいた別の水中翼船が、アクション映画に出てくる自動車の片輪走行のように浮かび上がり、そのまま横転、転覆していくのが見えた。

「くそっ!!」

『上陸続行!!　直撃しなければ死にはしない!!　ここで引き返しても強襲揚陸空母ごと撃ち抜かれるのがオチよ!!　構わず進んでお姫様と協力し、一刻も早く敵を黙らせる事！　それが生き残るための方法よ!!』

フローレイティアの叱咤が飛ぶ。

必死に手すりを掴みながら、ヘイヴィアが歯噛みした。
「クソッたれ!!　良い無茶ぶりだ!　あの上官はホントにSだよな!!　こういう命令飛ばす時の声の艶が半端じゃねえぞ!!」
「その声を聞いて体を震わせているヘイヴィアも相当なモンだと思うよ!!」
「なあクウェンサー、山ん中にマスドライバー財閥のオブジェクトが隠れてると思うか？　例えばあの山自体が、デカいオブジェクトに土を被せて作り上げたモンだとかよ!!」
「いくら何でもそれはないだろ！　レールガンは左右五〇〇メートルのあちこちから発射されているしな!!　おそらく、南極の時と同じだ!!　斜面に穴を掘ってレールガンを押し込め、草木を被せてオブジェクトのスペア砲を隠していたんじゃないのか!?」
クウェンサーは叫びながら、無線機のスイッチを押した。
通信相手は強襲揚陸空母シャルルマーニュの艦橋だ。
「こちらクウェンサーッ!!　衛星から情報を集めてるブリッジへ尋ねたい　山の中に人影はあるか!?」
『こちらシャルルマーニュ　熱源・電磁気ともに人間大の反応なし　おそらくスペア砲は遠隔操作かプログラムで砲撃している』
「民家などの建物は!?」
『確認できず　そこにあるのはスペア砲だけだ』

よし、とクウェンサーは周波数を切り替え、お姫様へ通信を繋げる。

「ベイビーマグナムへ。民間人の巻き添えは心配ない」

そこまで言うと、クウェンサーは一度大きく息を吸い込んでから、ありったけの力を込めてこう叫んだ。

「遠慮はいらない！　山ごとブチ抜いちまえ!!」

ゴバッ!!　という轟音が炸裂した。

ベイビーマグナムは、七本のアームで七門の主砲を展開させている。それぞれの砲の根元は顕微鏡のように回転し、状況に合わせて様々な種類の砲を撃てるように設計されていた

今撃ったのは下位安定式プラズマ砲

特殊ガスを砲身に充填した上で、そこに膨大な電気を流す事によって発生させた、人工的なプラズマをぶつける砲だ　射程距離は最大でも一〇キロ前後、敵のオブジェクトを確実に撃ち抜くとすれば三〜四キロほどしかないが、ベイビーマグナムが持つものの中でも最大級の威力を持つ。

七門の砲は一ヶ所に集中させず、連なる山々を等間隔で均等に、分散させて狙いをつけていた。

「すげぇな。南米だけあって、ヤシの木とか普通に生えてんじゃん。長袖長ズボンの軍服なんてお呼びじゃねえよ。ビキニの姉ちゃんがいねえのが不思議なぐらいの暑さだぜ」

「気温一九度だからビキニは早いけどね。今、何月だっけ？　『本国』の方じゃ、そろそろコートが必要になってくる頃じゃなかったか？」

「何でも良いからビキニの姉ちゃんどこだよ？」

携帯端末の画面を見ながら、クウェンサーも海水と汗で濡れた顔を適当に拭う。そのせいで、余計に砂を張り付けている事に彼は気づいていないようだ。

ヘイヴィアはライフルに取り付けられた赤外線や紫外線を読み取るためのセンサーや、長距離の音を探るためのマイクのスイッチを入れながら、

「しっかし、戦争とはいえとんでもねえ事になってんな。同じ『正統王国』の敷地内ならともかく、よその土地で無許可でこんな事やっちまって大丈夫なのか？」

「そういえば、イグアスってどこの所属なんだ。マスドライバー財閥が逃げてきたって事は、『資本企業』ではないんだろうけど」

「無所属だよ。いわゆる空白地帯ってヤツだ」

「？」

「『国連の崩壊』を機に、世界中のあらゆる国家は崩れ、分裂し、あるいは吸収し、国境は新たに書き直された。『正統王国』、『情報同盟』、『資本企業』、『信心組織』。こうした勢力によ

ってステンドグラスみたいに世界地図は色分けされた訳だが……中には、どこの勢力にも所属していない場所がある」

「それって、オセアニア軍事国みたいな独裁国家の事か？」

「そういうのとは方向性が違うな。そもそも政府がねえんだ。民衆の習慣がそのままルールになってる。『国連の崩壊』の時に政治的な問題なんかが重なって勢力加入が遅れちまった場所の中には、何色にも染まらずに宙ぶらりんになっちまった所もあるんだ」

ヘイヴィアはライフルのセンサーを使って辺り一面を注意深く走査しながら、

「こういう所は犯罪組織の中継地点として使われたりしてな。ここを経由して金を流したり、武器を貯蔵したりと色々やってる訳だ。ただ、職業的な犯罪者達はあくまで空白地帯から別の空白地帯へと渡り続ける事で行方をくらますのが定石で、マスドライバー財閥みてえに留まろうとする例は稀だな」

「よそからやってきた二つの勢力が、オブジェクトをぶつけ合って勝手にドンパチか。巻き込まれる方は堪ったもんじゃないかもな」

「それはここだけじゃねえ。どこの戦場だって、当人からすりゃ良い迷惑だ」

そんな事を言い合っていた二人の耳に、無線から同僚の兵士の声が届く。

『C方面、敵兵は発見できず。土砂に埋もれた砲身らしきものと、どこかに繋がっていたであろう太い送電ケーブルを見つけただけだ』

すると、クウェンサーの持つ無線機にヘイヴィアが割り込むように言う。
「H方面、こちらも発見できず。センサーで一通り走査したが、あるのは土砂と岩石だけだ」
似たような報告は次々と上がってきた。どうやら敵兵は最初からいなかったのか、早々に装備を回収して撤退したようだった。
そこでフローレイティアから割り込みが入る。
『ベイビーマグナムの海戦用フロートの取り外しが完了したの。AからD方面の班は引き返し、簡易飛行場の整備作業に入れ。EからH方面の班は引き続き捜索半径を五キロまで広げて、周囲一帯を捜索。その作業が終わったら輸送機を呼ぶよ。終わらんと風呂もベッドも届かないから覚悟しろ』
「クソ、俺らはH方面だから遠征だ」
「いやいや、トラクターで地面を均して滑走路作ったり、レーダー塔を建てたりするのも結構大変だよ」
「そんな事言ってよ、いきなりマスドライバー財閥のオブジェクトとバッタリ遭遇しても泣くんじゃねえぞ」
ビクビクしながらイグアスの大地を歩くクウェンサーとヘイヴィアだったが、予想に反してそれ以上何も発見できなかった。海岸から内陸に向けて、緩やかな上り坂が続いている。そこはコーヒー農園のものらしき、二～四メートル前後の高さの木がたくさん並んでいる平原にな

っていた。

ヘイヴィアは足元に目をやりながら、

「捜索って言われてもな。そもそも、ヘリで空輸してたらヒント何も残らねえじゃん。匂いだって途切れちまうよ」

『アホ、ヘリが地上近くでホバリングすれば、ローターの生み出す風で円形に草が薙ぎ払われていたりするでしょう。スペア砲はあれだけの重量だ、完全に何も残さずに輸送するのは不可能よ』

「ホントですか？　かなり大掛かりな陣地の割に、周囲に敵兵は一人も残っちゃいなかった。仕掛けてから時間が経ってんじゃありませんかね。だとすりゃあ、それだけヒントも少なくなると思いますけど」

うんざりしたように言って、ヘイヴィアは周囲の木々を見る。

「やっぱ植林ばっかりだな」

「そういえば、この辺って何でイグアスって呼ばれてるの？」

「イグアス川っていう、世界有数のデカい川があるんだよ。雨季になると幅だけで四キロを超えちまうようなヤツだ」

「ふうん。じゃ、その大きな川の周りに街ができていった感じなのか」

「いや、イグアス川そのものは、ここから数百キロ先にあるらしい。そこからトーナメントの

対戦表みたいに人工の河川を延ばして、各地に水を供給している訳だ。この近辺はイグアス・ダムってトコを中心に水源管理しているようだがな」

それにしても、とヘイヴィアは言葉を区切る。

コーヒー農園の木々はお行儀良く並んでいたが、どこにも幹が折れている痕跡はない。つまり、巨大なオブジェクトが通過した様子がないのだ。

「？？？　どうなってやがるんだ。まさか、数百キロぐらいの長い送電ケーブルを使って、国の外から撃っていたとかって言うんじゃねえだろうな」

だとしても、その送電ケーブルを短期間で回収するのは不可能だろう。地中に埋めてあるような、土を掘り返したような跡もない。

少し考え、答えが出ない事にクウェンサーはため息をつく。

「……南極と同じでスペア砲だけか。嫌な予感だけが残る感じだな」

ヘイヴィアは肩をすくめて、

「詳しい理屈は分かんねーけど、とりあえずこう報告できる」

言うだけ言うと、彼は無線機に向かってこう告げた。

「こちらヘイヴィア。命令されたエリアを一通り洗いましたが、マスドライバー財閥の影は確認できず。ひとまず敵兵はいないものと判断できます」

「……そんなんで大丈夫な訳？　きちんと不審な点を消化しないと、またどっかに穴掘って草

を被せたレールガンで狙われるかもしれないぞ」

クウェンサーはブツブツ言ったが、フローレイティアも『今分かる事』に終始する方針のようだった。

『ご苦労。不明な点については、ボケッと突っ立って数分考えた程度で答えが出るとも思えない。基地を作ってからゆっくり考える事にしよう。クウェンサー、ヘイヴィアはこっちに戻って来なさい』

「うへぇ。班を二つに分けたって、結局俺らも簡易滑走路の整備に回されんのかよ」

『そうじゃないの。要求された仕事をこなしたお前達に、座って休む権利を与えてやろうと言っているだけよ。緊急の用件ではないから、日没までに戻ってくればどこでくつろいでいても構わないけど。私見を述べると、基地の周辺が一番安全で休みやすい所だと伝えておこう』

通信は切れた。

クウェンサーとヘイヴィアは顔を見合わせる。

「……どうする？　今すぐ基地まで戻るか？」

「面倒臭ぇ。こっちは五キロも歩き通したんだ。戻るにしても、まずは一休みしてスタミナを回復させてからだ」

二人は一応コーヒーの木の陰に身を隠すようなポジションで座り込む。ポケットから味のないレーションを取り出すと、デカい消しゴムみたいな食べ物を口に含んだ。

「くそっ、何とかなんねえのかこのレーション。食のありがたみを教えるための反面教師としてしか活用できてねえぞ」
「食品開発部門じゃ、コンテナ状の畑とかも研究されてるって話もあるみたいだけどね。種から一週間ぐらいで収穫できる野草とかと組み合わせると、レーションを輸送するより効率的に食料を確保できるんだって」
「……それ、野菜っつーか食べられる雑草じゃねえか」
「俺、こういう上陸作戦は初めてなんだけど、浜辺にベースゾーンを構築した後はどうするんだ？」
「んー？　まずはお姫様のオブジェクトを内陸の山岳部へ遠征させるだろ。その間に、俺らは半日かけて、ゆっくりじりじりと車両団を前へ進ませる。そういう事を繰り返して行って、最前線である一〇〇キロ先の内陸部までベースゾーンを突っ込ませるんだ」
　大きな建物のような施設は、複数の車両を合体させて築き上げている。移動するたびに分解と組み立てを繰り返す訳だから、その分手間もかかる訳だ。
「しかし、結構のんびりしているんだな。パパッと終わらせなくて良いのか　そうこうしている間にマスドライバー財閥に逃げられるかもしれないじゃん。中米からこっちへ南下するルートだって聞いているけど、途中でUターンする可能性だってある訳だし」
「最終的にお姫様が追い着きゃ良いの。俺らはあくまで後方の補給だ。お姫様の行動範囲を広

げるためのな。アラスカでオブジェクトを失った俺らがどんな目に遭ったか覚えてんだろ。今、俺らはそれぐらい優勢なんだ。お姫様が戦場に着いた時には終わってるって事。別に俺らが最前線に到着する前にケリがついちまったって問題ねえだろ」

「仮に、マスドライバー財閥がオブジェクトを持っていたら？」

「オブジェクトだけなら高速で逃げられるかもな。でも、メンテ用の機材や施設がないんじゃ長続きしねえ。整備部隊を切り捨てて逃げたツケは確実に払わされるって訳だ」

そんなもんか、とクウェンサーは適当な調子で呟く。

時間単位、日数単位でワンアクションを行って勝敗を決めていく、というやり方は、ちっぽけな一少年の時間間隔ではいまいち実感が持てない。しかし、軍事行動とはそういうものなのかもしれない。戦艦や空母、潜水艦が活躍していた頃なら、一つの作戦でさらに多くの時間を費やしていただろう。

「それにしても……」

と、今度はヘイヴィアがこんな事を言う。

「さっきクウェンサーも言ってたけどよ、もしもマスドライバー財閥がオブジェクトを保有しているとしたら、そいつはどこにあると思うよ」

「地図だと、この辺は炭鉱があるみたいだけど、五〇メートル級のオブジェクトを隠せるもんかな」

「いやぁ、二〇万トンの巨重だぜ。入り組んだ炭鉱に隠したら崩れかねねえぞ」
「南極の時も、結局電力を供給していたオブジェクトが見つからなかった」
クウェンサーは、しばし空を見上げる。
味のない消しゴムみたいなレーションを食べながら、
「……もしかして、本当にレーダーや衛星で探知のできない、ステルスオブジェクトでも開発されているっていうのか？　なあヘイヴィア……ヘイヴィア？」
目線を空から傍らへ移したが、少年はどこにもいなかった。
？　と辺りを見回すクウェンサーだったが、
「おいクウェンサー、こっちだ！　なんかコーヒー農園経営しているじーちゃんばーちゃんにお茶に誘われちゃってさー」
「あれえ!?　戦場のど真ん中でレジャーシートを敷いてピクニックしている老夫婦が!!」
「馬鹿、ここは元々じーちゃん達の私有地なの。娘夫婦がなかなか実家に遊びに来てくれないらしくてさ、孫の顔が拝めないんだと。……えー？　ホントに俺みてえな二枚目に似てんですか、ばーちゃんの孫」
「いやいやいや!!　和んでないで避難誘導しないと！　ここオブジェクト同士でぶつかり合う最前線になるかもしれないんだぞ!?」
「クウェンサー、お茶飲まないの？　だったら味のないレーションでも食ってりゃ良いけど」

「お呼ばれしますけど!!　存分に堪能しますけど後でちゃんと避難誘導やるからねっ!!」
叫びながら、クウェンサーもレジャーシートの方へ向かう。
優しさの塊みたいなおばーちゃんからカップを受け取ると、
「……何故、コーヒー農園経営なのに紅茶が出てくるんだ？」
「黒いのは飲み飽きたんだとさ」
ヘイヴィアは言いながら、何故か四角いキャラメルをカップの中に落としていく。
クウェンサーはキョトンとした顔で、
「何してんのヘイヴィア？」
「色々飲み方があんの。砂糖とミルクとレモンだけだと思ったか？　文句と質問垂れる前に自分の頭で考えろよ」
「……さっきから、じーちゃんが頼んでもいないのに俺の紅茶にブランデーをドバドバ注いでいる訳だが、これも作法の一つなのか？」
何だかとんでもない事になっているカップから目を逸らすように、頭上へ視線をやるクウェンサー。青空がどこまでも広がっていて、白い雲の動きを目で追い掛けている内に目が霞んでしまいそうなほど、のんびりと時間が過ぎていた。
「参ったなぁ。世界平和について考えちゃうよ」
「戦争って基本的に面倒臭せぇよな」

そこへ、クウェンサーの無線機から通信が入った。
フローレイティアからの命令か伝達かな、と思ったが、そうではなかった。
声は男のものだった。
『「正統王国第37機動整備大隊」へ。こちらは「正統王国第52機動整備大隊」しょぞくのハルリード＝コパカバーナ少佐だ』
やべえ、とクウェンサーとヘイヴィアは慌てて自分達の無線機にイヤホンを取り付ける。農園のじーちゃんやばーちゃんに聞かせると、不要なトラブルに巻き込んでしまう懸念が出てくるのだ。
そうこうしている間にも、無線機からは男の声が続く。
『それとも、ブライトホッパーのそうじゅうし「エリート」と言った方が分かりやすいかな』
「？」
ブライトホッパーと言えば、最先端のオブジェクトの名前だ。確か、お姫様が一ヶ月後に模擬戦をやるやらないで頬を膨らませていたような気がしたが……、
『我々はげんざい、中米ルートをとおって、アマゾンほうめんからそちらへごうりゅうしようと考えている。れいの「マスドライバー財閥」をきょうげきできればさいてきだが、スケジュールてきにはかのうか』
すると、今度はフローレイティアの声が続いた。

どこか苦い調子だった。

『こちらフローレイティア＝カピストラーノ少佐。三七の現場指揮を行っている。貴殿の座標位置は確認したが、そこからでは遠い。協力するなら願ったり叶ったりだが、待っていられない場合は定刻通りに作戦を開始する。共同作戦を展開する場合はそのつもりでいるように』

『りょうかいした。ではきみたちがうちもらした「マスドライバー財閥」のオブジェクトが北方へとうぼうしたさい、それにとどめをさせるようなてんかいにきたいしよう』

クウェンサーはヘイヴィアの方を見て、小声で言う。

「……もしかして、わざと手負いにして、とどめはこっちに回せって要求してる？」

「言ったろ。ブライトホッパーのエリートは有力『貴族』のボンボンだって。どうせ今回の件も、ブライトホッパーに箔をつけさせるためのパフォーマンスだと思ってんじゃねえのか？」

フローレイティアもそういった展開は望んでいないのだろう。

南極でもイグアス上陸時でも、こちらの被害はゼロではない。オブジェクトが本格的に登場する前から、すでにこれなのだ。本格的に両陣営がぶつかり合ったら、遊びでは済まない可能性が高い。

『三七のカピストラーノから五二のコパカバーナ殿へ。生憎とこちらは五二と違って敵を確実に追い回すほどの余力はない。やれる時にはやらせてもらう。貴殿の申し出には応じられないが構わないか』

『52のハルリードから37のフローレイティアへ。私見を一つ伝えておこう。君はすなおに私の申し出をうけるべきだ。公私ともにな』

言うだけ言うと、ハルリードからの通信は切れた。

クウェンサーは無線機を軽く振って、

「今のどう思う？」

「実は二人は顔見知りだった　しかもフローレイティアの方は嫌々っぽかった。以上だ」

紅茶のカップから口を離し、ヘイヴィアは応じる。

「なんつーか、『貴族』社会特有のいやーな空気が漂ってるな　美人の貴婦人サマも色々苦労しているらしい」

「え？　フローレイティアさんって『貴族』だったの？」

「その筋じゃ有名だよ」

「どの筋だよ？」

クウェンサーは呆れたように言ったが、ヘイヴィアは適当にはぐらかした事でご満悦だ。どうやら謎めいた言葉を言うのが好きなヤツらしい。

すると、やや経ってからフローレイティアの通信が入った。

『クウェンサー、ヘイヴィア　予定変更よ　ダラダラ休んでスタミナも回復しただろ、さっさと基地まで帰って来て』

「へいへい。ご命令は人生相談ですか？」

『ヘイヴィア、後でブーツの踵で頭を踏むから覚悟しろ』

くだらなさそうな調子でフローレイティアは言って、

『ブライトホッパーに介入されて作戦のペースを乱される前に、さっさとケリをつけたい。あいつ一人の名誉のために足並みが崩れて、私の部隊に余計な損害が出るのは避けたいからね。多少早足のスケジュールになるから、余った人手も作業に回したいのよ』

「そういう事なら」

「なあクウェンサー。ばーちゃんがお土産にクッキーくれるってよ」

本当は避難誘導したいところだが、コーヒー農園の老夫婦はここを離れるつもりはないらしい。こうなったら、一刻も早く車両団を動かして、このコーヒー農園を通過してしまった方が良い。そうすれば戦場の位置も自然と変わるため、コーヒー農園に被害が及ぶ可能性も減る

手を振ってくれるじーちゃんへ同じように手を振り返しながら、クウェンサーは尋ねる。

「そういえば、ブライトホッパーってどれぐらいの実力がある訳？」

「あれは陸戦専用の第二世代で、海戦には対応してねえ。おかげで南米への上陸に手間取って、こっちの作戦に出遅れたみてえだが　ただ、スペックシートを見る限り、得意の陸上戦闘なら、ウチのベイビーマグナムが三機あっても勝てねえってウワサされてる」

「……そのウワサ、お姫様には内緒な。一見無表情なんだけど、意外にそういうプライドは高

そうなんだよな、あの子。ならためしてみようか？』とか平気で言いそうだし」

帰る道すがらにそんな事を言い合っていた二人の耳に、強襲揚陸空母からの通信が入る。

『こちらシャルルマーニュ。暇を持て余している諸君に、新しい生きがいを与えるかもしれない情報が入ってきた』

「？」

『五〇キロ北上したパラナ山岳地帯から、天候兵器のチャフミサイルの発射が確認された。天然の雲に微粒子を混ぜて、一時的に対レーダー用の遮蔽物に変えるタイプだ。現在、衛星からの監視網は使えなくなっている。雲の移動に従い、監視不能エリアは順次拡大中』

「……そんなものがあるなら、何で最初から使わなかったんだ？」

「南極の地対空ミサイルの時と同じじゃねえの。発射地点から自分達の居場所が知られるからだよ。ベイビーマグナムの上陸を防げなかった時点で、なりふり構っていられなくなったって訳だ」

『発射地点から敵兵が撤退する前に、早急にベイビーマグナムを急行させる事を推奨する。最大で時速五〇〇キロに達するオブジェクトなら、距離を詰めるのにも苦労はしないだろう』

『フローレイティア、了解した。貴殿の意見は有力な判断材料とさせてもらおう』

その通信を聞きながら、クウェンサーは眉をひそめた

「ちょっと待て　わざわざ逆探知されるリスクを覚悟してまでチャフミサイルの発射を決断し

たのは、自分達の位置を発見されないようにするためなんだよな。結局、マスドライバー財閥の主力部隊は、その五〇キロ北にいるって言うのか？」

「衛星の監視網から一刻も早く巨体を覆って雲隠れしてえのかもしれねえな。ま、馬鹿正直に部隊と同位置から発射されたとも思えねえが、せいぜい発射地点から半径数キロってところじゃねえの？　チャフミサイルの効果範囲は風に乗って一気に広がるからちょっと面倒な事にはなるが、時間勝負でさっさとケリをつけちまえば問題ねえよ」

「……」

だとすれば、ついさっきここでレールガンのスペア砲に動力を供給していたのは？

南極と合わせてスペア砲だけでも結構豊富に集まっていた。そして、スペア砲を動かせるという事は、彼らはオブジェクトを保有しているはずではなかったのか。

オブジェクトは戦争の代名詞だ。

マスドライバー財閥は正真正銘の戦争を起こすだけの兵力を有しているはずなのに、彼らは本当に『逃げ』に徹するのか。

それに、この局面でチャフミサイルを使った事にも不自然な点がある。

イグアスの上陸地点で正確に網を張っていたという事は、おそらくマスドライバー財閥は事前に情報を察知しているのだろう。宇宙開発関連の組織なら、自分達の衛星を保有している可能性も低くはないはずだ。

衛星軌道上の監視網は、確かにマスドライバー財閥を苦しめるが、逆に、その恩恵を受けてもいるはずだ。チャフミサイルによって全ての衛星を封じてしまったら、マスドライバー財閥自身、どのルートを通って『正統王国』のオブジェクトが攻めてくるか分からなくなる。本当に『逃げ』に徹する連中が、わざわざいつ奇襲が来るか分からない恐怖に陥る状況を作り出すか。

そもそも。

敵が『本物』だったとしても、オブジェクトの数は一対一。

今なら戦局は五分五分だ。ここでベイビーマグナムを叩いておかないと、後から合流するブライトホッパーと二対一で戦わなければならないというのに、みすみすその機会を譲ってしまうとでも言うのか？

「まさか……」

嫌な予感が膨らむ。

敵はそんなに甘くない気がする。

何かを見落としている気がする。

『逃げ』の一手以外に、チャフミサイルを使って衛星を使えなくする、何らかの合理的な理由が。

「まさかっ!!」

6

正統王国第五二機動整備大隊所属のオブジェクトである、ブライトホッパーは山岳地帯を突き進んでいた。

全体的なフォルムは、巨大な球体の下に、円形の静電気発生装置を取り付けたもの。それで機体を薄く浮かばせた上で、後部に取り付けられている、三本のバッタの脚のようなユニットで地面を思い切り蹴り上げて前へ進む。

一回一回のたびに、オブジェクトの後方へ爆風のように土煙が上がる。

その破壊と引き換えに、ブライトホッパーは常時時速七～八〇〇キロもの速度で超高速戦闘を行える設計になっていた。バッタの脚の構造上、後ろへ下がる機能は切り捨てられ、ひたすら前方へ突撃する仕様になってもいるのだが、操縦士エリートのハルリードの顔に恐怖心はない。

後ろへ逃げるのは名誉なき者の選択肢だ。誇りを重んじる『正統王国』の『貴族』は、最速で敵に近づき、速攻でオブジェクトの装甲を貫けば良い。その撃破速度こそが迅速に戦争を終わらせる切り札であり、敵味方の損害を最小限に留める、慈悲と博愛に満ちた戦術なのだから。

レーダーが高空を飛ぶ何かを捉え、ハルリードは即座に対空レーザーで撃ち落とした。

緊張感などない。

（……ミサイル？）

彼は眉をひそめる。

チャフミサイル発射の情報は、ハルリードにも伝わっていた。

どうやら敵は少しでも自分達の位置情報を紛らわすため、ブライトホッパーと軍事衛星を繋ぐ電波や赤外線を遮断しようとしたらしい。ミサイルは爆破したが、中身のチャフは多少大気中に撒かれたようだった。いくつかの計器にノイズが走る。

距離は直線で五〇〇キロ。

しかし実際には山々が入り組み、オブジェクトの通れるルートも脳味噌の皺のように、複雑にねじれている。その事で時間をロスするハルリードだが、やはり、彼の顔には焦りもない。

（……くもがくれか。いかにも、ひきょうもののやるような手だ）

身を隠して戦いを避ける事自体が、すでに彼我の実力差を認めたものだと判断できる。本当に強い者は隠れる必要がないからだ。ライオンは保護色をまとわないように、オブジェクトがあれだけの巨体を戦場にさらすように。

本来ならば、マスドライバー財閥などさっさと殲滅できているはずだった。

それが叶わなかったのは、ブライトホッパーが陸戦専用で、強引に海路で輸送するのに手間取ったからだった。特殊なガスを充填したバルーンを大量に取り付けて浮力を確保した上で、

複数のタンカーに繋げて曳航してきた訳である。

情報収集を専門とする部下からの報告によると、マスドライバー財閥が北米から南米へ移動する際にも、似たような『タンカーと巨大な影』の目撃情報があったらしい。しかし、ハルリードは脅威を感じていなかった。彼はこう考えていたのだ。

（……仮に、そのもくげきじょうほうが正しかったとして、ダミーであるかのうせいはひていできない、オセアニアのときと同じ、ガスタンクか何かでぎそうしていたんだろう）

本当にマスドライバー財閥がオブジェクトの開発技術を保有しているとしたら、もう少し駆け引きを行っていただろう。確かにオブジェクトは現代の戦争の代名詞だが、世界的勢力の一角である『正統王国』や『資本企業』が、どれほどの数の機体を保有しているかは問うまでもない。一機一機製造できた程度で、真っ向勝負など挑めるはずがないのだ。

しかも、

（『ほんもの』だったとしても、かんけいはない）

ニヤリと笑って、ハルリードはこう思う。

（きゅうごしらえのきたいなど、『だい2せだい』のブライトホッパーのてきではない）

高速で移動しながら、ハルリードは主砲のチェックを行う。

唯一の懸念は、オブジェクトの機動性に任せて一刻も早く戦場へ到着するために、整備用の車両団を遠く後方へ置き去りにしていた事だった。いちいち待っていては数日の時間を要する

【ブライトホッパー】
BRIGHT HOPPER

全長…120メートル（脚部最大展開時）

最高速度…時速850キロ

装甲…1センチ×1000層（溶接など不純物含む）

用途…対オブジェクト用駆逐兵器

分類…陸戦特化型第二世代

運用者…正統王国軍第五二機動整備大隊

仕様…静電気＋複数脚推進システム

主砲…短距離レーザービーム砲×4

副砲…レーザービームなど

コードネーム…ブライトホッパー
（強力なレーザービーム兵器と、バッタのような脚で高速移動するところから）

メインカラーリング…シルバー

BRIGHT HOPPER

ため、こうするしかなかったのだが、ブライトホッパーは一切の補給や整備を行えない事になる。

（……それもまた、フローレイティアの37とごうりゅうするまでのがまんだ。『正統王国』のオブジェクトのきかくには、あるていどのきょうつうせいもある。かくしゅへいそうはともかく、『そうこうばん』のこうかんや『どうりょくろ』のはいきガスようの『こちゃくボックス』ぐらいなら、ベイビーマグナムのものをりゅうようできるだろうし）

ベイビーマグナムやお姫様のために丹精込めて用意した補給物資を横から奪うようなやり方に、しかしハルリードは何の感慨も抱いていなかった。むしろ、旧式の第一世代のオブジェクトのパーツを、必要だからとはいえ取り付けなければならない事に嫌悪すら抱いている。良くも悪くも、彼は典型的すぎる『貴族』なのだ。女性の指揮官やエリートが支えている大隊の存在そのものについても、あまり良い感情を抱いていない。

（……ともあれ、ここでおわりだ）

主砲のチェックは終わった。

ブライトホッパーは史上最速の戦闘を行うため、全ての兵器をレーザービームで統一した特殊なオブジェクトだ　文字通り、戦争に光速を持ち込んだ怪物　当然のように、主砲も大出力レーザービームだった

超高速で近づき、敵オブジェクトの足元に大小無数のレーザーを浴びせ、わずかでも動きが

止まったところへ正確に主砲の大出力レーザービームを照射し、一撃で吹き飛ばす。設計時想定攻撃圏内の五キロに入ったところで、全世界のあらゆるオブジェクトはブライトホッパーに瞬殺される。様々な環境で戦えるマルチロール性を追求するあまり、個々の兵器の威力が出力不足になってしまった、どこぞの第一世代と一緒にされては困るのだ。

（……もしも、てきがどんなオブジェクトをもっていたとしても、かんけいない。えいよある光の1げきにて、ぶざまににげる『大きなまと』など、かるがるとほうむりさってくれよう）

その時、前方の空がチカッと光った。

山岳地帯のさらに上方からだった。

？　と、わずかに眉をひそめるハルリード。

そして、

7

ッッッドォォおおお

「なっ、何だぁ!?」

『シャルルマーニュより全員へ!!　チャフミサイルの雲の外で展開していたブライトホッパーに異変あり。五五〇キロ北方からこちらへ向かっていたブライトホッパーが大破した。繰り返す、合流予定のブライトホッパー大破!!』

「ちょっと、待て」

近くで爆発が起きたのかと勘違いしていたヘイヴィアは、思わず伏せていた体を起こしながら、全身が震えるのが分かった。

「マスドライバー財閥のオブジェクトは、ここから五〇キロ以上離れた所にいるはずだよな。その発射音が、あの大きさだっていうのか？　間近でプラスチック爆弾が爆発したってあんなに腹には響かねえぞ!?」

「そもそも五〇〇キロっていうのは何なんだ？　ここは山岳地帯だぞ！　間にある山を全部吹き飛ばしたって言うのか!?」

『曲射弾道よ』

クウェンサーの疑問に、フローレイティアが無線越しに応じた。

『野球のボールと同じ。一度レールガンを斜め上に打ち上げてから落下させてるの！　それなら長距離砲撃に向いてるし、途中の山もある程度は問題にならないはずよ!!　発射後も雲が吹き散らされていないところを見ると、二五〇〇メートル以下ってところかもしれない!!』

それにしても……、とクウェンサーの疑問は完全には消えなかった。ブライトホッパーは高速移動を得意とする、最先端の第二世代ではなかったのか。それを一発で確実に大破させるなんて、まともではない。

だが、事態は彼が冷静に思考を続けるだけの時間など与えなかった。強襲揚陸空母からさらに追加の通信が入る。

『こちらシャルルマーニュ!!　操縦士エリートのハルリード＝コパカバーナ少佐の脱出の成否は確認できず！　緊急時の救難信号も感知できない!!』

「……嘘だろおい。本当に、一発で大破したのかよ……？」

オブジェクトは五～一〇キロの距離で戦うのが常だ。主砲自体の射程はそれ以上であっても、レールガンやコイルガンは距離と共に速度と威力が落ちるし、レーザービームも空気によって減衰していく。下位安定式プラズマ砲の熱についても同様で、『オブジェクトの分厚い装甲を撃ち抜くためには、それなりに接近しなくてはならない』というのは定石だった。

まして、一気圧の大気中で五〇〇キロも距離が開いていれば、まともな殺傷能力を維持し続けている兵器の方が珍しい。些細な傷から墜落・撃墜の危険を孕む、高空の戦闘機や弾道ミサイルの迎撃ならともかく、あのオブジェクト相手に有効打を与えられるなどという話は聞いた事がない。

それなのに……、

『ブライトホッパーの動力炉は完全に破壊した模様。推定速度、……ッ!?　ま、マッハ二五だと!?　さっきのは本当に金属砲弾なのか!!』

「ふっ、ふざけんな!!　計測ミスだろそんなの！　そっ、そうだぜ。レールガンは曲射弾道なんだろ。マッハ二五で飛ばしたら、そのまま落下しねえで大気圏に向かっちまうだろうが!!」

『こちらに聞くな!!　おそらく巨大な砲弾の側面に可変式の特殊な溝などを用意して、軌道をある程度調整しているんだろうが、詳しい事までは断言できない!!』

「ケタが違い過ぎる……」

クウェンサーは思わず呻いた。

「チャフミサイルを発射したのはこういう事だったんだ。『逃げ』のためじゃない、砲撃のタイミングを伝えないようにするために!!」

慌てて携帯端末を取り出し、GPSモードの地図を呼び出す。帯が白い雲に覆われ、各種センサーでも解析できない状態になっていたが、雲の切れ目に巨大な影がチラリと見えていた。チャフミサイルは天候兵器の一種だが、利用するのは天然の雲だ。塗り潰すようにはいかなかったのかもしれない。

「……ちくしょう、本当にあったってだけじゃない。相手は間違いなく第二世代だぞ……」

クウェンサーは思わず貧血になりかけた。

マスドライバー財閥のオブジェクト。

これで、クウェンサー達の仕事は『オブジェクトによる一方的な追撃作戦』から、『勝てるかどうかも分からない、むしろ勝てる見込みの方が少なそうなぐらいの、オブジェクト対オブジェクトの戦争』へと移行してしまった。

携帯端末の画面を凝視するクウェンサー。

丸いボディと、そのボディの二倍以上の長さを持つ主砲。

オブジェクトの主砲は大体どれもこれも巨大だが、それにしてもあのサイズは普通ではない。機体の核は動力炉ではない。あの主砲を中心に、実戦に投入するために必要なパーツを寄せ集めたようだった。

狙撃銃のバイポッドのような物で支えられた長大な兵器を見るクウェンサーの心臓が止まりそうになる。

GPS地図は数秒置きに情報が更新されている。

そして、地図の中の巨大な影が、ゆっくりと回転しているのが分かったのだ。まるで長大な主砲をこちらへ――正確には、ベイビーマグナムへ向け直そうとしているかのように。

その時、雲の切れ目が閉じ、オブジェクトが完全に影を隠した。

まともに照準されたら終わりだ。

マッハ二五で飛んでくる砲弾など、避けられるはずがない。

しかし……、

「そもそも、あんな距離でどうやって正確に狙いを定めているんだ……？」

クウェンサーは理不尽な疑問をそのまま口に出した。

（五〇〇キロだぞ。単なる赤外線レーザーや電磁波？　いいや、マスドライバー財閥のオブジェクトからブライトホッパーの間までには、山岳地帯が広がっている。地上から電波を発しても山にぶつかってロックなんてできなかったはずだ）

地形を無視して正確に照準したとなると、人工衛星のレーザーでも使って垂直に照準を合わせているのだろうか、とも思ったが、クウェンサーは即座に否定する。

だとすれば、チャフミサイルを使って衛星の目を潰す理由がない。

ブライトホッパー大破の直前に、マスドライバー財閥はわざわざブライトホッパーの真上へチャフミサイルを発射している。それはブライトホッパーが軍事衛星とアクセスできないようにする……という面では有効だっただろう。しかし、同時にマスドライバー財閥側からも、衛星から『雲の下』を様々なカメラやセンサーで走査できなくなってしまう事も意味しているのだ。

わざわざチャフミサイルを選んで使った以上、軍事衛星に頼っている訳ではない。

となると、

「待てよ……」

クウェンサーはハッと顔を上げた。
頭上に広がる雲を見て、彼は思いつく
「逆に雲を利用しているんだ!!　レールガンを一度斜め上に打ち上げてから落下させるのと同じ。チャフミサイルで『電波を反射させる雲』を作った上で、地上から斜め上にロック用の電波を照射する。それを雲で反射させて地上のターゲットに狙う事で、自分の位置を隠しつつ、相手を正確にロックする。これなら電波の遮断されやすい山間部でも、上方から狙う事ができる!!」
「無茶だろおい！　確かに雲を使って照準用の電波をウチのお姫様にぶつける事はできるかもしれねえ。でも標的にぶつかった電波は、全部が全部マスドライバー側に返る訳じゃねえんだ。ほとんど乱反射しちまって、照準情報として利用できるぐらい密度の濃い波にはならねえんじゃねえのか!?」
「補正計算用のプログラムを用意しているんだ。乱反射した内、わずかに戻って来た出力の小さな電波だけで位置情報を正確に割り出せるような!!　連中は元々、宇宙開発専門の組織だろ。大気圏で弾かれてしまうレーザーや電波を軍事衛星で傍受するプロジェクトなんかの開発データがあってもおかしくはないはずだ!!」
そこまで言うと、クウェンサーは無線機を掴む
彼はありったけの力を込めて叫んだ。

「クウエンサーからベイビーマグナムへ!!　敵オブジェクトは大候兵器を利用して、照準用の電波を雲で反射させている！　下位安定式プラズマ砲か何かで頭上の雲を吹き飛ばせ!!」

――声に、巨大なオブジェクトが応じた

七本のアームに支えられた七門の主砲が、大空へ向く　砲は一ヶ所に集中せず、複数の雲をランダムで砲撃した　凄まじい爆音と閃光と共に雲に数十メートルの巨大な風穴が空いていく。遠くにいたはずのクウエンサー達の鼓膜に痛みが走るほどの大音響だった

しかし、二機のオブジェクトの間には五〇キロの距離があり、その全てが雲に覆われていた。多少の風穴を空けたところで、全ての雲は取り払えない。

おそらく今も、照準用の電波は正確にお姫様を捕捉している。

「くそっ」

クウエンサーは携帯端末に表示された地図から、かろうじて二機のオブジェクトの位置関係を推測した。

「西へ逃げろォおおお

しかし、

マッハ二五の凶弾が、容赦なく空気を引き裂いた。

それはオレンジ色の光線だった。実際には上方へ弧を描いていたのだろうが、スケールが大きすぎてクウェンサーの目には斜め上から落ちてくるようにしか見えなかった。一直線に突き進むレールガンは、間にあった低い山をまたいでベイビーマグナムへと襲いかかった。

わずかに狙いが逸れたのは、ここが山岳地帯でレーダー系の電波に不都合な地形だったためか、それともお姫様の反応の良さが功を奏したのか。

しかしそれでも、強大なレールガンは掠るようにベイビーマグナムへ突っ込んでいく。

爆音が炸裂した。

いや、それはもう人間の耳で感知できるものではなかった。

ベイビーマグナムの装甲がめくれ上がり、近くにあった背の低い山が、質量の半分以上をごっそりと抉り取られる。

一キロ以上離れていたクウェンサーとヘイヴィアの体が、容赦なく地面へと叩き伏せられた。内臓という内臓がギリギリと痛みを発した。あらゆる音が聞こえない。あまりの大音響に、一時的に耳をやられたらしい。クウェンサーはのろのろとした動きで、ポケットから補聴器の

ような物を取り出した　無線機の端子にコードを差し込み、耳の後ろに引っかける。いわゆる骨振動というヤツだ。

『……ベイビーマグナム、中破!!　第一から第三の主砲は発射能力喪失!!』

『まだ……いける……　7もんの内、1つでもしゅほうがつかえるなら……』

『推進機関に異常発生!　戦闘用の高速移動能力にも疑問の余地あり!!　整備兵、至急足回りのチェックを行う事を推奨する!!』

頭上を細い飛行機雲のようなものが走り抜けていた。おそらく、レールガンが通った後に大気がかき乱されて生まれたものだろう。

倒れたまま、クウェンサーは携帯端末を掴んだ。寝起きに目覚まし時計を確認するような挙動で、彼は小さな機械を操作する。GPS地図には、ベイビーマグナムが映し出されていた。本来ならチャフミサイルの影響を受けた雲で見えないはずなのだが、着弾時の衝撃で雲が吹き散らされたらしい　そこだけ円形の穴ができている

ベイビーマグナムの右手側の装甲が、砕いた空き缶のように弾け飛んでいた。ギザギザの断面が、得体の知れない昆虫の羽のようにひらひらと揺れている　中心を抜かれる事は避けられたみたいだが、相当の衝撃が走り抜けたはずだ　お姫様が生きている事自体、奇跡と呼んでも過言ではない。

そして。

マスドライバー財閥のオブジェクトのいた場所の雲に、再び切れ目が生じた。しかし、そこにオブジェクトの影はなかった。そして、別の雲の切れ目から巨体が覗けていた。移動しているのだ。クウェンサー達の方から遠ざかる位置ではない。

逆だ。

こちらに向かって近づいてきている。

（……どういうつもりだ）

本来なら、射程距離が開いていればいるほど、マスドライバー財閥は優勢になる　何しろ、ベイビーマグナム側に反撃のチャンスがないのだから

そう思っていたクウェンサーは、GPS地図のあちこちに、雲が円形に吹き飛ばされているのを見つけた。巨大な爆発が起きた証だ。それは皆、マスドライバー財閥のオブジェクトと、クウェンサー達の部隊の展開位置を結ぶ所にあった。

（誤爆……？）

確か、発射時にものすごい轟音が響いていたはずだが、クウェンサーには聞き取れていなかった。ひょっとすると、聴覚がやられている間に発射されたものなのかもしれない。

（マッハ二五っていう莫大な速度に、砲弾の方が耐えられなかったのか？）

当然ながら、砲弾が速く飛べば空気摩擦は増大する。マッハ二五などと言われたら、どれだけの熱が生まれるかはクウェンサーには想像もつかない。

だとすれば、今度は『確実に仕留められる距離』まで近づくつもりなのかもしれない。
何故か。
これはオブジェクト対オブジェクトの『白旗』を使えば見逃してもらえる現代戦ではないのだから。優勢な時に確実にとどめを刺さなければ、『常に逃走中で補給の難しい』マスドライバー財閥の方が不利になってしまうのは明白だ。膨大な資源を持つ『正統王国』軍はその辺りの心配をする必要はないし、時間が経過すれば、増援のオブジェクトと合流する可能性すらあるのだから。
リスクを冒してでも、倒せる敵は倒せる時に確実に撃ち抜く。
もしも敵の狙いがその通りだとすれば、近づかれたらベイビーマグナムに勝ち目はない。
そう思ったクウェンサーの体が、直後に強張った。
気づいたからだ
ある程度のリスクを被ってまで『確実』にベイビーマグナムを仕留めようとする者なら、次にどんな行動を取るのかを。
クウェンサーは起き上がる事もできないまま、それでも必死に無線機を摑み直す。骨振動のイヤホンが外れ、全ての音が聞こえなくなるが、無視して口を動かした。
「逃、げろ……」
特定の誰に向けて、ではない。

ベイビーマグナム用の整備基地ベースゾーンにいる全ての人々に向けて、だ。
「逃げろォォおおお

8

大声で名前を呼ばれているような気がした。
遠慮がちに体を揺さぶられているような気もした。
それを知覚したクウェンサーが最初に思ったのは、耳が聞こえなかったのは鼓膜が破れたからではなかったようだ、という事だった。
……自分が生きている、という当たり前の事実に気づいたのは、不思議とそれより後だった。
「――ウェンサー……。起きろ、クウェンサーッ!!」
「……う」
目を開けると、顔を覗き込んでいるのはヘイヴィアではなくフローレイティアだった。彼女の髪は泥だらけで、いつもきっちり着こなしているタイトスカートの軍服も、グチャグチャに乱れていた。カンザシを模した細長いヘアピンも、いくつかなくなっている。
「どう、なって……ヘイヴィアは？」
「分からない」
「……？」
分からないも何も、すぐ隣にいるはずだろうと思ったクウェンサーは、自然とそちらに目を

向けていた。そしてそこで愕然とする。

陸地がなかった。

ついさっきまで、ここは起伏の少ない平原のはずだった。それが、今では地盤そのものが崩れ、目と鼻の先が崖の下へと続いていた。切り立った奈落の底は一〇メートル以上もの深さがあって、大量の土砂や岩盤が崩れて積み重ねられていた。

単純に、崖の向こうが一〇メートルほど沈んでいるのではない。だとすれば、海岸線から水が浸食して水没しているはずだ。

崖の向こうが沈んでいるのと同時に、クウェンサー達のいる方も急激に盛り上がっているのだ。地盤そのものが砕けてしまったためだろう。

崩れた先に、人がいるかどうかは不明だ。

フローレイティアの言った通り。

（……直撃したのは、ここから一キロぐらい離れていた基地だろ。一キロ離れたここでさえ、こんな地形が崩れるほどの余波が襲ってきているって事は……）

「き、基地のみんなは……？」

「見ない方が良い」

フローレイティアは首を横に振った。

「とはいえ、全員がグチャグチャの肉の塊になって、何人分の死体かもカウントできないとか、

そこまでひどい状況じゃないから安心しろ。せいぜい骨折程度のものよ。とっさに外にではなく、頑強な基地の中へ逃げ込んだのが幸いしたんだと思うけど」

「どういう……？」

「直撃はしなかったの」

フローレイティアはため息をついた。

「たまたま砲弾に傷でもあったのか、何らかの整備不良か。空気摩擦に耐えられなかったらしくてね、直撃前に空中で砲弾が爆発したの。一九〇八年、ツングースカって所に隕石が落ちたのは知っている？　空気摩擦で爆発した一〇〇メートル級の隕石は、地上に直撃する事なく衝撃波だけを辺りに撒き散らしたのよ。それと同じようなものらしいね」

直撃していたらクレーターね、とフローレイティアは言う。

「マッハ二五なんて馬鹿げた速度じゃ、摩擦熱も相当なものになるはず。普通の金属砲弾じゃ、一瞬で溶けて原形を失うでしょうね。おそらく、連中の砲弾には融解を避けるため、特殊な冷却装置を内蔵しているはずよ。例えば、液体窒素を使うとか」

「それで、極端な温度変化に耐えられず、砲弾に亀裂が入った……」

「ひょっとするとね。お前もGPS地図で痕跡ぐらいは確認しているかもしれないけど、実はマスドライバー財閥のオブジェクトは、こちらに届いた以上の数の砲弾を撃ち出しているのよ。ここに届く前に、半数近くの砲弾が勝手に爆破している。……もしかすると、連中の主砲は試

作品なのかもしれない」

「……当たらなくても、あの威力……？」

ゾッとするクウェンサー。

余波に過ぎないものであっても、すでに戦術兵器クラスの破壊力があったのだ。

「でも、五〇〇キロ先のブライトホッパーは一撃で瞬殺されていましたよ。ベイビーマグナムまでの距離は五〇キロ。こっちの方が当たりやすいんじゃないんですか」

「運が良かった……のかもしれないけど」

フローレイティアはわずかに言い淀み、

「敵の砲弾は曲射弾道……一度空高くに撃ち上げて、放物線を描くように標的を狙っているのは知っているね。もしかすると、標的までの距離に拘らず、砲弾は常に一定の高さへ上昇させるのかもしれない。その場合、標的との距離が近ければ近いほど放物線のカーブはきつくなる。だから距離が近いお姫様の方が、砲弾の空中分解に助けられたのかも」

一理あるかもしれない。

だが、

「だとすれば、より一層あのオブジェクトが接近してくる理由にはならないですよ。むしろ、逆に距離を取った方が、安全かつ確実にお姫様を撃ち抜けるはずです」

「曲射弾道を使わなければ良い」

フローレイティアは即答した。

「補給を受けられないマスドライバー財閥が、安全な長期戦よりリスク覚悟の短期戦を望んでいる場合、後ろへ下がるよりも前へ出て、直線的な軌道の砲弾でお姫様を狙った方が、早くケリがつくでしょ。……ベースゾーンが破壊される寸前に、ウチのお姫様が中破したのはデータ類で確認した。あの状況じゃ高速戦闘は難しい訳だし、『万全のオブジェクト』がやってきたら手も足も出ないでしょ」

速度がそのまま威力に直結するレールガンは、当然ながら距離が近ければ近いほど破壊力も増す。マッハ二五の砲弾を至近距離から撃ち込まれたら、お姫様のオブジェクトもただでは済まないはずだ。

ゴクリと、クウェンサーは喉を鳴らした。

先ほどの大爆発を思い出す。

「……大丈夫なんですか、それ。ただでさえ失敗した時の衝撃波にしても、立派な脅威だったのに……」

「でも、核兵器に耐えられるオブジェクトに対しては、その衝撃波だけじゃ決定打にはならない」

フローレイティアは遮るように言った。

「第二波、第三波がしつこく来ないのは、おそらくマスドライバー財閥のオブジェクトの主砲

は、極めて威力は高いものの、装弾数は少ないんでしょうね。逃亡中だから、いつでも満足な整備を受けられるとも限らない。優勢な時に確実に仕留めておかないと、同じチャンスが巡ってくるなんて確約はない。だからマスドライバー財閥は近づいてくる。『確実に仕留められる位置』に機体をセットされたら、今度こそ逃げられないの」

クウェンサーの肩にフローレイティアは手を置いて話しかける。

「作戦は中止よ。悔しいけど、我々は交戦能力を完全に失った　それは認めるしかないの。ここからは、いかに損害を少なく済ませて撤退できるかを重点に行動するべきよ。負傷兵は水中翼船に積んで海へ逃がすから、お前もそれに乗れ。ここは一度撤退するの、この状況で戦っても勝ち目は薄いよ。一度距離を取って立て直さないと」

「……」

「私は撤退時刻ギリギリまで、見つからない兵士の捜索をする。……お姫様も見つかっていないのよ。通信にも応えない。オブジェクトから脱出したとは思えないから、もしかするとどこかで戦おうとしているかもしれないけど。チャフミサイルのせいで衛星から位置を確認できないし……」

「駄目です」

クウェンサーは、打ちのめされた体を酷使して、必死に唇を動かす

「確かに海に出れば、陸戦専用のオブジェクトから直接的な距離は離せるかもしれません。で

も、回収先の強襲揚陸空母自体は、海上をゆっくり進みます。あのオブジェクトの主砲の範囲外まで逃げられるとは思えません」

「分かってる。あれはブライトホッパーに対して五〇〇キロ離れた場所へ正確にレールガンの砲弾を爆破させた。しかも、時速数百キロで高速移動し続けていた第二世代に対して正確に、だ。ゆっくりと移動する艦船相手なら、それ以上の距離でも当てられるかもな。……放たれた砲弾が、全て空中分解してくれるとも限らないし」

「だったら……」

「私は、負傷兵は水中翼船で海へ逃がすと言ったのよ。シャルルマーニュと合流するとは言っていない」

フローレイティアは苦い調子で続けた。

「水中翼船なら船体のほとんどは水面より上に上がるから、最大で時速一〇〇キロを超えられる。各々の船をできるだけ散らばるように距離を取らせる。これなら、被害は最小で済ませられるのよ」

「じゃあ、シャルルマーニュの方はどうするんですか……？」

「残念ながら、彼らの艦隊は私に指揮権のある部隊ではない。彼らの判断は彼らの旗艦で行われるでしょうね。……強襲揚陸空母にはいくつか水中翼船が残っているはずだから、艦を捨てるという選択を取ってもらえると後味が悪くならないんだけど」

わずかに、フローレイティアが奥歯を噛むのが分かった。
艦隊を危機的状況に陥らせたのは、クウェンサー達の部隊の責任だ。それを強く感じているのかもしれない。
「幸い、七〇〇キロ先の大西洋上で、『正統王国』軍の旗艦シグムントを中心とした艦隊が別の作戦のために展開している。彼らに借りを作って回収してもらう。それが最善よ」
「最善……。でも、実際に生き残れるのは何割なんですか。そもそも、上陸用の水中翼船に、七〇〇キロも進むだけの燃料があるって保証すらもないのに……」
「苦しい選択なのは分かってる」
フローレイティアは片手で髪をグシャグシャと掻きながら、
「でも、どれを選んでも苦痛しかない。その中なら最善よ。いい、このまま陸に留まっていれば、いずれマスドライバー財閥のオブジェクトに接近される。陸を走るオブジェクトから距離を取る一番の方法は、海に出てしまう事よ。……たとえ、撃沈される危険性が極めて高くてもね」
重たい沈黙が下りた。
フローレイティアに任されたのは、正真正銘の敗走なのだ。
「立てる？」
「痛っつ!!　なんか、右足の足首が……」

ゆっくりと歩こうとして、クウェンサーは顔をしかめた。改めて見れば、足首の辺りが赤く腫れ上がって、わずかに膨らんでいた。関節を自由に動かせない。

フローレイティアは屈み込み、足の様子を確かめる。

「折れてはいないね。地味に捻挫しているみたいよ」

「そ、そりゃどうも」

足を引きずるようにゆっくり歩くならともかく、全力疾走などとてもできるような状態ではない。

すると、フローレイティアは無言でクウェンサーの腕を取った。そのまま自分の首に回し、彼の体重を支える。

「ふっ、フローレイティア、さん？」

「言ったでしょ、見つからない兵士を限界まで捜すって。お前もその一人よ」

どうやら、このまま浜辺の水中翼船まで運んでくれるつもりらしい。……もっとも、平原の地盤が割れて段差になっているぐらいなのだ。その浜辺もクウェンサーの知るものとは地形が変わってしまっているかもしれないが。

その時だった。

フローレイティアの軍服から電子音が聞こえた。無線機のものだ。フローレイティアは空いている方の手で無線機を取り出すと、それを耳に当てた。お互いに密着しているせいで、クウ

エンサーにも無線機からの声は届く。
聞き覚えのない女性からのものだった。
『こちら第五二機動整備大隊所属、最前斥候小隊のバイラニー＝サローノ伍長です』
「？」
「ハルリード＝コパカバーナ少佐の部隊の下っ端よ。オブジェクト突入前にいち早く戦場に向かい、事前情報を集めたり基地の基盤を構築したりして、下準備を整えるための部隊ね」
となると、ブライトホッパーが大破した事によって、宙ぶらりんになってしまった事になる。いち早く戦場に向かう、という事は、もしかするとすぐ近くにいて、強襲揚陸空母に回収されるのを希望しているのだろうか。
などと考えていたクウェンサーだが、バイラニー伍長の意見は予想外のものだった。
『三七所属のベイビーマグナムと連絡がつきました。我々が生き残るために最も有効な術は、協力してマスドライバー財閥のオブジェクトを破壊する事にあると進言させていただきます。……あれだけの射程と威力を誇る主砲をどうにかしない限り、我々には逃げるという選択肢すら許されていないのですから』
「ベイビーマグナム……エリートのミリンダ＝ブランティーニ中尉はどうしている？」
フローレイティアが尋ねると、バイラニーは躊躇なく答える。
『山間部の隙間にオブジェクトの巨体を隠しています。どれほど効果があるかは分かりません

が、マスドライバー財閥側の動きを予測し、常に多くの山を間に挟むように考慮しているようです。行動予測に関し、ヘイヴィア＝ウィンチェル上等兵からの分析情報を参考にしている模様です』

「良かった……。お姫様もヘイヴィアの野郎も、とりあえず無事みたいだな」

クウェンサーはホッとした調子で言う。

『すでに頭越しにベイビーマグナムへ作戦内容の提案をさせていただいた事、緊急時につきご容赦ください。遅れましたがフローレイティア＝カピストラーノ少佐へ同様の提案をさせていただいてもよろしいでしょうか』

「聞こう」

フローレイティアは一言で応じた。

『現在、ベイビーマグナムは敵のレールガンを受けて中破した影響で、三門の主砲が使用不可になり、推進機関も傷つき、戦闘用の高速移動は難しい状況にあるとの事です。……従って、戦術はベイビーマグナム主導ではなく、我々ブライトホッパー主導のマニュアルを推奨します』

「……敵の足元を狙い、動きが止まったところへ主砲を撃ち込むやり方の事？」

『ええ。とはいえ、ブライトホッパーと違って高速移動はできませんから、ほぼ一発勝負です。失敗した場合のリカバリーはできないものとお考えください』

バイラニーはそこで一拍置いて、

『ベイビーマグナムはイグアス方面にある高山植物用量産プラントの跡地に隠します。気圧調整用の半球状大型施設の廃墟をそのまま利用できるでしょう。ベイビーマグナムを収納できるスペースを確認できています。マスドライバー財閥のオブジェクトが近くを通った際に、壁ごと下位安定式プラズマ砲で撃ち抜けば破壊できるでしょう』

「どうやって、肝心の足止めをするの？　奇襲の場合、複数かつ複雑なアクションは成功率を下げるだけよ」

『少佐殿が部隊を展開させたイグアス方面には、巨大なダムがあります。そしてマスドライバー財閥のオブジェクトは、今のところ、パーツ換装なしで水上を移動できるという報告は受けていません』

まさか、とクウェンサーの腹の底に嫌な予感がわだかまった。

彼が何かを言う前に、バイラニーはサラリとこんな事を告げた。

『ダムを破壊して、一時的に下流を水浸させます。そうすれば、陸戦専用のオブジェクトを足止めできるでしょう。その間にベイビーマグナムが砲撃すれば、マスドライバー財閥側は回避できないはずです』

冷静に戦争の作戦計画を立案・実行するフローレイティアも、流石に息を呑んだ。

「……本気で言っているの？」

『当たり前です』

「駄目よ、その方法は容認できない。ダムを破壊すれば戦場の水没だけじゃ済まない。下流の一般市民が万単位で犠牲となるの。そんな作戦に私の部隊の人員を動員させる訳にはいかない!!」

『許容の範囲です。「正統王国」の民ではありませんから』

バイラニーの口調に変化はなかった。

『繰り返しますが、我々が生き残るために最も有効な術は、何としてもマスドライバー財閥のオブジェクトを破壊する事にあります。……我々は、戦争をしているのですよ。部隊を指揮する少佐殿には、今一度その事を強く自覚していただきたい』

「くそっ!!　どのみち、ベイビーマグナムが動かなければダムを破壊する事に意味はないの。貴君らがやろうとしている事は何の成果も生み出さない!!」

『その言葉は、少佐殿ご自身に刻むべきかと。我々は、どうあっても作戦を決行します。その犠牲を無駄にしたくなければ、ベイビーマグナムを早急に動員するべきと進言させていただきましょう』

作戦決行時刻は追って連絡します、とだけ言って、バイラニーからの通信は一方的に途切れた。フローレイティアは忌々しそうに舌打ちして、

「チッ!!　何が生き残るための最も有効な術よ。あいつら、自分達の上官がやられた事の報復しか考えていない!!」
「先に提案したとか言っていたけど、お姫様やヘイヴィア達は、本当にこんな作戦に同意したのか……？」
　すると、まるで質問に答えるかのようなタイミングで、別の通信が入ってきた。
『やっと繋がったな、この野郎。さっきからずっと呼び出し続けていたんだぜ　どこで気絶していたか知らねえが、俺の見ていない場所まで吹き飛ばされてんじゃねえよ』
「ヘイヴィアか？」
『こんな時で悪りいんだが、俺の人生相談を聞いてくれるか？　ブライトホッパーの部隊の連中からとんでもない提案を一方的に突きつけられてよ　正直かなり参ってる』
「その話なら私達の所にも来た」
　横からフローレイティアが割り込んだ
「ダムを破壊するという話ね？　作戦指揮者から命令する　その作戦には一切応じるな　私達は当初の予定通り、海上への撤退作戦を優先するの　ベイビーマグナムさえ動かなければ、マスドライバー財閥にとどめは刺せないよ。それが分かればダムを破壊しても何の意味もない事に自然と気づくはずね」
『……なら良いんですがね』

ヘイヴィアは苦しげな声で言う

『どうも連中はブライトホッパー大破の腹いせに色々やりてえだけ、みてえに見えんですよもう合理性とかが頭の中から抜けちまってる。どんな状況でもダムを爆破すんじゃねえですかね。……誰かが武力的に止めない限り』

「……」

それは、先ほどフローレイティア自身が口に出していた懸念だ。本当は彼女も、今の最前戻候小隊のバイラニー達が冷静さを失っている事に気づいているはずなのだ。

『よおクウェンサー。そこで人生相談だ。俺はこれからとんでもねえ事をテメエに要求するかもしんねえが、ちょっと話を聞いてくれるか』

「俺の方も少々真面目に話し合いたい気分になってきた。まあ、話自体はすぐに終わる。だからちょっと付き合ってくれないか」

クウェンサーとヘイヴィアは、ほとんど申し合わせたような調子で、それぞれ勝手に言う。

『ダムは俺が何とかする。でも、ダムの爆破作戦を止めると決定打に欠けちまう。だからマスドライバー財閥のオブジェクトはテメエに任せちまって構わねえか？』

「オブジェクトについてはこっちで解決する。でも、そうするとダムの件は全くの無駄だから、お前の方で何とか爆破作戦を阻止してくれないか？」

相談は一〇秒で済んだ。
通信を切ると、クウェンサーはフローレイティアの顔を見る。
「……フローレイティアさん。一つだけお願いがあります」
「駄目よ。協力はできない」
彼女は即座に言葉を封じた。
「海上への撤退作戦は、確かに分の悪い賭けよ。でも、だからといってお前達の計画は無謀すぎる。特に、ベイビーマグナムをこの場に留めておく事は、ダムを破壊しようとするバイラニ＝サローノ達にとっての希望になってしまうの。それに、マスドライバー財閥のオブジェクトを具体的に破壊する方法については、全く心当たりがないでしょ。こんな無謀な行動を許す訳にはいかない」
「そうですか……」
クウェンサーはわずかに気落ちしたように呟く。
それから、フローレイティアの肩に回していた自分の腕を、外した。捻挫して腫れ上がった足首に鈍い痛みが走るが、驚くフローレイティアからさらに数歩距離を取る。
「なら、本当に一つだけで良い。この砲撃現場から、俺の事は発見できなかったと報告しておいてください。俺は派遣留学の『学生』です。ここで何をやっても、『軍人』のフローレイテ

イアさんの人生には影響を及ぼさないはずです」

「クウェンサー、お前……」

「行かせてください」

ズキズキと痛む足首も気にせず、クウェンサーは言う。

「俺はオブジェクトの事を学ぶために来ただけです。本来、こんなのは俺の仕事じゃない。でも、だからと言って、このまま撤退するのは耐えられないんです。サローノ達は何が何でもダムの爆破作戦を決行しようとしている。マスドライバー財閥のオブジェクトだって、このまま居着いたら、どこかの世界的勢力のオブジェクトが吹き飛ばすまでの間に、この無政府状態の空白地帯でどれだけの暴虐を働くか分かったもんじゃない。さっきの砲弾の空中分解でも、民間に被害が出ているのかもしれない。……誰かがやらなくちゃいけないんです。そして、そこに俺達は立っているんです。幸か不幸かは知らないけど、俺達はここに居合わせたんだ!!」

フローレイティアは、しばしその言葉を聞いていた。

考え、俯き、唇を噛み、そして彼女はクウェンサーから顔を逸らす。

「駄目よ、その意見には従えない。ここでは私が上官なの。命令を出す権限はこっちにある」

「……ッ!!」

クウェンサーは思わず背負ったバッグの中にあるプラスチック爆弾を意識したが、フローレイティアは直後にこう付け加えた。

「クウェンサーは見つからない。だから私も捜索活動を続行する。そういう事にしておくから。上陸用の水中翼船一隻を除いて、強襲揚陸空母は全て沖合いへ退避させる。それで構わない？」

「フローレイティア、さん？」

「その足で何ができるの。下手に立ち向かっても死ぬだけよ」

ばつが悪そうな顔でフローレイティアは続ける。

「やると決めたからには全力で、あらゆる選択肢を考慮するのよ。そのためなら、出来の悪い部下の杖代わりになってやっても構わないって言っているの。アラスカ、ジブラルタル、そしてオセアニア軍事国。生身の兵力だけでオブジェクトを吹き飛ばしたその手腕、間近で見させてもらうから」

9

「クウェンサー。サバイバルキットは持ってる？」

フローレイティアが言っているのは、応急手当てに使うための薬や、野外で食糧を手に入れたり調理したりするための道具などをまとめた小さなセットの事だ。

クウェンサーは軍服のポケットを漁りながら、

「腹ごしらえに、魚釣りでもするって言うんですか？」

「サバイバルキットのアイテムは、食糧を得る他にも別の用途で使えるように設計されてるのよ」

部下から小さな箱を受け取ったフローレイティアは、中身を確かめながら、

「つまり、殺しの道具」

……言われてみれば、アラスカの時は、お姫様が調理用の鉄串を使って敵兵の脇腹を突き刺していたような気がする。

「鉄串は刺突と投擲、釣り糸は絞殺にもワイヤートラップにも使えるの。錘と組み合わせれば打撃もできるけど」

「ミニサイズの釣竿は？」

「カーボンファイバー製の鞭。接近戦ならナイフより便利よ。気管も動脈も一撃必殺」

言うだけ言うと、フローレイティアは使えそうな『武器』で身を固め、クウェンサーには応急手当て用の薬だけを投げ返す。

「……ま、指揮官がこんなものを頼るようになった時点で、部隊はほとんど終わっているけどさ」

彼女はそのままレールガンによって吹き飛ばされたベースゾーンの跡地へと、一度だけ引き返して行った。アシとなる軍用車両がないか探してくるためだ。

クウェンサーは足の調子を確かめたが、やはり、ゆっくりと歩くのが精一杯のようだ。だか

らと言って泣き言を言っている暇はない。このままではマスドライバー財閥のオブジェクトがやってきて全てを吹き飛ばしてしまうし、それを止めるためにバイラニー達の最前尖候小隊がダムを爆破してしまう。

どちらも止めなくてはならない。

そう考えながら、クウェンサーは辺りを見回した。捻挫した足は固定した方が楽かもしれないので、枝みたいなものがないかと思ったのだ。しかし、そこで予想外の物を見つけた。一丁の銃だ。『正統王国』軍のPDWだった。

（……レールガンの爆発で、向こうの基地にあるものがここまで飛んできたのか？　ほとんど火山の噴火だな）

そのPDWはサブマシンガンをさらに短くしたようなもので、サイズは二～三〇センチぐらいしかない。逆に両手で持つのが難しそうなぐらい小さな銃だが、グリップの下部には複雑に折り畳まれたストックがある事から、やはりクウェンサーの腕力や握力では片手で撃つのは難しいだろう。

右手でも左手でも扱えるように、薬莢はグリップを通って下から落ちる仕組みになっているらしい

マガジンは銃身に対して平行に差してあり、意外にも装弾数は七〇発近くもあった　銃全体よりも、マガジンの方が若干長いぐらいだ　どうやら、元々は前線に立つ事のない整備兵など

が基地に入り込んだスパイと遭遇した時のために、大量の弾を発射して敵の足止めができるように用意されていた物のようだ。

フローレイティアは訓練課程を終えていない者に火器は渡せないと言いそうだが、この緊急時には、少しでも多くの武器があった方が良い。そう思って、クウェンサーはPDWを軍服の中へと隠した。こんなものでオブジェクトが倒せるはずもないが、一緒に歩兵が行動している可能性もある。

その時、フローレイティアが軍用のオフロードカーを回してきた。ボディはボコボコで、かろうじて動くような状態だ。

「すみません、色々迷惑掛けて」

「まったくよ。後で死ぬほど肩揉みでもしてもらおうかな」

助手席に乗り込んだクウェンサーにそう言ったフローレイティアは、しかしどこか楽しげではあった。もしかすると何かが吹っ切れたのかもしれない。

イグアス方面は、海岸から内陸に向けて上り坂が続いていた　まるで大陸そのものが傾いているかのように、いつまでも坂だけがある。

「……何だか、少し涼しくなってきましたね」

「高度の問題でしょ。内陸部は九〇〇メートル超すらしいし。この辺はまだ低い方だけど、イヴィアのいるダムの方はもっと気温が低いはずよ」

「南極といいイグアスの海岸といい山岳地帯といい……地球の気温ってホントにバラバラなんですね。温暖化って、実はどこかでプラマイゼロになってるんじゃ？」

クウェンサーがくだらない事を言っていると、無線機から通信が入った。

『こちらシャルルマーニュから捜索活動中のフローレイティアへ。もはや戦う気はないかと思われるが、マスドライバー財閥の主砲について、分析の結果いくつか判明した事があるので伝えておく』

「……ちなみに、あの建前ってどれぐらいの人まで見抜いているものなんです？」

「そんなの全員に決まっているでしょ。そうでもなけりゃ、彼らがこの状況で艦を捨てずに留まっているはずがない。『正統王国』軍の兵士はそんなに馬鹿じゃないの」

そーですか、とクウェンサーは棒読みで相槌を打った。

道理で強襲揚陸空母のブリッジも嬉しそうな訳だ。

「フローレイティアからシャルルマーニュへ。敵の主砲がレールガンで大規模な曲射弾道の攻撃を行っている事、チャフミサイルを使用した雲を利用してロック用の電波を上空から反射させて、山岳地帯でも精密にこちらを狙ってくる事はおおよそ掴めている。それ以外に主砲に関する情報があれば、提示していただけるとありがたい」

『敵の主砲は、正確にはレールガンとロケットの混合技術らしい。まず初めに巨大な砲弾をレールガンで発射し、直後にその砲弾を二分割する。中心にあるロケットへ、全ての運動エネル

ギーを集中させて、さらに加速させるためだな』

「……戦車の砲弾と似たようなものね。おそらく、本命の砲弾は相当小さな物になるはずよ」

『着弾の直前にタングステンか何かの子弾を一〇発ほど、円形に射出する機能があるらしい。おそらくイージス艦時代の迎撃ミサイルの応用だろう。照準に誤差があった場合でも標的を破壊できるようにしているようだが、あまり効果的ではなさそうだ。きちんと展開されている例は稀だな』

「それでも、子弾が一発でも当たれば……いや、衝撃波の爆風の範囲内にいれば即死は確定、ですか」

「細菌兵器のコンテナになってないだけマシよ」

『それから、砲弾は曲射弾道だが、その軌道は少々特殊なものだった。ボールの遠投とは違って、標的のほぼ真上……二五〇〇メートル前後まで上昇した後、一気に急降下するような弧を描いている』

「尾翼か何かで、弾道を強引に曲げている……？　ただの曲射弾道じゃない、急降下弾道ってところですか」

「山岳地帯で障害物を避けて確実に当てるための努力かもしれない。ただ、急カーブは強い慣性の力を発生させるはずよ。砲弾が空中分解するリスクを負ってまで、急降下弾道を実現させたかったのかしら」

『発射時の映像を分析したが、尾翼のような物は確認できなかった　細かい軌道調整については、おそらく砲弾側面に可変式の溝があるか、特殊な火薬で砲弾側面へ意図的に傷をつけて摩擦を変化させる仕組みでもあるんだろうが、こればかりは砲弾のサンプルを入手しなければ解析できない。……解析できるレベルの砲弾が残されていればの話ではあるが』

シャルルマーニュのブリッジは話を続ける。

『砲弾は分割して運動エネルギーを集中させた後、さらに後部のロケットエンジンを点火する事で、最終的にマッハ二五の驚異的な速度を叩き出す。これは大型航空機で加速した状態から空中で切り離して凄まじい瞬間最高速度を記録した、世界最速の試作航空機に通じるものを感じる』

「冷却システムについては？　おそらく、空気摩擦の熱の問題を対処する仕組みがあるはずだ」

クウェンサーが質問すると、シャルルマーニュの管制はこんな事を言った。

『液体窒素を利用した冷却システムを完備しているらしい。実質、この効果時間が射程距離と直結しているようだな　先ほど、貴君らの基地を襲った時に「不発」で空中爆発したのは、冷却システムの誤作動で砲弾が溶けたのが原因らしい』

「じゃあ発射時の飛行機雲みたいなのって、ひょっとして窒素の蒸気だったのかも……？」

『もしかするとこの辺りに活路があるかもしれないが、仮に冷却システムの誤作動を誘発できたとしても、あれだけの爆発が起こるんだ　オブジェクトには遭遇しない、発見されないというのが、やはり一番の方策らしいな』

「なるほど。参考にさせてもらおう」
フローレイティアは礼を言ってから通信を切る。
改めてハンドルを両手で握り直し、前を見ながら彼女はこう言った。
「マスドライバー、ロケット、イージス艦のICBM迎撃用ミサイルの子弾技術。……まさに、宇宙開発専門の財閥らしい怪物兵器って訳ね。私も長い事部隊を指揮してオブジェクトと戦ってきたけど、あんな攻め方をされたのはこれが初めてよ」
「チャフミサイルの雲を利用してロック用の電波を反射させる照準方式も含めて、まともなレイアウトじゃないですよ。考えたヤツの頭のねじれ方は常軌を逸している」
「設計士の卵としては嫉妬するところ？」
「純粋に命の危機に怯えるところです。主砲が試作レベルでなければ完璧にやられていました」
「過去形にするにはまだ早い　接近されて直線的にブチ込まれてもお姫様はやられる。中破した状況じゃ高速移動で回避するのも難しいでしょうし」
お姫様は相変わらず絶体絶命。
それは部隊全体の生死に直結している。
思わず黙り込むクウェンサーに、アクセルを踏み込みながらフローレイティアは話しかける。
「……オブジェクトが正式に確認されたとなると、暫定的な敵性コードネームも決めなきゃね。『資本企業』側が公式の情報を提供してくれれば手間は省けるんだが、応じるはずもないか」

ブレイクキャリアー辺りにしようかな、などとフローレイティアは呟く。
破壊を運ぶ者。
巨大な球体状の本体と、その二倍以上の長さの大出力レールガンを装備した敵にはぴったりの、あまりにも嫌な名前だった。こういうところで皮肉っぽいセンスを発揮してほしくないものである。
「ところで、具体的な作戦はあるの？」
「お姫様の力を借ります。それが一番手っ取り早い」
「いきなり他力本願なの」
「バイラニーノはイカれていますが、着眼点は優れていました。向こうからは気づかれない位置に隠れて、一撃でマスドライバー財閥のオブジェクトを破壊する。それ自体は間違っていないはずなんです」
クウェンサーは痛む足を少し気にしながら答えた。
「そのために、まず敵のオブジェクトがどのルートを通ってやってくるかを知る必要があります。チャフミサイルの影響で、衛星からの監視網は使えませんから。居場所を伝えて的確に砲撃してもらう。この態勢を整えましょう」
言いながら、彼は携帯端末を取り出した。GPSモードの地図は、相変わらず雲に覆われていて詳細は摑めない。モードを切り替え、あらかじめデータの入っているオフライン地図を

【ブレイクキャリアー】
BREAK CARRIER

全長…150メートル（主砲含む）

最高速度…時速410キロ

装甲…5センチ×200層（溶接など不純物含む）

用途…大規模砲撃用兵器

分類…戦闘特化型第二世代

運用者…マスドライバー財閥

仕様…静電気式推進システム

主砲…高出力レールガン×1

副砲…レールガンなど

コードネーム…ブレイクキャリアー
（マスドライバー技術を応用した、主砲の絶大な破壊力から）

メインカラーリング…グレー

BREAK CARRIER

呼び出す。こちらの表示は鮮明だが、紙の地図と変わらないので、リアルタイムでどこに何があるか、そういった情報は一切ない。

「敵が素直に山脈の谷間を通ってくるなら、せいぜい二ルートぐらいです」

「全部を見回る必要はないね」

フローレイティアはさっさと言う

「大体の方角は音で分かるのよ。オブジェクトの駆動音を隠す事はできないしね。真ん中のルートで張りましょう。駆動音が前から聞こえてきたら真ん中、左右から聞こえてきた場合はそっちの方からやってきている事が摑めるし」

オフロードカーを道から外れた茂みに停め、倒木や枯れ草などで覆って隠す。カムフラージュを施した車から離れ、クウェンサー達は山の斜面に向かった。オブジェクトのセンサーやレーダーを考えると、金属の塊であるオフロードカーの側にはいない方がいくらか安全だ。どうせ、砲撃されれば一撃で粉砕されるのだから、装甲だの防御力だのは気にしないで良い。

山の高さは五〇〇メートル以上あったが、当然、山頂まで登る必要はない。オブジェクトの『音』を聞き漏らさず、なおかつ間近を通っても気付かれない位置に伏せていれば良いので、数十メートルぐらいの所に留まった。

足元の黒土は湿っていて、蒸し暑い空気を吐き出しているかのようだった

斜面には緑も多いが、どこか人工的な匂いがした。元からある大自然ではなく、人工的な植

林活動の成果だからだろう。背の低い木々はコーヒーや果樹などが多く、共通するのは『人の役に立ちそうなものばかり植わっている』という事だった。

（鉱山としてさんざん山を削り続けて、後から人の手で木々を植え直したのか……？）

そんな緑の中に身を沈めながら、クウェンサーとフローレイティアは肩を並べて座り込んだ。

クウェンサーは両手の指で携帯端末を操作していた。

フローレイティアは横からそれを覗き込みながら、

「何してる？」

「いや、ブックマークつけてます。この辺りの山って、鉱山とか交通用とか、かなり多くのトンネルが入り組んでいるみたいですから。いざって時に一発で地図や図面を呼び出せるようにしておけば、何かの役に立つかなって」

「ほどほどにしておけよ。その電波をブレイクキャリアー側に掴まれたら元も子もないからね」

言われて、クウェンサーは慌てて携帯端末のネットを切断する事にした。とりあえず軍のデータベース上のブックマークを、同じ大隊の全員で参照できるようにしてからスイッチを切る。

そんなクウェンサーの狼狽する様子をフローレイティアは退屈そうに眺めつつ、水筒の水をわずかに口へ含む。

待ち伏せは完了した。

わずかな風に揺られて、周囲にある背の低い木々がガサガサと音を立てた。得体の知れない

鳥の鳴き声が反響している　全体的には緑よりも黒土の多い斜面だが、所々にコンクリートがあった　トンネルの入口だ　この辺りには大量の鉄鉱石が埋蔵されているらしいが、地図によると、この山はさらに地熱発電所を建築する予定のようだった　しかし人が働いているような音は聞こえなかった　資金難か何かで作業を中断したのかもしれない

後は相手の出方を待つだけだが、やってくるのは核ミサイルの時代を終わらせた、あの怪物兵器だ　一秒一秒経過するごとに増す重圧は半端ではない　これなら雄叫びを上げて走り回った方が気が楽なのではと思うほどだ

「流石に緊張するね　喉が渇くのもそのためかな？　クウェンサー、何でも良いから気を紛らわせるような話をしろ」

「隠し芸を強要する会社の上司みたいな事を言わないでくださいよ」

「学生が知ったような口を利くんじゃない　つまらない男ね」

フローレイティアはため息をついた

クウェンサーは味のないレーションをかじりながら、

「そういえば、フローレイティアさんが『貴族』だっていう話を聞いたんですけど」

「んー」

質問され、わずかに彼女は言い淀むような素振りを見せた

聞いてはいけない事だったのか、と不安になったクウェンサーだったが、そこでフローレイ

ティアはあっさりと頷いた。

「カピストラーノ家には、とても魅力的な『特徴』がある……という話は割と有名なんだけどね。これは『貴族』向けの話題だったかな。まあ、あまり『平民』に益のある『特徴』とも思えないし」

「『特徴』……？」

「ウチは男系なの。誰と結婚してどんな風に子供を作ろうとも、生まれてくる子はほぼ一〇〇%男になる。『平民』にはあんまり関係ないけど、『貴族』社会にとっては結構重要な事なのよ。相続権とか、そういう問題でね」

王と貴族の社会が男尊女卑に偏りがちなのは、良く知られる事だ　より厳密には、その国家を治める元首の性別が男か女かによって、時代時代でも大きく変わるらしいのだが、基本的には男の王の方が多い傾向にあるのは事実だった

フローレイティアは、実地と遠隔を合わせて複数の部隊を指揮している　が、それは本来少佐より上の権限を持つ者の仕事だ　実質的にはどうであれ、公式上では彼女にこれ以上高い地位を与えたくないと考える者達がいるのかもしれない。『女性に守ってもらう事』を美徳とは判断しない者達が。

「『平民』のクウェンサーには、あんまり縁のない話だった？」

「ええと、まあ、こっちの身分は基本的に男女平等ですからね。家柄とか血筋とかの話も、あ

んまりピンとこない事だったりはします。別に好きな人同士で結婚すりゃ良いじゃん、って感じで。……まぁ、見ての通りのガキなんで、結婚って言葉にも実感はありませんけど」

「なるほど。それは羨ましい限りね」

フローレイティアは適当な調子で受け流した。

「ともあれ、ウチの家系にはそういう特徴があるの。誰と結婚してどう子供を作ろうが、ほとんど絶対的に男子が生まれてくるっていう、ね」

「？？？　でも、ほぼ一〇〇％確実に男子が生まれる家系って言われても、フローレイティアさんって、もろに女性ですよね？」

「だから、そこが旨味なの」

フローレイティアはよく分からない事を言った。

それがそのまま表情に出たのか、彼女はくすくすと笑った

「ほぼ一〇〇％確実に男子を産む『貴族』の女よ　男子の後継者を残したいけど上手くいかない殿方にとっては、喉から手が出るほど欲しい人材よね。何しろ、後継者を作れなければ家は断絶し、財産は没収されるんだから。『子作りの交渉』に関して、カピストラーノ家は普段は手の届かない超有力『貴族』の家とも有利に話を進めていく事ができる　向こうは何としても私の子宮を借りたい訳だしね」

「それは……政略結婚とか、そういう話ですか？」

西欧の島国では、王妃と別れて侍女と結婚するために世界的宗教から国を切り離したほどの王様もいたようだが、そういう例はやはり稀だろう。『正統王国』では一般的に、『貴族』は結婚の際には自分と同等かそれ以上の血統の相手を好むものだ。

「下僕上は結婚していても、実質的には『相続問題を安全にクリアするための道具』だろうね。『貴族』のプライドの問題があって、同じ階級の娘の子宮っていうのが必須事項であるらしい」

自分達の上官は、比較的怒りっぽい性格なのだとクウェンサーは思っていたにも拘らず、今のフローレイティアはうっすらと笑っている

この問題については違うのか。

彼女の中の激しい炎が鎮火するまでに、一体どれほどの事があったのか。

カピストラーノ家は、本来ならその炎が絶えないように守るべき存在ではなかったのか。

「これでもマシな方よ『貴族』の後継者を産むためには、両親ともに正統な血筋や経歴があるのが望ましいからね　もしもそういった条件がなかったら、政略結婚じゃ済まずに『男子の後継者を望む殿方ととっかえひっかえ』になっていたかもしれない　何しろ、ほぼ一〇〇%成功する私が欲しいっていう注文は山ほど来ているんだしね」

フローレイティアは、先ほどカピストラーノ家は男ばかりが生まれると言っていた　その中でイレギュラーな女子として生まれたのが彼女なのだと。

となると、カピストラーノ家自体の後継者は、すでに他の兄弟が確定させているのだろう

『できるだけ有利な条件を吟味している』辺りからも、余裕のようなものが感じられる。彼女の政略結婚は、家のために絶対にやらなければならないものではない。自分の家の相続問題はさっさと片付けた上で、その片手間で勢力を伸ばすため……ぐらいの意味しかない。

絶対に必要な事であれば、悲劇であっても諦めるための言い訳ぐらいにはなったかもしれない。しかしフローレイティアの話には、そんな慰めすらも存在しない。

王と騎士の勢力である『正統王国』の中でも、ここまでの話はあまり聞かない。

カピストラーノ家は、女性に対してはとことん冷たいようだ。

極端な男系の家だから、なのだろうか。

あるいは、一族の中から女性が生まれないからこそ、常に男性が優遇される世界を構築しないと窮地に立たされると、勝手に怯えているのだろうか。

「まあ、そういう訳だったんだけど、いつの間にかウワサに変な尾ヒレがついてね。『カピストラーノ家の娘は、どんな不能者とでも絶対確実に男子を作れる』とか『あそこの家の娘は、あの有力「貴族」が喉から手が出るほど欲しがるぐらい気持ちが良いらしい』とか、色々言われちゃってさ。後継者問題に悩む身勝手な連中の他に、何だかドギツイ好事家にまで目をつけられるようになった訳よ。今では機能を失って久しいご老人からどこぞの変態スケベ親父まで、私を押し倒す権利を巡ってオークションしまくっている始末なの」

言葉が出ない、どころではなかった。

『貴族』には『貴族』の悩みや問題もあるんだろうなと気楽に考えてきたクウェンサーだったが、この話題はあまりにも重たすぎる。

「私が『安全国』より戦場にいる事を望んでいるのも、そういう理由よ。軍役を退いても、待っているのは『第一候補』と大きなベッド。相手は顔も見た事もないどっかのおっさんかな、……そういえば、ブライトホッパーを操っていたハルリード＝コパカバーナって男がいたでしょ」

「ええ……」

「あれは第三候補ぐらいね。金や条件の積み方によっては第一候補になるかもしれないけど、正式な候補者は大体一〇人ぐらいだけど、その中では優しい方だと評価されているよ。何しろ、候補者によっては『一人目の相続者』さえ生まれれば良いんだから、その後は複数人と同時に相手させて誰の子ができるか、そういうロシアンルーレットで遊びたいなんて言ってるヤツまでいる始末だし」

顔をしかめるには十分な話だった。

対比として出てくる例が極端すぎる　逆に言えば、それぐらいの例を出さなければ、ハルリードの提示する結婚像も『優しい方』には見えないのかもしれない

クウェンサーのような『平民』が思い描いているごく普通の家庭と比べて、彼らの見ているビジョンはどれぐらいズレているのだろう？

「あいつのオブジェクトが大破された時、私は正直ホッとしたよ　こんな私は人間として間違っているのかな。どうせ、一人二人脱落したところで、候補なんて行列待ち状態なのにね」

目の前にいるのは、一八歳の少女だ。

それもクウエンサーやヘイヴィアのように、つい最近戦場へやってきた訳ではない　一体いつから戦場にいるんだこいつ、と思った事だってある。

しかし、本当にいつからいるんだろう。

一体どれぐらい昔から、自分の体を巡ってオークションのような事をされるのに怯えて、戦場へ隠れ続けているのだろう。

恋愛どころか、性欲ですらない　単なる『男子を確実に産む素材』として、いつ作業のようにベッドへ連れて行かれるか分からない状況は、一体どれだけこの人を苦しめ続けたのだろうか。

「ま、そう身構えないで」

フローレイティアは、あっけらかんとした調子で言った。

「別に救いがないって訳じゃないの。そんなヘビーな状況なら、私だってこんなあっさりと話したりはしないよ。ようは、ババアになって女としての価値がなくなるまで、この戦場で戦い続けていれば良いってだけ　……ま、それでも家を残したいってだけの連中はしわくちゃの体に絡んでくるかもしれないけど　もしかしたら、戦場に生きて戦場で死ぬのが私の人生として、

一番自由なパターンなのかもしれないね」

どう言って良いか分からなかった。

安易な言葉をかける事が、許される状況ではないのは何となく肌で感じられた。

子供の意見だとフローレイティアは笑って聞き流すだろうが、クウェンサーの方がそんな傷つけ方を許さないという意味で、だ

なのでクウェンサーは慰めではなく、素直な本音を口にした

「(……それはそれとして、フローレイティアさんは良い匂いがするよなぁ)」

「今の話を聞いてその言葉が出ちゃうお前は、実はとんでもない天才なんじゃないかと本気で思うよ」

呆れたように言うフローレイティアの眉が、微かに動いた

「待て。静かに」

クウェンサーも耳を傾ける

聞こえる。

どこか遠くから、低く唸るような音が。雷雲が近づいてくるような音にも似ていた。オブジェクトの推進機関の一種で、静電気を使って二〇万トン級の巨体を浮かばせるものを採用していると、こういう音を辺りへ響かせるのだ。どうやらお姫様と同じ方式らしいそう。

マスドライバー財閥のオブジェクトがやってきたのだ。
「どこから？」
「分かりません。山彦みたいに反響している……」
より意識を集中させ、クウェンサー達は音源を特定しようとする。三つあるルートの内、読みを間違えればベイビーマグナムは逆に窮地に立たされる。何しろ、あれだけの威力があるなら、相手のレールガンは山を丸ごと貫いてオブジェクトを破壊できるだろうから。
これは。
この方角は……

10

ヘイヴィアはイグアス・ダムへとやってきた。
上陸した海岸線よりも、こちらの方が緑が深い印象があった。植林よりも、天然の植物が多いのだろう。南国特有の、葉が大きくてやたらと硬い植物が生い茂っていた　ものすごく巨大なカブトムシがわんさかいそうな雰囲気である。
とはいえ、『貴族』の跡取り息子は虫採りに来た訳ではない。
彼はダムの方を見る。

高さだけで四〇メートル、貯水湖側へわずかに突き出すように湾曲した横幅は大体三～四〇〇メートル程度といったところか　最大貯水量は八億トン以上あるらしい。自然の理を無視して堰き止められた大量の水は、ひとたび暴れ出せば自然界ではありえないほどの大災害を巻き起こすだろう

（クソッたれ　すでにオフロードカーが何台か停まってやがる!!）

周囲を目ざとくチェックしながら、ヘイヴィアは身を低くして走る

ベイビーマグナムとお姫様はここにはいなかった。クウェンサー達のサポートに回るように頼んであるからだ。理由は二つ。一つ目は、ダムの爆破を止めるためだというのに、オブジェクトが突っ込んだら逆に破壊しかねない事。そして二つ目は、クウェンサーはフローレイティアとよろしくやるってよ、と冗談で言ったらお姫様がものすごく不機嫌になってしまったからだ。

（……やだやだ　集中力の切れたエリートの操るオブジェクトと共闘するなんて、命がいくつあっても足りねえぜ　そんなら一人でやった方が一〇〇倍マシだ）

ライフルを構え、上半身を揺らさないように走り、ヘイヴィアはダムの入口のドアの横へ張り付いた。一口にダムと言っても、水門の開閉をする施設、水質のチェックをする施設、水力発電のタービンに関する施設など、いくつもの部門に分かれている。ヘイヴィアが近づいたのは、水門に関する施設だ。

扉に鍵は掛かっていなかった。
逆に不安を感じさせるが、ヘイヴィアはゆっくりとドアを開け、注意深く侵入する。早速、入口近くにロープで拘束された作業員を二人見つけた。殺していないのは、それが目的ではないという意思表示か。どのみち、ダムが爆破されて膨大な水が全てを洗い流せば、彼らも巻き込まれて死ぬというのに。
このダムを爆破しようとしている勢力がいる事、それを早急に止めなくてはならない事、そのためにはパニックに付き合ってられない事などを、ヘイヴィアは簡潔に伝えてから、軍用ナイフでロープを断ち切る。避難先には山岳地帯を指示する。念には念を入れて、最低でも標高一〇〇メートル以上には上がってもらった方が良い。
（……勝手なもんだ。敵も味方も『正統王国』だってのによ）
思わず吐き捨てそうになってから、ヘイヴィアは階段を使ってダムの上層へ向かう。途中、コーヒー農園の老夫婦からもらったお土産のクッキーを軽くかじりながら、こうも思う。
（同じ『正統王国』同士で撃ち合うのも馬鹿らしいが、お土産の借りぐらいは返させてもらわねえとな）
足を動かしながら、無線機でクウェンサーに連絡をする。
「よおクウェンサー。お姫様はそっちに送ったぜ。両手に花のウハウハ状態にしてやったんだからよ、ちょっと俺の話を聞いてくれねえか」

『電波の発信場所からオブジェクトに居場所を探られるかもしれない。手短に頼むぞ』

爆弾についてはあまり詳しくないのだ。クウェンサーからアドバイスを受けた方が良い。

「確か、映画とかだと、ダムって一ヶ所に小さな穴を空けると、後は水の圧力で一気に崩壊するとかっていう話があるけどよ。実際のところってどうなんだ。あの粘土みてえな爆弾一つで吹っ飛んじまうもんなのか？」

『……確かに、穴が空けば水圧で崩壊する事もありえるけど、あれだけの水量を押さえつける分厚い壁に亀裂を入れるなんて、よっぽどの事だぞ。それよりも効率の良い方法がある』

「？」

『ダムだって老朽化が進んで補修も追い着かなくなれば廃棄される。初めから、取り壊す事を前提に組み上げられているんだよ。いくつものバイパスを作って、複数の小さなダムで水を押さえ込んだ上で、空っぽになったダムにあらかじめ用意されている、いくつかのチェックポイントを吹き飛ばして爆破解体するんだ』

何十年か前にダムの老朽化問題が一斉に持ち上がって、こういう仕組みがつけられるようになった訳だ、とクウェンサーは付け加える。

ヘイヴィアは眉をひそめ、

「チェックポイントの数と位置は？」

『ダムの設計によってまちまち。コントロールルームかどこかに資料が……ないか、下手に閲

覧できる状態だとテロとかに繋がりかねないし、建築業者のオフラインデータベースの奥深くまで探らないと見つからないかも　当然、分かりやすい目印なんかもないだろうな」

「使えねえなクソッ!!　防衛対象がどこに何ヶ所あるかも分からねえんじゃ守りようがねえじゃねえか!!」

『二〇ヶ所あろうが三〇ヶ所あろうが、チェックポイントは全て爆破しないとダムの解体には繋がらないと思う。多分、安全対策や改修工事のために、本来ならチェックポイント一つでも支えられる範囲に複数のポイントを用意して、どれが折れてもダムが崩れないようにはしているはずだろうから。つまり、爆弾を一つでも見つけたらコードを切って使い物にならなくさせれば良い。後はそのポイントを死守すれば、バイラニーロサローノ達の作戦はそこで止まってしまうんじゃないか』

「……その爆弾ってのは、映画に出てくるみてえに複雑な自信作じゃねえだろうな……」

ヘイヴィアは舌打ちして、

「結局闇雲に探すのかよ　爆弾を見つける前に吹き飛ばされたらどうしようもねえな　せめて、いくつ仕掛けるか正確な個数が分かれば良いんだが」

『ジャミングを仕掛けたらどうだ?』

「妨害電波?　どういう事だよ」

『ダム爆破と同時に膨大な水が暴れ回るんだろ　バイラニー達は別にそこで名誉の死を選ぼう

としている訳じゃない。必ず爆破前にダムを離れて、安全な高台へ向かうはずだ。だとすれば、無線起爆方式を使うんじゃないか？』

「なるほど」

ヘイヴィアは力強く笑った。

「それなら、個数が分からなくても時間稼ぎができそうだ」

貯水湖に沿って緩く弧を描くダムの最上部は、まるで巨大な城の城壁のようだった。手すりに手をつき、ゆっくりと下方へ身を乗り出すと、分厚い壁の真ん中辺りに、粘土のような物が取り付けてあるのが分かる。

爆弾だ。

破壊力を調整するためか、ある種の規則性に従って複数の爆弾が設置されていた。爆弾の一方には金属板のようなものが差し込んであり、爆風がダム側へ集中するようになっているようだ。

見た目には他の壁と区別はつかないが、わざわざプラスチック爆弾を仕掛けたという事は、そこが例のチェックポイントの一つなのだろう。

バイラニー達は、どうやってチェックポイントの詳細を知ったのだろうか。

やはりダムのどこかにデータがあったのか。それとも責任者か誰かに『しゃべらせた』のか。

（……どうやって取り付けたんだ、くそ!!　アクション映画みてえにロープ結んでここから飛

んだのか!?)

ともあれ、ここでジャミングを仕掛ければ、あの爆弾に起爆命令が送られる事はなくなるひとまず爆破される危険を潰してから、バイラニー達の部隊と対峙するべきなのだが……、

「ちょっと待て」

思わず、ヘイヴィアは一人で呟いた。

ダムの壁面に取り付けられた爆弾から、細いコードのような物が延びていた　一メートル二メートルなどという単位ではない　長大なコードはダムの下の地面まで垂れていて、さらにそこから遠くの森の茂みまで延びている。

「くそっ!!　有線起爆方式じゃねえか!!　これじゃジャミングなんか意味ねえぞ!!」

ヘイヴィアは慌ててライフルを構えようとして、そこで動きを止めた。有線式のコードには二種類ある。一つ目は電気信管に電気を送る、普通の送電ケーブル。二つ目は導火線のように火を点けて信管を小爆発させ、プラスチック爆弾を反応させるタイプだ

送電ケーブルなら問題ないが、導火線タイプだった場合、銃弾でケーブルを切っても、そこから着火してしまう危険がある。

かといって、すでにコードが接続されている以上、いつでも爆破できる状態だ。このままんびり考え込んでいる時間はない。

そこで、無線機からクウェンサーの言葉が飛んできた

『撃て!!　大丈夫だ、そいつは電気信管用の送電ケーブルだ!!』

「何で分かんだよ　見た目で区別できるモンじゃねえぞ!?」

『導火線式のは、線の長さが時間爆弾のタイマーみたいに作用する。ダイナマイトと同じだよ今回の作戦は、ダム爆破による大水害と、ベイビーマグナムの砲撃のタイミングが命だろ？状況に合わせて、いつでもタイミングを合わせて瞬時に爆発させる必要がある。そんな状況で、一度火を点けてしまったら二度と変更のきかない導火線式を使う訳がない！　だからそいつは電気信管用の送電ケーブルなんだ!!』

「っ!!」

ヘイヴィアは改めてライフルを構え、真下に向けて引き金を引いた

複数の弾丸が飛び、その内の一発が束ねてまとめられていた送電ケーブルをまとめて切断する　爆発は起こらなかった　クウェンサーの言った通りだったのだ

ケーブルが切断された以上、その爆弾に命令を送る事はできない

しかし、それを良しとしない者がいた。

他のチェックポイントへ爆弾を設置するため、再びダムの最上部へやってきた『正統王国』軍の女兵士だ

（……ッ、例の最前斥候小隊のサローノか!?）

「!!」

「!?」

その時、ヘイヴィアとバイラニーサローノは緩く湾曲したダムの両端の出入り口近辺にいた。二人はほぼ同時にドアへ飛び込み、ライフルの銃口だけを外へ出す

タタタン!!　パパン!!　と複数の銃声が連続した

（……クソッたれ、結構美人じゃねえか!!　良い女が俺に銃口を向けるんじゃねえ！　どうせなら月も当てられねえようなブスだったら良かったのに!!）

本当にブスだったら『男だったら良かったのに』『火星人だったら良かったのに』とさらにグレードを落としていたであろうヘイヴィアのぼやき　そうこうしている間にも無線機から複数の声が響く　同じ『正統王国』所属のせいか、バイラニー達の通信がこちらにも届いているのだ。

『サローノ伍長　これからそちらへ増援を送る　ロケット砲による支援も必要か』

『とにかく電気が流れれば起爆はできる　ヘイヴィア＝ウィンチェル上等兵を始末したら、千切れたケーブルを繋ぎ直せば良い』

『別方向からも回り込め。別班を組んで階段を上らせろ　挟撃して追い詰めるぞ』

『我々の作戦行動を阻害するヘイヴィア＝ウィンチェル上等兵については、必要であれば反逆罪として処分する　だから射殺しても構わん　とにかく作戦の遂行が最優先だ』

「ちくしょう!!　どいつもこいつも面倒臭せえな!!」

ヘイヴィアはわずかにドアから身を乗り出し、ダムの下の地面からロケット砲でこちらを狙う兵士へ銃口を向ける　ライフル弾は兵士のすぐ近くの地面に着弾した。頭や胸を撃ち抜かなかったのは、同じ『正統王国』という言葉が想像以上にヘイヴィアの心に打撃を与えたからか　驚いた兵士の狙いがブレ、ロケット砲はあらぬ方向へと飛んでいく。

それを見たバイラニー達から、さらに勢いを増した弾幕が飛んでくる　ヘイヴィアは慌てて建物の中へ身を隠したが、その時、階段の下の方からも足音が聞こえてきた。

（同じ訓練を積んだ者同士。やっぱ数の差で勝負が決まっちまうのか……ッ!?）

そうこうしている内に、バイラニーらしき女兵士の声が張り上げられる。

「ヘイヴィア＝ウィンチェル上等兵!!　武器を置いて投降しなさい!!　我々とて同じ『正統王国』軍同士で殺し合う事を良しとはしません!!」

「（……嘘つけ!!　明らかに殺す気まんまんだったろうが!!　もしかして通信の内容が聞こえている事に気づいてねえのか!?　ちくしょう、ドジっ子でツンデレかよ、ますます殺したくなくなるじゃねえか!!）」

「どうしました!!　返答がなければ、その沈黙を回答と捉えてもよろしいのですよ!!」

バイラニーの声に合わせる形で、一時的に銃撃が止む。それは最後の意思表示の機会を与えているつもりか。返答次第によっては、いつでも蜂の巣にできると言われているような気がしてならない。

いずれは追い詰められる。
多方面から同時に攻め込まれれば対処できなくなるし、ロケット砲やグレネードなど、爆発する武器を多用されれば為す術もない。
ヘイヴィアはその事を真剣に考えた。
（……勝機があるとすれば、そいつは一つしかねえ）
「バイラニー＝サローノ伍長!!」
彼は叫び返す。
「ベイビーマグナムは、すでに第三七機動整備大隊で修学中のクウェンサー派遣留学生の下へ回している！　テメエらが提案した高山植物用量産プラントの跡地へは向かわねえ!!　ここでダムを破壊しても何の効果もねえ事を伝えておく!!」
「貴方の回答はそれで決定ですか!?　戦意の喪失が認められなければ、我々は貴方を射殺せざるを得ません!!」
「そうじゃねえ!!」
ヘイヴィアはさらに強い調子で叫んだ。
「テメエらの目的はベイビーマグナムの主砲を利用して、マスドライバー財閥のオブジェクトを破壊する事だったな!!　なら、こうも解釈できる訳だ　テメエらがダムを爆破する前に、クウェンサー達がオブジェクトを破壊しちまったら、大水害を起こす大義名分は本当になくなっ

ちまうってな!!」

「それは……ッ!?」

わずかに言い淀み、しかしバイラニーはすぐさま次の言葉を放つ。

「貴方は、本当に信じられるんですか!? 相手は五〇〇キロの距離から、一撃で最先端のブライトホッパーを大破させた怪物兵器です!! それを、軍人でもない学生の力でどうにかできるとでも!?」

「……ああ。当たり前だろうが!!」

ヘイヴィアは迷わず答えた。

安全にリタイヤする選択肢を自ら切り捨て、さらなる死闘への引き金を引きながら

「だからそれまで時間は稼がせてもらうぜ!! 今から弾あ撃ちまくるが、間違ってあっさり死んだりするんじゃねえぞ!!」

11

クウェンサーとフローレイティアの二人は、山の斜面にある背の低い木の陰に身を潜めていた。

複数の音が聞こえる。

木々の葉がガサガサと擦れ合う音や、極彩色の巨大な鳥が大空へ羽ばたいていく音。
それらは、まるで無理矢理に押し出されるようだった。
そう。
遠くから聞こえてくる、オブジェクトの駆動音に。
クウェンサー達は山彦のように反響するその低い音響に、必死に耳を傾ける。
「右のルートか？」
「そういう風に聞こえますね」
あちこちに跳ね返って重なる駆動音は、方向性を探る事を困難にさせていた。ただ、注意深く聞いてみると、似たような音が順番に少しずつ重なっていくのが分かる。それが一番早く聞こえてくる場所が、マスドライバー財閥のオブジェクトがやってくるルートなのだ。
チャンスは一度しかない。
三つあるルートの内、相手がどこからやってくるかの判断を間違えれば奇襲は失敗し、ブレイクキャリアーの進軍を止められる者はいなくなる。
ベイビーマグナムもろともクウェンサー達の部隊は皆殺しにされるだろうし、バイラニー達はダムを爆破してしまい、下流の民間人にも大勢の犠牲者が出てしまう。
フローレイティアは無線機に手をやり、
「お姫様もこっちに回って来てくれるらしいね。三つのルートのどこで待ち伏せをするべきか、

判断を求めてきているよ。右のルートで伝えるから。良いね？」

「いや……」

そこまで聞いて、クウェンサーは何かに気づいたように立ち上がった。

彼は携帯端末を使って、オフライン地図を呼び出しながら、

「何か様子がおかしい。オブジェクトの駆動音に囲まれています。これは単純な山彦なんかじゃない」

「？」

「……ベイビーマグナムだ」

呆然と、クウェンサーは呟いた。

フローレイティアの方を改めて見据えて、

「ベイビーマグナムとマスドライバー財閥のオブジェクトは、同じ静電気で地面から浮かぶ方式を採用しています！　ベイビーマグナムが攻撃準備のために近づいてきた事で、二種類の駆動音が混ざり合ってしまったんだ!!　俺達が今まで聞いていた音は、マスドライバー財閥だけのものじゃない。二機の駆動音が混ざり合った音を聞いていただけだから、方角の算出のあてにはできないんです!!」

普通の部屋の中で、音源が二つあったとしても、人間はそれを両方とも聞き分ける事ができるだろう。

しかし山彦で何度も何度も反響し、様々な方向から跳ね返ってくる中で、ほとんど同じ種類の音が二方向から向かってきたのでは、正しい音源の位置など分かるはずもない。これでは何のヒントにもならない。

フローレイティアは焦ったように言った

「もう時間がない！　下手に近づかれてしまっては、奇襲のために『隠れる』時間を確保できないの　バレてしまってはマスドライバー財閥の大出力レールガンに山ごと撃ち抜かれるのがオチよ!!」

「でも、どこから来るのか見定められなければ本末転倒です」

クウェンサーは少し考え、それから顔を上げた

考えられるルートは三つ。そしてこっちにいるのは二人。

「二手に分かれましょう」

即座にクウェンサーは提案した。

「俺とフローレイティアさんがバラバラのルートで待ち伏せる　そのいずれかにマスドライバー財閥が通りかかればビンゴ。両方とも外れた場合は、最後のルートが正解です。いずれにしてもオブジェクトの通過ルートは算出できます」

言いながら、携帯端末のオフライン地図を操作する。彼らが現在いるのは真ん中のルートの側面にある山の斜面だ　この山は地熱発電所の建設予定地らしく、すでにいくつかのトンネル

が掘られている。ここから少し登った所にあるトンネルからでも、山の向こう側までトンネルは直結していた。そちらは左側のルートになる。

クウェンサーは少しだけ黙り、

「フローレイティアさんはトンネルに向かってください。すぐ近くに発電所の建設作業用のものがあります　資料では電動スライドリフトも設置されているようですから、山の反対側に着くまで数分かからないはずです」

「クウェンサーは……？」

「俺はここに残ります」

捻挫した足の事もあるし、左側のルートが今のところ、一番オブジェクトと遭遇する可能性が低そうだから、というのは内緒にしておいた。

しかし、フローレイティアは首を横に振った。

「駄目よ。許可はできない。その足でオブジェクトと遭遇して何ができるの？　たとえ見つからなかったとしても、あれだけ巨大なオブジェクトが通過した際の衝撃で土砂崩れが起きても不思議じゃないの。身動きが取れなければ、本来必要のない死に方をするかもしれない。それは容認できないのよ」

「はは、やっぱ駄目ですか」

クウェンサーは弱々しく笑うと、立っているのも辛そうな調子で、山の斜面に座り込んだ。

膨らんだ足首をさすりながら、フローレイティアに話しかける。
「すみません。実はもう足が限界でして。これは関節が動かないように固定してしまった方が痛まないかもしれません。ちょっと、そっちに落ちている太い枝を取ってくれませんか」
「まったく……」
フローレイティアは指差された方を振り返ったが、それらしい枝はどこにもなかった。
怪訝そうな顔で彼女はクウェンサーの方へ向き直り、
「おいクウェンサー。枝ってどこに――」
言いかけて、フローレイティアの口が止まった。
クウェンサーがどこにもいない。
カラカラという小さな音だけが耳に残っていた。そして、フローレイティアは気づく。クウェンサーは白ら山の斜面に身を投げて、彼女から距離を取ったのだ。自分からさっさと『真ん中のルート』へと動き出してしまう事で、フローレイティアにもトンネルを通って『左のルート』へ向かわなければならないように。
斜面の森に隠れるよりも、麓の平らな道にいる方が見つかりやすい。
何しろ、オブジェクトはまさに『そこ』を通過するのだから。
クウェンサーはわざわざその危険を冒してまで、強引に状況を動かしたのだ。
（あの野郎……ッ!!）

フローレイティアは歯噛みしたが、もう遅い。今から滑落したクウェンサーの所へ急行しても、ここまで引き上げるのは難しいだろう。そうこうしている間にマスドライバー財閥のオブジェクトがやってきてしまう。

やるしかない。

フローレイティアは一〇メートルほど登った所にあるトンネルを目指す。命令違反を犯した若造については、後でゆっくり張り倒せば良い。

12

数十メートル滑り落ちた。

斜面の大部分は柔らかい黒土だった事、それほど角度がついていなかった事、軍服もそれなりの耐久性があった事などがプラスに働いたのだろう。

クウェンサーは死なずに済んだ。

しかし無傷では済まなかった。

彼は山の麓に倒れていた　上記の利点があっても、なおクウェンサーの全身に痛みが走る。ある程度の強度があるように設計されていたであろう軍服のあちこちはボロボロに擦り切れていた。山の斜面は垂直ではないとはいえ、まるで土や石に体中を削られたような痛みが走る。

（く、そ……ッ!!）

起き上がろうとしたが、足に痛みが走った。捻挫していた足とは別の方だ。これで両足はまともに動かなくなってしまった。これ以上の移動はできない。

（構うもんか、死ななかっただけでもラッキーなんだ。どのみち、歩兵がパタパタ走ったところで、オブジェクトからは逃げられない　お姫様にマスドライバー財閥のオブジェクトの居場所を正確に伝えられれば問題ないんだ。それだけを考えれば良いんだ……）

腕だけで這いずるように移動しようとしたが、やはり駄目だった。幸い、近くには茂みがあるので、角度によっては体を隠してくれるかもしれない。

フローレイティアはちゃんとトンネルを通って左のルートのチェックに向かってくれただろうか。

お姫様のベイビーマグナムは今どの辺りにいるのだろうか。

ヘイヴィアはまだダムで戦ってくれているだろうか。

朦朧とした頭で色々な事を考えていると、今まで聞こえなかったほど大きく、オブジェクトの駆動音が聞こえてきた。大量の静電気を発生させて機体を浮かばせるための、雷雲が近づいてくるようなあの音だ。

（来たか……ッ!!）

音がこれまで以上にクリアになった理由に気づくまでに、数秒かかった。答えは簡単だった。

間に山を挟まず、一直線に音が抜けているから、クウェンサーの耳には音が大きく鮮明に聞こえるのだ。

という事は、

（真ん中のルート!!　こっちが本命だったか!!）

クウェンサーが倒れたままそう思った時、近くの山々から大きな鳥が一斉に飛び立った。その後に、それこそ山のような巨体が視界いっぱいに現れる。

マスドライバー財閥のオブジェクト。

見たところ、ステルス系の細工が施されているようには見えない。

『正統王国』軍の第二世代、ブライトホッパーが大破されるまで居場所が分からなかったのは、おそらくこの辺りが山岳地帯だからだろう。九〇〇メートル級の山々が巨体を隠し、なおかつ埋蔵される鉄鉱石がレーダーの感度を下げてしまう。おまけに、連中は天候兵器を使用していた。もしかすると、人工的な霧のようなものを発生させて山頂から山頂へと蓋をするように覆い、衛星の目もごまかしていたのかもしれない。『宇宙開発関連に強い』マスドライバー財閥なら、いくらでも対策を講じるための知識や技術は保有しているような気がする。

クウェンサーは迫り来る超大型兵器を見上げて唾を飲み込んだ。

ブレイクキャリアー。

丸い球体状のボディは、三脚のようなパーツに支えられていた。その先端にはスキー板に似

た形状の板が取り付けられ、地面の上を滑るように進んでいる

一番特徴的なのは、オブジェクトの右手側に取り付けられた巨大な砲か　全長一〇〇メートルを超す主砲の先端近くには、狙撃銃のバイポッドのような二脚のパーツがあり、砲を支えていた　おそらくあまりにも巨大すぎて、そのままでは自重で砲身が曲がってしまうからだ

主砲の最後部には、リボルバーのように回転するパーツがある　が、円筒形のシリンダーの側面五ヶ所から均等に、巨大なマガジンのようなものが飛び出していた

あそこに砲弾を収めているのだろう

普通のマガジンでは巨大になりすぎるので、複数のマガジンに小分けできるように、わざわざあんな複雑な機構にしているのかもしれない

砲Ｈとマガジンの大きさから逆算すると、おそらく装弾数は二五発程度

別の個所に取り付けられた、オブジェクトの兵装にしては極めて珍しい、大型のミサイル発射装置――おそらく、照準用の電波を反射するために利用するチャフミサイル用の物だ――の本数とも一致する

ただし、それは二五機のオブジェクトを五〇〇キロ以上の距離から確実に破壊する能力を意味している　液体窒素の冷却システムをフル活用し、斜め上に遠投する高度を調整すれば、一～二〇〇〇キロぐらいは対応できるかもしれない　さらに戦闘中に砲弾を補給すれば交戦可能時間は延びるのだから、冗談抜きで『マスドライバー財閥の領土を一方的に宣言できる』

戦力と言える。

巨大な影を見上げ、クウェンサーはゴクリと喉を鳴らす

さらに、敵の脅威は長距離砲撃だけではない事に気づいたのだ。

(……警棒みたいに、砲身が伸縮する……？　電圧の強弱と合わせて、威力を自在に変えられるんだ　仮に何らかの理由で敵のオブジェクトに近づかれた時は、砲の長さを意図的に短く縮め、慣性の力を少なく抑えて高速戦闘を行えるようにするために!?)

シャルルマーニュからの通信では、ブレイクキャリアーの主砲の砲弾は発射直後に分解されると言っていた　運動エネルギーを小さな中心核に集中させ、さらに速度を増すためだ。

しかし、もしかすると近距離や中距離では別の使い方をするのかもしれない。

砲弾を分解させず、塊のまま敵のオブジェクトへと叩きつける。周囲の外殻は押し潰され、鋭い中心核だけが飛び出し、一気に標的の装甲を貫通させる。砲身を短く縮め、電気的な干渉を行いづらくなった時にも高い威力を維持するために、砲台だけでなく砲弾のモードも変えられるようになっているのだ

長距離用の急降下弾道と、近・中距離用の直線弾道

一つの砲に複数の発射方式を採用する事で、様々な射程距離で存分に力を振るえるオブジェクト。

だが、機構を複雑化させた事が、かえって不調を招いたのかもしれない　実際、クウェンサ

ー達に向けられた主砲の砲弾のいくつかは、標的に届かないまま空中で破裂している。

（お姫様はどこにいるんだ……？）

クウェンサーはそんな事を考えながら、とにかく無線機を手に取った。マスドライバー射出の通過ルートは真ん中で決定だ。この情報を正確に伝えられれば、それだけ奇襲の成功率は高まる。

しかし、そこでクウェンサーは眉をひそめた。

無線機のスイッチが入らない。カチカチと何度押しても反応がない。斜面を滑落した時の衝撃で壊れたのだ。

「くそっ!!」

正確な情報が分かっても、それを伝えられなければ意味がない。そうこうしている間にもオブジェクトはクウェンサーの横を通り過ぎようとしている。このままでは奇襲は成功しない。ベイビーマグナムもクウェンサー達の部隊も皆殺しだ。

（ちくしょう、やれる事は何でもやってやる）

心の中で吐き捨て、クウェンサーは軍服の中に隠していたPDWを取り出した。サブマシンガンをさらに縮めたような、二〜三〇センチ程度の長さしかない銃器。九ミリの弾丸をばら撒くPDWは歩兵を殺すには十分な兵器だが、当然ながらオブジェクトの装甲には通じない。

銃器を取り出す時、ポケットから何かが落ちた。

それは透明な袋に入っている、手製のクッキーだった。コーヒー農園でもらったものだ

クウェンサーはそれを口に放りながら、PDWの安全装置を外す

（……こんなもんで、オブジェクトが倒せないのは分かっている）

銃口を、オブジェクトの球体状のボディへと向ける

倒れたまま、クウェンサーは引き金に指を掛ける。

（狙いに気づかれるな、気づかれたら終わりだ）

やる事は一つだ。

引き金を引き、オブジェクトを撃つ。

タァアアン!!　という乾いた銃声が山岳地帯へ広がっていく

マスドライバー財閥のオブジェクトも、自分の装甲に異変があった事には気づいたようだ

ただし、そこに切迫感はなかった　当たり前だ。たかが九ミリの弾丸では、オブジェクトの装甲どころか、大小無数の砲に併設してある照準用のカメラレンズすら破壊できないのだから

それでも、オブジェクトの動きが止まった

目の前を羽虫が飛び回るような不快感が、その挙動から感じられた

クウェンサーは構わず引き金を引く。

パパン！　タン!!　と、二～三発ごとに短く銃弾を放っていく　装甲で火花が散るものの、やはり目立ったダメージは加わらない

オブジェクトの砲が動いた。

銃声から居場所を特定されたのだろう

鉄橋のように巨大な主砲の大出力レールガンではなく、その他大勢の小さな砲の内の一つだった。クウェンサーには見覚えがある　南極で使われた対戦車陣地用のスペア砲と同じだったおそらくこちらが本来の使い方なのだろう　一番小さいものとはいえ、れっきとしたレールガンだ。発射されればクウェンサーどころか、イージス艦すらへし折りかねない

パパパンパン!!　とさらに銃弾を放っていたクウェンサーだが、不意にその銃撃も止んだ

オブジェクト側はそれをどう判断しただろうか　弾切れでも起こしたか、あるいは全く通用しない事に恐怖を感じたか

いずれも間違いだ

オブジェクトの方もそれに気づいたのかもしれない

クウェンサーの倒れている方に向けたレールガンは、それ以上動かない　もしかすると、搭載されているコンピュータやエリートの頭脳を使って、今の銃声を分析しているのかもしれない

もしもそういった作業をしていれば、クウェンサーが放った銃声に一定の規則性があった事

に気づいたかもしれない。それは極めて単純な○と一の情報伝達用暗号であり、以下のような文章を形作っていた事も分かったかもしれない。

オブジェクト。
中央ルート・ポイント３９１
通過中。
下位安定式プラズマ砲。
至急、準備されたし。

と

マスドライバー財閥のオブジェクトには、大小一〇〇門以上の砲が取り付けてあり、その全てに照準用のカメラレンズが取り付けられていた　それらが一斉にフォーカスの軋んだ音を鳴らす　他にも様々なセンサーを作動させているのだろうだが、

その時、ベイビーマグナムを操るお姫様はクウェンサー達が『右のルート』と示していた方向で待ち伏せを行っていた　理由はとても単純で、オブジェクトの巨体を隠せる所がそこしかなかったからだ。

ベイビーマグナムが潜んでいるのは、山間部の隙間にある谷だった　地表から数十メートルもの深さがあるのだが、そこからオブジェクトの主砲のアームだけが飛び出していた

そこへ、規則性のある銃声が聞こえた。

お姫様は即座に場所を悟ったが、今からルート変更していては間に合わない　おそらくマスドライバー財閥のオブジェクトは奇襲を警戒し、三六〇度の全方位へセンサーやレーダーで索敵を行うだろう　ここが見つかるのも時間の問題だ　そして見つかれば、間にある山など無視して大出力レールガンを放たれる。

しかし。

そもそも、お姫様も待ってやる義理はない。

「――――」

彼女は周囲一帯の地形情報を呼び出し、この山々にある全てのトンネルがどう通っているかを検索する事にした。

この辺りの山々には交通用、作業用、工事用……様々なトンネルが複雑に入り組んでいる

しかし、軍のデータベースは情報が膨大である代わりに、目的のデータだけを表示させるの

に多少時間がかかってしまう。その数秒のラグが、ブレイクキャリアーとの戦闘で致命的な結果を招いてしまうかもしれない。

だが、お姫様が手間取る事はなかった。

彼女がエリートとして情報を処理する能力に優れていたから、だけではない。

一足先に現場に到着していたクウェンサーが、周辺の地図を軍のデータベースから探し当て、ブックマークをつけ、同じ大隊の人間がすぐにアクセスできるように調整していたからだ。お姫様の知る由もないが、山の斜面から滑り落ちたのはその後である。

彼女は通常の検索作業を省略し、そこから一気に目的のデータを呼び出す。

（けっちゃくをつける）

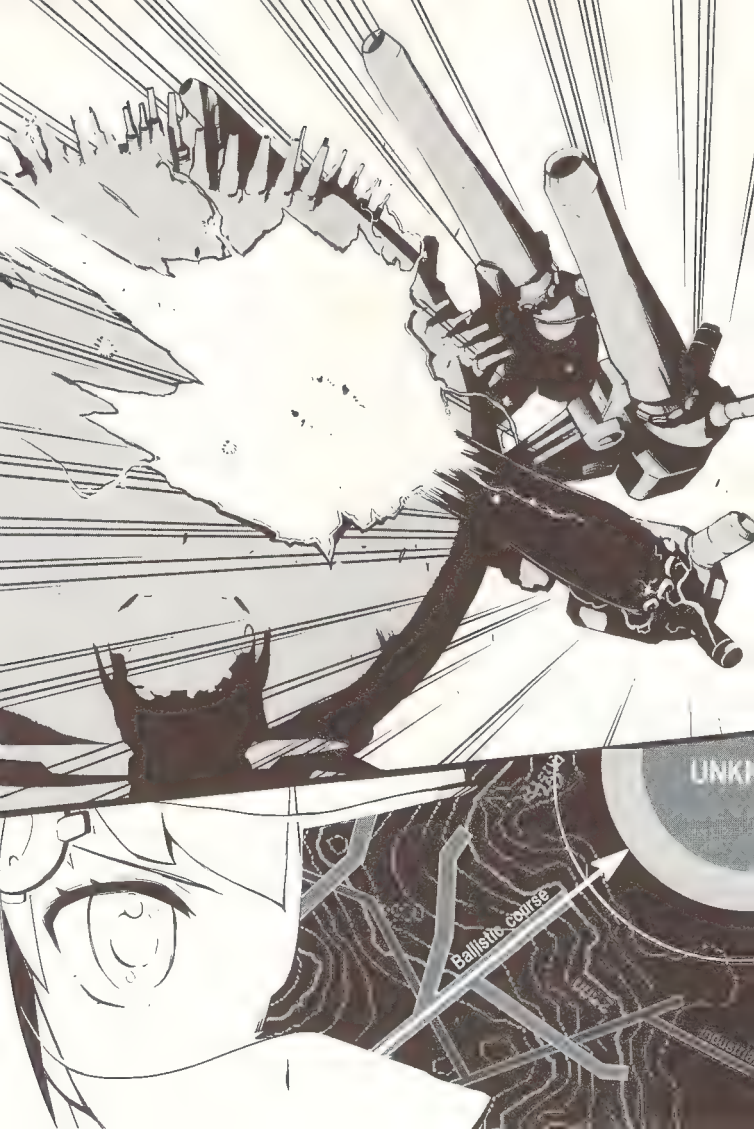
つまり

ここからクウェンサーが提示した座標までを、直線に結ぶ通行用トンネルを

（これ以上、クウェンサーたちを、おいかけ回させない）

迷う必要はない。

主砲のアームをそちらに向けると、お姫様はトンネルの穴に向けて正確に下位安定式プラズマ砲を発射する


UNKN
Ballistic course

14

その閃光は、遠く離れたイグアス・ダムからでも確認できた。
土壇場まで追い詰められていたヘイヴィアは、閃光に目を細めながら、無線機に向かって叫ぶように言う。
「今のが分かるかバイラニー＝サローノ伍長!!」
「……ッ!!」
「それはな、俺らの勝利を祝福するデカい花火だよ!! 何ならベイビーマグナムに連絡してみろ！ いや、あれだけの爆発ならチャフミサイルの影響を受けた雲も、まとめて吹き飛ばされているかもしんねえな!! ウチのお姫様の言葉が信用ならねえようなら、衛星観察官にでも聞いてみろよ!! 無残な残骸が映っているだろうからな!!」
銃声は止まっていた。
最前哨小隊の目的は、このダムを爆破し、大量の水を下流に流す事で、マスドライバー財閥のオブジェクトの足止めをする事。そして、そのチャンスにベイビーマグナムの主砲で敵を正確に撃ち抜く事だ。
実際にはバイラニー達はブライトホッパー大破の報復をしたかったようで、大義名分などど

うでも良かったようだが、今回ばかりは気に留めない訳にはいかない。
何故なら。
報復相手であるマスドライバー財閥のオブジェクトは、もう存在しないのだから。
『こちらベイビーマグナム、てきせいオブジェクトのはかいをかくにん。せんとうはしゅうりょうした。くりかえす、オブジェクトははかいした』
お姫様からの通信は、イグアス方面にいる『正統王国』の全兵士へと伝えられた。
呆然とするバイラニーへ、ヘイヴィアは大声で言う。
「聞いたか!!　危険なオブジェクトは破壊できた!!　このダムは元々俺らのもんじゃねえ!!　さっさと持ち主に返して一緒に帰りてえんだがよ、テメエはどうする!?　今なら自棄酒ぐらいは付き合っても良い　火酒と鉛弾、どっちで勝負してえんだ!?」

15

爆音なんてものではなかった。
周囲の木々が薙ぎ倒され、クウェンサーの体も宙を舞った。マスドライバー財閥のオブジェクトの装甲板が千切れてものすごい速度で全方位へ撒き散らされ、まるで対人殺傷用の手榴弾のように破片の雨が周囲の山を切り崩していく。

下位安定式プラズマ砲は、オブジェクトの中心を容赦なく貫通させた
動力炉は内側から爆発し、二〇万トンの鋼の塊が凄まじい衝撃波と共に弾け飛んだのだ しかし分かったのはそこまでで、莫大な白い閃光が迸り、クウェンサーの視界を一時的に奪っていた。低い唸りのような音や、パラパラと自分の顔に降りかかる粉っぽい感触から、あちこちで崖崩れが起きて、もうもうと土煙が上がっているらしいのは何となく分かる
何とか生き残った。
両足を痛めつけられ、まともに立ち上がる事もできないまま、クウェンサーは何とかそれだけの感想を思い浮かべる。
その時だった。
唐突に、何者かに襟首をぐいっと摑まれた そのまま吊り上げられる、ぼんやりと戻った視界で状況を確認しようとすると、すぐ目の前にフローレイティアの顔があった どうやら彼女の手で摑まれているらしい
フローレイティアの顔は怒りに染まっていた。
驚くクウェンサーに、彼女は低い声でこう呟く
「……次こんな真似をして命を粗末にするようなら、その時は私がお前を殺してやるから 分かった?」
「フローレイティア、さん?」

「返事は!?」
「はっ、はい!!」
クウェンサーがとにかく応じると、フローレイティアは苛立ったまま彼の襟首から手を離した。どすんと地面に落ちたクウェンサーなど気にせず、彼女は大空を見上げながらこう言った。
「なら帰るよ。強襲揚陸空母からこちらにヘリが向かっているの。どうやら、どいつもこいつも一番の功労者にインタビューをしたいらしい」

16

ベイビーマグナムも中破していた。
主砲を動かすためのアームは三本もやられていたし、装甲も大きく砕かれている。ベースゾーンだけで修復できるレベルかどうかも分からなかった。もしかすると、一度本格的な軍需生産工場へ送る必要があるかもしれない。
推進装置にもダメージが加わっているため、整備兵達の手で海戦用フロートをつけてもらい、ゆっくりのろのろと海上を進めていたお姫様だったが、そこで通信が入った
相手はヘイヴィアだった。
『ったく、今回もボロボロだぜ、楽ができる戦場ってのはどこに行っちまったのかね』

「……らくができたら、せんそうじゃない」

『おっと。オブジェクトを操るエリート様は毎回そんな感じだったんだっけか』

何が言いたいんだろう、とお姫様は首を傾げる。

すると、ヘイヴィアはこんな事を言ってきた。

『一応、マスドライバー財閥のオブジェクトも爆破できたし、一件落着なんだけどさ。何か腑に落ちねえ事がねえか？』

「……、」

質問されて、お姫様は少しだけ考えた。

ある。

ブライトホッパーを破壊された辺りから、疑問に思っていた事が、戦闘が終わった今も解消できていなかった。

『マスドライバー財閥のオブジェクトは、北の内陸五〇キロから、俺らのいるベースゾーンへと向かってきた。……でも、それなら上陸時に海岸線で俺らに砲撃してきた、あのスペア砲のレールガン。あいつに電力を供給していたオブジェクトはどこにいるんだ？』

そう。

そこが疑問なのだ。

スペア砲に動力を供給していたオブジェクトの足取りは摑めなかった。海岸線に太い送電ケ

ーブルが残されているだけだった。

もちろん、オブジェクトは時速数百キロで進むから、海岸線で支援を行った後、一度五〇キロ北まで戻って、そこからもう一度南下してきた可能性もなくはない。

しかし、

（それだと、いみがない……）

五〇〇キロの距離から一撃でブライトホッパーを破壊できる主砲があるなら、わざわざそんな真似をする必要がない。海岸線に陣取り、海上から迫るベイビーマグナムを主砲で狙った方が効果的だ。

おそらく海岸線に展開されていたスペア砲は、ベイビーマグナムのスペックを確かめ、遠方からの主砲の砲撃で倒せるかどうか見極めるためのテストだったのだろう。……そういう目的なら、ますます怪しい。倒せるかどうか分からない相手のテストをするために、あのオブジェクト本体が間近まで接近するのでは意味がない。

となると、

「……あのオブジェクトと、かいがんせんでスペアほうのレールガンにエネルギーを与えていたオブジェクトは、べつもの？」

『かもしれねえ。レーダー関係はお姫様のオブジェクトも強そうだからな。そういう変な影がなかったか聞きたかったんだが、その様子だと心当たりはなさそうだな』

「……」

マスドライバー財閥。

もしかすると、あの組織はまだオブジェクトを持っているのかもしれない。

それも。

誰の目にも留まらず、レーダーやセンサーでも発見できないような、謎のオブジェクトが。

17

ボッコボコに説教された。

衛生兵の少女からは『両足とも傷ついているから、車椅子を用意した方が良いのかも』と助言されたが、フローレイティアはそれを一蹴して怒濤の説教タイムに突入させたのだ　強襲揚陸空母に用意された上官室で罵詈雑言を受ける事一時間。まだまだ続くなこれはー、などとぼんやり考えていたクウェンサーだったが、そこで不意に説教が中断される事態になった。

フローレイティアのパソコンへ、映像チャットの着信があったからだ。

特に覗く気はなかったのだが、部屋の一面の壁はパソコンと連動したスクリーンになっていたので、自然とその相手をクウェンサーも見てしまう。

包帯やガーゼだらけの男だった。

カールした金髪が特徴的だ
同じ部隊の負傷兵か？　とクウェンサーは思ったが、そうではないらしい
『フローレイティア　カピストラーノ少佐。こちらは何とかいきのこった　とりあえずほうこくしておこうとおもってな』
「ハルリード　コパカバーナ少佐　お互いにしぶといものね」
その名前を聞いて、クウェンサーはようやく思い当たった　ブライトホッパーを操縦していたエリートで、カピストラーノ家が提供する『相続作業』の第二候補ぐらいの男だったはずだ
当然のように、部外者のクウェンサーとしてはとても気まずい。
単純に恋人同士の会話を聞かされるのとは、また状況が違う　フローレイティアの『周りの「貴族」の男達は、ほぼ一〇〇％男子の後継ぎを産む特徴にしか興味がない』という事情を知っていると、もっと黒くて嫌な感情が渦巻いた。
フローレイティアは、ブライトホッパーが破壊された時、正直ホッとしたと告白していた
その彼女は士官用の大きな椅子の背もたれに体重を預けながら、軽く息を吐く。
「それだけのために？」
『いや、他にもちょっとしたほうこくがあってな』
感情を見せないフローレイティアに、ハルリードは楽しげに言う。
『私が「だい3こうほ」というはなしはしっているかな』

「まあ　一番目と二番目が誰だったかあまり覚えていないがね」
『なら、そのままでもけっこうだ。本日付けで、私が「だい1こうほ」へとしょうかくしたようだからな』
「っ」
流石に、フローレイティアがギョッとしたような顔になった。
『れいの「マスドライバー財閥」だよ。オブジェクトをはかいするようなくきょうに立たされても、へいわのあんていのためにたたかいつづけたこうせきが君の「カピストラーノ家」にみとめられたらしくてな。「あんぜんこく」でこえふとっている、だい2、だい1こうほよりも有用だとはんだんしていただいたらしい』
「それは……しかし、マスドライバー財閥は……」
フローレイティアは、わずかにクウエンサーの方をチラリと見た　命令違反などがあったとはいえ、本来その功績は彼や、直接的にとどめを刺したベイビーマグナムのお姫様に与えられるべきもののはずだ、とでも言いたいのかもしれない。
ハルリードは気にしていないようだった。
『けいいはどうあれ、あのたたかいにさんせんしていたことにちがいはないからな。ポイントかせぎにはべんりだったと伝えておこうかな？』
「そうか……」

話している男の器を知ったせいか、フローレイティアはこれまで以上に感情のなくなった声で言う。

「しかし、貴殿が何番目の候補になろうが、本気で婚姻を望んでいようが、生憎とすぐには応じられないの。私には『正統王国』軍人としての役割があるからね。いつになるか分からない挙式を待つよりも、貴殿ならもっと良い縁談を探し出せると思うのだが？」

『どれだけ良い女を見つけられても、かくじつによつぎをのこせないのであればいみがない。それは「きぞく」に生まれたものならだれにでも分かることだよ』

ハルリードは本人に向けて、迷う事なくそう言った。

『ついでに言わせていただくと、君は「マスドライバー財閥」のさいぜんせんでせんとうにまきこまれたようだな。それはいけない。……今すぐ「あんぜんこく」にかえって、せいみつけんさをうけることをすいしょうするよ。そう、スケジュールが合わないようなら、いちじてきにぐんえきをしりぞいてでもね』

「……ッ!!」

今度こそ、フローレイティアの肩が明確に動いた。

一時的でも軍役を退いてしまえば、大義名分がなくなる。望まぬ相手との婚姻を中断させる手段が失われてしまう。

応じられない、と彼女の唇が動く前に、さらにハルリードが言葉を重ねる。

『ちなみにこのていあんは、君の「カピストラーノ家」でもほぼかくていしそうだ。君の体に、あとののこるきずがないかどうかをかくにんしたいというのは、まぁむりもないことだろうね私ともすばれるかはまだ分からないし、別のこうほしゃが上がってくるかもしれない。しかしいずれのばあいでも、そのうつくしい体がたもてているかどうかは、君のかちを決める上でじゅうようなことなのだから』

まるで美術品に傷がついていないかどうか、心配しているような口調だった。

どう考えても人間を扱うような言葉ではない。

（……）

クウェンサーはちょっと真剣に考える。

今回の件で、フローレイティアには恩がある。足首の捻挫した自分をオフロードカーで運んでくれなければ、マスドライバー財閥のオブジェクトを奇襲する作戦は成功しなかったかもしれない。すると、フローレイティアはクウェンサーの、いやこの大隊の兵士全員の、いやいやダム爆破の件まで考えればイグアス方面に住む人々まで含む大恩人という事になるのではないか。

となると、追い詰められた彼女をお助けせねばなるまい。

事は『貴族』間のデリケートな問題であり、そう簡単に解決できるものではない。しかしクウェンサーはすでに糸口を得ていた。ハルリードにしても、他の候補者にしても、欲しがって

いるのはフローレイティア本人ではなく、『正統な血筋を持つ男子の後継者』だ。ハルリード自身は色々言っているが、男子を作れない事を問題視している事を認めている以上、その特典は絶対に必要な条件なのだろう。単にセックスして子供を作りたいだけなら、娼婦にでも声を掛ければ良い。敢えてフローレイティアを希望しているのは、彼女のほぼ一〇〇％男子を産む特徴の他にも、フローレイティア自身が高潔な血を引く（『平民』のクウェンサーからすれば苦笑いだが、そういう事になっているらしい）『貴族』の一員であるからだ。『貴族』とは結婚相手の家柄とやらに、異様にこだわるものなのだ。西欧の島国には王妃と別れて侍女と結婚するために、世界的宗教から国を分離させたほどの王様もいたらしいが、そういう例は稀だ。妾としてならともかく、正統な後継者を産ませる正妻はそう簡単には選べない。周囲を納得させるために、いくつものチェックポイントが存在する。

ならば……ッ!!

ガッ!!　と。

フローレイティアの背後に回り込んだクウェンサーは、彼女の腋の下から両手を伸ばして、容赦なくその巨乳を鷲掴みにする。

「なん……ッ!!」

驚きのあまり口をパクパクさせるフローレイティア。しかしクウェンサーはなおも機械的にもみもみしながら、パソコンの上部に取り付けられた小さなカメラに向かって唇の端を歪める。

「すみません、コパカバーナ少佐。正直に白状しますと、この『平民』クウェンサー＝バーボタージュ派遣留学生はフローレイティアさんとこんな関係だったりします。はっはっは、いやあ以前から上官には優しく丁寧に色々面倒を見ていただいている内にずるずるーっと進んでしまいまして。第一候補らしきあなた様には本当に申し訳ない」

「ばっ、馬鹿、おい!! ち、違うの。こいつはなんか様子がおかしい――ンぐっ!? へ、変な所をコリコリするなクウェンサーッ!!」

よほどパニクっているのか、正当な反論であるはずなのに胡散臭い口調になってしまっているフローレイティア。

しばらく呆然としていた画面越しのハルリードだったが、やがて彼の体が小刻みに震え始めた。その震えは時間を追うごとにどんどん大きくなっていく。

『……へっ、「平民」と言ったな。つまり、それは、こういうことか。フローレイティア＝カピストラーノは、「きぞく」のれいじょうであるくせに、「平民」如きとかんつうしたと……?』

わお、姦通なんて古風な言葉が出てきたよ、とクウェンサーはちょっと感心した。

「えーと俺はまずいと思ったんですけどフローレイティアさんが押し倒して馬乗りになってくるからもう我慢できなくて」

「ぶふっ!?　なん、何故お前の妄想の中では私がそんな攻撃的に――　ッ!?」

「色々と質問するのは結構ですけど」

ぴしゃりとフローレイティアの言葉を封じ、巨大なおっぱいを鷲掴みにしたまま、クウェンサーは考え付く限り最悪の笑みを浮かべてこう言った。

「そんなに大事なモノだったら、名札付きの貞操帯でもつけてくれれば良かったのに。おかげで止めるものは何もありませんでしたよ？」

ハルリードや他の候補者が欲しがっているのは、フローレイティアという女ではなく、彼女が産むであろう『正統な血筋を引く男子の後継者』だ　この『正統』という言葉は『貴族』の出身である他にも、色々と条件がある

つまり、

『……くっ……』

モニターの向こうから、笑い声が聞こえた。

喜びの感情とは完全に異なる、ドロドロとした笑みだった。

『ふふふ。ははははははははは!!　そうか、そうか、そういうことか!!』

爆発するように、ハルリードは言う

混乱しかかっていた頭が、怒りのギアに切り替わって再起動したようだった。

『くそっ!!　おかしいとはおもっていたんだ。いつまでもせんじょうからかえらないとおもっていたら、そんなふうにおとこあさりをしていたとはな　いくらかくじつに男子をうむ　ししつがあるからといって、だれにでも体をひらくような下劣な女には、「コパカバーナ家」のよつぎをうませるわけにはいかん!!　……なんてことだ。これでは1からさがしなおしではないか、良いか、このことは君の「カピストラーノ家」にもほうこくさせてもらうからなッ!!』

ぶっつーん、と映像チャットは唐突に切れた。

後に残されたのは、もみもみしているクウェンサーと、もみもみされたまま青い顔で呆然としているフローレイティア

よしよし、こんな調子で話が広まれば『正統な血筋を持つ後継ぎを作る素材』みたいな扱いはされなくなるだろうな、と考えていたクウェンサーだったが、

「――――、」

無言のフローレイティアは、言葉の代わりに拳で意思を表現した

ドゴッシャアアアアアアアア!!　という壮絶な音がクウェンサーの頬骨から炸裂する。

床に倒れ、正座を横に崩したような、いかにも女の子っぽい崩れ方をするクウェンサー。そんな部下の若造を見下ろしながら、死ぬほど冷たい表情でフローレイティアは口を開く

「参ったな。軍規の都合上、私はお前を正式に射殺してもオッケーな権限を得てしまったぞ。体内拡散弾頭はどこに置いた。この辺に傷口を無駄に広げるステキな弾があったはずなんだが」
「ヤバい、照れ隠しじゃなくてマジな感じだ!!」
「……何か言いたい事はあるのクウェンサー。あったらここで言ってみろ」
「ホントにデカいなアンタ!! 両手に収まりませんでした!!」
「度胸は認めてやる!! だからちょっと踏んづけられろ……ッッッ!!!!」
ついに完璧にブチ切れたフローレイティアに顔を踏まれながら、クウェンサーは改めて弁解する。
「しっ、しかし!! 何だか追い詰められていてお困りのようでしたから!! 平和的に解決するには、もはやこれしかないかと思いまして!!」
「やってる程度の大小に違いはあっても、根本的な方針は全く同じだった事には気づいているかなクウェンサー!?」
「いや、ですからその辺は工夫してですね、あんまり重たくならないように、こう、ソフトな感じでですね」
素直に答えようとしたところで顔を踏む踵の重圧が増した
「だからそれが変わってないって言ってんでしょうが!! しかも何がソフトだ!? 思いっきり鷲掴みだったよ! じゃあ何か!! 確かに今回ハルリードのヤツは諦めたようだが、他の候補

者が言い寄って来るたびに、お前はそうして後ろから鷲掴みにするつもりなの!?」
「そっそれは……ッ!!　い、いや、毎回乳か。ありかもしれないな……」
「ある訳がない!!」
クウェンサーの顔をブーツでぐりぐりしながら、フローレイティアは額に手を当てる。
「……しかもあの言い分を鵜呑みにされた場合、軍の上下関係を利用して私の方から一方的に強要した事になってるし……。待て待て待て、それは私が本物のビッチ扱いされるという事じゃないかどうしようどうしよう」
「いやちょっ体重がフローレイティアさん体重が体重がすごい体重かけられて潰れる潰れるブーツがすごいめり込んでます踏むのは良いけど愛を込めてほしいっ!!」
ほとんど悲鳴に近いSOSを発すると、フローレイティアはようやくクウェンサーの顔からブーツをどけた。
ふーふーと荒い息を発していたフローレイティアは、やがて腰に手を当ててこう言った。
「しかしお前。イグアスの山岳地帯で話した事、そんなに気にしていたの？」
「ええ、そりゃまあ。あんなヘビーな話を聞いたら当然でしょう　別に俺じゃなくても、どうにかしたいと思うのが人間ってヤツです」
「そうか」
と、フローレイティアはわずかにクウェンサーから目を逸らした。

そのまま、彼女は何かを呟く

「（……どうにかしたい、か　久しく聞かなかった言葉だな）」

？」

クウェンサーは首を傾げたが、フローレイティアは同じ事を二度も繰り返さなかった

第三章　騎馬戦は足元を崩すべし　〉〉アマゾンシティ総力戦

1

旗艦シャルルマーニュを中心に、同型の強襲揚陸空母が七～八隻ほど、大西洋を北上していた。目的地は『正統王国』の領土である、南米大陸のアマゾン方面。赤道直下にあるブラガンサ港の近海が目的地だ。

平べったい甲板の上を、若い男の整備兵がゆっくりと歩いては時折屈み込んでいた。離陸用のカタパルトが熱で歪んでいないかどうかを確認しているのだ。一応、列車のレールと同じである程度は膨張・収縮する事を前提に設計されてはいるのだが、念には念を入れるのは当然の事だった　このカタパルトが機能を失えば、強襲揚陸空母はその価値を失うのだから。

整備兵はヘルメットを脱ぎ、頭上の太陽を忌々しげに見上げながら、

「くそっ、ハロウィンも終わったってのに、なんて暑さだよ。入港許可が下りればビニールの屋根が陽射しから守ってくれるってのによ。同じ『正統王国』の港だろ。民間だろうが軍港だ

ろうが受け入れてくれってんだ」

呟く整備兵の耳に、エレベーターの駆動音が聞こえた。とはいえ、高級デパートで制服のお姉さんがボタンを押してくれるものとはかなり違う。乗せているのはデルタ翼の小型戦闘機だ。コックピットからゆっくりと手を振るパイロットが見える。

戦闘機は一人乗りだった。

これはオブジェクトのコックピットのレイアウトの参考として研究開発が併用されている事もあるからだろう。この時代では、すでに戦闘機なんて時代遅れだ。オブジェクトが主流になった今、開発の基本ベースもそちらに移ってしまっているのだ。『何らかの形で、オブジェクトの方に応用可能』な兵器製造計画の結果、という訳である。

パイロットの声が、ヘッドセット越しに聞こえてきた。

『ボヤくなよ　ま、確かにあの港まで行けば自動販売機や売店があって、冷たい飲み物もアイスクリームも食べ放題だっていうのは考えたくもない事だがな』

「……相変わらず、ミサイルよりも多くのジャミング装置をゴテゴテ取り付けやがって。そこまで神経質になる必要はないんじゃないか？　もう敵オブジェクトはいねえって話だろ」

『いつもの癖ってヤツだ。……それに、そもそもこっちは、本来空戦のために軍に入った訳じゃない。浮き輪や補助輪ぐらいは容赦してくれないか』

「そりゃアンタだけじゃない、イマドキの空軍なんてそんなもんだろ」

整備兵は測量用の道具でカタパルトの歪みをチェックしながら、
「オブジェクトの対空レーザーが実用化した今じゃ、制空権確保なんて流行らないぜ」
『一応、北欧にはオブジェクトの侵入を国際的に禁じた、飛行機の楽園があるけどな』
「そんなの意味ないだろ。動物園の檻の中だぜ」
整備兵は退屈そうな調子で応じる
「現代の空軍の仕事は人員や機材の輸送、チャフミサイル使用下で衛星が使えない状況での低空偵察、後は式典用のアクロバット飛行隊ぐらいだろ。アンタは何だっけ？」
『アクロバットだ。ま、航空学校に通っていた頃は、精密爆撃とドッグファイトに憧れていたのは確かだがね』
「久しぶりの戦場か」
整備兵は測量装置から目を離し、チェックシートに合格のサインをしながら言う
「どう思う　今の心境は？」
『活躍はしたいが、活躍しなければならない状況にはなってほしくない』
そんな無線越しのやり取りを、別の場所で聞いている者がいた
シャルルマーニュの艦橋に佇んでいる、この船の艦長である　彼は部下達が世間話に使っている周波数を遮断し、本来の通信に使っていたものだけに集中する
相手は一足先に、内陸部からアマゾン方面に北上していた第二七機動整備大隊――ベイビ

ーマグナムの部隊の指揮官、フローレイティアだった。

他にも、元々アマゾン方面を守備していた『正統王国』軍の基地管制官も会話に加わっている。

「オブジェクトを失ったマスドライバー財閥の残党は、空白地帯を北上し、国境を突破、我が『正統王国』軍の領土であるアマゾン方面へ侵入したという話でしたな」

艦長は確認を取るように言った。

現地の管制官はすぐに応じる。

「我々は直接的な戦闘行動は取らず、とにかく該当エリアの民間人の避難を最優先させました、結果として、彼らの侵入を許してしまいましたが……」

すると、そこでフローレイティアが発言する。

『アマゾン方面を守備していた「正統王国」軍のオブジェクトは？　ウチのベイビーマグナムは中破しているのよ　可能なら共同作戦を提示したいけど』

『我々のオブジェクトであるフォレストローラーは、元々定期メンテ中でした　他の部隊にしても、一機は別の作戦で中破して緊急整備に、もう一機は現在も「信心組織」軍のオブジェクトと交戦中　この問題に割ける兵力はありません　……我々はメンテを終えるまで、ブライトホッパーに護衛してもらう予定だったのですが、先の戦いで大破してしまって……　あれ以来、何故かエリートのハルリード　コパカバーナ少佐は「本国」へ帰ると言って聞かなくなってし

まいましたし』

『チッ。お預けを喰らった犬は役に立たないな』

『？』

フローレイティアの意味不明な言葉に、艦長はわずかに眉をひそめた。おそらく現地の管制官も似たような表情になっている事だろう。フローレイティアだけが無視して先を促す。

『分かった。残党については、当初の予定通りこちらのベイビーマグナムで片付ける。だが、こちらも万全ではないの。装甲板の張り替えは終わったが、他は難しいね。七門ある主砲の内三つは使えないし、推進装置もやられて高速戦闘ができないの』

「アマゾン方面の基地で、資材の補給を受けてみては？　同じ『正統王国』軍のオブジェクトなら、規格も共通でしょうしな」

『い、いいえ』

と、否定したのは現地の管制官だった。

『装甲板などは確かに共通パーツですが、主砲や推進機関については、ほとんどオーダーメイドなんです。我々の基地は我々のフォレストローラーの整備に特化しています。おそらくベイビーマグナム側からのオーダーには応じられません』

『分かっている。このままやれという事でしょう』

フローレイティアは、それでもやや落胆したような色は隠し切れていなかった。

どうにかそれを払拭しようとするように、彼女は言う

『そんな訳です　こちらの事情は理解していただけましたか、シャルルマーニュ　今は少しでも戦力が欲しい　作戦通り、貴君の航空機にも力を貸していただきたいのですが』

「それは構いませんが」

艦長は慎重に言葉を紡ぐ。

「我々は、所詮時代遅れの航空機です　今時の戦闘についていけるとは限りませんぞ」

『っ？？　マスドライバー財閥のオブジェクトは、すでに破壊したという話ではなかったんですか？』

現地の管制官は不思議そうに告げたが、艦長は明確に答えなかった

（……そうだと良いんだがな）

南極やイグアス方面の沿岸部でスペア砲に膨大な電力を供給していたであろう、動力炉の存在　それを考えると、マスドライバー財閥が保有するオブジェクトの数に疑問が生じてくる

フローレイティアも似たような事を考えていたのだろう

彼女はポツリと呟いた。

『未確認のXか　もしも本当に実在するとすれば、また荒れそうですね……』

2

そんな不穏な会話など露知らず、クウェンサーとヘイヴィアは整備基地ベースゾーンの敷設の手伝いを行っていた　ベイビーマグナムの基地は世界中で展開できるようにするため、一〇〇両以上の大型車両の群れで構成されている。複数の車両を縦に横にと連結させ、その上にブロック状の部屋をいくつも重ね、テントのようにワイヤーを張って荷重を支える事で、即席の建物をいくつも用意するのだ。

彼ら二人が手伝っているのは、建物の構築そのものではなく、組み立て終わって『空っぽの建物』になった施設の中に、事前に梱包しておいた荷物の箱を色んな部屋へ運び込む作業だった。やっている事は引っ越し業者と同じである。

クウェンサーは段ボール箱を抱えて通路を歩きながら、

「しっかし、こんな風にチンタラ基地を作っている間に、マスドライバー財閥の残党が遠くへ逃げてしまったりはしないのかね？」

隣を歩くヘイヴィアは、時折クウェンサーの足に視線をやりながら応じる　もう捻挫も治っているのだが、もしかすると気に留めてくれているのかもしれない

「だとすりゃ、お姫様のオブジェクトが急行してんだろ。聞いた話によると、連中は二〇キロぐらい先にあるアマゾンシティ跡地に拠点を築きつつあるんだと　ここで反撃して足取りを消してから、改めて逃走するつもりらしいぜ」

「……アマゾンシティって何だっけ？」
「世界最大規模のゴーストタウンだよ」
ヘイヴィアは作戦室の床に段ボール箱をドスンと置きながら、
「ジャングルには色んなモンがある。石炭とか石油とか、鉄とか金とか宝石とか、まぁ色々な。後、レアなところでは特殊な草とか虫からエキスを吸い取って薬にしようって考える連中もいたらしいな。そこで、『正統王国』は採掘用の工業都市を丸ごと一個作っちまった訳だ」
「でも、ゴーストタウンになったんだよな。不景気で計画が頓挫したのか？」
「そんな可愛いもんじゃねえよ」
同じように箱を置いたクウェンサーと一緒に、来た通路を引き返しながらヘイヴィアは言う。
「密林の開拓作業中に、ヤバいウィルスと遭遇したんだと。免疫学を覆すような一品らしい。被害を最小に食い止めるために、『正統王国』はアマゾンシティを廃棄して引き上げたんだとさ」
「ちょ、ちょっと待て。俺達これからそこへ向かうんじゃなかったっけ？」
「二〇年も前の話だよ。この前も防護服来た調査団が向かったみてえだが、もうウィルスは確認できなかったって。大体、そんなウィルスが今でも猛威を振るっているなら、俺らがこんな肉体労働する必要もねえだろ。黙ってりゃマスドライバー財閥は全滅すんだから」
そうだよな……とクウェンサーは呟きつつも、まだ得体の知れない不安を払拭しきれないらしい。

ヘイヴィアは荷物の段ボール箱が大量に待っている部屋へと入りながら、
「南極に、空白地帯に、今度は緑に呑み込まれた街だ。利権の絡む所ってのは、とにかく戦争を招くモンだよな」
だー面倒臭せえ、とヘイヴィアは適当に言うと、大量の荷物と一緒に置いてあった、大きな椅子にドカリと座った。梱包用のビニールに覆われたままで全貌は掴めないが、結構豪華なものみたいだ。
「おいヘイヴィア。将校用の備品だったらヤバいぞ。フローレイティアさんの椅子だったらどうするんだよ」
「あの和風趣味は自分の部屋にこんな椅子は持ち込まねえだろ。そもそも、俺の仕事は敵オブジェクトの分析で、テメエの仕事はオブジェクトの勉強。こんな肉体労働を押し付けて、人を疲れさせてる方が間違ってんの」
と、そこへ場違いな顔がやってきた。
ベイビーマグナムを操るエリートのお姫様だ。
「ん。もうそれ来たんだ」
「？」
クウェンサーとヘイヴィアがお姫様の方を振り返ると、彼女は無表情で応じた。
「それ、コックピットにとりつけるイスなんだって」

「マジかよ。この肩甲骨の辺りでゴリゴリしてんのって、低周波治療器の電極だろ。今時のオブジェクトってのはそんな事になってんの？」

「ちょうじかんのせんとうで、しゅうちゅうりょくがとぎれないようにするための、はいりょの1つだって、ばあさんが言ってた」

「……確か、冷蔵庫とか電子レンジも内蔵しているって話だったもんね」

クウェンサーがやや呆れたように言い、ヘイヴィアは椅子に座ったまま肩をすくめた。

「そりゃスゲェ快適な戦場だな。その内ホームシアターとポップコーンでも導入するんじゃねえのか？」

単なる軽口のつもりだったのだろうが、真面目に受け取ったお姫様は、ミニスカート状のポケットから高性能な携帯ゲーム機を取り出して、

「今でも見れないことはないけど」

「ちくしょう!!　選り取り見取りじゃねえか!!　真空管付きの超高級なヘッドホンまで!?」

まぁその携帯ゲームはクウェンサーやヘイヴィアも私物として持ち込んではいるのだが、毎月毎月最新の映画ディスクを取り寄せてもらう事などはできない　ダウンロード販売もあるにはあるが、軍の通信の規約上利用できないのだ。

一方、クウェンサーはビニールの被さったままの低周波治療器つきの椅子をポンポンと叩いて、

「低周波のマシンって使った事ないけど、そんなに効く物なの？」
「やってみれば分かる」
お姫様は言うと、まったりしているヘイヴィアを横にどけて、ビニールを取り払った。家庭用コンセントに繋げるためのジャックを電源ケーブルへ取り付けると、壁際のプラグに突き刺す。
「良いの？」
「別にもんだいない」
と、お姫様が言うので、クウェンサーは素直に甘える事にしてみた。普通の椅子と違って妙に低反発で、体がズボッと埋まって固定されるような感じがする。背中や足の辺りに、低周波治療器の電極なのか、何かゴリゴリした感触があった。……これは服の上からでも効果がある機種なのだろうか？
「はじめるよ」
お姫様は椅子の腕置きの辺りにあるボタンをいくつか操作して、
直後に。
クウェンサーの全身に味わった事のない感触が走り抜けた。

「ほおおぅぅぅぅぅうにゃあああああっっっ!?　やん、あにゅ、ふにゅえあ、らめらめ、ちょ、これ！　ひょめてひょめへふにゅあああああああああぁぁぁああああああああ

「分ひゃった!!　もうひゃひゃっひゃから!!　ひゃのみゆきゃらスイッひぃひょめへひょめへ
――ふおおおおぅうぉあうえひゃらへえええええええ

「……許可なく私の後ろに立たないで。もう二度と不意打ちをさせるつもりはない」
「いやでも、あれ以外に解決案ってありましたかね？」
肩を落として脱力するクウェンサーと、不思議そうな顔をしている補給所のおっさん。フローレイティアは、度こほんと咳払いすると、ひとまずは本来の仕事――補給所で携帯用のシャンプーを受け取る――を済ませると、クウェンサーと共に補給所を出る。
すると、通路を歩きながら彼女は小声で言った。
「それを言われると辛いがね、だからと言って問答無用でやって良い事ではないの」
「そういえば、あれからどうなったんです？　コパカバーナとかいう人は政略結婚を諦めたみたいでしたけど」
「今のところ、私の株は順調に大暴落よ。相続問題に関しては、なりふり構っていられない老人達はまだ食いついてきているけど。……ま、そう簡単に解決するような問題なら、私だって戦争なんかやってない　その辺は、お前の気にする事ではないのよ」
はぁ、とフローレイティアはため息をついて、近くのドアに背中を預けた。
「しかしまぁ、代わりに、ウチのカピストラーノ家からの連絡がひっきりなしで大ピンチよちくしょう。下手に否定するとせっかく離れていった候補者達が戻ってきてしまうし、かと言ってこのままではビッチ扱いになってしまうし、どうしていいやら」
そんな事を言っていたフローレイティアの言葉が、唐突に途切れる

半開きだったせいか、彼女が背を預けたドアがそのまま向こうに開いていったのだ。そこはベイビーマグナムのメンテナンス用の設計資料などを保管するために用意された小部屋だ。今は派遣留学のクウェンサーが入り浸る勉強部屋にもなっている。

おっと、と呟いたフローレイティアは、転ぶのは避けられたが、そのまま二、三歩部屋の中に入ってしまう。そしてドアのすぐ近くにあった戸棚に、教材用のビデオディスクのケースが収まっていた。いや違う。教材の中に一つだけエロビデオが混ざっている。

フローレイティアは硬直したまま、パッケージ表面にあるタイトルを読んでしまう。

そこには、『クール女軍人悦楽㊙おっぱい猛特訓』と書いてあった。

彼女はしばし静止し、それから和風の煙管を握力でミシミシ鳴らすと、

「……クウェンサー、貴様まさか趣味で……？」

「いやこれは誤解です!!　俺が持ち込んだものではないし、あの鷲掴みは純粋な人助けだったっ！　しかし何故!?　マガジンの装填作業をやっていた火薬庫の棚にもあったぞこのビデオ!!　もしかして『正統王国』軍で大流行なのか!?」

大いなる謎に挑むクウェンサーだったが、フローレイティアの方は獣でも見るような顔でじりじりと距離を取り始めている。もう信頼はゼロらしい。

「……あのー、それじゃ俺もう行きますね」

「いや、私にも職務があるの。私情でスケジュールを曲げる訳にもいかない。仕方ないが途中

までは同行しよう」

そんな事を言い合いながら、クウェンサーとフローレイティアは通路を歩く。一応並んでいるのだが、微妙に離れていた。

「そういえば、アマゾンシティって所では、どういう風に作戦を展開させるんです？」

「もうあの廃墟で戦う事自体は摑んでいるのね」

フローレイティアはため息をつき、

「残党の数は五〇〇人程度。今まではオブジェクトを操っていたエリートが陣頭指揮も行っていたみたいだけど、そいつが吹き飛ばされたせいで、命令系統にも変更があったみたいね。スラッダー・ハニーサックル。マスドライバー財閥の人事に変更がなければ、今はそいつにスライドしているはずよ。……アマゾンシティ跡地にお姫様のオブジェクトをぶつけて、最低でもこいつだけは確実に殺す。そうすれば、他の雑魚に作戦立案能力はないから、後は右往左往しているところを皆殺しにできるって訳」

「誰なんですか？」

「肩書きは色々あるよ。マスドライバー財閥専属のオブジェクト設計士、世界有数の投資家、そして同財閥の名誉会長の軍事相談員も兼ねている」

「……」

設計士、という言葉にピクンと眉を上げるクウェンサー。

しかし彼は、敢えてそこを避けるように別の質問をした。
「軍事相談員というのは？」
「『資本企業』の連中は株主が承認して会社で軍を動かすからね。専門の軍師を雇っているのよ。ちょっと特殊な組織構造をしたマスドライバー財閥にもね」
そこまで言うと、フローレイティアはわずかに黙った。
やがて、彼女は自らの不安を吐露するかのように、ポツリと言う。
「……本当に残党が、オブジェクトを失った整備基地の連中だけなら、話は簡単に終わるんだけどね」
「ウワサには聞いています」
クウェンサーも眉をひそめて応じた。
「南極やイグアス方面の沿岸でスペア砲に電力を供給していた、第二のオブジェクトがいるかもしれないって話でしょう？　……でも、そんなのってありえるんですか。オブジェクトって言ったら、全長五〇メートルの怪物兵器ですよ。レーダーも衛星も人の目もかいくぐるなんて事、普通に考えれば……」
「分からない」
フローレイティアは首を横に振った。
そうしながら、彼女は自分自身に確認を取るように、こう告げる。

「だからこそ、びっくり箱が怖いの。お前も気をつけておくのよ。甘く見ていると、今度は捻挫ぐらいじゃ済まなくなるかもしれないから」

4

そんなこんなでアマゾンシティ跡地へ出撃である。

とはいえ、指揮官のフローレイティアは最前線には立たない。彼女は戦場から離れた所に設営された整備基地ベースゾーンの中で、煙管を咥えながら、モニター越しに部隊の展開状況を確認していく訳である。

和風趣味のフローレイティアであるが、部屋の内装は、普段に比べるとそういった趣味の品が少ない。イグアス方面でマスドライバー財閥のオブジェクトに整備基地を丸ごと破壊されたためだ。それでも、追加物資と一緒に新たなコレクションを運び込ませているところから、ヨーロッパの『本国』にどれほど溜め込んでいるかが窺えるだろう。

（……それにしても、今度の舞台はジャングルにビル乱立のゴーストタウンか。伏兵を忍ばせるにはもってこいの環境ね）

オブジェクト対オブジェクトの状況ならば、それほど気にはならないだろう。何しろ、オブジェクトは巨大すぎる。前のイグアス方面のような山岳地帯でもない限り、あれだけの巨体が

地形で隠れてしまう事はほとんどありえない。

しかし、あの怪物兵器を使って密林に潜むちっぽけな人間を捜すとなると、多少状況は変わってくる。

もちろん、オブジェクトには多角的なセンサーがあり、体温や磁気から隠れている人間を捜し出す術も存在する。……が、元々、密林には様々な生き物が存在するので、単純に『人間サイズの生物のいる反応』だけをサーチすると、膨大な数がヒットしてしまう訳である。

（……さて、歩兵との連携でここらへんの問題をクリアできるか。あるいは、声や足音など、人間特有の音波をキャッチする方に専念させるべきか）

センサーを最大限に活用させる場合、味方の兵士の存在がかえって邪魔になってしまうケースもある。細かいやり方は現場の連中に任せるが、その結果として生まれるであろう弊害は、遠方から客観視するフローレイティアが潰すべきだ。

くれぐれも、小さな反応を見逃さないように、と自分自身に言い聞かせ、改めてモニターを睨みつけるフローレイティアだったが、そこで通信が入った。

ベイビーマグナムを操縦しているエリートのお姫様だ。

『ちょっと、しつもんがあるんだけど』

「作戦前会議と何か状況に変化でもあったの？」

フローレイティアの見る限り、そういった事はなさそうだが、ひとまずはそう尋ねていた。

案の定、お姫様はその可能性については否定する。
『ううん。そうではなくて。あるいみでは、とてもプライベートなしつもんになるかもしれないけど、いい？』
「？」
らしくない、とフローレイティアは思う。
しかし、彼女がその違和感の正体に気づく前に、お姫様はこんな風に切り出してきた。
『……クウェンサーにもまれたって、本当？』
「ぶふっ!?」
思わず咥えていた細長い煙管が口から発射されるかと思った。
その反応をどう受け取ったのか、件のお姫様は、
『――――、』
「待て、そこで黙らないでくれ。もしかしてコンディションが低下気味なの？　こんな理由で!?　オブジェクトを操るエリートの精神状態がどれだけ戦況を左右するかは理解しているよね。これで戦争に敗北したら教科書にそのまま掲載されるんだが、揉んだ揉まれたで勝敗が決まったなんて事になったら軍の上層部は卒倒し歴史マニアは大笑いだぞ!?」
『……どうしよう。もまれたことについては一切ひていしないみたい』
異様に低い声色からお姫様が危険なテンションになっている事を理解し、額の嫌な汗を拭う

フローレイティア。どうもあの一件以来、何かの調子がおかしくなっているようだ。

5

アマゾンシティ跡地への進軍が始まった。

クウェンサーやヘイヴィア達は、大体二〇〇人ぐらいの編成で、複数のオフロードカーに分乗して跡地へと向かった。直接そのまま街に入る事なく、三キロぐらい手前で車を降りて、さらにバラバラに分散しながら街を目指す

車を停めた所から先は、熱帯のジャングルだった。密度の濃い森の向こうに、コンクリートのビルの群れがある。あれがアマゾンシティ跡地だろう。廃棄された後、緑の中に埋まったのだ。

ジャングルの中は、ただでさえ暖かい赤道直下とは、また違った雰囲気だった。ビニールハウスの中のように、熱気と湿気がこもっている。息を吸い込むと、体の中にじんわりと生暖かい感触が広がっていくようだった。

ヘイヴィアは早速うんざりした顔になっていた

「……くそ、相変わらずの人間アンテナだぜ」

「ベイビーマグナムが万全じゃないから、強引に突っ込ませるのは避けたいんじゃないの？」

クウェンサーは顎の汗を手の甲で拭いながら、
「ひどい所だな。なんか地面がブヨブヨしてるぞ。もうちょっとまともな進路はなかったのか」
「アマゾンシティ用に作られていたハイウェイの跡地を通れば快適に進めんだろうが、代わりに敵から丸見えになっちまうぞ」
「っていうか、ヘイヴィアさ。ライフルの先っぽにくっつけてるの、何？」
「見て分かんねえの？　殺虫剤だよ」
「……ヘイヴィア、もしかして虫とか触れない人？　まあ俺もゴキブリとか駄目だけどさ」
「馬鹿」
ヘイヴィアは思わず額に手を当てた。
「ここはアマゾンだぜ。世界最大の密林よ？　刺すのとか噛むのとか、レアでヤバいヤツがいっぱいいるじゃん。デカい蜘蛛なんてジャンプするからさ、ブーツで踏もうとすんのも危ねえんだ。でも、いちいち銃弾で対応してたら無駄撃ちで弾がなくなっちまう。銃声で敵兵に居場所を教えるのも馬鹿馬鹿しいしな。だから、そういうキケンな虫とか排除するために殺虫剤は必要なの。今回は大々的に攻め込む側だから、虫を殺して痕跡を残しても問題ねぇしな」
「そういうものかね。変な匂いで軍用犬とかに追われなければ良いけど」
「どうせなら、ヘラクレスオオカブトとかテンション上がるのに会いてえよな」
ぎゃあぎゃあという得体の知れない鳥の鳴き声を聞きながら、クウェンサー達は密林の中を

進んでいく。

ヘイヴィアはライフルについている複数のセンサーを使って、伏兵やトラップがないかを確認しながら、

「っつーか、テメェもズボンのポケットに何突っ込んでんの？　本だよな　ジャングルで遭難した時の野営マニュアルとか？」

「そんなに大層なもんじゃないよ。西部劇の小説　敵の出方待ちで待機する事があった時に読もうかなと思ってただけ」

「おいおいクウェンサーさんよ。俺らは今、超大型兵器のオブジェクトが行き交う戦争やってんだけど、今さら拳銃チマチマ撃つ話なんて読んでどうすんの？」

「駄目だよヘイヴィア　鉛弾一発の重さを忘れちゃあ」

「へっ、拳銃一丁持っていねえヤツが何言ってんだ。勉強熱心なクウェンサーちゃんは、てっきり休憩時間もオブジェクトの設計図でも眺めてるもんだと思ってたぜ」

軽い調子のヘイヴィアに、クウェンサーはそこでそっと口を噤んだ。

スラッダー＝ハニーサックルの論文は読んだよ、とは言えなかった

あいつは普通じゃない。

戦争中の『正統王国』にもネット上で公開される程度のものなのだから、重要度は低いのだろう　しかし、そこからでもあの男の才能の片鱗が見え隠れしていた

あらかじめ決められたテーマに対し、ひねくれた意見を返すだけなら子供でもできる。屁理屈、という形で。

ただし、現実的に役には立たない事を承知で無理矢理に絞り出した考えなど、世間話以上の価値はない

それに対して、スラッダーはそもそものスタート地点、着眼点からしてまともではなかった。言われて初めて気づく　そんな騙し絵のようにねじれたところから思考を始めるくせに、彼が構築する論理そのものは、極めて理路整然と並べられていくのだ　机上の空論を効率良く実用化へ繋げるための手順が。

完成された論文は、読んでいる人間にある種の感銘を与えるものだ　例えるなら、山のように見えた荷物が小さな収納ボックスの中に残らず収まった時のような　そうか、その角度から差し込むって手があったのか、といった感覚に近い。

しかし、スラッダーの文章はそれだけではなかった

『可能性』というものが上乗せされているのだ。

こいつの思い描くものが完成したらとんでもない事になる。そして、この論文に描かれたものが実現された未来を一度で良いから眺めてみたい。たとえ敵にとって得になるものであっても。

そんな気にさせる文章だった。

単にテキストを暗記しただけでは到達不可能な次元が広がっていた
あんなねじれた頭脳と戦って勝つのは、並大抵の事ではない。
……と、そんな風にわなわなしているクウェンサーの様子にヘイヴィアは気づかず、殺虫剤つきのライフルを構え直しつつ、恨めしそうに大空を見上げた。
「それにしても、ちくしょう。反撃が来る事が前提の布陣じゃねえか、少しでも砲撃を受けた時の被害が軽減するように兵員を散らばらせてやがる」
「お姫様のオブジェクトが万全なら、もっとスマートなやり方もあったかもしれないんだけどね」
クウェンサーは顔の汗を拭いながら、
「しかし、妙な話だよな」
「何が？」
「マスドライバー財閥の連中、あんな大出力のレールガンがあったなら、そのまま月面の基地を狙えたんじゃないのか？　わざわざ南極で探査ロボットを利用して衛星を経由して……なんて、回りくどい手順を踏まなくても良かったんじゃ……」
「連中の思惑なんて知るかよ。ありゃレーザー兵器を使ってテロ攻撃を行う事に意義があったんじゃねえの」
ヘイヴィアは適当な調子で、

「それに、ヤツらのオブジェクトの主砲は、摩擦熱で空中分解するらしいじゃん。大気圏を突破する事は想定されてねえのかもしれねえ」

「……」

「おいおい、深く考えるなよ　オブジェクトはもう吹っ飛ばしただろ　マスドライバー財閥がどんな風にオブジェクトの運用法を練っていようが、もう俺らにゃ関係ねえさ」

「そんな楽観的で良いのかね」

「あん？　……マスドライバー財閥が、第二のオブジェクトを持っているかもしれねえって話か」

ヘイヴィアはうんざりした調子で言う。

「オブジェクトを倒せるのは同じオブジェクトだけ　だから瀕死のベイビーマグナムはできるだけ温存しておきたいってか　でもよ、歩兵の俺らを差し向けてオブジェクトの有無を確認するなんて、地雷の撤去よりも危ねえ仕事だぜ」

『不用意にお姫様を突っ込ませて、不意打ちで撃破された方が悲惨よ　チェックメイトの駒がなくなるんだしね　お前は絶対に決着をつける事のできない消耗戦を延々と続けたいの？』

フローレイティアが無線越しに呆れた調子で言った。

彼女は念には念を押すような感じで、

『良いか。第二のオブジェクトの有無も重要だが、とにかく敵を分散させないで。可能な限り

逃がさずここで殺すのよ。最低でも、指揮を執っているスラッダー　ハニーサックルだけは必ず殺せ。こいつを見逃すと、ここで戦争を終わらせられなくなるよ』

「へいへい。そのハニーサックルって野郎はそんなに面倒臭せえヤツなんすかね？」

『何しろマスドライバー財閥が誇る、自慢のオブジェクト設計士だからね。最悪、準備さえ整えば新たなオブジェクトの建造に着手される恐れも出てくる』

「……冗談でしょう？　オブジェクトって、最低でも一機五〇億ドルはかかるものじゃねえんですか？」

『その五〇億ドルを個人的に捻出できる大物なのよ。彼は「資本企業」でも有名な投資家で大株主　お前達も分かっていると思うが、オブジェクト設計士っていうのは莫大な報酬を得られる人気職よ。ヤツはその莫大な資金を運用し、さらにその一〇倍も二〇倍も金を生む方法を熟知している　現在はハニーサックル名義の取引は全て凍結されているはずだけど、手元にある資金だけでもオブジェクト建造に手が届くとウワサされているの』

フローレイティアは面倒臭そうな調子で、

『もっとも、オブジェクトを一から建造すると、丸々三年ぐらいはかかる。よほど長期潜伏されない限り、そこまで巻き返される恐れはないかもしれないけど』

「……仮に、ハニーサックルの持つ技術を入手したい第三国と手を結んだ場合、面倒臭そうな事になりそうですね」

クウェンサーが言うと、『それよ』とフローレイティアは応じた。

『この戦争をこれ以上の大事にするつもりはない　馬鹿はさっさと駆逐して、車両団を温泉近くにでも駐留させましょう。……そのためにも、ここでマスドライバー財閥の息の根を止める。特にスラッダー＝ハニーサックルについては、絶対に逃がさないで。顔写真と指紋と血液を採取しろ。後で「資本企業」の連中と駆け引きして、そのデータを基に作戦遂行確認を取る』

「あの『資本企業』軍が快く協力してくれますかねえ」

『協力せざるを得ない状況を作れば良いのよ』

その時、クウェンサーの無線機から別の信号音が聞こえてきた。

頭上から、ジェットエンジンの音が細く細く響いている。無線はそちらからだ。

『こちらバーニング・アルファ。何ならアマゾンシティ周辺に地雷をばら撒いて退路を塞ぐという選択肢もありそうだが？　言ってくれればいつでも空から投下するぞ』

『提案には感謝するがやめておけ。自国の領土を地雷で汚染するのは好ましくないの。あれは五〇年以上人間の足を吹き飛ばし続ける危険地帯を作り出す』

『スマート地雷なら無線による自爆処理機能もついているはずだが？』

『その安全装置がたった一つも動作不良を起こさないという保証があるなら、使用許可を出そう。しかし、ばら撒いておいて誤作動を起こした場合、貴君の部隊に土地を耕してもらう。それで構わないのバーニング・アルファ？』

『冗談　俺達は空を飛ぶのが仕事です、泥にまみれるのには慣れていない』
クウェンサーは頭上の飛行機雲を眺めた
「強襲揚陸空母の方も動いているのか」
「みんな揃って瀕死のオブジェクトを動かすために必死だぜ。戦争の代名詞はオブジェクトじゃなかったのかよ　俺ら、何十年前の戦争をやってんだ？」
そうこうしている内に、地面の感触が変わった　これまでの柔らかく湿った腐葉土ではなく、ひび割れたアスファルトの道路だ　森に沈んだアマゾンシティ跡地へと繋がっていた、無数の道路の内の一つなのだろう。
戦場となる都市はもう近い。
ヘイヴィアはそこで眉をひそめ、何となしに頭上を見上げ、
「おいおい　このまま突っ込むのか？　突入前にオブジェクトで砲撃とかして、邪魔なビルとかぶっ壊さねえのかよ　どの建物に敵が潜んでいるか分かんねえんだぜ」
『流石にオブジェクトの巨体は隠せないでしょ。それ以外は無視して問題ないの』
フローレイティアは涼しい調子で応じる
『前のブレイクキャリアー戦で、お姫様のオブジェクトにもダメージが入っているし、レールガンやコイルガンは砲弾の補給もままならない。できるだけ無駄撃ちは避けたいのよ。まあ、どっちみちオブジェクトにダメージを与えられるのは、同じオブジェクトの大出力攻撃だけ。

ビルの窓から携行型ミサイルで狙われた程度で倒れる事はないのよ』

「……、駄目だよヘイヴィア、生身の俺達についての配慮はなさそうだ」

クウェンサーがため息混じりにそんな事を言った時、ベキベキベキ、という木々を押し倒すような轟音が聞こえてきた。

振り返ると、背後から巨大な鋼鉄の塊――ベイビーマグナムがゆっくりと接近してくるのが見える。

「マジかよ。環境破壊も甚だしいぜ」

「焼き畑やってた頃に比べれば全然エコじゃないの？」

そうこうしている内に、視界が開けた。

アマゾンシティ跡地に入ったのだ。

クウェンサー達が立っているのは、一面が灰色のアスファルトやコンクリートで覆われた地面だった。ただし、人工の地面のあちこちから巨大な亀裂が走り、その隙間から突き破るように、道路の真ん中から木々が生えていた。ビルの窓はほとんどなくなっており、傾いている建物も少なくない。当然のように、信号も街灯も光がなかった。錆びついた道路標識は、何が書いてあるのかも分からないほどボロボロになっていた。

その他に特徴的なのは、

「随分と道幅が広いな。片側三車線なのに、両方合わせたら八〇メートルぐらいありそうだぞ。

建物よりも道路の面積の方が広いぐらいじゃないのか？」

呟くように、クウェンサーが言う。

ヘイヴィアの方は適当な調子で答えた。

「メインストリートはオブジェクトのパレードに使えるように調整されてんだろ」

頭上を見上げると、はるか上空、ビルの屋上から屋上を繋ぐような位置に高層電線が走っていた。オブジェクトのパレードを邪魔しないように、おそらく地下ケーブルと高層ケーブルを組み合わせて送電網を形成していたのだろう。地下鉄や水道管なども、メインストリートの下を通らないように配慮されているのかもしれない。

クウェンサーは半ば呆れたように、

「……まあ、パレード用の無茶な都市計画は『安全国』の大都市とかでも見かけるけど。でも、メインストリート以外も同じような幅を維持しているなんて普通じゃないぞ」

「ここは密林の採掘用に作られた街だぜ。超大型の重機をスムーズに進ませるために、道幅と耐久性は折り紙つきって訳だ」

「ふうん。本場のダンプカーとかって、高さだけで学校の校舎ぐらいあるんだっけ？」

「運転席に乗るために階段を上るんだとさ」

その時だった。

青い大空へ突き抜けていくように、遠くの方から銃声が聞こえてきた。それにつられるよ

うに、さらに複数の銃声が立て続けに鳴り響く。神経を集中させると、一口に銃声と言っても音の高さに若干の違いがあるのが分かる。

二つの勢力が互いに撃ち合っているのだ。

ヘイヴィアはライフルのセンサーを操るスイッチに手を伸ばしながら、

「始まっちまった」

「お姫様も近くにいるし、これ以上は隠密に気を配る必要はなさそうだね」

クウェンサーは一応道路の真ん中ではなく、崩れたビルの壁面だろう……数メートルほど積み上がった瓦礫に寄り添い、その陰に隠れるような形でゆっくりと移動しながらも、周囲を見回す。

「どう思う？」

「上は無視して構わねえんじゃねえか。フローレイティアが言った通り、少なくともオブジェクトに致命打を与えるような兵器があるとは思えねえ」

「でも、南極とかイグアスの海岸で襲ってきたスペア砲って、元々はオブジェクトに取り付けて発射するためのレールガンだろ。だったら……」

「二〇万トンのオブジェクトに取り付けて撃つための、な。地面に取り付ける場合、一〇メートル以上のアンカーを地面に刺して固定してんだよ。こんなボロボロの廃墟ビルの床に取り付けたら、発射と同時にビルごと倒壊するんじゃねえの？」

「了解了解。それじゃあ窓から狙撃銃で狙われないように気をつけながら、地面のスペア砲でも探して潰しますか」

と、そこでお姫様から無線で連絡が入った。

『クウェンサー、ヘイヴィア。ちょっと両手で耳をふさいで』

「？」

『ほうげきしえんのオーダーがあった。早くしないとこまくがふきとぶよ』

「クソッたれ!!」

馬鹿二人は叫ぶと、耳を塞いだ上、そのまま地面へ飛び込むように伏せた。

直後。

ドォン!!　という凄まじい爆音……というか、衝撃波が突き抜けた。

複数のビルの先端を引き裂いたコイルガンの砲弾が、はるか遠方で炸裂する。オブジェクトの砲の中では比較的小さいものだったが、それはあくまで怪物兵器のスケールとしては、の話である。

粉塵の中から身を起こしたクウェンサーは咳き込みながら、

「ごほっ、げへっ。ちくしょう、これは支援を受けた味方も命懸けなんじゃないのか……？」

「さ、最低でも着弾点から一〇〇から二〇〇はダッシュで逃げておきてえところだよな」

とはいえ、これがオブジェクトを持つ軍隊の強みでもある。

歩兵の持つ力は、両手で持っているアサルトライフルだけではない。座標情報さえ送信できれば、あのオブジェクトがピンポイントで標的を吹き飛ばしてくれる。まるで虎の威を借る狐状態だが、敵にとってこれほど恐ろしいものはないだろう。

クウェンサーは辺りを見回しながら、

『辺り一面には敵の伏兵、スペア砲の可能性まである。挙げ句に味方のオブジェクトの砲が撒き散らす衝撃波まで気をつけなくちゃいけないって訳だ。……くそ、今時の戦争はオブジェクト任せなんじゃなかったのかよ』

そこで、無線機からフローレイティアの声が聞こえてきた。

『そのスペア砲は、オブジェクトの兵装の中では小規模なレベルよ。主砲クラスじゃないから、それだけでオブジェクトを撃ち抜けるとも思えない。それほど気張る必要はないのよ』

「じゃあ、俺達が出張ってる意味って？」

『ベイビーマグナムにはダメージが入っているって、何度言えば分かるの？　それは推進装置についても同じ　普段はともかく、今のベイビーマグナムは極端な瓦礫を越えられない可能性がある　そうなったら工兵の出番よ　爆薬を使って、手早く足枷を吹き飛ばすように』

そうこうしている内に、お姫様のオブジェクトが街に入ってきた。本来、メインストリートはオブジェクトのパレードに使えるようにできているようだが、その時には道路標識や信号などを撤去していたのだろう　が、今はそんな時間的余裕はない。ベイビーマグナムはベキベキ

と障害物を砕いて前へ進む。
　無線で話をしていたヘイヴィアが、こんな事を言った
「他の連中も別々の場所から街ん中に入ったみてえだな　外周からゆっくり円を縮める感じで、街の中心部まで捜索しろとさ　ドンパチの頻度も上がりそうだぜ」
「具体的にどうするんだ？　ビルを一つ一つ回って敵がいないかどうか確かめるのか？」
「まずはアシを潰す」
　ヘイヴィアは肩をすくめて言った
「敵だって五〇〇人の中隊クラスだぜ　移動も楽じゃないっ　どっかに大規模な車両団があると思うから、そいつを吹き飛ばす　そうすりゃ連中はこの廃墟から逃げられねえ　じっくり追い詰める事ができるって訳だ」
　クウェンサーは頭上の飛行機雲を見上げ、
「……空から分からないもんなのか、それ？　衛星とか戦闘機とかさ」
　こうしている今も、青空を舞うデルタ翼の戦闘機が大きな爆弾を廃墟の真ん中へ落としていた　低い地響きがクウェンサー達の足元を突き抜けていく
『色々面倒なの』
　無線でフローレイティアが面倒臭そうな調子で言う
「一応、衛星が最後に確認したのは、街の中心部にある地下駐車場に大量の車両団を収めてい

るところだったけど　別に車がそれだけとは限らないのよ　事前に用意していたアシを、別の地下駐車場に隠しているかもしれないし』

「じゃ、とりあえず地下っぽい所は全部回るんですね」

『後は、その辺に乗り捨ててある廃車も一応チェックよ　そういう風に偽装しているだけかもしれないし、そいつを使ってスラッダーかハニーサックルだけでも逃がそうとする可能性もあるんだから』

パパパン!!　と遠くから複数の銃声が聞こえてきた

この近くで戦闘が起こっていないのは、偶然敵兵がこの辺りにはいないからか、あるいはベイビーマグナムから遠ざかるように陣形を変えているからか

「追い詰められた状態でそんな作戦を提示されたら、逆にハニーサックルが袋叩きにされるんじゃ……？　『正統王国』にとってハニーサックルが面倒な相手なのは分かるんですけど、連中はそれを『勝利』条件に設定するものなんですか　マスドライバー財閥は安全な場所への『亡命』をゴール地点に定めているんでしょう　一生懸命戦って上官一人だけがゴールに向かうなんて話になったら、捨て駒係にされる周りの連中が納得するとは思えないんですけど」

『クウェンサー　一つ良い事を教えてあげる　連中が何を夢想しているかは関係ないのよ』

フローレイティアは短く息を吐いてから応じた

『こっちはこっちの目的を果たせば良いだけ　たとえハニーサックルが本気で世界平和のため

の方法を考案していたとしても、私達は遠慮なく殺せばお仕事完了　……今回の件で、向こうもこっちを恨んでるでしょうしね　再び力をつけさせたら、「正統王国」に矛先を向けてくる確率も低くはない』

「へえへえ。美人でクールな上官サマはホントにおっかねえな」

遠方から敵味方の銃声や爆発音が響く中、ヘイヴィアが唇を曲げながら軽口を叩いた時だった。

「ッ」

「？」

二人は思わず足を止めた。

目の前の道路が黒かった。二〇メートルぐらい先だ　てっきり過去の地震か何かでアスファルトがめくれ上がり、黒土が露出しているのかと思っていたが、近づいてみると違ったのだ　道路の脇に立っているビルの出入り口の方から、黒いタールのようなものが流れ出ている……ように見えた。黒い汚れは薄く広く流れ出していて、滑走路のように大きな道路の横幅を完全に塞いでしまっている。

そう。

そういう風に見えていた、のだが……

「マジかよ……」

ヘイヴィアが、呻くように呟いた。

目を凝らしてみると、その黒い広がりの正体が液体ではない事が分かるだろう　何かものすごく小さな物体が、細かく上下するように蠢いているのだ。数万、数十万もの黒い集まりが示すものは、もしかするとマニアックなドキュメンタリー番組で観た事のある人もいるかもしれない。

つまり、

軍隊アリの群れだった

ズザッ!!　とクウェンサーとヘイヴィアの二人は思わず一歩後ろへ下がった　大量の小さな虫が与えてくる生理的な嫌悪感と、あやふやで適当な知識に基づいた恐怖感がせり上がってくる。

「おいおい！　確かあれって、数万匹で大移動して、手近にある牛とか豚とか片っ端から食い荒らしていくってヤツじゃなかったっけ!?」

「流石はアマゾン、大自然のレベルが半端じゃねえって事だろ!!」

叫び返しながらヘイヴィアは辺りへ目を走らせる。

わざわざ軍隊アリが占拠している道路へ突っ込むつもりはない　他に脇道があればそちらに

回るつもりだったのだが……

バサバサバサッ!!　という、ビニール袋を丸めるような音が聞こえた

それは、クウェンサー達のすぐ近くに生えていた巨木が、後退するためのルートを遮るように倒れてきた音だった。中身は丸っきり腐っていたが、あちこちへ乱雑に生えた枝が、天然の格子となって退路を阻む　乗り越えたり潜り抜けたりできる密度ではない

ヘイヴィアは目を剝いて、

「ちくしょう!!　何だよ何が起きやがったんだよ!?　ついさっきまでアスファルト突き破ってそびえていたじゃねえか!!」

「かろうじて立っていたのが、お姫様の砲撃支援の衝撃波で揺さぶられたのかも……」

ともあれ、後ろへは三〇メートルも下がれない。

アマゾンシティ跡地の道路の幅は相当広かったが、半ばで折れた巨木はくの字になってアスファルトの上へ倒れ込み、ビルの壁面と巨木の残骸で完全にクウェンサー達を囲んでいた。唯一の出口は軍隊アリが占拠してしまっている。

クウェンサーは昆虫の群れに目をやったまま、隣にいるヘイヴィアの肩をバシバシ叩き、

「ヤバいって！　早く何とかしないとアリとキリギリスの蒼えにされるぞ!!」

「具体的にどうやって!?　数万匹の群れに向かって銃弾なんか撃ち込んでたら、あっという間に弾切れ起こしちまう　かと言って、あんな凶暴なのをブーツで踏みに行ったら返り討ちに遭

うかもしんねえぞ!!」

すると、クウェンサーはヘイヴィアのライフルの先端に取り付けられている物を指差し、

「それ使ってみたら？　先っぽにくっついてる殺虫剤」

「おおっ!!　言われてみれば俺提供のスペシャルアイテムがここに!!」

自分ですっかり忘れていたのか、ヘイヴィアはいそいそとライフルを構え直す。まるで銃剣みたいに取り付けられた殺虫剤のトリガーを引く

すでに軍隊アリの群れは一〇メートルぐらいまで接近していた。

そこへ、殺虫剤の霧が勢い良く直撃する。殺虫剤はスプレー状に広がるのではなく、ほとんど強力な水鉄砲のような直線的な軌道だった。使い方次第では目潰しにも使えそうだな、と楽観的に眺めていたクウェンサーだったが。

ウジャッ!!!!

「ぎゃあ!?　殺虫剤喰らった軍隊アリが死に物狂いの暴走を!?」

「下がれ馬鹿っ！　やっぱ一度距離取んぞ!!　追い着かれたら全身嚙まれる!!」

ヘイヴィアと共に逃げながら、クウェンサーは無線機に向かって必死で叫ぶ。

「ベイビーマグナム！　小型ので良いから、レーザービームとか使ってアリを焼けるか!?」

『やれないことはないけど……』

「じゃあ早くっ！　一刻も早く!!」

『そんな近くで、じめんにちゃくだんしたら、ようせつとはくらべものにならない、はでな光が出るよ、多分、十中八九クウェンサーたちの目がつぶれるとおもうけど』

「ええいくそっ!!　八方塞がり!!」

つつーか、アリに殺されそうって、地味な戦争やってんな俺ら!!」

なおも水鉄砲のように殺虫剤をばら撒きながら、ヘイヴィアが叫ぶ

クウェンサーは近くのビルを見ながら、

「どうする!?　とりあえず建物の上階に逃げて、通り過ぎるのを待つか!?」

「アリのコロニーってビルの中から広がってなかったか!?　それに、仮に軍隊アリの群れが逃げ込んだ建物の中に入ってきたら、いよいよ俺ら追い詰められちまうよ!!」

クウェンサーは自分が背負っているリュックの感触を思い出す。プラスチック爆弾を放り投げて吹き飛ばす、という手もあるにはあるが……、

（でも、それで数万匹のアリを全部駆除できるかって言われると……　一部分を吹き飛ばす事はできるかもしれないんだけどなぁ……）

そこまで考えたクウェンサーは、ヘイヴィアの軍服に取り付けてあった発煙筒に手を伸ばした。唐突な行動に驚いたヘイヴィアは、

「きゃあエッチ！　何すんのよこの痴漢!!」

「意外に余裕あるなヘイヴィア……っつっ!!　スモークグレネードとかヘリへの連絡用の発煙

筒とか全部出せ!!　とにかく煙の出るヤツ全部だ!!」
「なになに？　煙で燻す方向でやんの？」
質問に答えず、クウェンサーは缶ジュースぐらいの塊の先端にあるピンを抜いて、次々に放り投げていく。
ヘイヴィアは呆れた調子で、
「ヘタクソだなテメェ!!　半分もアリのコロニーの中に落ちてねえじゃん!?　しかも煙は上に向かってるから、地面を這ってるアリにはほとんど影響ねえじゃねえか!!」
「いいんだいいんだ」
クウェンサーは急いでプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出し、慎重に量を調整すると、電気信管を突き刺していく。今度はその塊を大きく上へ放り投げた　数十メートルも真上へ飛んでいく。
「今度は爆弾かよ」
「スモークを無駄にしないためのな」
？　と眉をひそめるヘイヴィアに、クウェンサーは無線機のスイッチを押す。
バガッ!!　と、空中で『ハンドアックス』が起爆した。
空高くへ舞い上がろうとしていた煙を、そのまま地面に叩き落とすように。

真上からゲンコツを落とされたような衝撃が走った。

スモークグレネードや発煙筒は、それぞれが白や赤、黄色など、機種によって様々な色に染まっていた。それらが巨大な手で叩かれたように、一気に地面へ落とされ、ぶつかり、全方向に広がっていく。

大量のアリはそれぞれが驚き、バラバラの方向へ逃げようとするが、時間はそれを待たなかった。煙の滞留する一八〇秒程度の間に、ぴくぴくと勢いを失っていき、やがて動かなくなる。

「……痛っつ……。純粋な爆風だけだったら、どれだけ爆薬使ってたか分からなかったな」

「なあクウェンサー。あれホントに死んだのか？　死んだふりじゃなくて？」

「だったら殺虫剤で試してみたら？」

ヘイヴィアは試しに遠くから殺虫剤を撒いてみるが、やはり反応はない。ようやく一息ついたクウェンサー達だが、それでも、何となくアリの群れの中を突っ切るのは気が引けた。できるだけ中心から遠い……つまり、ビルの壁面に沿う形で恐る恐る死骸の敷き詰められた大地を横断する。

アリの死骸の絨毯を抜けると、ヘイヴィアは周囲の様子を観察しながら、

「急ごうぜ。今の爆音やスモークで、マスドライバー財閥の連中もこっちの様子を調べに来る。撃ち合うにしても、囲まれるのはまずい。どうせなら爆弾か何かでトラップ置いていかねえか」

「……いや。あれ見ろよ」
「？　どうしたんだよ」
怪訝そうな顔をするヘイヴィアに、クウェンサーは思わずビルの窓の奥を指差す。
「あそこでぶっ倒れてるの、マスドライバー財閥の連中じゃないか？　ほら、全身噛まれて、ぶくぶくに腫れ上がってるヤツら」
「マジかよ。……道理で俺らだけ銃撃戦を避けられた訳だぜ」
「ホント、戦争って地味だよね」

6

フローレイティアは、後方で展開している整備基地ベースゾーンで待機していた。士官用に用意された執務室には、日本列島から取り寄せた畳が正方形に敷かれており、脚の低いテーブルの上にはノートパソコンが置かれている。
そのパソコンを使って戦況を確認していたフローレイティアに、映像チャットの着信が入った。和風の細長い煙管を煙草盆に置き、フローレイティアは別のウィンドウを開いた。
映ったのは、がっしりとした中年の男だった。
軍服と肩に取り付けられた階級章を見て、フローレイティアは表情を変えないように努力す

る必要があった。

（……『資本企業』軍の、それも少将クラス!!　そろそろ来る頃だと思っていたが……）

『こちら「資本企業」軍。バッファ＝プランターズ少将である。そちらは当方のマスドライバー財閥を追っているという話だが』

（バッファ＝プランターズ……）

名前を聞き、フローレイティアには思い当たる節があった。

（くそっ、クウェンサー達が月面の別荘攻撃から、うっかり助けてしまったＶＩＰ様ね）

「私は現場指揮をしているフローレイティア＝カピストラーノ少佐。……一応先手を封じておくが、この戦争に対し、どういう風に決着をつけるかについて、協議に応じるつもりはない」

階級で言えば少佐と少将には雲泥の差があるが、フローレイティアは特に気にしていない。

それ以前に、敵国同士の軍人だからだ。

それは相手も同じらしく、

『娘さん。我々もくだらないメンツの話をしているのではない。実益の話をしたいと言っているのだよ』

「……こちらがマスドライバー財閥を仕留めた後、彼らの持っていた技術情報を吸収するとでも危惧しているのか？」

実際、『資本企業』が噛んでくるとすればそこだろう。

あるいは、ブレイクキャリアーの建造に関わったオブジェクト設計士、スラッダー＝ハニーサックルだけは、何としても『正統王国』に亡命させたくない、とか。

「ハニーサックルについては、たとえ降伏しても射殺するので心配なさらぬよう。我々『正統王国』は、何よりも名誉と規律を重んじている。こんな形で梯を突いた者を笑顔で迎えるような制度はないので」

『いや、その点については心配していない』

バッファは緩やかな素振りで首を横に振った。

『そもそも、マスドライバー財閥が本気で「正統王国」に亡命する気なら、そちらの部隊と交戦する事はなかっただろう』

「それはそうだろうが……」

フローレイティアは、ついに眉をひそめてしまった

だとすれば、ここで『資本企業』軍の重鎮がコンタクトを取ってきた理由は何だ？

スラッダー＝ハニーサックルの持っている技術情報に興味がないなど、戦場にオブジェクトを持ち込む現代の軍人らしからぬ考え方だ。他に考えられる理由があるとすれば、

（金……？）

スラッダーはオブジェクト設計士として莫大な報酬を得ており、なおかつ、その資金を元手にかなり巨額の株取引を行っていたらしい。一人でオブジェクトを用意して戦争を起こせる男

とまで言われる大物投資家だ。となれば、『その軍資金は本来なら「資本企業」のものだ』と主張する可能性もなくはないが……。

（そんなもの、オブジェクトの開発競争を二の次にするほどの理由になるの？　いや、まぁ、『資本企業』は貯金の大小で人権の序列が変動すると言われるぐらいだし、連中特有の思考方法と言われればそれまでなんだが……）

『いや、失敬。もしかすると混乱させてしまったか』

バッファ＝プランターズは再び首を横に振る

今度は、わずかな苦笑があった

『我々は、ハニーサックルが「『正統王国』へは一亡命しないだろうと言っているだけだ』

「……まさか」

『もはや二勢力だけの問題ではない』

フローレイティアの危惧を補強するように、バッファは続けてこう言った

『マスドライバー財閥は、「情報同盟」への助力を求めているようだ』

彼女の顔色がサッと青ざめた。

『情報同盟』。フローレイティアの所属する『正統王国』に並ぶ、世界的勢力の一角だ。当然、そこに所属する各国もオブジェクトを保有している。今のお姫様と違い、新品同然に磨き上げられた、万金の状態の怪物兵器が。第一世代はもちろん、第二世代の保有数も多い。

テクノロジーの面でも優秀で、特に軍用ソフトウェア関係は『正統王国』軍を凌ぐとさえ言われている。現に、AIによるオブジェクトの無人化計画の研究もあそこが一番盛んだった

（……まずい　その情報が本当なら、今の疲弊した状況で介入されるべき相手じゃない……!!）

歯噛みしたフローレイティアは、とっさに南米大陸の勢力図を思い浮かべる。現在、ベイビーマグナムやクウェンサー達が展開しているアマゾン方面のすぐ隣には、『情報同盟』が支配しているパリマ方面がある

『このままでは、「情報同盟」軍はアマゾンシティ跡地へ「支援」を送る事になるだろう、それが火器や補給物資の提供だけで済むのか、それとも大規模な人員・兵器・オブジェクトを投入するレベルになるかまでは分からんがね』

7

あちこちに、軍隊アリにやられたであろう兵隊達が倒れていた。

どうやらビルの陰に隠れる形で、奇襲用の砲座を設置しようとしている最中だったらしいオブジェクトのスペア用のレールガンや、一〇メートル以上もある長大なアンカーを突き刺すためのボーリング設備のついたクレーン車などが放置されていた。

呆れたような調子で、ヘイヴィアは呟いた。

「取り付け作業に夢中になってて、アリの接近に気づかなかったんだな」

オブジェクト主体の戦場とはいえ、一応周囲のチェックぐらいはしているだろう。しかし、それはあくまでも『人間が近づいてくるであろうルートに対する警戒』だ。例えば、建設重機の真下にあるマンホールからいきなり軍隊アリの群れが静かに溢れ出てきたら、警戒の隙間を縫って奇襲を受ける事になってしまう。

ヘイヴィアは屈み込んで、痙攣するように震える兵隊を覗き込む。

蚊に刺されると、その周囲がぷくっと盛り上がるだろう。兵士達は、そういう痕跡で全身をびっしりと覆った上に、さらに二重、三重に体が膨れたようになっていた。小さなアリに繰り返し噛みつかれた弊害だ。これでも、骨まで食い荒らす種類の軍隊アリではなかっただけでも幸いだっただろう。

クウェンサーは兵隊の数を数えながら、

「……まだ生きてるみたいだけど、どうする？」

「縛って捨てる」

ヘイヴィアは適当な調子で答えた。

「戦意がなけりゃ、放っておいても問題ねえだろ。流石にこんな状態の連中を一人ずつ撃っていくのは後味悪りいし」

「まあ、仮にマスドライバー財閥の味方が発見してロープを解いたって、こいつらが銃を持って戦えるとは思えないんだけど」

「とはいえ、縛った連中が他の動物だの昆虫だのに噛みつかれる可能性までは斟酌してやる理由はねえがな」

「……手当てしたり救助したりって選択肢はない訳だ」

「全部終わって、引き返す時に思い出したら拾ってやるよ」

そこまで言うと、ヘイヴィアは周囲を見回した。

「それにしても、妙だよな」

「何が？」

「マスドライバー財閥の連中、自分で袋小路に追い込まれてねえか？」

ヘイヴィアは設置途中で放置されたスペア砲のレールガンを指差し、

「こんなもん取り付けて籠城したって何の意味もねえだろ。時間が経てば経つほど、『正統王国』軍は大量のオブジェクトを差し向ける事ができるようになっちまうんだぜ。仮に二機目のオブジェクトがあったとしたって、こんな作戦は自分の寿命を縮めるだけだろ」

「言われてみれば……考え方が逆だよな。連中にとって必要なのは『一ヶ所に留まる戦法』じゃなくて、『少しでも遠くへ逃げるための方法』のはず。そもそも、連中は何を狙ってアマゾンシティ跡地にやってきたんだ？」

クウェンサーは少し考え込み、
「……もしもセオリー通り、マスドライバー財閥は『少しでも遠くへ逃げるために』作戦を展開させているとしたら？」
「こうしてスペア砲をガンガン設置して、徹底抗戦の構えを取ってんのに？　そもそも、ここからコソコソ移動しようとしたって、軍事衛星から監視すればバレちまうだろ。後はそこにオブジェクトを差し向けりゃおしまい。……俺ら、二本の足で歩き回って何やってんだ？」
「衛星から見つからないルートなら問題ないんだ」
「あん？」
怪訝な顔をするヘイヴィアに、クウェンサーは自分の足元を指差し、
「地下鉄」
「……おい、嘘だろ……」
「アマゾンシティは元々、かなり大きな都市計画で作られたものなんだろ。だったら、交通関係にも力を入れていたはずだ　ここから別の街まで、直通で地下鉄が通っていても不思議じゃない」
「待て待て待て！　じゃあ、連中がスペア砲を設置してんのは……ッ!?」
「文字通りの時間稼ぎ！　こっちがうろたえている間に、マスドライバー財閥は長いトンネルを通って遠くへ逃げようとしているんだ!!」

クウェンサーはプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出すと、周囲を見回した。地下鉄の出入り口となる階段はすぐに見つかった。間に合うかどうか分からないが、今からでも路線を潰しておいた方が良い。

「おい、アマゾンシティは一〇〇万人規模の大都市だったんだぜ。地下鉄なんて蜘蛛の巣みたいに走ってんじゃねえのか!?」

「市内ならね。でも、他の都市に繋がる長距離路線なら限られてくるはずだ。おそらく二、三本程度!!　ヘイヴィアはネットワークで当時の路線図を出してもらえ!!」

「くそっ、面倒臭せえ事になってやがる!!」

ヘイヴィアは慌ててフローレイティアと連絡を取ろうとしたが、そこで地面に落ちていたアサルトライフルを蹴飛ばしてしまった。軍隊アリにやられた、マスドライバー財閥の兵士が持っていた物だ。

衝撃でライフルからマガジンが外れるのを見て、ヘイヴィアの動きがわずかに止まった。

「どうしたんだよヘイヴィア？」

「いや……マスドライバー財閥って、『資本企業』の組織だったんだよな。兵士にしても兵器にしても、そっちの方から調達していたはずだけどよ」

言いながら、ヘイヴィアはマガジンを足の先で突く

「でも、このスピアライフル社の七・六二ミリ弾……『情報同盟』軍の弾薬じゃなかったっけ？」

何やらブツブツ呟いているヘイヴィア

そこへ、フローレイティアから通信が入った。

『全軍へ！　追撃を急がせろ!!　状況は変わりつつあるの。早急にスラッダー＝ハニーサックルを仕留めないと、戦火が一気に広がる恐れが出てきたのよ!!』

「フローレイティアさん？」

クウェンサーは怪訝な顔になったが、そこでやるべき事を思い出した

「ハニーサックル達の逃走経路が分かりました　おそらく地下鉄のトンネルです！　連中はスペア砲を街の中に設置して時間稼ぎをしながら、軍事衛星からの追跡を逃れるために地下鉄を利用するつもりなんです!!」

『残念ながら大外れよクウェンサー　そんな穏便な話じゃない』

対して、フローレイティアは一秒も待たずに切り捨てた。

『マスドライバー財閥は、「情報同盟」軍へ亡命を希望している事が分かったの。このまま放置しておけば、「情報同盟」軍は「亡命希望者を救出する」という名目で、このアマゾン方面へ進軍しかねない状況になりつつある　どうやら、書類上はすでに「亡命は完了した」という事になっているらしい　ハニーサックルが「情報同盟」側にいない方がおかしいんだと』

「つまり……」

『連中の目的はまんま籠城!!　黙っていれば世界的勢力の一角「情報同盟」がオブジェクト

を使って全力で助けに来てくれるから、それまで持ちこたえるだけ!!　まったくシンプルな作戦よね、くそ!!』

無茶苦茶な……とヘイヴィアは呻いた。

すでに国境を越えて無事に亡命した者を守るならともかく、国境を割って助けに入るなんて話は聞いた事がない　というより、それが許されるなら、国境を引く意味などない。

だが、

ヘイヴィアも、連中のオブジェクトの運用方法は見ただろ　あの技術が手に入るって分かっていれば……　しかも、『正統王国』と『情報同盟』は元々対立関係にある　『これ以上こじれる事のない最悪の状況』なら、国境を割った進軍も十分に考えられるんじゃないか?」

『そうよクウェンサー　そして「資本企業」軍は、ハニーサックルが「情報同盟」へ亡命する事で、自分達のオブジェクト技術が漏洩する事を恐れている　「情報同盟」軍がアマゾン方面に進軍してきた時点で、「資本企業」軍も「何としても亡命を防ぐため」アマゾン方面へ即座に軍とオブジェクトを差し向ける準備を進めているらしいの』

「マジか……　二勢力の戦争だけでも厄介だっつーのに!?」

ヘイヴィアが悲鳴のような声を上げる。

フローレイティアの話が本当なら、最悪の場合、このアマゾン方面は『正統王国』、『情報同盟』、『資本企業』、マスドライバー財閥という、四つの勢力がオブジェクトをぶつけ合う地

獄と化すだろう　このアマゾンシティ跡地はあくまで廃墟だが、戦火が広がっていけば、国境の内側全てが破壊の嵐に呑み込まれる可能性も出てくる　当然、軍人も民間人も問わず、あらゆる人々を巻き込んで

クウェンサーは慌てて口を開いた。

「そ、そんな事になったら、一体何機のオブジェクトが入り乱れる事になるんですか!?　こっちの増援は!?　アマゾン方面のオブジェクトをかき集めたりとかは!!」

『別の作戦で使っているかメンテ中か、いずれにしても増援をあてにできる状況じゃない　そもそも、そんな余力があれば傷だらけのお姫様が立て続けに戦う必要もなかったはずよ』

最悪じゃねえか……とヘイヴィアが呟く

同じ感想を抱いていたのか、フローレイティアも忌々しそうな調子で、

『だから急いでハニーサックルを潰して、この戦いを私達の手だけで終わらせるの　マスドライバー財閥を完全に叩けば「情報同盟」が介入する理由も消える　そうすれば「資本企業」が乗り込んでくる理由も連鎖的になくなる　それができなければ、追い詰められるのは私達の方よ。ベイビーマグナムがどういう状態か分かっているよね？』

「ちくしょう。ヤバいぜクウェンサー……」

ヘイヴィアが呻くように言った

ブレイクキャリアーとの戦闘で、お姫様のオブジェクトも大きなダメージを負った。そして、

その修復を終えずにここへやってきている。単なる残党への追撃なら十二分な戦力だが、複数の世界的勢力が鎬を削る――最先端のオブジェクトがぶつかり合う激戦区となれば話は別だ。万全の状態であっても何が起こるか分からないレベルの戦場で、ダメージの尾を引いたまま戦えばどうなるかは目に見えている。

目の前が真っ暗になる錯覚すら覚えるクウェンサーは、くらくらした頭を必死に動かして質問する。

「フローレイティアさん。タイムリミットは……『情報同盟』軍が絡んでくるまでのタイムリミットは分かりますか？」

「具体的な作戦行動時間までは摑めていないの。ただ、モタモタする理由は特にないね。私だったらさっさとやる。『正統王国』が治めるアマゾン方面と、『情報同盟』が治めるパリマ方面の間にある国境線。その『情報同盟』側に、仮設のプレハブ建築がいくつも建てられているのが衛星で確認できた。おそらくオブジェクトの整備基地ベースゾーンでしょうね。そいつが完成し次第、おそらく最先端のオブジェクトが国境を割って突撃してくるはずよ』

机を指で叩いているのか、コツコツという音と共に、慎重に言葉を選ぶようにフローレイティアは言った。

『おそらくベースゾーン完成まで二時間程度。それまでにマスドライバー財閥を叩いて、スラッダーハニーサックルを抹殺しないと、「情報同盟」軍と「資本企業」軍が同時に攻め込ん

でくる事になるのよ』

くそっ!!　とヘイヴィアは吐き捨てる。

「ったく、マスドライバー財閥が二機目のオブジェクトを隠しているとしたら、そっちと戦うだけでも勝率は五分五分かもしれねえってのに！　変に急かしやがって、ここで躓いたらどうしようもねえぞ!!」

「なぁヘイヴィア。ここにスペア砲のレールガンがあるって事は、やっぱり莫大な電力を供給しているオブジェクトはあるって事だよな」

クウェンサーは設置途中だったレールガンの周りを確かめながら、

「もしかすると、この送電ケーブルを辿っていけば、オブジェクトの所まで案内してもらえるかもしれないぞ」

「とにかく場所の特定を急ごうぜ　向こうのオブジェクトを見つけても、短期決着つけられるかどうかは分かんねえんだしよ!!」

しかし、その作業に入る必要はなかった。

ズズン……ッ!!　と、遠方から重たい爆発音が聞こえてきたからだ　腹の奥に響くような低い震動に驚いたクウェンサー達は、多数のビルに阻まれた数キロ先の地点から、灰色の粉塵が空高くへ巻き上がっているのを発見する

「な、何だっ!?」

『クウェンサー、ヘイヴィア！　すぐにそこから離れるのよ!!　マスドライバー財閥に動きがあった！　連中、地下街の屋根に大きな風穴を空ける形で爆薬を吹き飛ばしやがったの!!』

「それが……？」

訝しむヘイヴィアの横で、クウェンサーは携帯端末を取り出し、衛星からの地図を呼び出す絶句するクウェンサーが見たものを説明するように、フローレイティアの切羽詰まった声が続く

『やってる事は南極やイグアス方面の海岸線と同じ、オブジェクトのスペア砲よ。でも、今回はケタが違う！　連中、ブレイクキャリアーの主砲に使っていた大出力レールガンの予備をそのまま持ち出してきたの!!』

「……ッ!!」

ギョッと身を強張らせる二人。

実証されただけでも、五〇〇キロ先から一撃でオブジェクトを貫通させた、あの悪魔の大砲あんな物を撃ち込まれたら、クウェンサー達どころか、お姫様のオブジェクトだって瞬殺されてしまう。

「どうすんだクウェンサー!?」

「今なら間に合う……」

表示が消える寸前の地図を必死に思い浮かべながら、クウェンサーは無線機を掴む。

「ベイビーマグナム!!　砲までの距離は三〇〇〇メートル強だ！　こっちの主砲も十分に届く！　向こうに撃ち込まれる前にやっちまえ!!」

言葉に、同じ事を考えていたのだろう、すぐ近くを進んでいたお姫様のオブジェクトは即座に応じた。

ベイビーマグナムと大出力レールガンの間には、多数のビルが乱立していた。お姫様がここで主砲を撃っても、間にある障害物を貫く内に軌道が変わってしまう可能性も高い　対して、ブレイクキャリアーの主砲の破壊力があれば、遮蔽物を無視して一直線に突っ込んでくるだろう。

ここでは駄目だ。

そう判断したお姫様のオブジェクトが、真横にスライドするように移動する。ターゲットである大出力レールガンを中心軸にして、大きく円を描くように動こうとしているのだ　直線の国道まで出てしまえば、障害物はない。そこからお姫様が主砲の下位安定式プラズマ砲でも撃ち込めば、確実に仕留められる。

しかし、

『……っ!?』

お姫様の息を呑む音。

オブジェクトが急に動いた反動か、あるいは元々老朽化していたせいか。すぐ近くにあっ

たビルが突如倒壊した　クウェンサー達は破片にやられないようにするため、慌てて裏路地へ逃げ込む。一〇階建てぐらいの建物の真ん中からへし折れた『残骸』は、道路の上に落ちて、コンクリートの山という巨大なバリケードを作ってしまう。

津波のような粉塵は、数秒遅れてクウェンサー達を包み込んだ。

「うえっ、げほっ!?　ヘイヴィア、ヘイヴィアっ!?」

「クウェンサー、下手に動くな!!」

視界が利かない中、ヘイヴィアの声が変な方向から聞こえてきた。

真下だ。

「ビルが崩れた衝撃で、裏路地の道路が崩れちまってる。下手に動くと地下街へご案内だ!!」

ヘイヴィアの声の調子からすると、落下と共に深刻な重傷を負った訳ではなさそうだった。

「ここから上がるのは無理だな　俺は別の出口を探す　合流するまで死ぬんじゃねえぞ!!」

それっきり、声は聞こえなくなる。

おそらく言葉通り、ここから立ち去ったのだろう。

ヘイヴィアの方も心配だが、懸念はそれだけではない。クウェンサーは気持ちを切り替え、無線に向かって話しかけた

「ごほっ、ごほっ　ベイビーマグナム！　状況はどうなった!?」

『がれきをのりこえられないっ!!　このままだと……っ!!』

お姫様の悲痛な声が聞こえる。ようやく粉塵が晴れてきた。クウェンサーは足元に気をつけながら走り出す。ベイビーマグナムの元へ向かいながら、プラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出したクウェンサーだったが、電気信管を突き刺す前にその動きが止まった。

大きすぎる

道路一面を塞ぐコンクリートの山は、高さだけでも一〇メートル弱はあった。ここまで積み上がってしまうと、どういう風に爆弾を仕掛けたところで、工兵一人の手持ち量では対処できない

「ベイビーマグナム！　主砲で瓦礫を吹き飛ばせるか!?」

『ここからじゃ……ッ!?』

「なら、一度下がれば――ッ!!」

言いかけて、クウェンサーは気づいた。

ベイビーマグナムの推進装置は、球体状の本体の下から延びた、逆Y字のパーツを主としている。そのパーツの下から大量の静電気を生み出して巨体を浮かばせ、レーザーの乱反射を利用した空気の急速膨張で前進する仕組みなのだが……、

「くそっ、落ちてきた瓦礫の山に『脚』を挟まれているのか……ッ!?」

『クウェンサー、ぜんぶじゃなくても良い。うごきをふうじているがれきだけでも、ふきとばせない？』

「やってはみるけど……ッ!!」

クウェンサーは山のように積み上がった瓦礫を見上げる。確かに、爆弾を使えというのは、瓦礫を全てどかせと言われるよりは簡単だろう。しかし、それでもベイビーマグナムの自由を確保できる保証はないし、瓦礫の一部分を崩した事で、他の部分の瓦礫がさらに土砂崩れのように覆い被さってくる可能性も否定できない。

モタモタしている今も、マスドライバー財閥の大出力レールガンはこちらへ砲口を旋回させ続けている事だろう。

クウェンサーは地震で崩れた石垣のようになっている瓦礫に手をつきながら、

「ここの瓦礫から『脚』を抜いたらどうする!? 迂回できるか!?」

『オブジェクトの巨体をとおせる、大きなみちは少ないの。だから、かなり大回りになるはず……っ!!』

くそっ、と吐き捨てながら、クウェンサーは爆弾を仕掛けるため、瓦礫に手足を引っ掛けて登ろうとする。ベイビーマグナムの逆Y字推進装置を上から押さえつけている瓦礫を吹き飛ばすには、七メートル以上登らなければならない。

だが、それもままならなかった。

瓦礫の山は、ロッククライミングの愛好家が集う絶壁とは違い、一枚岩ではない。手すり代わりに摑んでいたコンクリートがあっさりと崩れ、クウェンサーは路上へと転がってしまう。

『クウェンサーっ!!』

ちくしょう、爆弾は投げた方が手っ取り早いか!?」

爆弾は仕掛け方で破壊力が変わる　これだけ大質量の瓦礫を吹き飛ばすとなると、単に爆弾を置くよりも、瓦礫の中に埋めてしまった方が効果的だ　元々、手持ちの爆薬全てを使っても達成できるかどうか分からない以上、そういう工夫をしなければならないのは当然なのだが……

『クウェンサー、左手のビルに入って、そこの3かいのまどから、かべのでっぱりを伝ってがれきの上に下りた方がてっとりばやいはず！』

「くそっ、間に合うのか……ッ!?」

起き上がったクウェンサーは、歯噛みしながらもビルへ飛び込む。広い空間が確保されていた。数階上まで吹き抜けになっている。

彼はそこで絶句した

エレベーターは当然使えないが、階段代わりのエスカレーターも途中から崩れていた　これではビルの三階まで上がる事はできない。

（他に……他に非常階段は!?）

辺りを見回すクウェンサーだが、焦るばかりで何のヒントも得られない。

二〇〇〇メートル先ではマスドライバー財閥の大出力レールガンは、もうそろそろロック用

の電波を照射し始めているかもしれない
その時だった
『こちらバーニング・アルファ、ベイビーマグナムへ、話は聞いていたが、どうやらお困りのようだな　こっちは空爆用の五〇〇キロ爆弾をぶら下げている　必要なら瓦礫の上に投下できるが？』
上空を飛んでいる戦闘機からの通信に、クウェンサーはギョッとした。
そんなご大層な爆弾を使ってくれるならありがたいが、おそらくそれはできない。爆弾を投下する前に、マスドライバー財閥側の対空砲火で撃墜される可能性の方が高い。
クウェンサーは慌てて無線機を摑み、
「バーニング・アルファ！　アマゾンシティ跡地でオブジェクトのスペア砲の稼働が確認されている!!　対空レーザーがある可能性も高い！　早く逃げるんだ！　そんな所を飛んでいると、あっという間に撃ち落とされるぞ!!」
『分かっているよ、ベイビー』
切羽詰まったクウェンサーの言葉に、戦闘機のパイロットは笑いながら応じた
『ようは、向こうがロックできないコースを進みゃ良いのさ』

設置途中のレールガンが放置されていたり、地下街のスペースに隠されていたブレイクキャリアーの主砲の予備である、大出力レールガンが稼働準備に入っている事からも、同様の『オブジェクトに搭載されるはずだった対空レーザービーム砲』が、アマゾンシティ跡地に設置されている可能性は極めて高い。

通常、光の速さで飛んでくる対空レーザーに、戦闘機が抗える術はない

電波や赤外線照準でロックされた次の瞬間には、もう複合素材の航空機は爆破されている

脱出装置のレバーを引き上げるだけの猶予すらも残されていない

ただし。

確かに、いくつかの例外はあった。

一つ目は、ジャミング装置やチャフ、フレアなどを利用して、オブジェクト側にロックされる事そのものを妨害してしまう事。実際には、オブジェクトは複数の方式で同時にロックを仕掛けるため、必ずしも成功するものではないのだが……運良く成功すれば、数秒から数十秒程度は逃げ切る事ができる。

二つ目は、極めて低空を高速で突き進む事。

レーザーは光だ。空気中の塵が多い低空の方が、威力が減衰したり、軌道がねじ曲がったりする可能性は高い。アスファルトの上ならヒートアイランド現象などで蜃気楼が発生する事も

あり、さらに『狙ったレーザーが狙った所へ届かない確率』は跳ね上がる。とはいえ、低空を飛んでいれば安心という訳ではなく、全速力を出し続けるのは基本だが。

しかし。

それは、逆に言えば無数のビルが乱立し、電柱や電線が複雑に交差する街の中を、時速一二〇〇キロ以上の速度で突き進めと言っているようなものだ。

バーニング・アルファと呼称される『正統王国』軍のパイロット、スタッカート・レイロングは、操縦桿を握る右手に全神経を集中させる。

高度わずか五メートル。突き進んだ直後に音速超過時の衝撃波が、都市の亀裂から伸びる木々を吹き飛ばしていくが、スタッカートにそれを認識する時間はない。

マッハ一、時速一二〇〇キロという事は、一秒間に三三〇メートル以上進んでいるという事を意味している　直線的な国道を中心に進み、時に主翼を縦一直線に立てるように機体を曲げてビルとビルの間をすり抜け、時に錆びついた歩道橋の真下を潜り抜けながら、ものすごい速度で廃墟の中を突き抜けていく

（確かに、ほとんど自殺行為だが）

その時、眼前に巨大なビルの壁が迫った

ほとんど錯覚を感じるほど、ビルは大きな怪物が口を開くように、視界全体に広がる　今度こそ避けられない

（生憎、こうまでしても飛行機に乗りたいぐらい、こいつが好きなもんでな!!）

ズバッ!!　とデルタ翼の小型機がそのまま突っ込んだ

とはいえ、激突したのではない。

ビルの四階。

壁一面のガラスを丸ごと失ったビルの窓から内部へ飛び込んだ戦闘機は、そのままフロアを潜り抜け、反対側にあった別の窓から突き抜けて外へと飛び出したのだ

元々、スタッカートの操る小型機は、強襲揚陸空母で使われているものだ　着陸用の滑走路は一五〇メートル程度　旧式の大型空母に比べると、半分ぐらいしかない　そのため、スタッカート達の操るデルタ翼の小型機の下面には、地面や滑走路との距離を正確に測るためのセンサーが複数取り付けられているのだ

スタッカートはそのセンサー群を応用していた

直線的なレーザーを発する事で、ここから目的の場所まで、ビルの内部を含めて一本道で繋がっている事を確認した上で街の中を突き進んでいるのだ。

とはいえ、最低で建物内部の床や天井に五〇センチまで迫るアクロバットである　超高速で通り過ぎる景色から正確に位置情報を割り出し、センサーからの情報を信じ抜き、迷わず内装のないビルの中へ飛び込む度胸を示し、操縦桿をミリ単位で正確に操るだけの腕がなければ、即座にビルの壁面に激突しているだろう

正気の沙汰ではない。

しかしスタッカートは、口元に野蛮な笑みを浮かべながら、さらにスロットルを開放。アフターバーナーまで点火させ、それこそ全速力で突き進む。

理由は単純。

（戦場の主役はオブジェクト、俺達、戦闘機乗りが活躍するような戦いなんて、もう限られた場所にしか残されちゃいないが……）

スタッカートは自分の視力とセンサーからの情報を組み合わせ、恐るべき精度で戦闘機を操りながらも、こう思う。

（たまには、こっちだって主人公をやりてぇんだよッッッ!!）

複数のビルの内装のないフロアを超音速で突き抜けたスタッカートは、そこで視界が急速に広がるのを感じた

そこにあるのは、戦争の象徴である超大型兵器オブジェクトと、そのオブジェクトの足元に半ば嚙みつくように広がっている瓦礫の山。

スタッカートは指先で五〇〇キロ爆弾の安全装置を外す。

交差は一瞬。

落とすというより空間に置くような感覚で、スタッカートは瓦礫の真上に爆弾を投下する。

9

崩れた階段の他に非常階段がないかどうか、廃ビルの屋内を見回していたクウェンサーの真上を、デルタ翼の小型機が一瞬で突き抜けた。

壁一面のガラスを失った窓から飛び込んだ戦闘機が、そのまま吹き抜けの四階辺りを突破したのだ。

ドォン!!　という超音速特有の衝撃波が直後に襲いかかり、クウェンサーの体がノーバウンドで二メートル以上も後ろへ飛ばされる　落下時の衝撃より、耳から頭の奥に走る激痛の方がひどかった　思わず呻き声を上げようとしたクウェンサーだが、それだけの暇はない。

外

ベイビーマグナムの行く手を阻む瓦礫の山の頂点

そこからほんの二メートルの位置に、何かが浮かんでいた　いや、投下されたのだ。黒光りする鋼鉄で作られた、長さ三メートルほどの巨大なカプセル状の物体だった。バーニング・アルファの言が正しいのなら、

（五〇〇キロ爆弾……ッ!?）

気づき、クウェンサーはただでさえ床に転がっていた体を起こし、廃ビルの地下への階段へと飛び込んだ。

直後、

カッ!!　と

莫大な閃光と共に、全ての音が消えた

薙ぎ払うような爆風が地上を突き抜けた　地下に逃げ込んでいたはずのクウェンサーの体すら、衝撃波に叩かれて数メートルも飛ばされた　しかしそれは幸いだったかもしれない　階上から大量の瓦礫が降り注ぎ、つい先ほどまで彼がいた場所を潰していたからだ

耳鳴りすらも聞こえなかった

クウェンサーは壁に手をつき、瓦礫を伝って、元々老朽化で穴が空いていた天井の一角から地上へ身を乗り出す　すぐ近くの裏口から、ビルの外へと飛び出した

「ちくしょう、あのパイロットは俺を殺す気か……っ!!」

一〇メートル近く積み上げられていた瓦礫の山は、跡形もなく吹き飛ばされていた　ベイビーマグナムの自由は取り戻されている　しかし、代わりに周りのビルが爆風に薙ぎ倒されかけていた　再び瓦礫に邪魔をされる前に、お姫様のオブジェクトが動き出す

『「かいあんていしきプラズマほう」をうつから、クウェンサーはそのまま伏せてて!!』

お姫様から通信が入る

ベイビーマグナムは相手の照準から逃れるように、そして遮蔽物のない場所から一直線に敵を撃ち抜くため、三〇〇〇メートル先の大出力レールガンを中心軸にして、大きく円を描くように高速移動する。

巨大なバイパスに到達するまでおよそ五秒。

お姫様のオブジェクトの七門の主砲の内、三門はブレイクキャリアーとの戦闘で破壊されて使い物にならない。彼女は残る四門の主砲のアームを動かし、正確に狙いを定める。

その時。

クウェンサーの背筋に、何かゾッという悪寒が走った

違和感があったのだ。

ブレイクキャリアーの主砲は、確かに強力だ。実証されただけでも、五〇〇キロ先で高速移動する最先端のオブジェクトを一撃で貫くほどなのだから。たとえオブジェクトに搭載しなくても、砲台としても十分に脅威的だろう。

しかし。

（そんなに凄まじい威力の砲を、地面に固定なんてできるのか……？）

オブジェクトは大小一〇〇門以上の砲を備えている。南極やイグアス方面の海岸線に設置されていたのは、その中でも最も小さなレールガンだ。そして、そのサイズであっても、地面に固定するために一〇メートル以上もの長さのアンカーを突き刺していたのだ。

ならば

マッハ二五を叩き出し、オブジェクトを一撃で葬る怪物サイズの主砲を固定するためには、一体どれだけのアンカーが必要になる？　というより、そんなものを用意できるのか？

（まさか……）

五〇〇キロ爆弾の衝撃波に打ちのめされ、半ば朦朧としていたクウェンサーの意識が、次第に湧き上がる恐怖によって、強制的にはっきりさせられてくる。

（まさか――――罠!?）

クウェンサーは痛む体を動かし、お姫様のオブジェクトが向かった方を見ようとする。

この時点で、すでにクウェンサーは『マスドライバー財閥は二機目の謎のオブジェクトを保有している』という可能性を捨てていた。仮にそれが本当なら、ブレイクキャリアーの大出力レールガンをあんな風には使わない　素直にオブジェクトに搭載して運用した方が効率的だからだ。

つまり、マスドライバー財閥はオブジェクトなど持っていない。

しかし、現に南極やイグアス方面の海岸線では、何者かが莫大な電力を供給していた

その正体は、考えてみれば簡単だったかもしれない

（試作実験炉……ッ!!）

歯噛みし、クウェンサーは無線機を掴み取る

オブジェクトの心臓部であるJPlevelMHD動力炉が正常に建造できているかどうかを確かめるために作られる、試作炉の事だ　おそらく南極やイグアス方面の海岸線では、この十数メートルサイズの試作実験炉を潜水艦などに搭載し、海中から送電ケーブルを延ばして電力を供給していたのだろう

「ベイビーマグナムへ……」

そして。

敵の目的は。

この局面で撃てもしない大出力レールガンを無理に動かして

その大出力レールガンを最も破壊しやすいポイントへお姫様を誘導して

虎の子の試作実験炉を、最も効率良く利用するための方法は、

「敵の主砲のレールガンは罠だ!!　おそらく地中に試作実験炉が埋まってる!!　動力炉の臨界爆発を利用して、オブジェクトを吹き飛ばすために、だ!!」

通信に、ベイビーマグナムを操っていたお姫様はギョッと身を強張らせた

しかし時間は待たなかった

あるいは、逆Y字の推進装置が万全だったなら、静電気やレーザーの力を存分に振るって、

緊急回避できたかもしれない。
最悪の条件が重なった。
そして、お姫様のオブジェクトの足元から、巨大な爆発が炸裂した。

10

試作実験炉の臨界爆発の少し前。
士官室のフローレイティアは、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。
原因は、脚の低いテーブルの上に載ったノートパソコン。映像チャットの画面が開いているのだが、相手はついさっきまで話していた、『資本企業』軍のバッファ＝プランターズ少将ではない。それよりさらに面倒臭い相手と繋がっている
『情報同盟』軍。
レンディ＝ファロリート中佐。
二〇歳ぐらいの年齢の、銀髪に褐色の肌の女だった。胸元にある勲章の略式章の数から鑑みるに、おそらく少年兵からのし上がってきたフローレイティアよりも、さらに長く戦場で活躍してきたのだろう。
『率直に申し上げまして。我々としては、別にスラッダー＝ハニーサックルの生命に興味はな

いのです。彼の持っている技術情報さえ手に入れば。そのための最も効率の良い方法として、ハニーサックル氏の亡命を支援する……という選択肢が極めて有効である事は認めますがね』

「そのために国境を割って、我々のアマゾン方面へオブジェクトを侵攻させれば、それこそ全面戦争だな。単なる小競り合いではなく、互いの「本国」を直接狙うレベルの。その意味が分かっているか？　それほどの価値があるものか？」

『回避するための方法はいくつかあります。例えば、あなた方がマスドライバー財閥の拠点を襲い、そこでハニーサックル氏の技術情報を収めたデータでも見つけられれば、それをこちらに回していただく事で、問題は解決すると思いますが』

「……それを『資本企業』軍が容認するとでも考えているのか？」

『でしょうね』

画面の中で、レンディはにっこりと微笑んだ

『ですが、そんな些細な問題は当方に関係のある話ではありません。「正統王国」と「資本企業」が戦争をしようが、我々「情報同盟」には何ら影響のない事ですので』

だろうな、とフローレイティアも頷いた。

だからこそ、こんなヤツに協力してやる義理はない。

「そうまでして、手に入れたいものなのか？」

『何がでしょう』

「確かにブレイクキャリアー……マスドライバー財閥のオブジェクトに搭載されていた、主砲の大出力レールガンの威力は破格だった。あれは宇宙開発技術の結晶である、マスドライバーを応用しなければ建造できるものではないだろう　しかし、あれは『資本企業』軍のフォーマットだ『情報同盟』軍のオブジェクトとは、規格や相性の面で噛み合わない可能性もあるそれを、そうまでして手に入れたいのか？」

『いえいえ、我々が欲しているのは大出力レールガンではありません』

「？」

『マスドライバー財閥の名前の通り　宇宙進出技術を欲しているんですよ。様々な機関や組織が電磁式の宇宙開発基地建造のための研究を続けていますが、技術力の不足、開発費用の問題、安全性の確保、世界的なフォーマットがレーザー式軌道エレベーターへ傾きつつある事への不安などから、どこも頓挫しつつあるのが現状です。……兵器としてのレールガンは作れても、人員や物資を、安全、安価、安定して運ぶマスドライバーには応用できないというのは、何とも皮肉な話ですがね』

レンディはすらすらと述べる。

『今この段階で実用レベルの量産に成功しているのは、あの財閥ぐらいです。その技術を途絶えさせてしまうのは、あまりにも惜しい。我々は彼らの技術文化に敬意を払い、保存するべき価値があると判断した訳です。だからこそ、「マスドライバー技術を採用して欲しかったけど、

どこにも売り込みをかけられなかった」ハニーサックル氏達は、快く亡命しようとしているらしいですけどね』

『情報同盟』軍の中佐の言葉に、フローレイティアは眉をひそめた。

今の話はおかしい。

「……こちらを煙に巻くつもりか？　確か『情報同盟』の新型シャトル方式は、我々と同じレーザー式軌道エレベーターだったはずだ。レールガンを主体としたマスドライバーの技術を得たところで、何かの役に立つ訳がない」

『ええ。今はね』

銀髪に褐色の女、レンディ＝ファロリートは意味深な事を言った。

『確かに今この瞬間は、レーザー式軌道エレベーターの方が効率は良いと言われています。ですが、その定説もいつまで正しいかどうかは分かりません。……後になってから、実はこういう弱点や問題があったのだ、とか判明するパターンも珍しくありませんしね。そうなった際、対応策や代案が一つもないでは困るのですよ。そのためのマスドライバー技術です』

「……」

フローレイティアはわずかに黙った。

言っている事には一理ある。

しかし、

「いつ起こるか、どんな風に起こるのかも分からない未知の問題に対処するためだけに、一〇〇%明確に起こる戦争を容認するだと……？」

『ええ』

レンディはあっさりと頷いた。

『あなた達の場合、兵器開発競争ではテストに負けた方の試作機はスクラップにするそうですね。しかし、我々に言わせれば……それは、あまりにももったいない。性能が拮抗しているなら、両方とも保存すればよいのです。単なる死蔵状態のデータだけではなく、職人の指先の感覚をも含めた、いつでも使える「生きた情報」をね』

「……」

『その膨大で、一見無駄とも言える圧倒的なデータ群こそが、予測もつかない世界的トラブルから身を守る術となるのです。大量の弾幕を張るための無駄弾を惜しんでいては、敵の侵攻は止められません。たとえ無駄であっても、その弾幕が分厚ければ分厚いほどに、我々の安全は高まるのですよ』

「パーフェクト・ブラウジングか……」

忌々しそうにフローレイティアは呟いた。

『情報同盟』の連中は、検索エンジンに文字列を打ち込むだけで、世界の危機の対処法が表示されるようなシステムを作り上げようとしている訳だ。

「だが、生憎とそちらの作戦は『スラッダー＝ハニーサックルの亡命』という軸を失えば意味をなくす。パリマ方面側の国境で準備を進めている『情報同盟』軍のオブジェクトが動き出す前に、我々の手でハニーサックルを抹殺し、マスドライバー財閥のデータ群を破壊してしまえばおしまいだ。一〇〇％確実にマスドライバーの技術情報が手に入るならともかく、『戦争を起こしても情報は手に入る可能性は極めて低い』状況になってしまえば、流石にそちらの上官も作戦を容認したりはしないだろう」

『ですね』

レンディ＝ファロリート中佐は率直に認めた。

認めた上で、彼女は微笑みながらこう言った。

『しかし、そんな余裕がありますかね？』

「……、」

『仮にスラッダー＝ハニーサックルが、「正統王国」軍のオブジェクトを破壊してしまった場合、もう我々の進軍を止められるものは何もなくなりますが』

そして、『正統王国』軍との通信が切れると、レンディ＝ファロリートはソファへ深く身を沈めた。アマゾン方面の隣にあるパリマ方面は赤道直下という事もあって気温は三〇度を超え

ていた。彼女のような士官でなければ、エアコンの恩恵を受ける事ができず、全身汗だくになって作業するしかないだろう。

ソファから一度身を起こし、ホテルにあるような小型の冷蔵庫からブランデーを取り出したレンディは、褐色の指先を動かして大きなグラスに液体を注ぎながら、音声認識モードで同じ整備基地ベースゾーン内の格納庫へ回線を繋げる。

彼女の質問は端的だった。

「ウチの第二世代の『ガトリング０３３』、出撃準備はどれぐらいで完了する？」

『30分もあれば何もかもせんめつできますわよ、おほほ』

11

体が内側から焼き焦がされたかと思った。

仰向けに転がったクウェンサーは、呻き声を上げようと思ったが、声も音も出なかった。喉が異様に渇いている。視界には白いスクリーンのような残像がいつまで経っても張り付いていた。耳は激痛を通り越し、逆に耳鳴りすらも響かない。

無線機の発光ダイオードがチカチカと点滅していた。

数秒経って、ようやくクウェンサーの耳に信号音が届く。

出来損ないのロボットのような動作で指に命令を送り、転がっている無線機を摑み取ったクウェンサーは、ひび割れた唇を必死に動かす。

「……大、丈夫か……？　なんか、一瞬あのオブジェクトが浮いたような錯覚があったんだけど……」

『クウェンサーは……？』

「何とか、火加減を……間違った、バーベキューみたいにはならずに済んだよ……」

無論、本来ならば即死していたはずだ。

お姫様のオブジェクトの真下に仕掛けられていた試作実験炉は、おそらく『爆風の向き』を調整されていたのだろう。普通の爆弾でも同じだ。爆弾は仕掛け方で破壊力が変化する。より堅牢な標的を正確に爆破するためには、コップ状の鉄板で爆弾を覆って『爆風の向き』を一点に集中させる事もある。

もちろん、試作実験炉の特別臨界爆発の爆風の向きを調整するなど、ただの鉄板でできる事ではない。

（……オブジェクトのオニオン装甲のスペアを使った訳か）

『こっちは、足元をおもいきりやられたせいで、みうごきがとれない』

「くそっ、やっぱり今の臨界爆発で推進装置を丸ごと破壊されたか。ここから先は砲台として作戦に組み込んでいくって感じなのか？」

『ううん、そのせいで、カウントダウンがはじまってる』
「カウント、ダウン？」
『システムのはんだんまち。てきに「ろかく」されないようにするための。こっちでもコマンドをキャンセルするように努力してるけど、多分システムのはやさにおいつけない』
「自爆装置……ッ!?」
超大型兵器オブジェクトを運用する上で最も避けたいのは、自国のオブジェクトを敵に奪われて、そのテクノロジーを解析されてしまう事だ。そのため、お姫様のオブジェクトには最悪の場合を防ぐための、自己破壊機能が取り付けられている。
この機能は操縦士エリートが意識不明になった際にも的確に機能させるため、機体のダメージに合わせて自動的に判断される。
お姫様は、それを止められないと言っていた。
このままではベイビーマグナムは大爆発を起こす。それは、先ほどの試作実験炉以上の範囲を吹き飛ばすだろう。地中に埋まっている爆弾より、地上に置いてある爆弾の方が、爆風は広範囲に広がっていくはずだ。
ところが、お姫様はこう続けた。
『パターンBは、まだじばくはしないの』
「どういう事だ？」

どうやら、対歯獲用の自動安全装置にも、いくつかのグレードがあるらしい。もうどうにもならないとプログラムが判断した場合は、エリート射出後、速やかにオブジェクトを内側から吹き飛ばして技術情報の流出を防ぐのだが、パターンBはそこまでではないようだ。

パターンBの場合は、操縦士エリートを射出するに留まるらしい。この後、エリートが同型機や後継機に乗るか、大破したオブジェクトを回収して修理するかの判断は人間に任せる。状況が悪化してオブジェクトが敵に歯獲されそうになった際は、エリート自身か指揮官クラスの命令信号によって、遠隔地から爆破できるようにする。普段、オブジェクトは外部からのハッキングを防ぐ機能を持っているが、緊急時は何重ものハッチを開放する事で、無線信号を受信できるような状態にするらしい。

そんな説明をしていたお姫様は、そこでポツリと言った。

『ごめんなさい、クウェンサー　ここでオブジェクトを失ったら、クウェンサーたちに大きなふたんをかけるのは分かっていたのに……』

「だっ、大丈夫だ。元々ブレイクキャリアーのダメージを押して、無理に戦わせてたのはこっちなんだ。お姫様が気にする事じゃない」

口ではそう言ったクウェンサーだが、やはり動揺は隠せない。

戦争の代名詞はオブジェクト。

それを失う事が、どれだけ兵士の死亡率を高めるかは言うまでもない。

マスドライバー財閥は『二機目のオブジェクト』ではなく『試作実験炉』を軸に戦っていた訳だが……それでも油断はできない　こちらのオブジェクトがなくなれば、後は生身の兵士と兵士がぶつかり合う、勝敗の分からない戦争に突入する

さらに、下手をすると、この後に『情報同盟』軍や『資本企業』軍の最先端オブジェクトの介入がある可能性も出てくる。もしもそんな展開に発展したら、オブジェクトなしの自分達に勝ち目はない。

クウェンサーは壁に手をついて、のろのろと立ち上がりながら考える

（……こうなったら、ますます短期決戦で勝負を決めるしかないな。一刻も早くマスドライバー財閥を無力化して、それ以上の介入をさせないようにしないと……）

「とにかく、一度ここから離れよう　これから自動的に射出されるんだろう？　予想降下ポイントを携帯端末に表示できるか？　そしたら手っ取り早く合流できるんだけど」

『これからそっちにおくる　今、しゃしゅつまで７００びょうって出た』

お姫様の言葉を聞きながら、クウェンサーは携帯端末を操作する。彼女の降下地点に向かうため走り出す　一度オブジェクトのすぐ横を通り過ぎるコースだった

オブジェクトから半径二〇〇メートルぐらいの街並みは破壊されていた。アスファルトはめくれ上がり、廃墟のビルは倒壊し、その内の一棟は斜めに傾ぎ、お姫様のオブジェクトを上から押さえつけていた　そのベイビーマグナムも、球体状のボディの下半分がドロリと溶けてい

る。

（……味方の兵士達に応援を求めた方が良いよな）

クウェンサーは無線機に向けて、事務的な調子で要請を送る。

アマゾンシティ跡地は広い。兵士達は全体的にアマゾンシティを包囲して、敵兵や重要な施設を発見した場合はお姫様のオブジェクトに連絡し、即座に攻撃してもらう……という方式を採用していた。つまり、兵と兵の間隔は広い。少なくとも、クウェンサーの目の見える範囲に同じ『正統王国』軍の兵士がいる様子はない。

要請は送ったが、今すぐに大量の増援がやってくるという訳ではないのだ。

道路の亀裂から地下街へ落ちたヘイヴィアの方も、あれから連絡はない。爆破用の試作実験炉が地下に仕掛けられていた事を考えると、沈黙に不吉な意味があるように感じられてしまう。

（くそ、何か嫌な感じだ。あの野郎、勝手に死んでいないだろうな）

過去の戦いの経験から、クウェンサーには一つの懸念があった。

オブジェクトを失った操縦士エリートは、敵軍から真っ先に狙われる最優先重要ターゲットだ。実際にあるかどうかはさておいて、生き残ったエリートが再び同型機や後継機のオブジェクトに乗って襲いかかってくるかもしれない可能性を、できるだけ早期に排除しておきたいという考えによるものである。

そして。

マスドライバー財閥側は、あらかじめ全てを計算した上で、『あの場所』でお姫様のオブジェクトを爆破させていた。

（まさかとは思うけど、予想降下ポイントまで先読みされてて、高射砲とか設置されていないだろうな!?）

そんな風に思い、全速力で走りながらも、自然とオブジェクトの威容を見上げるクウェンサー。お姫様は球体状ボディの後方上部から、斜め後ろへと大きく放物線を描く形で射出されるはずだった。

しかし……、

（何だ、あれ）

クウェンサーは走る足も止めて、思わずギョッと身を強張らせた。

（射出口を塞ぐ形で何か張り付いてるぞ!?　何だあれ、鋼鉄の……網？）

通常、オブジェクトは戦闘機や弾道ミサイルを正確に撃ち落とすための対空レーザーをいくつも装備している。しかし、あの試作実験炉の爆発の直後だ。スタングレネードのようにお姫様の五感が奪われている間に、何者かがネットを広げるためのバズーカ砲みたいなものを発射したのかもしれない。

それ自体は、オブジェクトに対して特にダメージを与えるものではないだろう。

そもそも、おそらくは人を殺さずに捕獲するための兵器なのだろうから。

しかし。

（射出口を……塞いでる？）

クウェンサーは小型の双眼鏡を取り出し、射出口付近を改めて観察した。

ネットは射出口のハッチに喰い込むように接着していた　まるで、自動的に開く仕組みのハッチが開かないようにするように。

オブジェクトの全長は五〇メートル。

中心点から射出口までの長い上り坂は、超高速で自動的に上昇させるようにできている。だがその先で、もしも最後のハッチが開かなかったとしたら……

（時速一〇〇キロ以上の速度で――激突する!?）

「ちょっと待てお姫様！　射出のカウントダウンを止められるか!?」

『？』

「誰かが意図的にハッチを塞いでる！　このまま装置を作動させても、分厚い鋼鉄の板にぶつかるだけだ!!」

息を呑む音が聞こえた。

おそらく、自動的に判断された決定を覆す余裕がないのだろう

「くそっ!!」

クウェンサーは舌打ちし、それから改めて走り出した

爆心地へ近づいているためか、むわっとした熱気のようなものを肌に感じる。
試作実験炉の爆発で、多くのビルが倒壊していた。ベイビーマグナムに上からのしかかるように、斜めに傾いているビルもある。クウェンサーはその建物の中に飛び込み、扉のなくなったエレベーターシャフトの中に飛び込むと、傾斜した廃墟の中を走り続けた。幸い、シャフトの側面は鉄骨などの凹凸が多く、傾いだ状態などほとんど階段と変わらなかった。
カウントダウンは続いている。
射出まで数分もない。
クウェンサーは背中のバックパックに手を伸ばし、四角いプラスチック爆弾を取り出した。その『ハンドアックス』に、電気信管を突き刺す。
無線機のチャンネルを起爆用のものに切り替えようとした時、スピーカーの向こうから、ガコン！　という乱暴な音が聞こえた。
コックピットの自動射出装置が起動してしまったのだ
そこから射出口までは数十メートルあるが、一度作動してしまえばものの数秒で到達する。
そして、そうなったらおしまいだ。時速一〇〇キロ以上で鋼板に激突してしまう。
その時。
クウェンサーは、トンネルの出口のような物を見た。本来ならばビルの屋上へ繋がる、エレベーター用の扉が外れている出口だ。

しかし届かない。
出口は見えていても、そこに辿り着くにはまだ時間がかかる
（ちくしょう……）
「間に合えッッッ!!」
叫び、クウェンサーは手の中にあったプラスチック爆弾を思い切り投げつけた。それは四角く切り取られた出口の向こうへと飛んでいき、クウェンサーの視界から見えなくなる。
ほとんど一か八かだった。
クウェンサーは無線機のスイッチを押し、『ハンドアックス』を起爆させる。
パガッ!!　という爆音が炸裂した。
灰色の粉塵が出口から屋内へと流れてくる。
その間もクウェンサーは走り続ける。
数秒遅れて、彼はようやく斜めに傾いだ屋上へと飛び出した　外に出た所でコンクリートの床は大きく壊れていて、すぐに鋼鉄製のオブジェクトの球体状ボディの上に足がつく。
そこで。
ズバンッ!!　と何かが大きく射出された　青空を見上げると、それはエリート用の特殊なスーツに身を包んだお姫様だった。爆風は、ギリギリのところで射出口のハッチを塞いでいたネットを引きはがしていたのだ。あと一瞬でも遅れていれば、彼女は自らの安全装置に殺されて

いたはずだった。
（助かっ……た……？）
大きくパラシュートを開いたお姫様に、思わずホッと安堵の息を吐くクウェンサー。
その時だった。
ガサリという物音を聞いた。振り返ると、一〇メートル以上先……同じオブジェクトの球体状ボディの上部に、先客がいた。大小一〇〇門の砲の内、比較的小型な……それでも全長数メートルはある砲の陰に隠れるように、一人の男が立っている。
軍服の上から白衣を着た男だった。
その白衣にしても、複数のスプレー塗料を噴きつける事によって、迷彩色が施されている丸みの削り取られた顔立ち、わずかに生えたヒゲ、疲れの見える表情などは逃亡生活によるものだろうが、それがかえって獣のような印象を強くしている。
彼の手には拳銃があった。
そして、その銃口はパラシュートを広げたお姫様へと向けられていた。
「っ!!」
クウェンサーはプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出したが、電気信管を刺している暇はない　彼はそのまま大きく放物線を描くように、粘土のような塊を上空へ放った。
男の方はすぐに気づいた。

そして、爆発すると勘違いしたのだろう。
バッ!!　と慌てて別の砲の陰へと飛び込む男。その動作の内に、射撃のタイミングを失う。
一、二秒ほど経って信管なしのハッタリだと分かったのか、今度はその銃口をクウェンサーの方へと向けてきた。
（くそっ!?）
クウェンサーは慌てて男とは別の砲の陰へと隠れる
街路樹のように、一定の規則性で林立する鋼鉄の砲へ、鉛弾が織り成す火花がいくつか散る。
「『正統王国』軍か」
油断なく柱の陰に身を隠しながら、男はそう言った。
「どうやら、あそこのお嬢さんは部隊からそこそこ気に入られているらしい」
「誰だ」
クウェンサーはバックパックからプラスチック爆弾を取り出し、今度こそ電気信管を突き刺しながら告げる。
「お前は誰だ」
返答はない。
代わりに、パパン!!　という九ミリ弾の連射が応じた。自分の隠れている鋼鉄の砲の表面に火花が散り、クウェンサーは思わず身をすくめる。

銃がないとは気づかれない方が良い。
爆弾しかない工兵と思われたら、向こうは積極的に攻め込んでくる。
そんな事を考えていたクウェンサーの耳に、男の言葉が届いた。
先の邂逅だけで、ある程度こちらの実力でも知られたのか。それとも、元々そういう起伏の少ない人格なのか。どこか余裕のある声色だった。
「スラッダー＝ハニーサックル」
その言葉に、クウェンサーの顔色が変わった。
続く言葉で、さらに眉がひそめられる。
「マスドライバー財閥の名誉会長の軍事相談員、『資本企業』有数の投資家、そしてオブジェクトの設計士。……お前達、『正統王国』軍が真っ先に殺そうとしている男だよ」

12

スラッダー＝ハニーサックル。
こいつさえ仕留めれば、南極から始まった戦争は幕を下ろす。そんなＶＩＰが最前線に顔を出している事に違和感を覚える反面、クウェンサーは心のどこかで別の意見も持っていた。
オブジェクトの設計士。

だからこそ、スラッダーはお姫様のベイビーマグナムの弱点を突き、翻弄する事ができたのではないかと。たとえ彼が立てた計画に従って他の兵士が動いたところで、これほどの結果を生み出す事はできなかったのではないかと。

（……同じ穴の狢か……）

クウェンサーは、思わず電気信管を刺したプラスチック爆弾に目を落とした。彼もオブジェクトの設計を学んでいる学生で、その知識を利用して、これまで何度か超大型兵器を破壊している。

敵味方ともに、歩兵が駆けつけてくる様子はない。

試作実験炉の爆発は大規模で、遠方からでもベイビーマグナムが深刻な破損を被ったのは分かっただろう。しかし、周りの兵隊達は、今も銃撃戦を続けている。今すぐに陣形を崩して再編するだけの余裕はないのだ。

補給の状態や人員の数から察して、情勢そのものは『正統王国』軍の方が圧倒的に有利のはずだ。が、今すぐ決着がつくとは思えない。全力で戦っている彼らをあてにする事はできない。

「良いのか。のんびりしていて」

相変わらず、スラッダーの声には余裕があった。

こちらの戦力を探られている、とクウェンサーは思う。

声で位置を知らせているのに、一発も撃ち返してこない。この状況から、すぐにでもスラッ

ダーはこう判断するだろう。クウェンサーは銃器を持っていないと。

「さっさと殺さなければ、『情報同盟』軍や『資本企業』軍が我が物顔で侵攻してくるぞ。『正統王国』軍のオブジェクトが動かない、などという情報が伝われば、『テロ組織から隣国を守るため』とかいう大義名分を押し返せなくなる」

「それが狙いか」

「そうだと思うか」

互いの距離は一〇メートル前後。クウェンサーは街路樹のように規則性をもって林立する砲の陰に隠れていて、スラッダーはそれとは違う『街路樹のライン』の砲へと身を寄せている。

一〇メートル。

相手が持っているのが射程の短い拳銃とはいえ、ほぼ一〇〇%命中できる必中の距離だ。クウェンサーは辺りを見回すが、すぐ近くにある隣の砲の陰へ移るだけでも命懸けになる。スラッダーに回り込まれたら窮地に立たされる。

クウェンサーはひんやりとする鋼鉄の砲に体を押しつけながら、舌で唇を湿らせた

会話で時間を稼ぎ、声から位置の情報を確認し、相手を圧倒する作戦を立てなければ、あっという間に追い詰められてしまう。

（くそっ。ライフル持ってるヘイヴィアがここにいれば……）

無線機で連絡すれば、今からでも来てくれるだろうか。いや、クウェンサーとスラッダーは

巨大なオブジェクトの最上部に立っている。ここまでやって来なくても、地上からでもライフルで狙撃できるかもしれない。

そんな事を考え、無線機を指で操作しながら、それと悟られないようにクウェンサーは口を開く。

「投降しろ。どっちみち、マスドライバー財閥にはもうオブジェクトがない　街の中央にあった大出力レールガンも、地上に設置したまま撃てるようなものじゃない。おまけに試作実験炉も使い捨てた。……仮にここで俺達に勝ったとしても、お前達には後がないぞ」

「悲観的だな。我々マスドライバー財閥が、『情報同盟』へ亡命を希望している事は知っているはずだろう？」

「ヤツらが本気で応じると思うか？」

クウェンサーは無線機を見て舌打ちしそうになった。

ヘイヴィアに向けて信号は送っているのだが、向こうが応じる様子はない。もしかしたらヘイヴィアの無線機が壊れているのかもしれないし、気絶している可能性もある。

「向こうに行ったら、アンタを待っているのは多分拷問だ。マスドライバー関連の技術情報を手に入れたら、おそらく『資本企業』へ引き渡される。国を裏切るようなヤツは、よその国でも信用なんかされる訳がない。アンタだって分かっているはずだ」

「そうだな」

スラッダーは己の人生プランの不備を指摘されても、声色を変えなかった。
「……手土産が、マスドライバーの技術情報だけだったらな」
「？」
「何のために、わざわざこんな手の込んだ事をしたと思っている？」
スラッダーは、一、三発の銃弾をこちらの林立する砲へ撃ち込みながら言う。
「その気になれば、最初から我々のリゾレッテを出撃させられた。あれの最大射程は三〇〇〇キロだ。南極海で待機していたそちらのオブジェクトを瞬殺する事だってできたんだ」
「……」
リゾレッテ
一瞬、敵側のエリートの名前かと思ったが、直後に思い返す。これは『正統王国』でブレイクキャリアーと呼んでいたマスドライバー財閥のオブジェクトの正式名称なのだろう。『資本企業』では、確かオブジェクトの名前に女性名をつける習慣があった。ハリケーンに女性名をつけていた頃からの『伝統』というヤツなのだろう。
クウェンサーは手の中の『ハンドアックス』を弄びながら、
「何を狙っている？」
「定説の破壊」
質問に、スラッダーは簡潔に応じた。

「戦争の代名詞はオブジェクト。現代戦の勝敗はオブジェクトのスペックで決まり、投入されるオブジェクトの数が一機違うだけで、どちらが勝つかが戦う前から分かってしまう　……ある意味では明快で、安全度の高い戦争ではある訳だが――そうしたセオリーを覆したいと思う人間も、少なからずいるという事さ」

「……まさか」

「オブジェクトを使わずにオブジェクトを倒す、否定論者にとっては悲願だな。そして私はその実証のために、具体的な行動に出た。小さなスペア砲を大量に配置した南極の対戦車陣地、大出力レールガンを利用した囮、そして今回の試作実験炉を使った臨界爆発、色々試した結果、亡命先の『情報同盟』の連中が興味を示しそうなデータもいくつか採取できたよ」

　オブジェクトは最低でも一機五〇億ドルすると言われている。しかし、そのオブジェクトを丸々一機組み立てなくても、その『パーツ』だけで大破できるとしたら？　かかる費用は数分の一、数十分の一で済む。

『正統王国』、『情報同盟』、『資本企業』、『信心組織』。

　これら世界的勢力が織り成す現代の戦争は、馬鹿正直な総力戦の世界大戦ではない。小規模な小競り合いと、それを支えるオブジェクト開発競争や、資源、経済などの確保と奪い合い。それらを総合する事で、『敵対勢力に戦争を行えないような経済状況に追い込む事』こそが、人類を滅亡させないで世界規模の戦争を行うためのセオリーとされている。

そんな中で、『五〇億ドル以上のオブジェクトを、その数分の一の費用で確実に破壊できる技術』は、大勢を覆すために極めて有効なカードと言える。

もしも。

そんな都合の良い技術があればの話だが。

「残念だったな　ウチのお姫様を一番傷つけたのは、そういった小細工じゃなくて、イグアス方面でのブレイクキャリアーの砲撃だった　あれさえなければ、今回の試作実験が駄って回避できたかもしれない」

「ブレイクキャリアー？　ああ、リゾレッテの敵性コードネームか」

スラッダーはどこか楽しそうに応じた。

「それもまた、程度の問題だよ　別に私はその道の研究者じゃない　身の安全を保障し、マスドライバーを自由に開発できる環境へと確実に亡命できる『交渉材料』さえ手に入れば良いそういう面では、『実現しそうだけど、まだ少しだけ未完成な夢の技術』の方が効果的だ……何しろ、単なる『完成してしまった技術情報』なら、拷問で入手しようと考える輩が出てくるかもしれないからな」

「……」

研究の余地のある、極めて有益な技術……の場合、スラッダーを生かしたまま研究を続けさせる必要がある。下手に拷問する訳にもいかないし、『資本企業』へ引き渡す訳にもいかない

スラッダーはわざと中途半端な結果を提示する事で、マスドライバー財閥の全員を『情報同盟』に見捨てさせない』ように仕組んだとでも言うのか

危険な賭けだった。

結果を出し過ぎて『スラッダーがいなくても、この研究は実現できる』と判断されればおしまい。かといって、あまりにも未熟な結果に終わり、『やっぱりスラッダーが言っていたのは夢物語だったのだ』と判断されてもアウト。

超大型兵器オブジェクトという圧倒的な戦力に対し、強すぎず弱すぎずの絶妙な戦果を叩き出す。

それは、ただがむしゃらに爆弾を持ってオブジェクトを破壊しに行くよりも、何倍も何十倍も危険で難易度の高い作戦ではないだろうか。

「信じられない」

クウェンサーは言う

「そのために、わざわざブレイクキャリアーを見殺しにしたっていうのか？　そんな作戦を、ブレイクキャリアーの操縦士が容認するはずがない」

「実を言うと、そこまで計画的でもない」

スラッダーの口調が、わずかに沈む。

彼は、具体的にそのエリートの顔を思い浮かべられるからか。

「『オブジェクトを使わずにオブジェクトを破壊する戦闘技術』を使って亡命をしようと本気で考えたのは、リゾレッテが吹き飛ばされてからだ。当初の計画では、リゾレッテをダシに『情報同盟』と交渉を行う予定だった。チャフミサイルの雲を利用した照準方法と大出力レールガンを組み合わせた長距離砲撃、結構旨味があっただろう？　あれを一番操れるのはウチのエリートで、あれを一番整備できるのはマスドライバー財閥だからな。……今やっているのは事前に仕掛けておいた、第二プランといったところだよ」

「……」

（……マスドライバー財閥は中米を通ってやってきた。南米大陸の最北端のパリマ方面と、南方のイグアス方面。ストレートに『情報同盟』へ助けを求めるだけならイグアス方面へ行く必要はなかった。……となると、当初は『空白地帯』に独立国でも作る気だったのか、ブレイクキャリアーにしても、オブジェクトを使わない戦術にしても、交渉用のデータを集める必要があったのか）

運が強かったのか。

それとも、用意周到さがスラッダーを助けたのか。

おそらく両方だろうとクウェンサーは思う。この怪物は、偶然も必然も全てを取り込んだ、才能だけでも努力だけでも手に入れる事のできない、最強の駒としての資質を手に入れてしまっている。

「どうでも良いのさ」
軍師。
スラッダー＝ハニーサックルは静かに言う。
「我々はただ、望む環境で存分にマスドライバーの開発さえできればな　オブジェクトを中心に構築される現代の戦場やそのバランスがどう崩れようが、それは我々が気に留める事ではない。あんな巨体、どうせ人を殺す事しかできないのだしな」
「……そうかよ」
クウェンサーは、改めて手の中のプラスチック爆弾の感触を確かめる
『ハンドアックス』を弄びつつ、
「やっぱり、アンタとは分かり合えないな」
「どの辺が？」
「オブジェクトやエリートに戦争をやらせるだけやらせておいて、その陰に隠れて利益だけはもらっておいて、いざ自分達のオブジェクトがやられてしまったら、『全部あいつのせいです私達は悪くありませんでした』とか平気な顔で言うところだよ」
きっぱりとした声だった。
そんな考えがあったからこそ、クウェンサーはこんな所にいるのだろう
大破したオブジェクトやお姫様を見捨てる事なく、塞がれた射出口のハッチを強引にこじ開

けるために、こんな所までやってきたのだ。
だが。
その言葉を聞いて、スラッダーは失笑した。
共に上向きの砲の陰に隠れているため表情は見えないが、その笑い声はクウェンサーの耳まで届いた　おそらくスラッダーは静かに肩を動かしている事だろう
「……お前よりはマシだと思っているよ」
不吉な予感を感じさせる声色だった。
自然と、これまで以上に緊張するクウェンサーに対し、
「数々のオブジェクトを真っ先に爆破する事で、最小限の被害で戦争を終わらせようとしたお前よりは　なあ、クウェンサー　バーボタージュ君？」
（こいつ、何で俺の名前を……ッ!?）
驚くクウェンサーだったが、いちいちその答えを待っている暇もなかった。
パパン!!　と。
彼の隠れている上向きの砲に、銃声と共に複数の火花が散る。
しかし今度は単なる脅しでも牽制でもない。

その銃声に隠れるように、こちらへ接近してくる足音がある
（来るか!?）
とっさに音源の方へプラスチック爆弾を投げようと、砲の陰から身を乗り出そうとするクウェンサー。
そこへ蹴りが飛んだ
片膝をついた状態で爆弾から手を離す前に、クウェンサーの顔へ重たい一撃がめり込む
「が……っ!?」
頭が揺さぶられ、クウェンサーの体がごろんと後ろに転がる　投げる直前だった爆弾が球体状ボディの上に落ちる。
そこへ、至近距離からスラッダーが拳銃を向けた。
「君は思っているより有名だぞ。……特に、自分の持っている技術の粋を集めてオブジェクトを造っている者にとってはな」
「!!」
起き上がる暇もなく、慌てて転がるように回避しようとするクウェンサー。しかし思った以上に勢いがついた　球体状ボディの傾斜に従って、転がり落ちようとしている事に少し遅れてようやく気づく。
（まずいっ……　これ以上転がると地面まで一直線だ!!）

踏ん張って勢いを止めようとするクウェンサーだが、そこで銃声が鳴り響いた。
タァン!!　という炸裂音と共に、左肩の辺りに熱い痛みが走り抜ける。
「がァあああああああああああああああああああああああああっ!!」
「騒ぐなよ。掠っただけだ。関節すら砕いていないぞ」
焼けつくような肩をもう片方の手で押さえながら、クウェンサーは歯を食いしばる。
同時に、疑問もあった。
この局面で、スラッダー側に手加減をする理由は特になかったはずだ。
「特に大それた理由はないさ」
スラッダー＝ハニーサックルは静かに笑う。
「根は技術屋なものでね。実を言うと、銃器についてはほとんど独学だ。転がる君を試しに撃ったら肩に当たったってぐらいでしかない」
互いの距離は三メートルもない。
専門的に格闘術を学んでいれば、相手の銃を奪えたかもしれない。しかし当然ながら、学生のクウェンサーにそんな技術はない。
そうこうしている間にも、スラッダーは銃口をこちらへ正確に向ける。
「だから、殺せる時には殺してしまう。そう、例えば、今この瞬間のように」
「……なら、一発で満足していないで、さっさとありったけの弾丸をブチ込んでいれば良かっ

たんだ」
「？」
「そういう努力を怠るから、こういう風につけ入れられるって言っているんだよ」
言いながら、軍服の内側を晒すクウェンサー
銃でも出てくるかと思ったスラッダーは即座に引き金を絞ろうとするが、そこで手が止まった。
クウェンサーのズボンのベルトには、粘土のような物が挟んであった
――電気信管を突き刺した、プラスチック爆弾の『ハンドアックス』だ
「く……ッ!?」
「呑気に狙いをつけていて良いのか？」
言いながら、クウェンサーは片手で持っていた無線機のスイッチに親指を添える。たとえここで彼の頭を正確に撃ち抜いたとしても、倒れた時の衝撃でボタンを押してしまえば、スラッダーごとまとめて吹き飛ぶ事になる。
（舐めやがって……ッ!!）
爆風から逃れるため、とっさに近くにある上向きの砲の陰へと飛び込むスラッダー

しかしそこで彼は気づく。
クウェンサーの持っている起爆装置。
それは起爆信号を送るための無線機で代用されていた。
無線機。
そう、
(待てよ　本当にあのスイッチは、ベルトに挟んだ爆弾と直結しているのか――――ッ!?)
懸念は不安を呼び、不安は恐怖を生んだ
だが、クウェンサーは待たない。
そのスイッチを、迷わず押す。

バガッ!!　という爆音と衝撃波が炸裂した
ただし
上向きの砲の陰に隠れていたはずのスラッダーの、真後ろから。

スラッダーがクウェンサーの顔に蹴りを放った時、クウェンサーは投げるつもりだったプラスチック爆弾をボディの上に落としている。転げ落ちそうになっている今の位置とは違い、オブジェクトの頂点に近い部分だ。クウェンサーは自分の方に注意を引きつけた上で、スラッダ

ーの真後ろにあった爆弾を起爆させたのだ。
爆弾とスラッダーの距離は多少開いていたが、彼の体を宙に飛ばすには十分な威力を秘めていた。ノーバウンドで数メートル飛んだスラッダーは鋼鉄でできた球体状ボディの上を何度も転がり、クウェンサーの足元近くでようやく動きを止める。
クウェンサーは一度だけ身を屈めた。
スラッダーが手放した拳銃を掴み、その銃口を改めて彼の頭に突きつける。
何か呻き声を上げるスラッダーに、クウェンサーはこう言った。
「チェックメイトだ」

終章

首謀者のスラッダー＝ハニーサックルが捕縛された事によって、マスドライバー財閥の士気と作戦遂行能力はガタ落ちになった。

ベイビーマグナムは戦闘行動を続けられない状態に陥っていただけだが、残った歩兵や戦車などの『泥臭い旧式の戦争』でも、『正統王国』軍が負ける事はなかった。

こうして、南極から始まり、『正統王国』のアマゾン方面まで続いたマスドライバー財閥との戦争は、ようやく幕を下ろした。

マスドライバー財閥は、元々『資本企業』の一角を担う大組織だった。『資本企業』側は『マスドライバー財閥が勝手に暴走したのだ』と主張していたが、それで責任を回避できる訳ではない。おそらく、今後は『正統王国』に有利な条約をいくつか結ばされる事だろう。

陰で暗躍していた『情報同盟』については、その責任を追及する事はできないようだった。スラッダー＝ハニーサックルの要請に応じて、国境を割ってアマゾンシティ跡地へと進軍する予定だったようだが、予定はあくまで予定。具体的な行動に移していないのだから、のらりく

らりとかわしていけば、それ以上踏み込むのは難しくなる。

「結局、マスドライバー財閥については『正統王国』の法で裁くようになったみてえだな」

傍らにいたヘイヴィアがそんな事を言った。

クウェンサー達がいるのは、アマゾン方面にあるオブジェクトの製造工場だった。数々の戦いでボロボロになったお姫様のオブジェクトを修理するためだ。造船所にも似た巨大な箱のような施設だが……実は、オブジェクトを工場まで持って来たのではない。バラバラに分解した工場の方を、大破して動けなくなったベイビーマグナムの周りに展開させたのだ

巨大なクレーンで壊れて動かなくなった主砲を取り外しているのを眺めながら、クウェンサーはヘイヴィアの言葉に応じる。

「ま、一応ウチの領内で解決できたからね」

「『資本企業』と『情報同盟』は共にスラッダー＝ハニーサックル達の身柄の引き渡しを求めていたが、馬鹿馬鹿しい。それに応じる事は、治外法権を認めるようなものよ」

フローレイティアは、金属製の手すりに身を預け、気だるそうな調子で和風の細長い煙管を燻らせていた

クウェンサーは青めに染めた銀髪の上官の顔を見る。

「……ハニーサックル達……というか、マスドライバー財閥は、これからどうなるんですか？」

「さあね。『正統王国』内でも、素直に処刑するか技術情報を引き出すかで揉めているよ　お

前があそこで撃ち殺していれば、色々と簡単に事が終わったのに。向こうの少将には『射殺する』って言っちゃったよ」

「……」

「あそこで撃てなかったのは、境遇が似ていたからなの？」

「分かりませんよ、そんなの」

クウェンサーは首を横に振った。

こんな事をしていると、時々ものすごく遠回りしているんじゃないかと思う。彼はオブジェクトの設計を学ぶために、『安全国』の学校からわざわざ戦場へ派遣留学してきた身分だ。感覚としては飛び級のようなものに近いのだが、これなら素直に学校で勉強を続けていた方が手っ取り早かったのではないか、と

ただし。

学校では学べないような事もあるのかもしれない。

例えば、あの時垣間見えたスラッダーの微かな憎悪。それから、突きつけた銃の引き金を最後まで引けなかった感覚。それは具体的に何かの役に立つとは限らないが、同時に、決して忘れてはいけないものなのかもしれない。

特に。

これから本気でオブジェクトを設計し、戦場へ送り込もうとしているのなら。

「ただ、何のために戦っているのかをちょっと考えたんです」
「？」
「……俺達が生き残るためだったら、あそこでハニーサックルを殺す必要もなかったんじゃないかなって」
甘ちゃんめ、とヘイヴィアが思わず呟いた。
クウェンサーもそう思う。
そこへ、今までどこかで作業していたお姫様がやってきた。おそらく、オブジェクトを全体的に修理する過程で、どういう操縦感覚なのかのニュアンスを整備兵達に伝えていたのだろう。今回の件で、最も命の危機にさらされていたのは最前線にいた彼女だった。今も、その無表情な顔はどこか疲労の色が強い。
「しゅうりには2しゅうかんはかかるって。それまではみうごきがとれない」
「一応、別地域から『正統王国』軍のオブジェクトを増援で呼んでいる。不測の事態が生じても、すぐさま私達だけで出撃する羽目にはならないでしょう」
フローレイティアはスケジュールの確認をするような調子で言った。
お姫様はクウェンサーの方を見た。
「おつかれさま」
「そっちこそ」

言って、クウェンサーは一度だけ工場の中心にある物を見上げる。
超大型兵器オブジェクト。
数々の攻撃で大破し、現在では身動きも取れなくなった鋼鉄の塊を見て、クウェンサーはポツリと呟く。
「……定説の破壊、か」
スラッダー＝ハニーサックルが言っていた『目的』。
しかしその引き金を引いたのは、もしかすると、クウェンサーやヘイヴィアだったのかもしれない。
そう。
今までプラスチック爆弾を使って数々のオブジェクトを破壊してきたのは、とりもなおさず彼らだったのだから。
「俺達だけじゃない。オブジェクトを使わずにオブジェクトを破壊しようって考える連中が、少しずつ現れてきてる」
「歴史の定説なんて、案外簡単に覆されるもんさ。鉄の起源の年代と文明は紀元前一四〇〇年代のヒッタイトだって書かれていた教科書が、次の年には別の事が書かれていたりするようにな」
「それは本当に良い事なのかね」

「さあな」
ヘイヴィアは肩をすくめてこう言った。
「でもよ。オブジェクト中心のこの世界だって、過去の何かが覆された結果なんだぜ」

……と、ここまで華麗にキメたヘイヴィアが、不意にニンマリとした笑顔になってこんな事を言ってきた。
「ヘイ、ところでクウェンサー、今回は結構な戦果になったんじゃねえのか？」
「あん？　なに、どういう事？」
「だってよ、テメエはブレイクキャリアーってオブジェクトは吹き飛ばしただろ。俺はイグアス・ダムが爆破されるのを阻止したし。おまけにマスドライバー財閥の指揮官だったスラッダーハニーサックルは生け捕りにできた『正統王国』、『資本企業』、『情報同盟』の三つ巴の大戦争が起きるのも未然に防げた訳だし、俺らってひょっとして勲章もらえんじゃねえの？」
「おう!!　そうだそうだ、今回はプラスがいっぱいだ!!　前みたいに上層部の変な思惑とかでプラマイゼロにはされなかったもんな！　これで貯金はいっぱい、俺は設計士への道が近づき、ヘイヴィアは『貴族』の家督を継ぐための箔が一つ追加されたって寸法だ！　ばんざーい、ばんざーい!!」

両手を挙げて大はしゃぎする馬鹿一人だったが、そこで銀髪爆乳の美人士官フローレイティアが、細長い煙管で甘い煙を吐きつつ、遮るようにこう言った。

「……何言っているの？　ブレイクキャリアーにとどめを刺したのは、クウェンサーではなくお姫様の主砲でしょ　別にお前の功績って訳じゃないし」

「は？」

「イグアス・ダムの防衛については、個人的には評価してやっても良いけど、指揮系統の点から鑑みるに、あの時点ではバイラニー＝サローノ伍長率いる最前乐候小隊の方が合理的な『正規活動』と判断される可能性が高い。つまり、その阻止に向かったヘイヴィアの方が作戦妨害に相当するかもね。……私の正式なゴーサインで行っていた訳でもないから、特に」

「え？」

「アマゾンシティ跡地での作戦については、我らが第三七機動整備大隊全体で動いていた。またまお前がハニーサックルの近くにはいたけど、単独行動ではないのだから『特別な功績』とはならない。部隊全体の功績にはなるかもしれないけど」

「……、おい。ここまでやってチャラかよ？」

「……、嘘でしょ。嘘ですよね？」

「さて、厄介なのはここからね　南極で小型衛星の軌道を勝手に変えて、月面の別荘にいた『資本企業』軍の少将を殺すタイミングを逸したのでマイナス」

「うっ!?」
「あとイグアス方面では現地のコーヒー農園でご馳走になっていたそうね。どこで休んでも良いとは言ったけど、軍事行動中に他国の民間人から物資の供与を受けるのはマイナス」
「ううっ!?」
「さらにクウェンサーは私の胸を鷲掴みにしたから上官を侮辱した罪で超マイナス」
テメェクウェンサー何してやがる羨ましい!! いやこっちもこっちで色々あったんだよってかお前は婚約者いたよね!? と掴み合いになる馬鹿二人。お姫様の目も何やら冷たいものに変化しつつある事に、クウェンサーは気づいていない。
そんな中、フローレイティアは適当な調子でさらに続ける。
「ま、総合的に見ればプラスよりマイナスが目立つかな。規律を守るための軍事教練なら、ざっと乗馬鞭で三〇〇回ぐらいぶっ叩く感じ?」
「全身が真っ赤に裂けちまいますよ!! 肌色の部分の方が少なくなっちゃいますって!!」
「……っつかフローレイティアさん、まだおっぱいの事を根に持ってッッッ!! 確かにあの感触は平均値を大きく上回っていたのは認めますが、乳の値段が少々高すぎやしませんかね!!」
「うーん。それなら乗馬鞭一〇回につき、蝋燭一本と交換しても良いよ?」
「いやいやいや蝋人形のオブジェになりますって!!」

「駄目だ、度を超し過ぎてプレイ感が全く存在しねえ。かなり猟奇な方向に足を突っ込んでやがる!!　俺は上官の乳とは縁がねえのに、クウエンサーと同じ目に遭うのは理不尽だぜ!?」

「あら。死にたくないの？」

フローレイティアに質問され、ガクガクと首を縦に振る馬鹿一人

すると、上官はニヤリと笑ってこう言った。

「なら、結果で信頼を取り戻せ。ピッタリの仕事が待ってるの。ちょっと輸送機で遠くまで飛んで行って、クソッたれのオブジェクトをぶっ壊して来い」

あとがき

ザ・二冊目!!
鎌池和馬です。

今回は各章ごとで戦闘に区切りを設けていますが、以前に比べて長編っぽい雰囲気の本にしてみました。マスドライバー財閥との戦いはいかがだったでしょうか。

一巻の序章にチラッと『月面に別荘が建つ時代』と書いていたのですが、その辺をちょこちょことクローズアップさせています。

今回、オブジェクトとの直接戦闘自体は一巻よりも少ないものの、実は一巻に匹敵する数のオブジェクトが登場していた事にはお気づきでしたでしょうか。

スラッダー＝ハニーサックルが取った戦術は、完成されたオブジェクトではなく、そのオブジェクトをバラバラに分解して、各パーツごとに適した場面で運用していこう、というものです。主砲、副砲、装甲、動力炉、そして『敵はオブジェクトを持っている』という情報まで、

様々なパーツを独立させて使ってきます。

この辺りの『完成形としてまとまっている味方のオブジェクトを、改めてバラバラにしてみる』という考え方は、この世界の設計士特有のイレギュラーな思考方法なのかな、と思います。頭の中で敵のオブジェクトを分解して弱点を探すクウェンサーとは、また違ったアプローチという訳です。

実際の成果は本編の通りですが、もしもスラッダーの戦術が成功を収めていたとすれば、この世界の戦争のセオリーは大きく覆されていたかもしれません。ひょっとすると、スラッダーが別の物語の主人公になっていた可能性も？

……書き手の狙いとしては、『個々のパーツをクローズアップさせる事で、その集合体であるオブジェクトの威容を様々な角度から読者さんに提示する』というものがあったのですが、上手に機能していましたでしょうか？

マスドライバーとレーザー式軌道エレベーターの関係は、新型戦闘機の開発競争のコンペなどをイメージしています。マスドライバー財閥側は、その戦いに敗北したものの、そこで立ち止まる事をしなかった組織……という設定です。今回の話で『情報同盟』軍の中佐も語っているのですが、世界的にも有名なステルス機の開発競争などの話を聞くと、『うわーもったいないなぁコンペに負けた方、こっちも多分それなりに高性能だろうに』などと素人丸出しの感想

を抱いてしまいます。まあ実際には、両立させたまま生産段階に入ってしまうといろんな問題が生じるのでしょうけどね。そのために取捨選択のコンペをしている訳ですし。

あと、ヘイヴィア、フローレイティア、そしてスラッダーと、キャラクターの抱えている事情みたいなものについても、ちょっとだけ触れています。最初の一巻目に比べると、彼らの人間味は増しているのかもしれません。ただ、一番最初に掲げていた『敵を撃破する爽快感』を追求するに当たって、もしかすると逆効果を与えてしまうのかも……という懸念がなかったと言えば嘘になります。さて、どっちが良いものなんでしょうね。クウェンサーやお姫様、整備兵の婆さんについても、一応それっぽいエピソードはあるんですけど、効果的に爽快感を演出するための使い方はないものかと思案中です。

イラストの凪良さんと担当の二木さんに感謝を。ヒロインの可愛らしさやオブジェクトの威容などを、分かりやすく伝えているのは間違いなくイラストの功績だと思います。今回は本当にありがとうございました。

そして読者の皆様にも感謝を。今回の本でも、色々と学ぶ事ができました。そんな、お話の『実験』を試す機会ができたのは、間違いなく貴方達の応援のおかげです。これからもよろしくお願いします。

今回はオブジェクトの力を借りる場面が多かったですが、生身だけでブレイクキャリアーを破壊するにはどうすれば良いか、あれこれ考えてみるのも面白いかもしれませんね

それでは、今回はこの辺りで
この一冊が、貴方にとって小さな糧となる事を願いつつ、筆を置かせていただきます

マッハ二五ってイメージできる速度の限界を超えていますよね……

鎌池和馬

◉鎌池和馬著作リスト

「とある魔術の禁書目録（インデックス）」（電撃文庫）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）②」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）③」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）④」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑤」（同）

「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑥」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑦」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑧」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑨」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑩」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑪」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑫」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑬」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑭」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑮」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑯」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑰」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑱」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑲」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑳」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）ＳＳ」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）ＳＳ②」（同）
「ヘヴィーオブジェクト」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒160 8326 東京都新宿区西新宿4-34 7
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「鎌池和馬先生」係
「凪良先生」係

■

電撃文庫

ヘヴィーオブジェクト 採用戦争

鎌池和馬

発行　二〇一〇年六月十日　初版発行

発行者　髙野　潔
発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒一六〇-八三二六　東京都新宿区西新宿四-三十四-七
電話〇三-六八六六-七三一一（編集）
発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見一-八-一二
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）
装丁者　荻窪裕司（META+MANIERA）
印刷・製本　株式会社暁印刷

※本書は、法令に定めのある場合を除き、複製・複写することはできません
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします　購入された書店名を明記して、株式会社アスキー・メディアワークス生産管理部あてにお送りください　送料小社負担にてお取り替えいたします
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません
※定価はカバーに表示してあります

© 2010 KAZUMA KAMACHI
Printed in Japan
ISBN978-4-04-868594-8 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃文庫

ヘヴィーオブジェクト

鎌池和馬
イラスト／凪良

超大型兵器オブジェクト。その操縦士、『エリート』。雪原の戦場に派遣留学したクウェンサーが出会ったのは、そんな素性を持つ奇妙な少女だった――。

ISBN978-4-04-868069-1
か-12-21　1833

ヘヴィーオブジェクト　採用戦争

鎌池和馬
イラスト／凪良

宇宙開発技術採用を巡る戦争の最中。戦地派遣留学生のクウェンサーと、見習い軍人のヘイヴィアの次なる相手は、姿が見えない超巨大兵器、ステルス・オブジェクト!?

ISBN978-4-04-868594-8
か-12-24　1954

とある魔術の禁書目録（インデックス）

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

〝超能力〟をカリキュラムとする学園都市に〝魔術〟を司る一人の少女が空から降ってきた。『インデックス（禁書目録）』と名乗る彼女の正体とは……!?

ISBN4-8402-2658-X
か-12-1　0924

とある魔術の禁書目録（インデックス）②

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

学園都市「三沢塾」で一人の巫女が囚われの身となった。上条当麻は魔術師ステイルと嫌々手を組み、彼女を助けに行くことになるのだが――！　学園アクション第2弾！

ISBN4-8402-2701-2
か-12-2　0951

とある魔術の禁書目録（インデックス）③

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

補習帰りに、上条当麻は御坂美琴とその妹に出会う。御坂妹も姉同様とにかくヘンな奴で……。そんな普段通りの生活の中、学園都市の能力者が次々と殺されはじめる……。

ISBN4-8402-2785-3
か-12-3　0988

電撃文庫

とある魔術の禁書目録(インデックス)④

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2858-2

海へバカンスに来た上条当麻が見たものは、インデックスが青髪ピアスで、神裂火織がスティルで、ステイルが海のオヤジで、御坂美琴が当麻の実妹で!?　全てはとある魔術から……！

か-12-4　1021

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑤

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3025-0

8月31日の学園都市。御坂美琴は、さわやか男子生徒に誘われた。一方通行(アクセラレータ)は、不思議な少女と出会った。上条当麻は、不幸な一日の始まりを感じた……。

か-12-5　1083

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑥

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2973-2

新学期初日。それは上条当麻が通う学校に転校生が来た日で、インデックスにはじめての「ともだち」ができた日で、学園都市に謎の魔術師が潜入した日だった……！

か-12-6　1113

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑦

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3205-9

伝説の魔術師クロウリーが記したとされる魔導書「法の書」と、その解読法を知るシスターが何者かにさらわれた。上条当麻は、"不幸"にもその救出戦に加わることに……。

か-12-7　1167

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑧

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3269-5

こ)は学園都市屈指の名門女子校・常盤台中学。御坂美琴が体育の授業後、シャワーを浴びていると……。お姉様とあの殿方が交差するとき、白井黒子の物語が始まるのですの!?

か-12-8　1198

電撃文庫

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑨

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3385-3

学園都市最大級行事「大覇星祭」。上条当麻や御坂美琴も参加するその大運動会の開催中に、謎の〝霊装〟を巡って、とある魔術師が学園都市に侵入した……。

か-12-9　1243

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑩

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3428-0

学園都市に、ひとつの波紋が広がった。『使徒十字(クロスエンディビュート)』。そう呼ばれる存在が、上条当麻の大切な人たちの夢を、破壊していく！科学と魔術が交差するとき、物語は始まる！

か-12-10　1257

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑪

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3581-3

大覇星祭最終日。自分が〝不幸〟であることしか自慢できない男・上条当麻が、なんと大覇星祭「ナンバーズ」に見事当選した。景品は『海外旅行』のチケットで……!?

か-12-11　1327

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑫

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-3683-6

九月三〇日。学園都市の某所に、御坂美琴は立っていた。待ち合わせである。けれど、あの少年は一向に姿を見せず……。罰ゲームを巡る学園コメディ(ラブ)編スタート?

か-12-12　1372

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑬

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-3801-4

九月三〇日の学園都市に侵入した魔術師『前方のヴェント』。彼女が操る謎の魔術により都市機能は完全麻痺、大部分の人間は倒れた。絶望的な状況下で上条当麻は……。

か-12-13　1411

電撃文庫

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑭

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-8402-4062-8

一〇月。ローマ正教徒によるデモが全世界で勃発した。混乱の最中、その元凶が霊装『C文書』にあることを聞かされた上条は、土御門と共にフランスへと飛び立つ！

か-12-15　1506

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑮

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-8402-4145-8

治安部隊がアビニョン侵攻作戦で不在の学園都市。そこでは闇の組織らの暗躍が始まっていた。『グループ』の一方通行(アクセラレータ)は、謎の組織『スクール』の存在を知り……！

か-12-16　1537

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑯

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-8402-4086-9

宿敵・後方のアックアがついに動いた。標的とされた上条当麻だが、彼の元には五和がボディガードとしてやってきて……インデックスとの同棲バトル勃発!?

か-12-17　1601

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑰

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-04-867591-8

『禁書目録召集令状』が布告された。何者かに爆破されたユーロトンネルを『王室』と共に調査せよ、という任務だった。上条当麻が被る今度の〝不幸〟は、英国にて開幕！

か-12-19　1730

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑱

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ
ISBN978-4-04-867897-1

ロンドンはクーデターにより堕ちた。影響はイギリス全土に及び、市街では『清教派』と『騎士派』が対立する中、ついに上条当麻は「あの男」と出会う……!!

か-12-20　1787

電撃文庫

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑲

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868137-7

一方通行ら『グループ』が『ドラゴン』について探る中、それを煩わしく思う統括理事会のメンバーが彼らに牙をむく。同じ時、浜面と絹旗が滝壺を見舞いに行くが……。

か-12-22　1847

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑳

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868393-7

上条当麻はインデックスを解き放つため、一方通行（アクセラレータ）は打ち止め（ラストオーダー）を救うため、浜面仕上は滝壺理后を治療するため。三者三様の想いが渦巻く、緊迫のロシア編開幕！

か-12-23　1908

とある魔術の禁書目録（インデックス）SS

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-3912-7

上条のクラスで行く鍋パーティのゆくえは？イギリス清教ロンドン女子寮の乱れた？一日とは？一方通行が闇へと堕ちた、その先には……。本編補完のSSSシリーズ！

か-12-14　1456

とある魔術の禁書目録（インデックス）SS②

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-8734 2-6

ジーンズ切り裂き魔を追う神裂、半蔵に恋する郭（くるわ）ちゃん、謎の魔草売り少女と出会う上条刀夜、微妙な強さの超能力者（レベル5）・ナンバーセブン。圧倒的な登場人物で送るSSSシリーズ第2弾。

か-12-18　1676

エアリエル ～緋翼は風に踊る～

上野 遊
イラスト／夕仁

ISBN978-4-04-868603-7

政府軍と反政府勢力の小競り合いに巻き込まれたカメラマン志望の少年、マコト。その危機を救った反政府勢力のエースパイロットは、彼と歳の変わらない美しい少女で――!?

う-3-7　1963

電撃大賞

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

上遠野浩平(『ブギーポップは笑わない』)、高橋弥七郎(『灼眼のシャナ』)、支倉凍砂(『狼と香辛料』)、有川　浩・徒花スクモ(『図書館戦争』)、三雲岳斗・和狸ナオ(『アスラクライン』)など、常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。今年も新時代を切り拓く才能を募集中!!

●賞(共通)

大賞……正賞+副賞100万円

金賞……正賞+副賞 50万円

銀賞……正賞+副賞 30万円

(小説賞のみ)

メディアワークス文庫賞
正賞+副賞 50万円

電撃文庫MAGAZINE賞
正賞+副賞 20万円

メディアワークス文庫とは

『メディアワークス文庫』はアスキー・メディアワークスが満を持して贈る「大人のための」新しいエンタテインメント文庫レーベル!　上記「メディアワークス文庫賞」受賞作は、本レーベルより出版されます!

選評をお送りします!

小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を通過した人
全員に選評をお送りします!

※詳しい応募要項は小社ホームページ(http://asciimw.jp)で。